

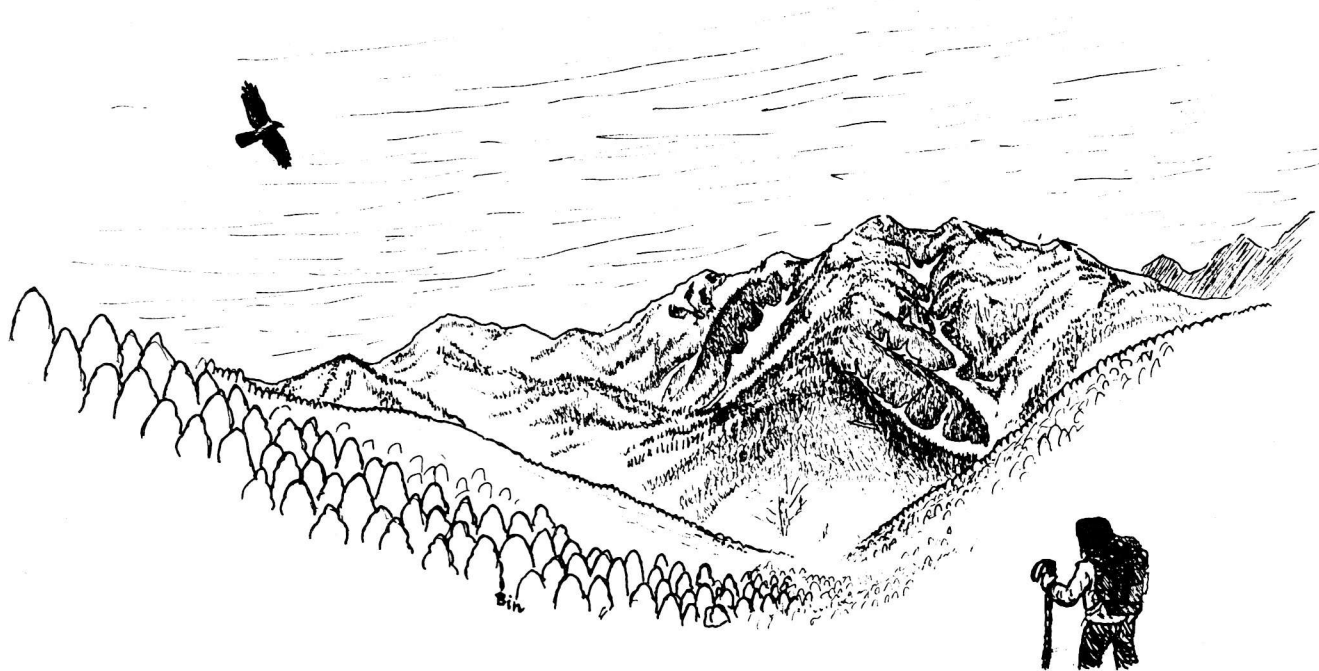
やまざと

会報15号(2001年度冬号)

* 行事お知らせ 2002年KUWV OBスキー合宿
2月23日～24日 野沢温泉スキー場

* 特集 “山の語り部”に聞く

木下 幸雄氏		(白山室堂元主任)
吉田 孝男氏		(山とスキーの専門店ケルン経営)
山下 忠氏		(ハンター 二又新町出身)
力丸 茂穂氏		(元白山室堂診療所所長)
古川 脩氏		(故人 山路の会)
林 正一氏		(金沢ナカオ山岳会代表)
番外：根深 誠氏		(登山家 ルポライター)



金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

目

次

*表紙	21期 竹中 敏	
*「やまざと」第15号によせて	会長 15期 奥名 正啓	1
*行事お知らせ 2002年OBスキー合宿		2
*特集 “山の語り部”に聞く		3
木下 幸雄氏	(白山室堂元主任)	4
吉田 孝男氏	(山・スキー専門店ケルン)	8
山下 忠氏	(ハンター 元二又新町住人)	18
力丸 茂穂氏	(元白山室堂診療所所長)	28
故古川 脩氏	(やまみちの会)	36
林 正一氏	(金沢ナカオ山岳会代表)	39
(番外編) 根深 誠氏	(登山家 フリーライター)	46
*2001年OBスキー合宿 野沢温泉		53
*石楠花の宴	現役バイト隊 45竹内雅幸 44日野鋼資 43加藤菜就 13期辰野隆義 他メール 関連お便り	60
*秋の山小屋酒場	15期 舟田 節子	70
*同期会報告 3期西尾皓史 15期鈴木良紀 23期?		73
*寮歌祭 他	0期 田村 昭夫	76
*50歳のウオーキング事始め	15期 松林 知一	81
*お便り		84
*山行報告 米山 妙高山	4期 森島 稔	87
大辻山 奥大日岳縦走	10期 木津 治男	93
白山夏山開き	15期 舟田 節子	94
*メール便り・年賀状		98
*「花の山旅⑩白山」の光と陰	19期 梅 典雅	106
*毛勝山遭難救助体験記	19期 梅 典雅	108
*白山での遭難者救助について	37期 若山 悟	110
*新聞記事情報		115
*辞任予告		118
*OB会会計報告	23期 鳥越 伸博	119
*“山の語り部”に聞く 後編	(白山室堂元主任) 木下 幸雄	120

現 役 情 報 の ペ ー ジ

*「山ぼうし」と私	44期 福村 岳代	1
*IN TROUBLE	15期 舟田 節子	2
*小屋作業を終えて	44期 谷村 一成	4
*2001年度現役名簿		5
*顧問の独り言	顧問 前田 達男	8
*現役活動録		9
付録 OB会報送付者名簿		

(編者注：山便りについては、お便り、メール便り中にもあります。「別扱い」か「一把一絡げ」かは、入手時期、入手体裁他、いい加減な判断に拠ります。原稿価値、筆力とは一切無関係です。一把一絡げ中の報告も、克明に読まれて下さい。)

「やまざと」第15号に寄せて

15期 奥名 正啓

今回でこの会報「やまざと」は15号となり8年を経過しました。昨年までは年2回発行してきましたが、莫大なエネルギーを必要とするこの事業をこれまで7年間にわたり継続してきたことは誇るべきことといっていでしょう。ですが、この負担があまりに大きいため今後年1回の発行とすることにしました。夏／冬と会報を望んでおられるOBも多いかと思いますが、この点ご了承ください。また、この一年間たくさんの方々にご協力を頂き感謝しております。

さて2001年すなわち21世紀最初の年は皆さんにとってどんな年だったでしょうか。長引く不況、金融機関の破綻、狂牛病、同時多発テロとそれに続くアフガン戦争、遅々として進まなず痛みばかりが目立つ小泉改革、・・・思い浮かぶことはいづれも暗く悲しい出来事が多いようです。とりわけ山形大に端を発した大学入試に関わるミスが金沢大にもおよんでいたことは残念でなりませんし、年末になって石川銀行の破綻によって地場中小企業の資金繰りも心配されます。そうはいいいながらも個人個人にはそれぞれに嬉しい出来事やしあわせを感じる瞬間があったに違いありません。

私事ながらこの一年間は千葉（幕張）に単身で赴任しておりました。幕張というと幼少の頃夏休みに潮干狩りに何度か訪れたことある土地でしたが今はまったく面影もなく東京のベッドタウンとなっていました。20階ほどのマンションが立ち並び、それらを区切る道路と公園し

かないように見えます。広大な関東平野が途切れて海となる縁にあたる場所なので近くに山らしい山はなく、はるか遠くに連なる山々がかすかに望まれる程度でした。のっぺりとした平野に住んでいると山・森・川・・・が手の届くところにある生活がひどく潤いのあるそして季節の移り変わりを肌で感じられるように思えます。そう言ったことがあってかいつもの年より山や森へ出かけた回数は多く、ほとんど毎週週末にはどこかへ出かけていました。時間に余裕があるよりも却って忙しいほうが時間を有効に活用できると思いますが、その通りかもしれませんし、本当の余裕がないだけなのかもしれません。

昨年は犀川ダムから倉谷部落への道が改修され見違えるほど立派になり、これまで北アルプスへ行くよりも危険とまで言われたこの道が車で行けそうなほどの変わり様です。わがベルクハイムへは時間的にも体力的にも格段に行きやすくなり、今後の活用が期待されます。建物は老朽化が著しくいつまでもつやら心配な面もあります。いつまでもこのベルクハイムを残していくつもりで、これまで同様毎年春と秋には小屋の維持管理を兼ねて語らいの場としての場を提供したいと思っています。

ベルクハイムへは行ってみたいという声をよく聞きます。その思いを一歩行動に移すことによって新たな世界がひろがって、潤いと安らぎと活力を得ることができるでしょう。

【11月10日 近江町食堂にて

OB会役員と現役3回生との懇親会】

44谷村 18岡部

19梅 23鳥越 44河原

20深田 44福村 44山本 44西 44石原

44日野

15舟田

16北川 15奥名 44吉森 44角田

20深田

ノークヨー白山の話

他で盛り上がる。



チャレンジ!

ファイト!

2002年KUWV OB スキー合宿

1. プロジェクト名 2002スキー合宿 in 野沢
2. 実施日 2002年2月23日(土)～24日(日)
(通常、先発&後発隊により22-25日に延長されます。)
3. 場 所 野沢温泉スキー場
メインゲレンデ：やまびこゲレンデ(スキー専用)
スカイラインコース(全長 5km)
4. 宿 泊 リゾートハウスふるさと
長野県下高井郡野沢温泉村6556
電話 0269-85-2241
<http://www.nozawa.com/furusato/>
5. プロジェクト運営 KUWV11期 有志
幹事長 森川功、同代理 青柳健二
その他 技術指導、映像記録、遊戯指導等
11期メンバーが担当させていただきます。
6. 申込み 2002年2月9日(土)までに
Eメールにて、上記 幹事長/同代理へ申し込み下さい
KENAOYAGI@aol.com
isaom@bl.mmtr.or.jp
*和室2部屋を確保しますが、家族参加の場合は、
別室を確保しますので、その旨申し込み下さい。



7. 参加の意義

ソレトレーク冬季五輪の開催時に、スキーをすることにより、世界平和に貢献し、かつ五輪記録に挑戦できる。11期及び11期を指導した大先生を指導員に、本格カービング&前期カービング技術を習得できる。運が良ければ、プロジェクトの記録映画「冬の歌」に主役にて出演できる。夜の部では、加賀のお茶、全国の銘酒、極上信濃ワイン等を味わいながら、KUWV田村教祖の有り難い訓話を拝聴できる。

その他、長野県及び日本の景気回復への貢献など多数

*なお、野沢温泉スキー場、リゾートハウスふるさとの情報は、各ホームページを参照して下さい。(本日の積雪情報から宿の場所まで確認できます。)

<http://shinshu.online.co.jp/nozawa/>

<http://www.nozawa.com/furusato/>

登録会報入手が2月9日すぎの場合、
即「追加」申し込みをして下さい。

どんどん参加してね!

特集 “山の語り部” に聞く

《取材スケジュール》

平成13年11月14日	林 正一氏（金沢ナカオ山岳会代表）
11月17日	木下 幸雄氏（白山室堂元主任）
	力丸 茂穂氏（元白山室堂診療所所長）
11月26日	吉田 孝男氏（山とスキー店ケルン店主）
12月1日	根深 誠氏（登山家 フリールボライター）
12月16日	山下 忠氏（猟友会金沢支部 二又新町出身）
12月21日（再）	力丸 茂穂氏（元白山室堂診療所所長）
	（特）古川 脩氏（山路の会 故人）
平成14年1月23日（再）	木下 幸雄氏（白山室堂元主任）

* 掲載順は内容のつながり具合などを勘案し、当方で入れ替えさせていただいています。

* 木下氏分は、編集進行の都合から、分割掲載にしてしまいました。
不手際の段、お詫び申し上げます。

上記の方々是我的勝手…（根深氏は番外）自分の山歴、人脈を通して、「山と関わり続けて来られた方々」として、選ばせていただきました。

木下氏、力丸氏については、室堂会所属の7期村田 泰恵先輩に橋渡しをしていただきました。

たかが〇B会の会報のために時間を割き、稚拙インタビューに答えていただいた皆様には、感謝の念に堪えません。

どの原稿も、ご本人には校閲いただきましたが、真っ赤になったものはありませんでした。

わずかの数字の手直しや、第三者に非礼になりそうな箇所の削除や、添加くらい…学生気分丸出しの私の切り口を、温かくご容赦いただいたものと解釈いたします。

稚拙なりに、人対人の言葉で語られる世界の中に、その方の「生きざま」…山に関わりつつの自己実現を描こうと試みました。

ただ、インタビューであった限りは、結局は私の器を越えられないものであったと思います。

上記の方々のほんの一部しか聞いていない、そしてあくまで「私がそう聞いた」にすぎないことを強調しておきます。

そうでありながら、「聞かねば、知ることが出来ない」も、重すぎる事実、そしてワクワクする体験でした。

皆様には、私の気付かなかった分の失礼もお詫びし、重ねて感謝申し上げます。

（インタビュー、文責：15期 舟田 節子）



木下 幸雄

(きのした ゆきお)

略歴 大正13年生まれ。写真家。昭和27年より50年まで、白山室堂主任を勤める。

「『二代目 主任』ですと、弟の道雄の方と誤解されますから」

なるほど、こちらは「室堂主任職」には2年ほど前任者がいて、二代目が木下幸雄さん、三代目が道雄さんと分かってしまったから、いいが…。原稿の「二代目主任」を「元主任の方が」と訂正された木下さん。

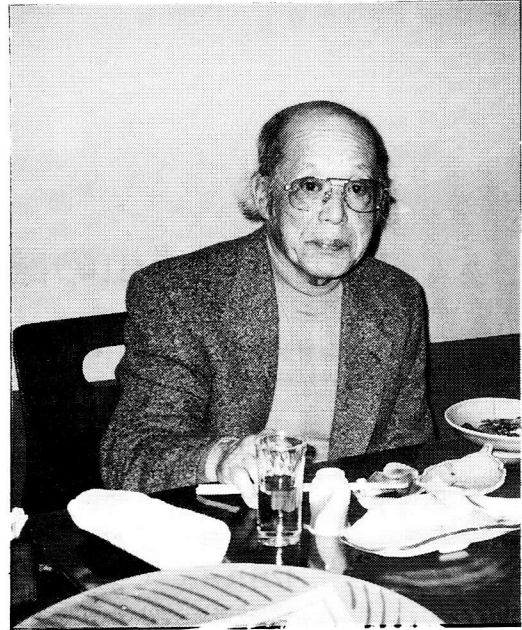
白山室堂はそうように、白山観光協会が経営主体（国立公園になってからは…とか、厳密には付記がいろいろ必要だが）ながらも、木下さん兄弟が、それぞれ約30年ずつ、「主任」の重責を担ってきた。「木下」とは、室堂の歴史における「名跡」である。

ただ、「弟の方」と「誤解できる」方はまだマシな方。橋渡しを頼んだ7期村田先輩に、

「私が知ってるのはお兄さんの方だけど、それでいいのね」に、

「は？木下さんて、二人いるんですか？」と、答えてしまった素っ頓狂な私。ちょっと考察してみれば、年令があうはずがないのである。しかし、＜私が知らないくらいなら、知らん人の方が多い！＞と、すぐ開き直れて、＜それなら、なおのこと、貴重な昔話を聞かなくっちゃ＞と前向きになれるのが私の長所である。

ここからの4ページは、とりあえず、11月17日のインタビューで、まとめてあった。2月のOBスキー合宿の公示に、このOB会報が間に



合うためには、そうでもしなければ段取りがつかない。1月23日インタビュー分を後編にして、現役分は別にページを打って…と、ない知恵をしぼったが…。結局全面訂正すべきと判断。よって、7ページで中断し、120ページへ「続く」というお粗末さ。

また、以上の理由により、校閲済みでない部分も多いが、重大なミスについては次号での訂正とさせていただきます。

その替わり、木下氏が事実上の編集をされた昭和53年発行の白山観光協会発行「三十年のあゆみ」の方は、相当量を転載させていただいた。金大ワングルOB、ならびに現役は、それらのページで、相応に白山、室堂の歴史ツウになれるものと思う。またそうであってほしい。



昭和23年、写真班だった木下さん（右端の軍服姿）。当時はこの規模の勤務員数だった。



昭和28年の室堂。

木下さんは28歳。主任2年目。
前列の左から2番目。

室堂診療班はこの時は、日赤
の所轄。4人の診療班員、大工
も交じる。服装にも当時が
しのばれる。

カーバイドの街灯も見える。

血のつながった父母、祖父母であっても、その人の若い時代は想像しにくい。目鼻立ちに、否応なしの血縁を感じることがあっても、その人に子供時代、青年時代があったことはなかなか…。たっぷりの接触時間があるさえ、「親」と「子」の立場から、ものを言い、考えてしまう。

昭和27年…とお窺いしておきながら、私は青年木下さんではなく、目の前の木下さんと、当時は石室だったという室堂を重ねていた。そんなボタンの掛け違いを避けるべく、まず皆さんにも、青年木下さんを写真でご披露したい。

木下さんが室堂主任になられたのは昭和27年。軍服姿の写真が残っている。復員してきた時の冬の軍服。純毛で、それが一番暖かかったから、作業着にしていたのだという。毎年、その年の作業員と室堂前で記念写真を撮っているが、軍服姿は5年ほど続いた。

登山どころではない戦争が終わった昭和21年に立山に登った。その翌22年に白山に登り、白山振興会あらため、白山観光協会が出来たのが、23年という順序になる。そもそも「主任職」なるもの、地元白峰住人のあたりでもよさそうなものである。ところが、7、8月の2カ月だけの山暮らしを受ける者はなかなか見つからなかった。

木下さんは、営業写真屋の長男だった。写真屋には季節需要があり、秋から春は、冠婚葬祭、卒業・入学などで多忙ながら、夏は比較的暇になる。元々山好きだった木下青年は、夏には下界の営業は父任せとし、自分は登頂記念撮影の需要に応えるべく、室堂に滞在していたのだった。

当時カメラは大衆が持てる物ではなく、カメ

ラは大型、写真乾板も重かった。白山で登頂記念の写真を撮るのは、営業写真家の仕事だった。室堂前で御前峰をバックに、あるいは、頂上で撮ってほしい…日に何度も登頂することがあったという。

丁度夏場になってくる青年…観光協会は、それならと白羽の矢を立てたのだ。

「あんた、山好きなそうやけど、山行って、ちょっこり写真も写したり、山の手伝いでもしてもらたりで、一月ほど山で生活してみんか」という話になって、

「ほんなら、いっぺん行ってみましょ。続かなか続かんかは別として…」

と受けたのがきっかけだったそう。つまり、昭和23年より、まず白山観光協会写真班として室堂へ務めることになる。

「ほしたらもう縛られてしもて。当時主任しとった人が都合で辞めてしもて、あともう否応なしで」

「『わしゃ、そりゃ駄目や。二月も山に縛られたら、わしかて商売しとるがやし』

て言うたがやけど、

『みんなで応援すさかい、やってみてくれ。どうしても駄目なら、それはまたそん時の話や』

言われて」

「当時、前田宮司やら、玉井敬泉さんやら、そんな人らに押さえつけられて。もう、ねじ伏せられたようなもんで（笑い）。それが25年続いてしもたがや」

前田宮司さんの「三十年のあゆみ」誌への祝辞の一部を掲載しておく。（掲載時は北海道神宮 宮司） - 咲

「私が白山比神社に宮司として御事仕させて頂きましたのは、終戦間もない昭和23年の正月

のことでありますが、御奉仕20年間を省みますと悲喜こもごもの思い出があります。

山好きの私は、白山登拝を楽しみに赴任致しましたが、戦時中は登拝する人も少なく、四方の登山道は雑草や藪に覆われ、所々崖崩れがあって道形のない所が多くなって居りましたので、白峰・尾添の人達と共に登山道路を開くべく危険を犯して登山した思い出があります。又、昭和26年の白山奥宮境内3000歩の無償譲与に際しましては、大蔵省に御百度を踏みましたが、白山全山の実測図を添付するように命じられまして、これは到底不可能でことでありますから、参謀本部の地図に実測線を入れたものを複写して、恐る恐る提出しましたが、冷汗をかけたことも忘れられません。又、国立公園昇格問題では審査委員の方々が、夏の短い期間中に、しかもバラバラに調査に来られますので、其の都度、山麓の村長さん方と案内役・接待役をつとめました。そのせいもあって、私は在任20年の間に50回も白山全域を駆け廻らせて頂きました。その当時の松原村長・佐藤村長・永井喜市郎氏等の面影が目に見えるようです。

昭和36年8月の白山北美濃地震の際は、登拝者の安否を心配しましたが、前日の登山者はほとんど下山しており、当日の登山者はまだ山麓にいる2時半という時間帯でありましたので、犠牲者を最少限度にとどめることが出来たことは、不幸中の幸でした。白山三峰の頂上の御社殿は、地震のため全部倒壊しましたので、この復興に当って、御前峰の奥宮は、間組の寄進ということもあって、東京で一度組み立てたものを分解して、美濃側の山麓に運び、柱を1本づつ蒲団に包んでヘリコプターで山頂に運搬するなど苦心したもので、今考えて見ても、貴重な建造物であると思います。(後略)」

玉井敬泉画伯も本職の絵を描くのも忘れて、国立公園昇格運動に懸命に動かされた方だった。



それら白山を愛する方々に頼み込まれ、またまだ戦後をひきずる時代に2カ月だけの山暮らしの変則生活を受ける者など探せない事もわかり、また何より「白山なら」の思いもあって、「木下主任」は誕生した。昭和28年の写真は、主任になりたての木下さん。大正13年生まれだと、昭和の年号が丁度、年令と同じになる。28歳の若い若い「主任さん」である。

写真が本業の木下さんであれば当然かもしれないが、室堂での歴年の勤務員集合写真、また「白山会」(力丸さん主宰の会とは別)というその年の勤務員の解散式(遠方に帰る学生もいることから、夏山終了直後に開催されていた)の集合写真、どちらも大切に保存されている。



選暦の室堂会の時のスタイル。赤チョッキ。山シャツ。チロルハットは主任時代の物。

その右端、左端、あるいは真ん中に、とても楽しそうな木下さんが写っている。

当然ながら木下さんは、少しづつ貫禄がついていく。回りは若く、華やかだ。勤務員は当時も、夏場だけの特殊性から学生が主体だった。

もう一種、「室堂会」の集合写真もたまっている。こちらは、かつての室堂勤務員の、木下さんを囲む同窓会。隔年に永井旅館で開催され、パンクしない程度の百名ほどが参加している。こちらはかつての年令差を保ったまま容貌が変化しているが、その真ん中に、これまた、幸せそうな木下さんがいる。

これが25年続いた理由なのであろう。若い人達の人生に、人生を重ね、また、それら学生が社会人になり家庭をもち、顔を出してくれたり知らせをくれたり…。二足草鞋を辞めなかった「主任職」の魅力であったのであろう。

「それが、昭和48年まで。そう、昭和48年11月23日…発病した日やさかい忘れんわね」

初冬の寒さをこらえ深夜まで仕事に精を出されていた木下さんは、脳梗塞の発作で倒れられた。48歳の働き盛りの時のことだった。

2カ月の入院の後、左半身不随から、かつての室堂診療班ゆかりの医師の親身のリハビリにより写真業には復帰。その間、主任職は保留されていたが、山はもう無理の結論を出し、弟の道雄さんに引継ぎをされたのが昭和51年。その道雄さんは昭和45年から、手伝いに室堂に上がっていた。

やはり、室堂管理は特殊な仕事だった。夏のアルバイトは確保出来ても、通しでの職員がな

かなか確保できなかった。

主任を受けた時には、夏山の2カ月のみが山上勤務だった。秋山については、団体登山の申し込みがあれば、先に入山し、釘打ちを外し、めった汁などを用意した場合があった。また、春山については、白山荘が開放されており、木炭や毛布が用意してあって、登山者が自主的に使用することになっていた。

それが国立公園になってからは登山者が増え、春山、秋山も常駐するようになる。春山となると、連休前4月下旬からの入山となる。木下さんも本来の仕事がある。そんなに長く山にいてくれる人は、なかなか探せなかった。

「他人にはどうしても無理が言えない。兄弟にも言えるというものではないが…。私は兄弟が多いんやけど、道雄ならとひっぱりこんだ。山知っとたってわけやなかったけど『ほんならやってみようか』言ってくれて。それがきっかけやったがやけど、あれも30年続くことになったね」

「観光協会はね。交替がおらんがです。神社ならね、職員は交替で10日から2週間交替で奥の宮勤務になって上がって来て、替わりに下りて行って。神主も巫女さんもそんながやけど。

アルバイトかてね、2月通しなんて人はなかなかつかめん、足踏みしとるような人はともかく（笑い）。そんな何日から何日までとかの編成を、全部私がやとったがです」

「夏山始まってしまったら、いやおうなしに勤務員が要るんやから。その頃のあいてる人がなかなかつかめんで。あちこち頼んで歩いて」「時間がある人でもね、山が好きな人でないね」

夏だけの特殊性から、あたる先は大学など、学校関係だった。バイト料は、平地より割高に設定してあった。しかし、

「いくらか？」をまず聞いて来た学生はいなかったそうだ。「山へ行ってみようか」「白山なら」で、申し込んでくる学生ばかりだった。そのことも、木下さんには、嬉しい行脚だったようだ。

室堂にあっては、度々コンパも催し、楽しめるよう腐心されたという。もちろん、ご本人自身好きだったようである。食事にも気を使い、勤務員用には変化あるメニューを厨房とも相談し、荷揚げを手配された。

勤務員は役割により、出勤時間が違う。厨房を手伝う者、発電機をスタートさせる者、掃除に掛かる者、売店に立つ者、登山者を案内する

者、また、別当出合へ郵便囊を担いで下っていく者…細かいローテーションは、ベテラン勤務員が組み、かつ点検に歩いた。そういった分業をやる所は任せだが総采配は主任であり、細かい賃金計算など、仕事は山のようにあった。

「山へ来てからでもね、途中で不満洩らす人やら。先輩連中から『これくらい担げんがが！』言われるとね。本人にすりゃ、初めてで、そんなこと言われてもね。それこそ5キロや6キロで重さでないしね」

「ヘリも、途中から使えるがにはなったけどね。ほんでも緊急に上げんなんもんとか…。ヘリは天候で飛べんがになるし、どうしても上げんならんもんとか、郵便物とかあるしね。勤務員は、別当出合と、ずっと往復もせんならんと決めて（注：ポッカ業務がかなりあったという意味）」

「それもね。私の時から始まって。その頃始まった例が、その後もずっと続いとるがです。先輩から後輩へと受け継がれてね」

ちなみに力丸さんが兵隊になられた時の初仕事は、「中飯場へ行って、フキ採って来い」だったという。

「とにかく山菜を使わんといかんという。山行ったら山のもん。あざみの天麩羅やたら、落たら。それにあわせて、椎茸やたら。椎茸なら荷揚げしても軽いし」

国定公園になった直後の頃であったが、その頃は全国の山小屋もそんなものだった。だいたいが、野菜が外国から空輸されてくる等考えられない頃。金沢旧市外にもまだまだ畑が多く、そこに生えていて、食べられるのなら、使わない方が不審がられる時代だった。

永井旅館にもなめこの塩漬けを頼み、一斗樽漬けしてあるそれを小分けにして運び上げた。小分けといっても、漏れない容器はやはり小樽であった。担ぎ辛く難渋したそうだ。

雪解け直後に顔を出すアマナ（大葉雪笹）もあくがなくおいしかったとのこと。

山菜利用といっても、室堂周辺は砂礫地である。客が登ってくる季節であって、豊富に採れる所…それが「中飯場への出勤」であったらしい。長靴で1時間足らずで駆け下りる。路の束を担ぎあげ、その後は指を真っ黒にしている皮剥き…。それが、山菜採取など以外の外となり、全部の食材を荷揚げせねばならなくなった。もちろん登山客も増えて、量的にも現地調達では間に合わなくなった。

(→ p.120)



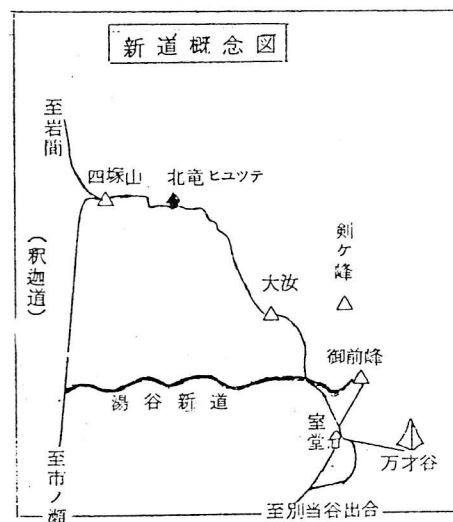
上から3分の1、
右から5分の1
あたり。お花畑
コースの斜め右
下に、右下へ延
びている道痕が
見える。これが
かつてのワング
ル道（湯谷新道）
その先に広がっ
ているのが、千
歳平。

国立公園昇格運動の際には、白山観光協会会
長には国会議員が就き、副会長は白峰村村長、
比叡神社宮司に県会議員も加え…の体勢の政治
力で臨んだらしい。誰の次は誰かと、さすがに
お詳しい。

国立公園になってからは、それまでの老朽化
していた石室を、一つずつ壊しては立て替えし
てもらえるようになった。

ランプやカーバイドの照明も、発電機からの
電球に変わった。夏の最盛期には 500名であっ
た宿泊客が、2000人にも増加していった。その
一方で、大型冷蔵庫が設置され、ヘリでの大量
輸送、大量備蓄も可能になった。

その頃の金大ワングルに関係深い事柄として
は、昭和37年、ワングル新道が作られたのであ
る。そのとっつきはわかりにくいけれど、高山
は自然回復が遅いため、知っている人が見れば
まだ、それと分かるという。私は「当然」分か
らず、とうに昔話と思っていたが、一枚の航空
写真を見せていただいた。なんと、はっきりワ
ングル道が写っている。もうみんなが忘れて昔
話になっているのに…ハイ松は、切られてしま
うと、かくも回復できないものなのだ。今はお
花松原が脚光を浴びているが、千歳平（せんざ
いだいら）も、劣らぬ花園であった。室堂から
も近く、木下さんもかつては、よく花見に行か
れていたそう。



もちろん、当時もワングルはテント暮らしで
、テントから作業現場への往復であった。中で
は、連絡のため度々室堂に立ち寄っていた稲葉
さんを、主任さんは覚えているという。

当時県内には、砂防新道、観光新道、釈迦新
道、白山旧道、岩間道、案々新道、中宮道の7
コースがあった。白峰へ降りてくるコースとし
て作られたのが青柳新道であり、その上部がワ
ングル新道もしくは湯谷新道と呼ばれた。

このあたりはベルクハイム4号、稲葉正巳氏
の記録が詳しく、再録しておく。

新しい道・白山湯谷新道開発

◇コースについて

夏期合宿の疲れも癒えない7月28日から8月
10日まで、白峰村の依頼により、我々14名は、

室堂から主谷を経て釈迦岳に至る新道の開発を行なった。

◇いかにしてこの道は作られたか

コースの選定までも我々に一任されていたために、作業は予想以上に難行した。

確か6日目だったと思うが、真夜中にむっくりと起き上がり、“先発隊が消えたぞ！”とどなった人もあった位で、肉体的・精神的疲労は非常に激しいものであった。

二度台風に襲われはしたが、天気が余りにも良すぎたことも、疲労の大きな原因になったと云えるだろう。

その反面、新道と釈迦岳に到達した時の喜びは大きく、その夜テントの中で、“ハクサンコトブキ”と“エタ”で行なった乾杯の味は忘れられない。

しかし新道は何も我々だけの力で完成したのではなく、色々と助力して下さった室堂主任の木下さんや観光協会の出村さんの御好意も忘れてはならない。

作業は辛いことばかりあった訳でもなく、色々面白いエピソードもあったのであるが、それは別の機会に述べることにして以下簡単に新道の紹介を行いたいと思う。

◇時間的にはどうか

先に述べたように、此の新道は室堂から直接釈迦岳に至る全長4kmの道である。従って、大汝・四塚を通ることなく釈迦岳に行けるから、時間的にも距離的にも非常に短縮される訳である。

◇室堂から千歳平へ

室堂から夕日岳を経て、約20分で千歳平に出る。しかし、千蛇ヶ池にその源を発する沢を下り、途中で新道と合流し千歳平に出ることも出来る。

ここはそのほぼ中央を流れる沢をはさんだ緩傾斜の台地で、草原と、トガ・ハイマツが巧みに配合された美しい高原である。草原は雪渓から流れ出る水と、点在する数個の池に潤されたお花畑である。特に7月の中旬乃至は下旬の頃、ここを訪れる人は、白山の象徴黒百合、可憐な白山小桜、チングルマや、緑の絨毯を敷いた様にぎっしり生えているイワイチョウ等の群落に目を見張ることであろう。作業中、草花の少ない所をさがすのに苦労した位、豊富なお花畑である。とにかくここのお花畑は白山随一であろう。

◇千歳平から市ノ瀬へ

千歳平を過ぎると主谷への下りである。トガやダケカンバの生えている急斜面を下ると主谷へ出る。この谷は余程の雨が降るらない限り、

足を濡らさずに渡れる。

主谷からジグザグの道を登りつめると釈迦新道と合流する。室堂から市ノ瀬までは約4時間の行程である。

次の昭和38年には8期柳川徹氏の記録(BH5号)を見ると12日間、シゲジ〜鳴谷峠間を作業している。BH11号では「通行不能」を「通行可能」にしており、BH15号で再度バイトの要請が来ている…部内記録はそれだけである。観光協会の30周年記念誌には昭和37年着工だけが載っている、いわば幻の道だ。

村田先輩は、このバイトに37年、38年に参加しているという。この土方仕事はたいそうきつく、炊く飯の量も並みではなかった。肉体労働に明け暮れる諸氏は、次第に本能が剥出しになってくる感があって、恐怖を覚えたともいう。そんな真夏の高山帯バイトは連日のように雷に見舞われた。

主任さんも雷は恐ろしかったという。避雷針があって、室堂に落ちることはないものの、窓ガラスの向こうを真横に稲光が走り巡り、さながら天地創造の光景が繰り広げられた。

頂上の方位盤には幾条の雷の跡が見られるし、頂上奥宮が被雷消失(第一発見者は29期深井氏)していたこともあった。

昭和37年は白山国立公園制定の年だ。この気運に乗じて、白峰村は、自村へ下りてくる新道が欲しかったのであろう。

木下さんもその当時は、岩間道よりもっと利用客があるのではと思ったという。しかし登山客の方は、どうせやや長めを歩くのであれば、白山を縦断し、温泉があり、バスの便(当時は北鉄の岩間温泉行きが山崎旅館まで入っていた)もあるルートの方を好んだ。結果、この道はワングル部員の懐を潤すのみで廃道になった。

青柳新道はその後、春山合宿として昭和57年春まではワングルで利用された。

室堂暮らしが長かった木下さんは、室堂から上になると、踏む石も決まってくる程だった。それほど慣れ親しんでいても、ホワイトアウトになってしまえばわからない。常連客が、実は御前荘のすぐそばで穴を掘ってしのいでいたなど、笑い話ですんでよかったことはいくらかもある。客が少なくなってから補修仕事にかかってもらうが、その大工が下山のおり、弥陀ヶ原が白一色になどなってしまうと、木下さんは随分心配されたそうだ。

たかがの所で方向感覚を失う…それが高山で

あれば遭難になってしまう。そんな不幸な事例にいくつも関わってこられた。

中でも印象深かったのは、昭和41年の小松の中学生の行方不明。「しょんべんに。後で追い付くから」

と友人を先行させた清水昭博君は、それきり消えたのだ。場所は十二曲がり、水平道と、エコーラインの3本の登山道に囲まれた三角地帯。どこへ行っても登山道には出られるのに。先生方はもちろんのこと、多くの山岳団体も加わり、一週間探し続けた。ローラー作戦もして、隈無く三角地帯を調べた。今も見つかっていない。

集団搜索の後も学校の先生は上がってきていた。一人で探している光景が長く見られたそう。三角地帯をあれだけ探したからには…おそらく一旦は登山道に出て、早く友人に追い付こうと近道のつもりで、登山道を外れた…それで見つからないのではと思うとのこと。

遭難については、鶴来警察署の所管であり、そちらを調べれば、記念誌に掲載されていないものもわかるという。

観光協会の三十周年記念誌、五十周年記念誌は、木下さんが編集され、写真も選定された。四十周年誌は、神社の方で、追加分を主に文章でまとめておくということだったので、タッチしていないそうだ。

室堂は2002年改築され、また新しい歴史が始まる。主任を辞められてから、木下さんは二度へりに乗って室堂を訪ねる機会があったそうだ。そして、五十周年誌をまとめられた際、かなりの資料を整理されたという。

今年は室堂会の開催される年にあたる。壮々たる役職に就いていた元兵隊達も徐々にリタイアし始めている。室堂会に、また集え、ご縁を楽しめる。お名前とおりの幸せを手にしておられる木下さんだった。

以降は白山観光協会発行「三十年のあゆみ」からの転載です。

コピーを重ねる度、画質が落ちますので、ページもそのままとします。

なお、25ページの写真が木下さん撮影のもので、記念切手に採用されています。





玉井敬泉画伯筆 白山案内絵図 (昭和2年)

白山開山の歴史と

「白山観光協会」

設立の経緯

古来、白山は「越のしらね」「加賀のはくさん」などと呼ばれて衆人に親しまれ、万葉を初めとして多くの詩歌にも詠まれ、駿河の富士・越中の立山と並んで「日本三名山」の一つに数えられているが、その信仰の歴史は、5,000年前からか或いは10,000年前からか、私達の祖先が、私達の郷土に生を承けた時から始まるはずである。

そして、今に白山の崇高さに変りはなく、祖先から受け継いで来た尊崇の想いをそのままに、霊山としての白山を汚すまい、幾千年の後世に伝えようと努めているが、この尊崇の想いは遠い昔の人達といえども…その時代の敬虔な人達だからこそ一層……浄い山頂に立ち、直接神々の座にひざまづいて靈氣に触れたいと希う気持となり、約1,200年昔の養老元年、(或は三年とも云う)越前の僧(或は帰化僧とも加賀の僧とも伝う)泰澄によって人類初の登頂がなされた、と伝えられて今日に到っているが、この事はあくまで信仰そのものの行動であり、そのような観念に基づく行動は「登拝」と云う敬虔な呼び方で言い継がれて1,000年以上も続き、信仰登山時代を具現した。

そして江戸末期、蘭学・漢学医などによる学術的な立場からの調査登山が併せ行われるようになって、急激に近代登山思想による登山に移行し、更に明治末期から大正年代に入って、海外からの影響も加わってか、「征服登山」とでも云うべき冒険的観念も加わった登山時代を経て今日に到って

いる。

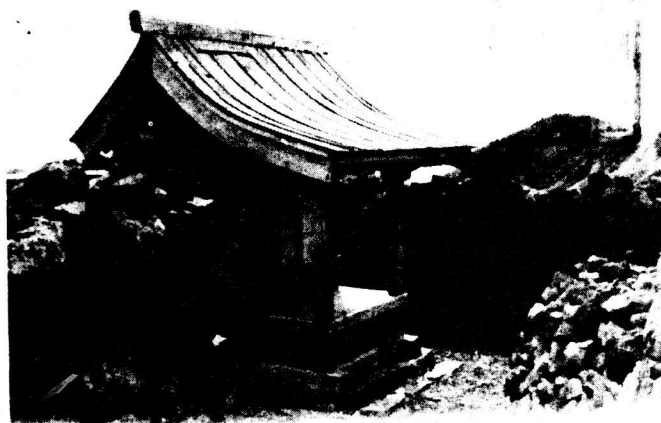
以上のような最近の状況を背景に大正10年9月、限られた1,000人程度の夏山登山人口ではあるが、敬虔な若者を主とする登拝者へのサービスを主な目的とする事業を行うための団体が「白山振興会」の名称で結成され(13年6月内容充実のため改組)昭和6年国立公園法が制定され、全国各地に国立公園・国定公園・都道府県が指定する自然公園が次々と充実整備されるにつれて、先づ国定公園指定を目標に、その運動を強力に進めるべく、23年3月、十余年にわたった「白山振興会」を解消して「白山観光協会」が発足した次第で、今年春満30年の月日を経過した事になる。

以上のように協会発足以来の30年を振り返ってみる時、それは白山開発の歴史の内の僅かに一部でしかなく、古い昔からの、先人の信仰心に基づく、ひたすらな「登拝」時代から現代に到る永い変遷の歴史の、最新の一コマに過ぎない。

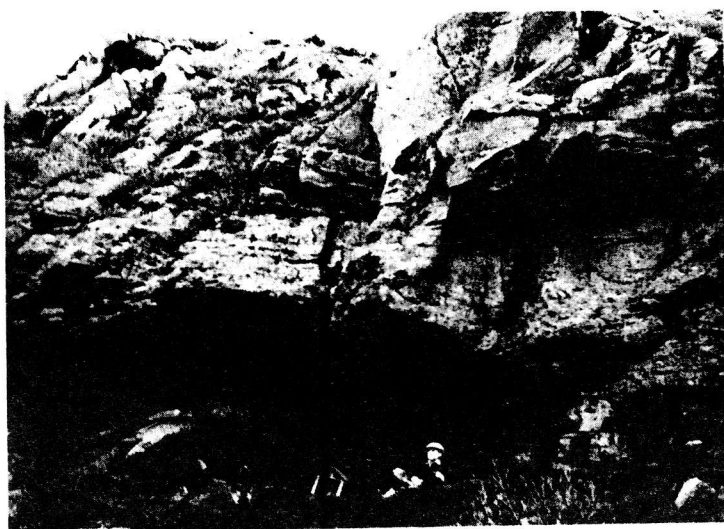
従って「30年の歴史・事蹟」だけを記述して語ることは無意味に近い事で、そのような観点から、振興会時代、或はそれ以前の事蹟をもさぐって、永い歴史の中での30年間で、どのように白山の利用面が移り、且つ変ったか、又変りつつあるかをうかがい知るための参考とし、今後どのように利用すべきか、如何にして誇るべき遺産を後世に伝えるべきかを考え、且つは検討するための指針としたいと希う次第である。



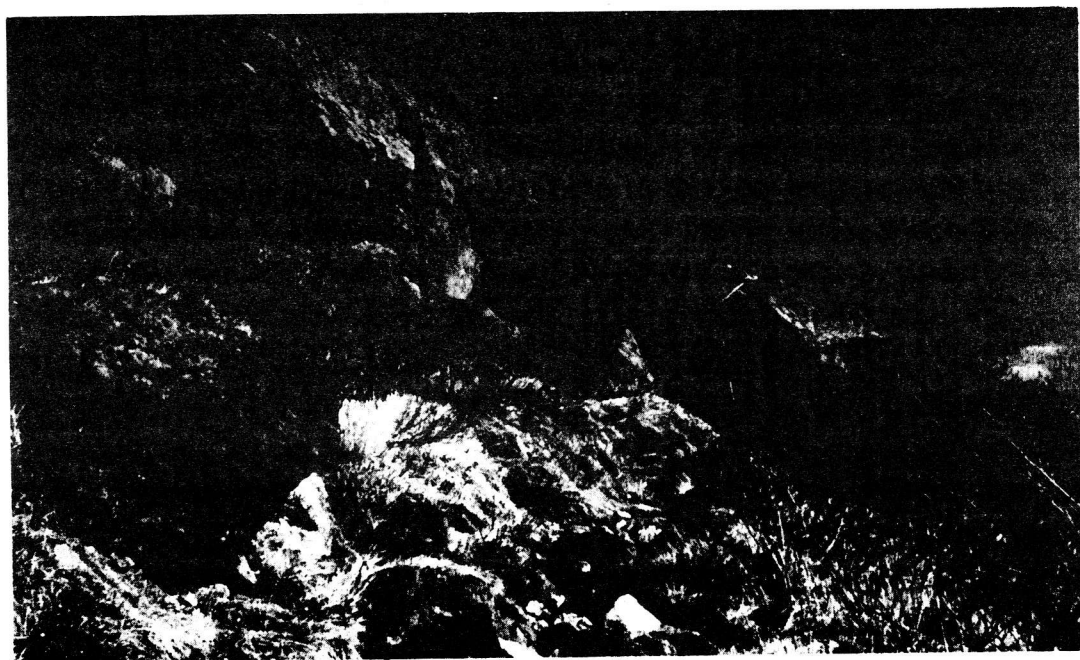
改築前の奥宮社殿 (昭和36年9月)



大汝神社社殿 (昭和27年8月)
(昭和29年9月26日の台風15号により倒壊)



白山開山の祖、泰澄大師が3年間こもって十一面観世音菩薩を念じたと伝えられる「転法輪の窟」(御前峰東斜面直下にある)



昭和36年8月19日14時34分頃発生した北美濃地震により
欠落する以前の黒ボコ岩 (昭和35年8月)

白山室堂の推移

泰澄大師白山開山以後、仏教思想の浸透につれ逐年登拝者が激増した事は想像に難くない所で、初めの頃は辛うじて雨露を凌ぎ得る程度の雨具を携帯してブッシュをかき分け、又は伐り開いて進み、岩角を枕として、又木の根を枕として眠り、明くれば又難行を続ける、と云った必死の登拝行であったにちがいないし、その内に伐り払った雑木や、笹や枝などで立木を便って屋根形を作って、そこを「休み場」として常用した事であろうが、それ等の内の一番利用度の高い場所を選んで、少くとも可成り永い期間の利用に堪え得る所に、もう一步進んだ規模の「小屋」と云い得る程度のものを造りあげ、登拝が増えるに従って、其処に粗末ながらも、更に一步進んだ建物を造り「室堂」と呼ぶようになった、と推測される。

そして初めて「室堂」の名称が見られるのは長久三年(1042年)……「白山記」……のようだから(開山以来約300年余)開山から100年及至は200年経って「室堂」と呼べる程度・規模の建物が出現し、「越前室」はほぼ現在の位置に、「加賀室」は大汝峯から御手水鉢を過ぎて右側の道沿いにあったようで、何れも水の便が良く(今もその事に变りはない)……昭和24.9.1「白山比咩神社社報「白山さん」9月号、玉井敬泉画伯稿……それから江戸時代に入って、「越前室」がほぼ現在位置に、「加賀室」は加賀禪定道(旧尾添道)の馬の背越の天池の横に、別山御手洗池の所に「別山室」、南龍ヶ馬場山姥谷の一角に「美濃室」千蛇ヶ池のほとりに「六道室」更に越前禪定道の慶松平には「慶松室」別山天池わきに「六兵エ室」今清水の大杉の所に「今冷水室」とそれぞれの禪定道沿いに「中継室」(中間室)があった(その証左として今に建物

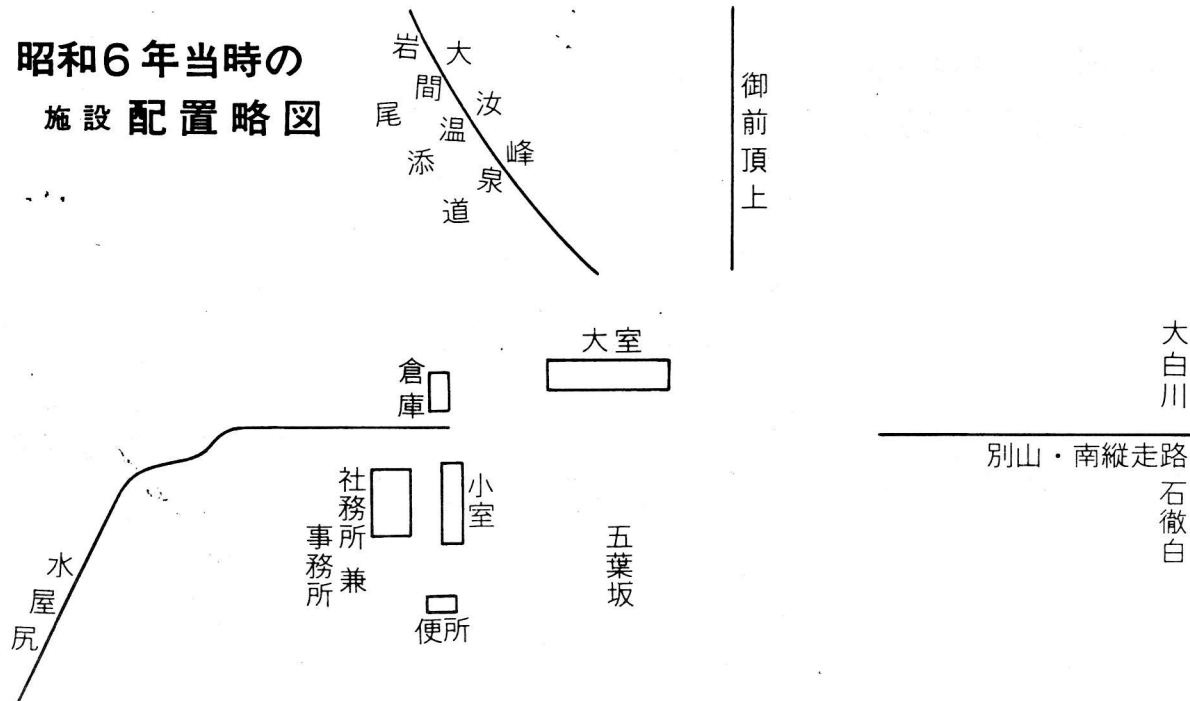
跡が見られる)……前承「白山さん」9月号……。

明治末年の頃には既に間口7間、奥行2.5間の室堂が、ほぼ現在位置に1棟あり(約17坪・58㎡)……収容力40~50人程度で板葺屋根の上には多くの石を乗せて台風などの被害から守るように工風してある。

大正10、11年には県の継続事業(3,000円)として以前迄の木造を腰下石積に改めて「大室」「小室」が新築され(大正10年には白山振興会設立)昭和7年には矢作水力電気会社が「婦人室」(後に黒百合荘と改称)を造り、昭和12年には食堂を新築するなどの事があり、利用者の増加と共に約15年間受入れ態様の充実と整備に努めたが、時代の推移と利用者の急増に伴い、昭和23年「財団法人白山観光協会」発足を機会に、同年には「雷鳥荘」が出来、更に24年「御前荘」と年を逐って古い宿舎の改造・改築を重ねて収容力の増加と内容充実に努めたが、全国各地の山岳公園の魅力が登山人口の増加を促したのか、それとも荒されていない白山の良さが認められたのか、将又37年に国立公園に昇格したことが大きく影響したものか、30年頃からの登山者急増が目覚ましいためもあって、38年からは次々と軽量鉄骨造りの宿舎を新築して、35年には10,000人を超え39年には15,000人を突破すると云う状態に対応してきたが一方38年からは自然公園の整備方針に基き、之迄の建築物・施設は全て取り壊して前記の方針に則った施設(雷鳥荘・御前荘の跡に室堂センターなど)が次々と新築され今日の全体施設が出来上った経緯の下に昭和52年には24,646人(南龍ヶ馬場の利用者を加えると28,407人)を数えるに到っている。

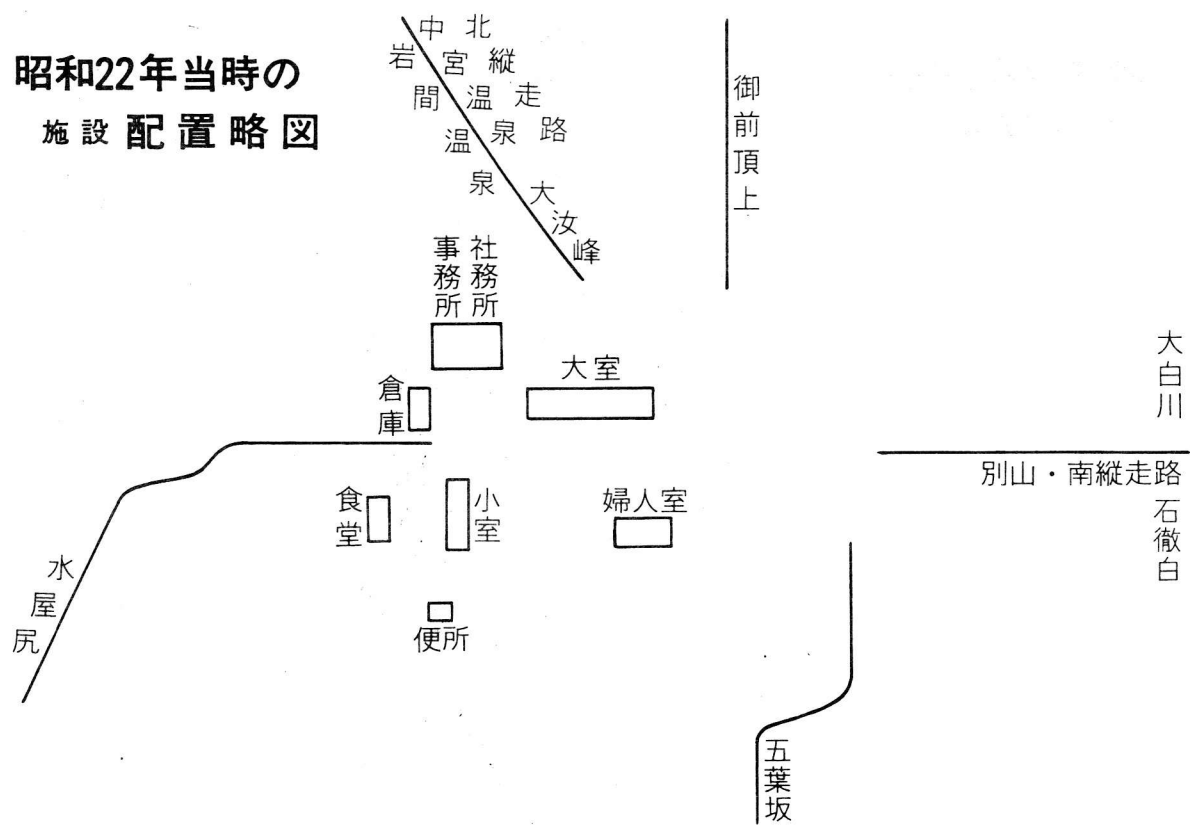
……但しこの数字は凡て宿泊者名簿・利用者名簿に登録された人数だけである……

昭和6年当時の 施設配置略図

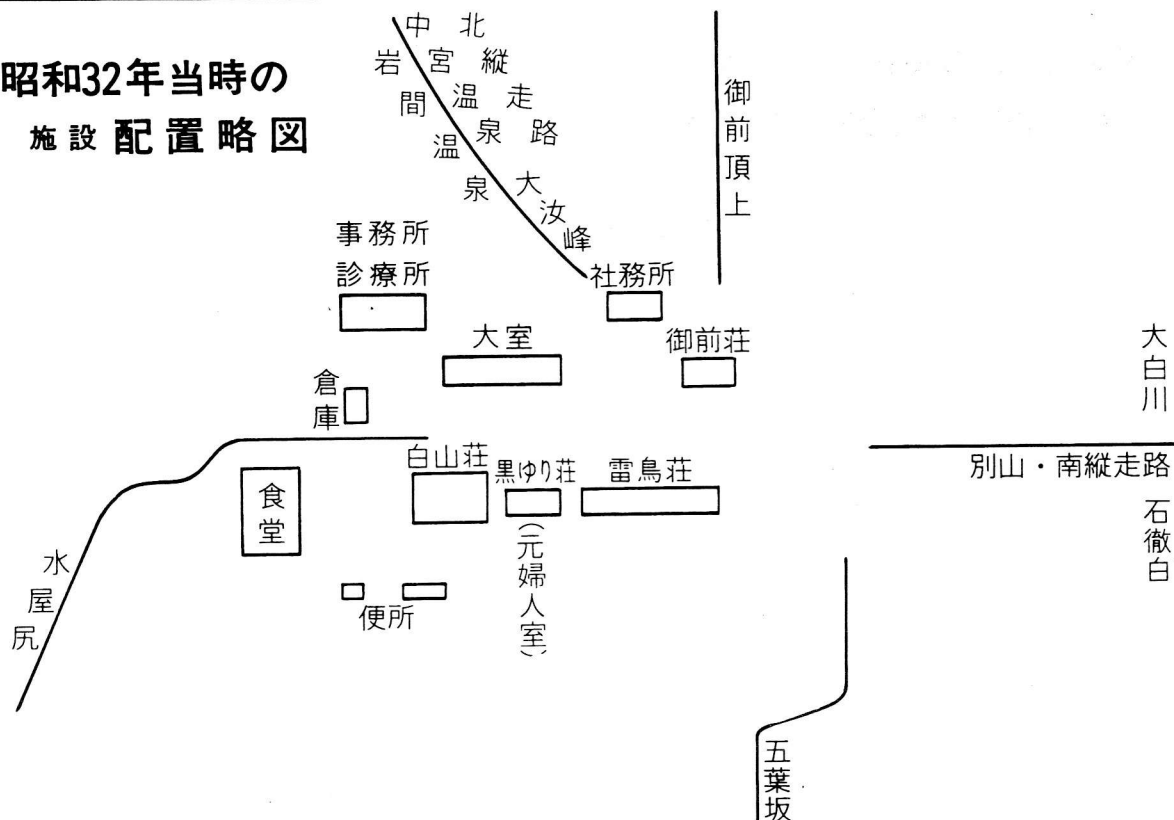


室堂施設の変遷

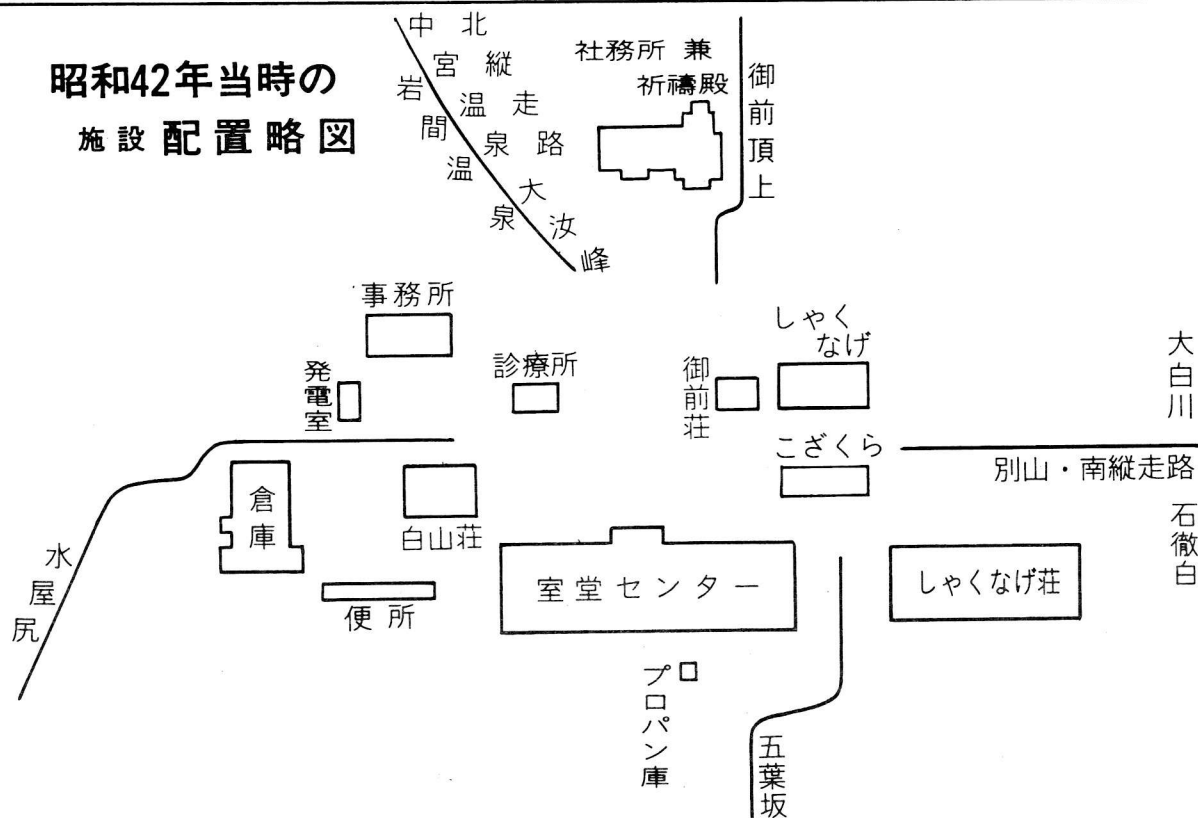
昭和22年当時の 施設配置略図



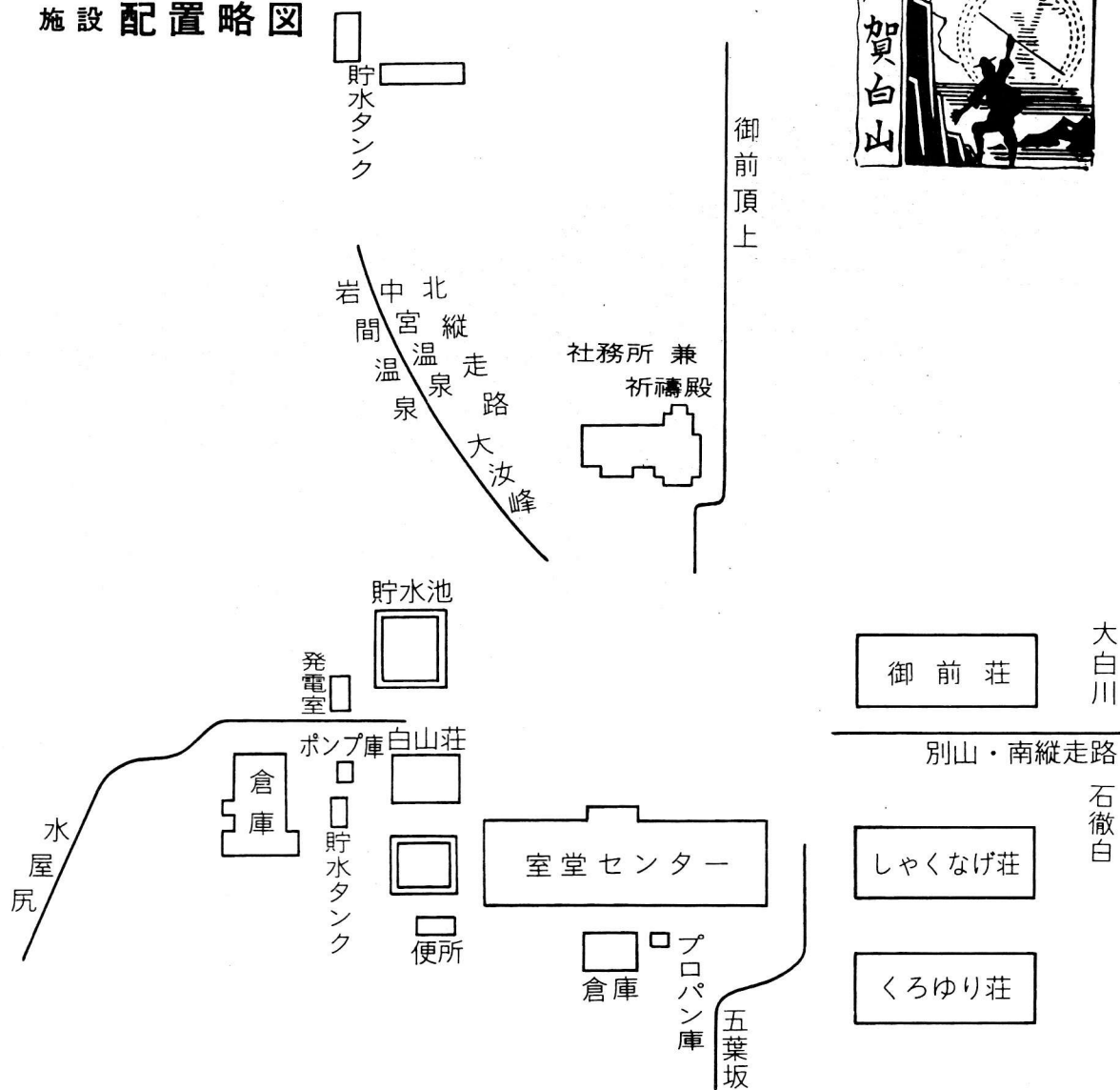
昭和32年当時の 施設配置略図



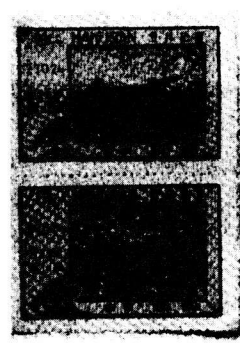
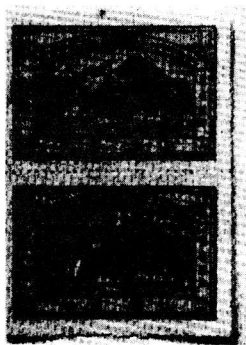
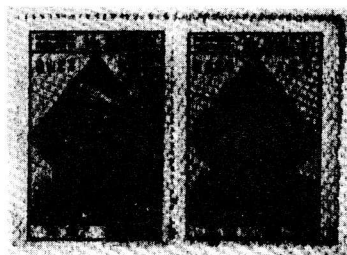
昭和42年当時の 施設配置略図



昭和52年の 施設配置略図



昭和初期の 登山記念シール





翠ヶ池の全景

白山国立公園郵便切手

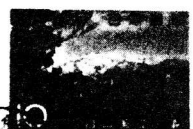
白山国立公園は石川、福井、富山および岐阜の4県下に跨り、御前峰(2,702メートル)を主峰として、大浅峰、刺ヶ峰、大ノコ、根尾岳等の高峰を含む山岳自然公園で、面積は47,402ヘクタール。昭和30年7月1日、国定公園に指定されたが、昭和37年11月12日に国立公園に昇格した。

第2次国立公園切手シリーズの第4集として白山国立公園の風景を描く5円および10円の郵便切手を発行し、全国各郵便局で売り出す。なお、東京中央郵便局切手普及課では通信販売も行なう。



発行日	昭和38年3月1日
種類	5円および10円郵便切手各1種
票面	5円 白山翠ヶ池 10円 白峰村から望む白山連峰
刷色	5円 茶黒 10円 暗い青緑
用紙	白紙、無透
版式	グラビア
印刷寸法	縦22.5ミリ、横33ミリ
シート構成	縦4枚、横5枚の20面
原写真撮影者	5円 木下幸雄 10円 津村記三郎
発行枚数	各10,000,000枚

白山国立公園 HAKUSAN NATIONAL PARK



FIRST DAY OF ISSUE: MAR. 1, 1963

北陸郵趣連盟



夏山開山準備 強力による荷揚げ（昭和30年 6月29日）



食糧の補給荷揚げ（昭和31年 8月）

荷揚げ 風景



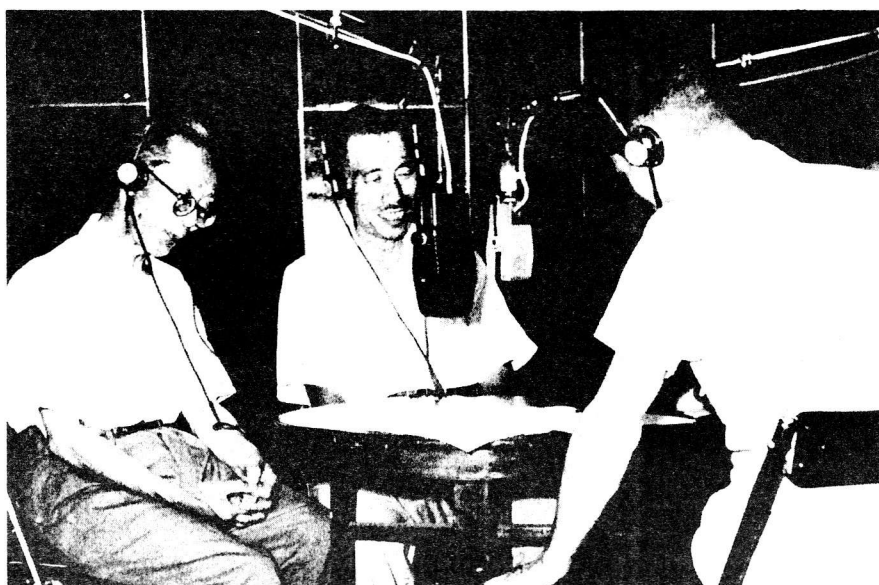
ヘリコプターによる
夏山用物資輸送
（昭和51年 8月）





無線電話
開局記念
三元放送

白山



MROスタジオ
左より
故玉井敬泉画伯
故細川元孝氏



立山



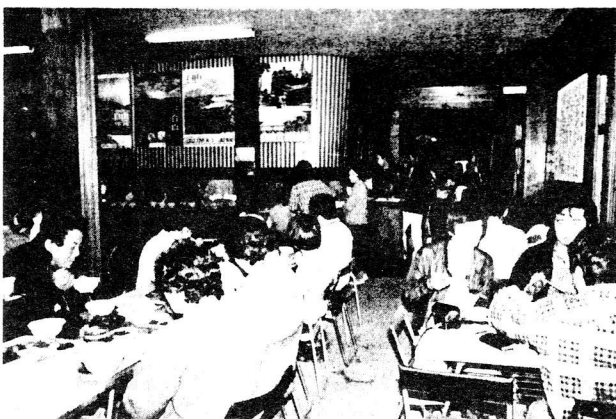
モシモシお父さん、今元気で着きました



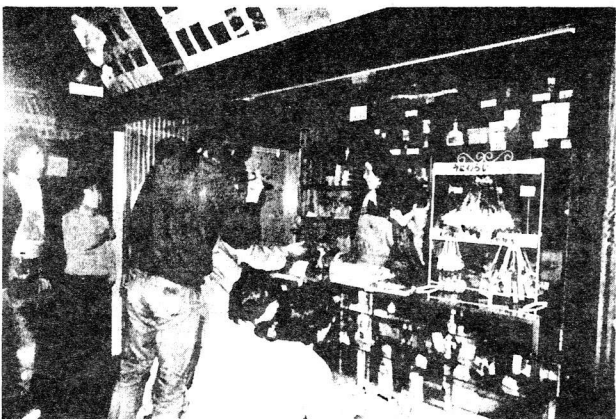
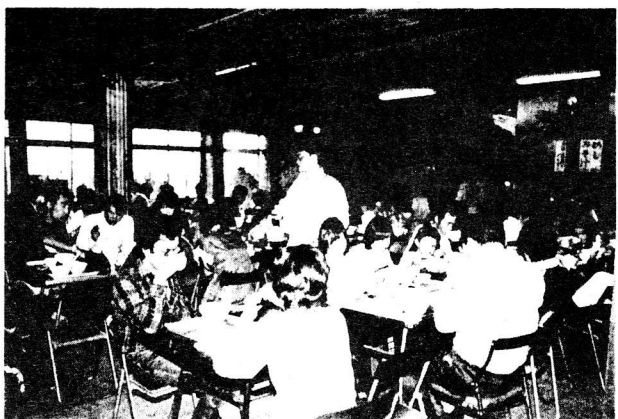
受付売店風景

白山室堂生活 夏のスナップ

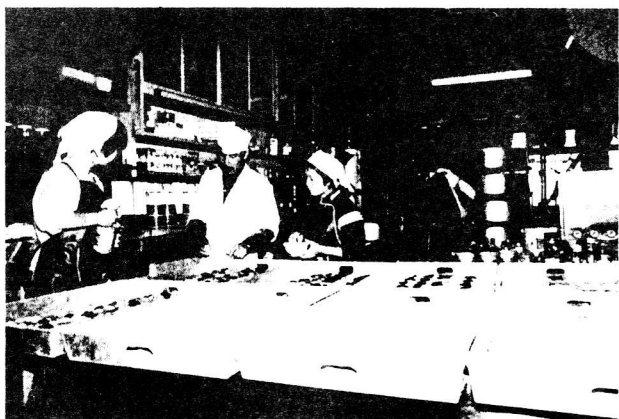
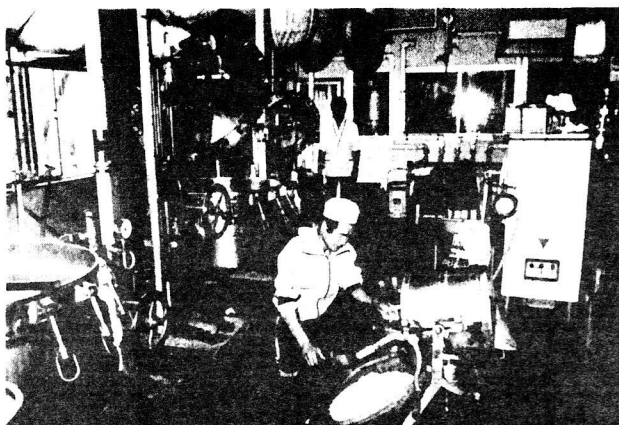
食堂はセルフサービスです。
今日のメニューはなんでしょう？



食堂風景（なめこのみそ汁のうまいこと）

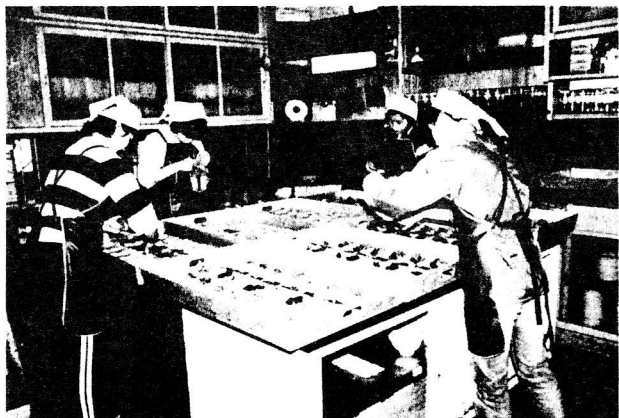


食堂でコンパのあと記念撮影(昭和33年8月)



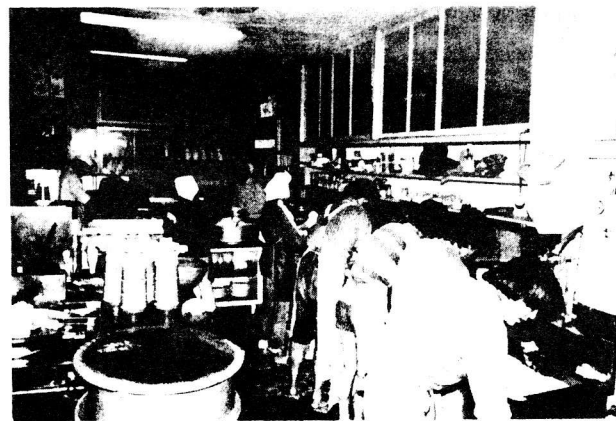
白山室堂生活 夏のスナップ

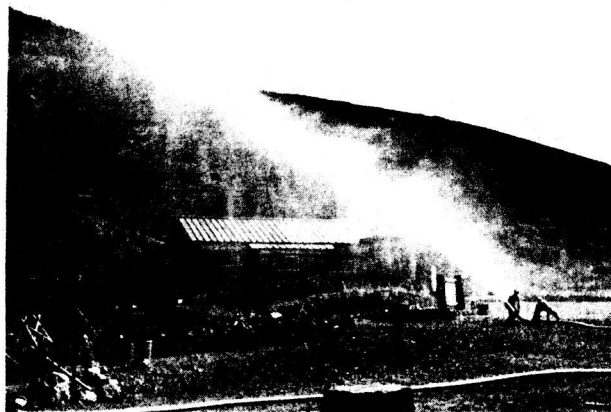
室堂調理場の今昔



左
現在の近代的に完備された調理場で
シーズンピークには一度に二千人近く
の食事を作る日もある。

右
二十年前の調理場風景
なつかしい顔、顔……

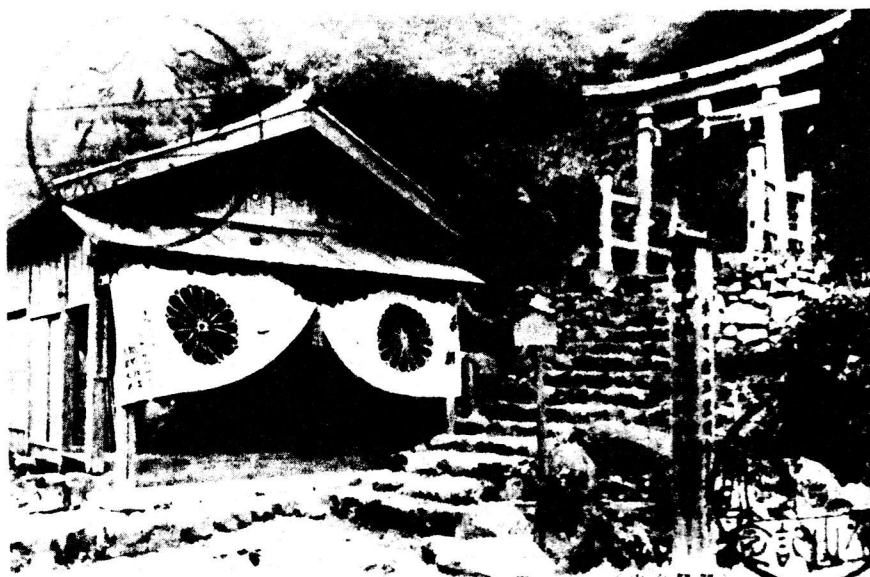




各室のゴミ処理、カンつぶし、毛布干しは、室堂の兵隊（アルバイト学生）達の重要な役割である。ゴミはすべて焼却、プレスされた空カンは翌春ヘリでおろされる。

飲料水や雑用水の確保も大変である。水の豊富な時期には消火放水訓練も行なわれる。





旧白山温泉
(越前禅定道)
登山口



旧 白山温泉

旧白山温泉全景



昭和9年7月11日の手取川
洪水により流失する迄は専
らこの温泉を登山基地とし
て利用した。又この頃から
砂防工事用の資材運搬路も
利用するようになった。

昭和7年のパンフレットから

温泉旅館(市ノ瀬口・尾添口・飛驒口)

宿 泊……1円50銭～3円00銭
強力組合……日 帰 り……3円
夜 掛 け……4円
泊 り 山……5円
平瀬及尾添……10円

冬 期……2割増

ス キ ー……5割増

今日こそは音にきく名もことわりと
見て白山の夏の白雪

本 居 宣 長

昭和10年の室堂の物価

室堂使用料……………45銭	白扇(男持)……………15銭
定 食 料……………60銭	白扇(女持)……………10銭
弁 当 料……………35銭	白扇(平骨)……………20銭
毛布貸与料(2枚つき) 40銭	雷鳥扇子(御製入)…20銭
木炭(1貫)……………70銭	絵ハガキ……………20銭
スタンプ……………2銭	絵ハガキ(高山植物)15銭
焼 印……………5銭	桑 盃……………20銭
白山地図……………3銭	和 酒(2合入)……50銭
白山絵図……………20銭	ビ ー ル……………60銭
雷鳥ハンカチ……………8銭	サイター……………25銭
雷鳥手拭……………12銭	金 剛 枚……………15銭
雷鳥タオル……………15銭	草 鞋……………5銭

◎室当使用料、定食料は団体(15人以上)は各5銭引

白山年譜

年 代	西紀	記 事
白鳳11.6.11	682	白山開山の祖、泰澄大師、越前の国麻生津(現福井市)で生れる…… 景雲元年(767年)3月18日86才で入寂したと云う…… 一説に加賀の人とも、又帰化僧とも云う
慶雲3	706	越前に山災あり、白山の噴火か
養老1.6.18	717	僧泰澄白山に登ると伝う、以来この日を「開山記念日」として諸種の行事が行われている
真観1	859	白山に異変あり
長久3	1042	白山噴火、「翠ヶ池」が出来た
安元2	1076	京都・藤原兼定著「玉葉」に「白川郷」の名が載せられている
康和1	1099	強震あり
寿永2.5	1183	木曾義仲、平氏追討を白山に祈願
正治2	1200	この年、後鳥羽院の「白山の松の木かげにかくろひて…」の御詠があり、白山のライチョウが広く世に知られる
文暦1	1234	強震あり、余震続く
建長4	1252	洪水のため本宮流失
天文10.8.11	1541	大風のため大汝峰頂上の神殿倒壊
23.4.1	1554	翠ヶ池から噴火、翌弘治2年迄続く(黒ボコ岩はこの噴火による遺物と推定される)
天正7.8	1579	白山噴火
13.11.29	1585	夜大地震あり、白川郷「帰雲城」埋没、内ヶ島氏一族城下300軒と共に滅亡
慶長4	1599	白山鳴動
正保2	1645	同 降灰あり
寛文7	1667	この年以來明治の廃藩までの約200年にわたり「お縮(おしほり)小屋」「平小屋」と称する流刑小屋が、加賀藩によって五箇山の各地に設置され罪人を隔離す、その

年 代	西紀	記 事
		数約200人(赦免・病死・刎首・縊死・獄門・移送等あり)
天明5.6	1785	金子鶴邸、白山に登る
文化2.4	1805	この年没した橘南爰著「名山論」に富士山・立山・白山の三名山の名が見られる
文政12	1829	岩間の「噴泉塔」金子鶴邸によって発見発表
明治1	1868	神仏分離令布告
7.7.11	1874	ドイツ人ライン(J. J. Rein)博士によってジュラ紀の化石を含むジュラ層を白峰村・桑島地内で発見、この研究結果が1877年世界に発表されてから、わが国各地のジュラ紀層研究の手がかりとなる
明治末期	1830頃	ほゞ現在位置に間口7間・奥行2.5間の室堂1棟があった
大正8.8.25	1919	東久邇宮稔彦王殿下登山さる
大正10.9	1921	寛政の頃(1810年頃)からの木造室堂を石積室堂に改造した。「白山振興会」設立
10 11	1921 1922	大室・小室が県により増築された
13.6	1927	「白山振興会」組織替
昭和7	1932	矢作水力電気会社により「婦人室」が建築された
9.7.11	1934	「手取川洪水」家屋倒壊流失535棟、死者行方不明110人、耕地埋没流失2,550ha
12.7	1937	御前峰頂上に方位盤設置(矢作水力電気会社奉納)
23.3	1948	「白山振興会」を解消し「白山観光協会」を設立
23.7.18	1948	「雷鳥荘」新築
24.9.3	1949	午後5:00過ぎジェーン台風のため「雷鳥荘」の屋根破壊
25.9	1950	東大・小林真一教授、牛首川・湯ノ谷右岸に於て珪化木発見(昭和32.7.10「天然記念物」に指定)
26.9	1951	尾添川上流・中ノ川左岸に熱泉を噴出する石灰華塔群を学界に発表
27.6.11	1952	五箇山の「麦屋節踊」を無形

年 代	西紀	記 事
昭和28.7	1953	文化財に指定
29.9.26	1954	山頂で無料診療所開設
		台風15号のため大汝神社社殿 倒壊
29.12.25	1954	「岩間の噴泉塔群」を天然記 念物に指定
30.2	1955	ライチョーを特別天然記念物 (地域を定めず)に指定
30.7.1	1955	白山「国定公園」に指定 (47,289ha)
30.7.9	1955	山頂夏期臨時郵便局に無線通 信開始
30.9.27	1955	大汝神社再建(総工費25万円)
31.8.4	1956	日本山岳協会長・塚本閣治氏、 天然色映画「白山」撮影の ため来県
31.9	1956	白山荘竣工
32.6.19	1957	「岩間の噴泉塔群」を特別天 然記念物に指定
32.7.2	1957	白鳥町の「今清水の大杉」を 特別天然記念物に指定
32.7.10	1957	手取川流域の「珪化木産地」 を天然記念物に指定
32.7.11	1957	山頂に方位盤取付(奉納・細川 元孝氏夫妻、運搬人・長崎 幸雄氏)……落雷等のため 破損著しいことにより再度 製作したもの
32.10.29	1957	室平に「白山荘」竣工
33.5.14	1958	平村の「白山宮」「村上家」「羽 馬家」上平村の「岩瀬家」 を重要文化財に指定
33.11.10	1958	「別当出合休憩舎」完成(雪害 のため破損、48.9.30再建) 「岩間ヒュッテ」竣工
33.12.14	1958	白川村の「白水の滝」を天然 記念物に指定
34.7.24	1959	白鳥町の「中居神社の杉林」を 県・天然美術保存林に指定
34.9.22	1959	「甚之助避難小屋」新築(旧) 45.9.30移転・再建
34.10.30	1959	「清浄ヶ原ヒュッテ」完成 (雪害のため倒壊)
35.5.27	1960	白峰村の「かんこ踊り」尾口 村の「でくまわし」石川県 無形文化財に指定

年 代	西紀	記 事
昭和35.7.2	1960	協会事務局長・細川元孝氏、 開山祭の帰途、六万橋にて 転落死(64才)
36.4.1	1961	手取・中宮・岩間地区の温泉 を「白山温泉郷」として厚 生省国民保養温泉地に指定
36.8.19	1961	14時34分頃、別山三ノ峰附近 を震源地とする「北美濃地 震」発生、死者4・負傷者 7・登山者122名一時孤立、 別山神社倒壊、黒ボコ岩の 上部裂落
37.8.10	1962	室堂にターゼル発電施設完成
37.10.19	1962	白川村の民謡「こだいじん」 無形文化財に指定
37.11.12	1962	白山「国立公園」に指定 (47,289ha)
38.7.1	1963	白峰村・桑島「小倉家」重要 文化財に指定
38.7	1963	室平に「軽量鉄骨宿舎」2棟 竣工(ヘリ輸送)
38.7	1963	「清浄ヶ原ヒュッテ」竣工 (雪害のため倒壊)
38.8.30	1963	故玉井敬泉画伯胸像〔ブロン ズ〕竣工・黒ボコ岩に取付 奉告祭(35.9.30没)
38.9.3	1963	奥宮社殿改築・竣工
38.10	1963	「ゴマ平避難小屋」「殿ヶ池 休憩舎」竣工
39.8.13	1964	祈禱殿兼社務所改築工事竣工
39.10.24	1964	「小桜平休憩舎」竣工(雪害 のため倒壊、46.9.30再建)
39.11.12	1964	「南龍ヶ馬場休憩所」竣工
40.5.1	1965	本年度から春山開き
40.8.8	1965	「三方岩岳避難小屋」新設(同 年冬雪害のため倒壊、41.8 再建)
40.10	1965	「室平園地」開設
41.6.4-7	1966	白山を会場として全日本登山 大会開催
41.9.23	1966	平村の「相ノ倉集落」国指定 史跡となる
42.7.25	1967	室平に「くろゆり荘」竣工 (鉄骨平屋建311m ²)
42.7.30	1967	南龍ヶ馬場に「セントラルロ ッジ」竣工

年 代	西紀	記 事
昭和42.7.30	1967	(鉄骨2階建190.26m ²) 室平に「室堂センター」竣工 (鉄筋コンクリート2階建 320m ²)
43.5.6	1968	荻町の明善寺鐘樓門「重要有 形文化財」に選定
43.9.29	1968	室平に「こぎくら荘」竣工 (鉄骨平屋建311m ²)
44.2.18	1969	白峰村・林西寺所蔵「十一面 観音菩薩立像」県重要文化 財に指定
44.9.30	1969	室平に「御前荘」竣工 (鉄骨平屋建311m ²)
44.10.31	1969	「チブリ尾根避難小屋」竣工
45.12.4	1970	上平村の「菅沼合掌集落」国 指定史跡となる
45.12.9	1970	白川村の「どぶろく祭り」重 要無形文化財に指定
45.12.15	1970	白川村の「太窪水ばしょう」 を天然記念物に指定
46.12.14	1971	白川村「荻町の合掌集落」を

年 代	西紀	記 事
昭和46.12.28	1971	重要伝統的建造物保存地区 に指定 白川村・御母衣の「田遠山家 住宅」を重要有形文化財に 選定
47.11.20	1972	「シナノキ避難小屋」竣工
48.6	1973	「別当出谷駐車場」竣工 (45年～継続)
48.7.4	1973	中宮温泉入口・蛇谷沿いに「石 川県白山自然保護センター」 開館(鉄筋コンクリート 部中2階 延1,231m ²)
48.11.5	1973	富山県「五箇山の唄と踊り」 を無形文化財に選定
50.10.30	1975	南龍ヶ馬場に「南龍山荘」竣 工(鉄骨2階建276.3m ²) 畳 6×5、2段ベッド24人×4
52.8	1977	「白山スーパー林道」開通(42 年11月着工)……石川県尾 口村と岐阜県白川村を結ぶ ……延長33.3km



◀ 故細川元孝氏奉納の方位盤取付作業 ▶



駒草会有志による故細川氏顕彰記念碑

登山コースの 充実と推移

白山開山当時には登山コースといった山道があったはずはなく、何とか歩けそうな尾根を踏み分け、特に困難な所はブッシュを伐り開いて進む、といった具合で、永い年月の間にだんだん踏み跡は歩き易くなり、伐り開いた難所も少しずつ改良されて、数百年を経て漸く使える程度の山道が出来上り、支障のないコースとして利用されるようになった、と想像される。

このようにして近代に近い100年或は200年頃に出来上っていたコースとしては、養老の頃（或はそれ以前）からの白山登拝の望みに基づく信仰基地としての遙拝所として造営された。次の3馬場を基点として白山に到達する3線がある。

美濃禪定道（南縦走コース）

駿河・遠江・三河・尾張（静岡・愛知など中京方面）からは、長良川を遡り、白山中宮長滝神社（岐阜県白鳥町）を発して檜峠——石徹白（中居神社）——銚子ヶ峰——一ノ峰——二ノ峰——三ノ峰——別山——油坂——南竜ヶ馬場——御前坂を登って白山

越前禪定道

越前（福井）方面から九頭竜川を遡り平泉寺白山神社（勝山市）を基点として三頭山——一本松——小原峠——三ツ谷（現在は離村して部落なし）——白山温泉（昭和9年7月の洪水の為流失）——六万部山（六万山）——柳谷と湯ノ谷の分水稜線——黒ボコ岩——白山

加賀禪定道

加賀・能登（石川）方面からは鶴来・白山比咩神社を基点として手取川を遡り、瀬戸——中宮——尾添を経てハライ谷——目

附谷と丸石谷の分稜を四ツ塚山——大汝峰——白山

その他のコースとしては、

白川郷平瀬で白川街道に岐れて大白川を遡り——大白川温泉（昭和39年大白川ダム……御母衣第二ダム……建設の為水没）別山谷を遡って地獄谷との分稜を登り、南龍ヶ馬場の山姥谷を降って美濃禪定道に合流、と元の大白川コースが一番古く、天保12年（1841年）頃には已に登山路として利用されていたらしく、信仰心のあつい奥飛弾白川郷の人達によって、美濃道を利用するには余りに遠廻り（約30km）で不便な為に開設されたものと思われる。

このコースは大正末期まで利用していたが、難所続きのため、大白川温泉から大倉尾根を登りカンクラ雪溪を利用して御前峰の東に達して南側を巻き、室堂に到る（現在のコース）ように改修したが、雪溪があまりに永く、危険が予想されるため、昭和の初期には雪溪を捨てて尾根を伝うよう改修して今日に到っている。

一ノ瀬から柳谷を昇り——岩山谷川（岩屋俣谷）の右岸を遡って三ツ岩を経て別山谷川と井谷川、更に畜生谷との振分稜を昇り、別山室（追分）で美濃禪定道に合流するコース（このコースは昭和の初期迄利用されていた）

岩屋俣谷と柳谷川との分水稜線を昇り、別山・御舎利山で美濃禪定道に合流するコース（現在の別山コース）……大正初期に開設され、十数年間一部の人達によって利用された。

その後開設されたものは、登山が漸く一般化するに到った昭和期以後に集中していて、年代順に次の通りである。

大正10年 岩間温泉元湯コース

尾添——ハライ谷を渡り、更に丸石谷を吊橋で渡って中ノ川との分

稜に到って（ここ迄は旧山道……
出作り道……現在車道——中ノ川
の中腹を横断して元湯——薬師山
——長坂——清浄ヶ原（北龍ヶ馬
場）——四ツ塚で加賀禅定道に合
流（以後禅定道は尾添——四ツ塚
間の利用者は漸次無くなる。）

昭和初年 砂防新道

柳谷を主とする手取川の最奥部が
手取川洪水の根源である為初めら
れた治水（砂防）工事は、大正元
年、石川県の直営で中飯場に、翌
2年には高飯場に、夫々工事基地
を設置して工事が進められ、昭和
2年には当時の内務省に引き継い
で国の直轄事業として施行された
が、その為の資材運搬路（歩道）
を右岸沿い中腹に築設したので、
大正末期からその歩道を利用する
ようになり、昭和の初めには甚之
助谷から黒ボコ岩に取り付いて越
前禅定道に合流するよう延長して、
工事用道路を其のまま利用して今
日に到っている。（現在の砂防新道）

昭和5年 釈迦ヶ岳コース

市ノ瀬——旧白山温泉——湯ノ谷
（此ノ間営林署・治山工事用歩道
利用）——湯ノ谷と支流丸岡谷と
の分水稜線を釈迦ヶ岳——四ツ塚
で加賀禅定道に合流。

昭和5年 箱抜（科倉）棧道新設

大白川コース・箱抜峡谷は稀にみ
る絶壁で、登山路は大白川沿いに
十数個の小谷を昇り降りする難路
であるため、この年約400mの断
崖にヒノキ材二ツ割の吊棧道を設
けて通行を容易にした（この棧道
は昭和9年7月の白山を中心とす
る大洪水のため流失。）

昭和10年 ゴマ平コース・北縦走路

中宮温泉——清浄坂——湯谷頭——
しなのき小屋——カンバ坂——い

ちい坂——ゴマ平（以降北縦走路）
——ゴマ峠——三俣峠（以降県境
稜線）——うぐいす平——地獄の
ぞき——北弥蛇ヶ原——お花松原
——翠ヶ池で加賀禅定道に合流。

昭和24年 観光新道

白山観光協会設立記念事業として
開設したもので昭和23年着手。別
当出合で砂防新道に岐れ——市兵
エ茶谷（現在はアト）——別当谷
の右岸・中腹を殿ヶ池で越前禅定
道に合流……現在は改修して市兵
エ茶屋アト——越前禅定道の別当
坂を利用——畜生谷——殿ヶ池。

昭和26年 刈込コース

鳩ヶ湯温泉コース——小池（跡）
——刈込池……此の間部落道利用
——二ノ峰の北で美濃禅定道に合
流。）

昭和29・30年 岩間温泉コース（楽々新道）

岩間温泉を岐点として、丸石谷と
中ノ川との分水稜線を登り、見返
坂で元湯コースに合流するもので
延長6,744m。

昭和32年 三方岩岳コース

元々登山道があったものを、この
年改修して整備したもので、馬狩
部落（現在廃村）から白谷を涉り、
稜線に沿って三方岩岳に登る（北
縦走路に合流）

昭和37年 砂御前コース

白峰——青柳山——砂御前山——
鳴谷峠——シゲジで釈迦ヶ岳コー
スに合流。

昭和37年 湯ノ谷コース

釈迦ヶ岳コース釈迦ヶ岳の奥部で
岐れ——湯ノ谷を涉り——千蛇ヶ
池尻の草原を縦断して——直接室
堂に到達する。崩壊部分多く危険
を伴う慮れあるため（昭和52年廃
道とする。）

昭和39年 蛇谷探勝コース

中宮温泉——蛇谷沿いを遡り——
蛇谷荘を経て蛇谷噴泉——しし見
峠——国見山（これより北縦走コ
ース）——フクベ山——三方岩岳。

昭和39年 北縦走コース

細尾峠——小瀬峠——袴腰山（越
中富士）——三方山——猿ヶ山——
ブナオ峠——大門山——大笠山——
笈ヶ岳

昭和39年 南竜コース・エコーライン

甚之助ヒュッテから間もなく、南
に分岐して南龍ヶ馬場。南龍セン
ターで南縦走コースに合流する…
南龍の入口から万才谷沿いに草原
を縦断して弥陀ヶ原・五葉坂の麓
で室平へのコースに合流する。

昭和40年 鳩ヶ湯新道

刈込池キャンプ場から直接福井・
石川の県境に取り付き稜線を三ノ
峰で美濃禪定道に合流。

昭和41年 噴泉塔・蛇谷探勝コース

噴泉塔から湯谷頭……霧晴峠……
更に蛇谷・コヤ谷口へと横断する
が危険ヶ所あり。昭和52年廃道と
する。

昭和42年 アルプス展望コース

南龍ヶ馬場・南竜センター……山
姥谷沿いに岐阜県境に達し、ほぼ
県境沿いに登って大白川コースに
合流。

昭和43年 別山コース

白山温泉……柳谷川と岩屋俣谷と
の分岐を登って別山・御舎利山で
南縦歩コースに合流するもので、
約50年前の道を再改設した。



故玉井敬泉画伯の功績をたたえ、黒ポコ岩の
背面に埋め込んだブロンズ像（昭和38年8月）



白山に「ライチョウ」 移殖を、とする調査

環境庁は、今、絶滅に瀕している特別な鳥獣の保護問題を検討するため、49年8月、増殖対策委員会を設け、このなかで、ライチョウについては、その生息する環境における保護増殖の他に、生息地域を拡げる為の方法をも実施すべきである、と云う意見に集約されたことで、この意見に基づき、50年7月25日、同庁に信州大学羽田健三教授を座長とするライチョウ移殖調査委員会が設置された。

この委員会で検討の結果、50年度において、かつてライチョウが生息していた、と云う白山地域で、移殖の可能性、環境条件についての調査を行うこととなり、この調査は、8月下旬から9月上旬にかけ、白山地域において、羽田教授を長とする総員11名が現地に入り、

①ライチョウの絶滅原因・鳥獣の生息現況・被食昆虫現存量などの鳥獣調査

②食餌植物・遮蔽植物の分布などの植物調査

③気象・雨量・積雪量などの気象調査

④寄生虫・病原菌などの疾病調査

を実施した。また、以上の調査を取りまとめ、これに基づいて移殖の可否を判断することとし、生息が可能で、且つ地元のコンセンサスが得られれば、52年にも立山から移殖したい。と云う意嚮の下に、前記の調査に先立ち8月28日、この事業に対する協力要請を兼ねて、説明会を金沢市で開催したが、参加者は約80名、真面目に且つ真剣な意見が多く出され、その結果、移殖論のコンセンサスはとられておらず、尚議論が必要である。

当面、現在の生息地の保護を優先すべきだと云う方向で報告書を作製すべきである、等の結論的理由で、この問題は当面「見送り」の形となった。

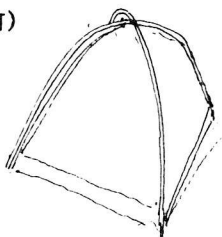


昭和初期までライチョウが棲んでいた大汝峰北斜面

部誌ベルクハイムに掲載された広告を見ても、やはりそこに時代は映し出されているものです。ここではスポーツ店に絞ってまとめてみます。



- 1号 丸善運動具店（大手町） ニシナガ商会
（香林坊） 大和デパート（片町）
- 2号 山みち（上伝馬町） 西田運動具店（堅町）
- 3号 丸善運動具店 西田運動具店 山みち
コジマスポーツ（尾山町） 田村テント
制作株式会社（野町広小路）
- 4号 大和デパート 西田運動具店
コジマスポーツ 田村テント制作株式会社
- 5号 大和デパート 西田運動具店
コジマスポーツ 田村テント制作株式会社
- 6号 大和デパート 西田運動具店
コジマスポーツ 田村テント制作株式会社
北村運動具店（木倉町）
- 7号 大和デパート 西田運動具店
コジマスポーツ 田村テント制作株式会社
- 8号 コジマスポーツ 田村テント制作株式会社
中村スポーツ店（広坂）
- 9号 西田運動具店 田村テント制作株式会社
マンゾク製靴（金大生協）
- 10号 田村テント制作株式会社 マンゾク製靴
- 11号 西田運動具店
- 12号 コジマスポーツ ホリイケ（本町）
- 13号 ホリイケ
- 18号 チャムラン（笠市町）
- 19号 チャムラン 好日山荘（安江町）
- 20号 チャムラン ケルン（尾山町）
- 21号 チャムラン ケルン
- 22号 チャムラン ケルン
- 23号 ケルン
- 24号 ケルン 好日山荘
- 25号 ケルン
- 26号 好日山荘
- 35周年記念誌 ケルン（高柳町） コージツ
（東大通店 新神田店 高尾店）
- 33～37号は1997年1月発行
以後発刊されていない。



経年変化を追うと、長い間には店そのものが消失した…が一番多いようです。

テントやザックは、アウトドアの言葉が出てくる頃から、テント屋を離れました。

また、デパートについては、血洗いの腕と忍耐を買われて、食堂専属団体バイトをやっていた時代があり、そのお情けでいただいた広告でした。紙面の山用品の階に出入りしていた訳ではありません。

その他は、当時の現役部員が出入りしていた

スポーツ店であって、「広告をお願いします」が言いにくいほどの付き合いはあった店とみなせます。どう考えても、それは広告費ではなく、寄付金に該当する出費といえました。

14～17号では、広告ゼロです。山小屋改築が部財政を圧迫、見劣りする体裁での発行がやっとであったため、欲しいけれどお願いにもいけない結果であったようです。

27号から、再び広告はなくなりました。その後は6年に一度の発行となり、広告を集める伝統もなくなりました。

35周年記念誌の広告は主に、25期雄谷さんが自分の人脈で電話を入れてくれ、現役がその後足を運んで獲得したものでした。寄付そのもので広告を出してくれたOBもいました。また、あの時、ノウハウなしの広告取りの陣頭指揮をとった34期松浦さんは、今明石市役所勤務で、花火事件のその後に奔走しています。

今、現役会計は、高三郎登山道修復の補助金で潤い、もう広告とりの必要はなさそうです。だからといって、部誌が発行されるわけでもないのが「時代」です。

さて、今、中高年登山ブームが押し寄せています。20年近く続いてきた点からは、加齢による次の変化がそろそろできそうではありますが…。

出版物を見ても、切り口をやや変えては、重複購入をねらい、綺麗なカラーページばかりが豊富で、「行きたい」心を煽るようになっていきます。

一方、地図がダウンロードできたり、リアルタイムの天気情報が入手できたり、山情報を閲覧できたり…情報が簡単に手に入るようになりました。まさに本人の力量とは無関係に入手でき、それがまた「簡単に」登れる錯覚を招きます。携帯電話で「私はどこにいますか？」「地図？持っているけれど、わかんない」。

そんな方達のために、山用ナビが開発され、ザックの上に広げておける太陽電池も軽量化が図られています。

以上のような変化を、「今時の」と、編者は嘆いておればいけれど、客としてお相手を務める山道具屋さんは、たいへんに違いありません。

「スポーツ店」で電話帳を調べると、それだけではわかりにくいもののサッカー専門、ラケット専門など、扱うジャンルが決まっているものです。

個人商店の場合、山・スキーとジャンルを絞った中で多種の商品展開をし、道具とフィールドの最新情報・話題に通じ、地域での顧客をきっちり押さえていく…が、生き方となるのでしょう。

一方、コージツ、アルペン、モンベルなどの全国チェーン店は、山溪、岳人などの月刊誌、発行本に宣伝することによって、不特定を含む集客をしています。自社製品をブランド化や、直営店といった展開もしています。山道具店というより、アウトドアの言葉の方が嵌まる店構えです。金大ワングルにカヌーのジャンルが加わったのも、これらの店舗でみかけたり、情報入手できるようになってからのようです。今、コージツには35期吉田さんがおり、モンベルは現役、留年OBの貴重なバイト先ということで、広告をいただきに行くなら、そちらのあたりでしょうか。

もちろん、大規模店の1コーナーとして、ゼビオ、デポはそうように店舗展開をしています。どんなスポーツにどんな用品が売られているのか？大体育館か倉庫か？の中を眺め歩くのは楽しいものです。ただ、そこで商品整理に忙しい店員に聞いても、あるのないのしか答えてもらえず、時にはこちらが「こういう時に使う、こんな形の物で」と説明することになります。つまりはこちらがすでに知っているような消耗品を、安く購入が目的の限定利用になります。

以上のように、山道具店にも、時代の波は押し寄せ、目的別利用もなされています。

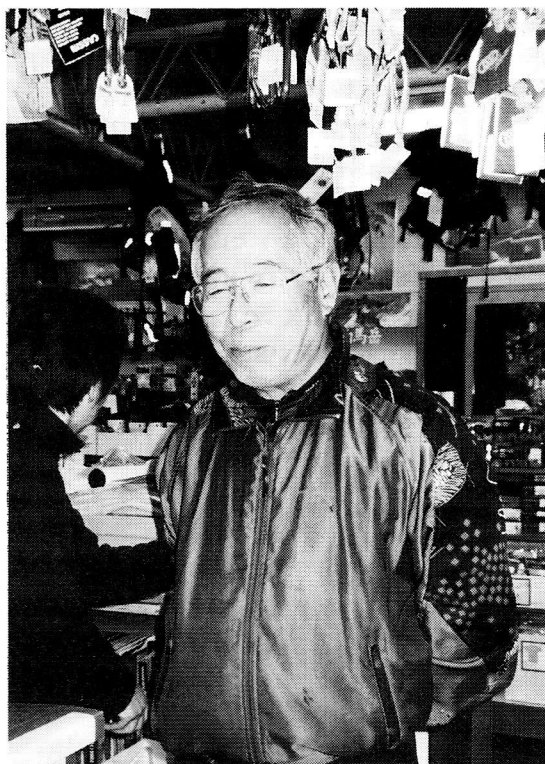
「ケルン」は金沢にあって、一早く郊外型店舗経営を始めた山・スキー専門店です。オーナー吉田さん夫婦がしっかり舵取りをしてきました。

振り返れば、息子達の小さな山靴、また末っ子を担いでいくためのキャリア、その二代目…いずれも意にかなう品がケルンにはありました。その頃他の店では見つからなかった子供サイズの豊富さ、安定感のあるキャリアでした。

また、笈ヶ岳に参加を決めた私達夫婦が、無縁と思っていたアイゼン、ピッケル、エアーマット、厚手シュラフ、さらには増えた荷物のための大型ザックと20万円の出費になってしまったのも、ここケルンでした。カードが使えないとのことで、道具は預けたまま後日支払いに来ることになりました。面倒に思った一方で、万が一がきまとう山遊び…現金決済をなるとと

思い、出費の分気を引き締めたものでした。

山道具屋さんならではの、見える時代、世相があるはずです。厚かましく取材をお願いしました。



「えっ？カ丸さんや林さんと載るの？
格違えますよ。困っちゃうなあ…」

吉田 孝男

(よしだ たかお)

略歴 昭和20年生まれ。昭和53年より、山とスキー専門店「ケルン」を経営。6年後、尾山町より、高柳町に移転。

現在も年に40回余りの山行、山スキーを楽しむ。

まず、お年は？意外とお若かった。こちらがベテランだとかなり年上のはずの発想をしてしまうからである。そういえば、息子達の登山靴を探しにきていた頃、退屈を紛らわす手頃な遊具が店の片隅に置かれていた。あ、同じ世代なんだと、頭の中を前倒しにする。まずは私の知っている頃の山や社会を背景に、お聞きしていけばいいのである。

石川県出身。それだって、富山県のはずと決め付けていた。ああ何も知らんなと思いつつ、今の山仲間についても実はそうは知らないと気付いた。山へ来たら山の話をする。下界を持ち込まず楽しむ…それが山の世界なのだ。

一番初めの山は高校生の時。近所の人に連れ

ていってもらった剣岳であったという。オヤジの作業ズボンを穿き、借り物のキスリング、キヤラパンの出で立ちだった。キャンプの際の水の冷たさを何より覚えているという。

ところが、自分から山に行きたい気持ちは全くなかった。のめり込んだのはスキーの方。23才の頃だった。24才からもっぱら白馬へ通うようになり、暇になる夏もついその近辺の山へ足を運ぶようになった。さらにはその白馬のスキーの先生自身が山のベテランで、山の話題もでれば、早春の蓮華温泉の山スキーなどにも誘ってくれた。そんな中で山靴、山道具が増えていき、休日はぶらぶら一人で山へ行く…そんなふうにならなくなって行ったのだそうだ。

そのように彼自身は山の組織に入ったことはないそうだ

「自分は組織を好まない方の人間でした。今もそうですが、クラブを作ることも好みません。だから、店でやっている山行も、自由に参加していただければいいのスタンスで紹介しています」

「本当は技術向上とか、いろんな知識を深めるためには、組織に所属した方がいいでしょうけれどね…」

さて、部の現役数も、減る一方であるけれど、それでも金大内の部員数では2位になるらしい。ワングルだから減ったのではなく、組織を嫌う全体風潮の中で、減っているということになる。

そのような、組織に属さない選択は、自由である替わり全てが自己責任となり、より旺盛な知識欲が必要になるはずである。が、単にひとりよがり、世間知らずで固まっているのみのようでもある。

では、組織に所属する側はといえば、おんぶにだっこで利用するのみ、が顕著になってきている。組織には、組織を維持していくための役職と、教わったことを次代に伝える責任がある。そんな負担面には関わらず、会費を払えばサービスを受けて当然とする風潮がある。ただ、山に関しては、そのように無責任な利用レベルでは、何も身についてはいけないものだ。

どちらの選択にせよ、長短わきまえての自己研鑽が必要であろう。

吉田氏の場合、組織には所属しなかったが、その時々教わる方がいた。

「立山へスキーに行っているうちにチロルに顔を出すようになって、佐伯さんに山の話聞くようになりました。あの頃一人で行くと、山小屋の主人はよく話をしてくれたものでした。蓮華温泉の田原さんも、炬燵にあたりながら、

このへんの山のうち、あの辺りは絶対入るな、雪崩の危険がある。今度はこっちの道から来てみると、詳しく教えてくれました」

「その後、見上峠の湯原氏やナカオ山岳会の林氏など紹介いただいて、少しずつ教わってきました。今も来店の方から色々聞いています。山の危険は隠れた所にいっぱいある…そのことを私はしっかり教え込まれました。」

「だから難しいことをやってきたということじゃないんですよ。せいぜい、剣の源次郎尾根ぐらい…それも重広氏のガイドで」

部誌の20号から、ケルンの広告は登場する。祖母谷から天狗の大下りの写真が使っている。祖母谷の名剣温泉が奥様の実家なのだ。

「結婚して1年くらいで、女房の父親が体を悪くしまして。女房の弟がまだ高校生でしかから、山小屋を手伝ってくれんかと頼まれました。2年間やりました。でも弟がいましたから、私の性格としては、まあ、親と一緒に仕事をしてほしかったらしいですけど、二人ではうまくいかんと思いましたし、女房もそう思っていたようですし。やむなく今の仕事を始めたという訳で」

「昭和53年6月のことです。まさに無一文でした」

「その前に、重広恒夫（最近では123日百名山踏破が有名。それ以前は、K2日本人初登頂など、ヒマラヤでの山歴豊富）を知っていたんです。当時はアシックスに勤めていましたね。彼に相談したら、ある問屋さんを紹介してくれて、そこから始めることになったんです」

昭和53年といえば、現役数が一番多かった頃である。相応に需要のあった頃ではないだろうか。

「初めは商品をたくさん仕入れることができてなくて、こまめにちょっとずつ、自分でできる範囲で仕入れていました。それが、知らないうちにこんな状態になって…」

遠い目付きになって店を振り返られる。堂々たる構えの山、スキー専門店である。尾山町に6年で、ここ高柳町に移転してきた。当時スポーツは、学生か、有閑人のやることで、スポーツ店なるものも、金大の回りや繁華街にあったように記憶する。いち早く、郊外型店舗を展開したわけである。すでに、スキー、登山に、マイカーは不可欠になってきており、駐車場があり、豊富な品揃えの床面積を誇る郊外型を彼は選択、軌道に乗せた。

「ワングルの方、金大の山の会、山岳部、それにナカオの方にも、いろんな方のお世話になってきました」



奥様と、夏は岳沢ヒュッテの従業員だった次女。

ワングルの方はあんまり…とは思いますが、地道な苦勞の報われた方の「みなさんのお陰で…」には、こちらもほっこりした思いにさせられる。

さて、お店で山行をされるようになったのはいつからだろう。

「一番下の娘が、中1の時から始めて、今高3だから…。6年前あたりからになりますかねえ」

私には、この表現がよくわかる。末っ子がどの程度手が離れているかで、わが家族の行動圏も選ぶ山も決まっていたからである。その成長に重なる背景の山があって、以前来た時は、あの子は背中で、子守日傘の紐で遊んでいたなあ…は、とっておきの思い出である、

「それ以前にも、店の休みの火曜日には出掛けていたんですけどね、私と女房と、あとは店に来た暇そうな人に、あした山へ行きますけどくらいに声を掛けて」

「どうせなら、アフターサービスで連れて行ってあげられないかと、その頃から年間予定をたてて貼り出すことにしました」

山専門店が、地域の山グループの紹介をするだけではなく、自ら山行を計画して募集する…今はよくみかけるサービスになった。客をつかみたければ当然かといえば、私は引率する側の苦勞がよくわかる。ボランティアであってさえ、添乗員なみにサービスを要求され、我儘、苦情をぶつけられる。事故にいたっては、店の方が立場が悪くなるはず。だいたい、この人は…のようなお客さんを断ることにすれば、逆効果にもなりはしないか？

「そうですね。引率する側には事故が一番嫌

なことですよね。私は1回もないんですよ」

「出発前には山行申し込み書に記入してもらいます。そして相当に釘を刺してしまいます。それでもよかったらどうぞということで」

事故がないといっても、膝痛、頭痛といったトラブルぐらいはおきる。膝を痛めると治りにくいので、ザックを持ってあげる場合もたまにはある。目の届く範囲で行動してもらおうを徹底しているとのこと。

きれいに整理された山記録。スリーブ保存ネガにも、なるほど目の届く範囲の人数の方達が写っている。20～30人、まして、70～80人でそろそろなんて、異常だ。私はそのような会を手伝って来て、何度も一緒に登りながら、あの人達の名前も覚えられなければ、山の話をしたこともなかった。主催者の意図が浸透し、把握できうる人数…保険より何より、根本の安全策であると思う。

「国内旅行の延長で山へ…それは堪忍させてもらっています。お客さんだからといっても、

ケルン山行参加申込書

山行名	年月日
御氏名	生年月日
御住所	TEL/FAX
お勤め先	TEL/FAX
山行歴	
病歴	
山岳傷害保険加入会社名	
所属山岳会名	TEL/FAX

注 山岳会に所属の方は、必ず登山計画書を会に提出し、山岳会の承認を得てください。
又、病歴のある方や、健康に不安のある方は、医師の診断書を提出していただく場合があります。

思い付きで山へ来るんでなく、計画性をもって。行くんだったら、よく調べてから、分かん所を聞きに来てくださいと言っています」

「何も調べないで、何から何まで聞いて、それで『私、白山行けますか』じゃ困るんです」

今の世の中、好意が仇になることは多い。サービス業ゆえ、あるいは、ボランティアであった私達より苦境に立たされる場面も…と想像していた私には、深く首肯するフレーズだった。つまりは、「いいことをしてあげている」気分、引率していた私達の方が隙だらけだったのだ。やっぱり店を背負って、自己責任で生きてきた人は違う。

そのような「私、白山に行けますか」のような人を、山行の場合には釘を刺す手があるとして、肝心の商売上ではどんな対応になっていくのだろう。

まず靴。「軽い物」だけがポイントになってしまうという。

「帰るまで安全に足を守り、さまざまな地形でよりカバーしてくれるとなると、相応の厚さ重さがでできます。軽い靴はそれらのどこかを削って軽くしているんです。だから『こちらの靴の方が安心して登れますよ』とは言うんですけどね」

「私も3足くらいを使い分けています。本当は全種を履いて試してみればいいかもしれませんがね。以前より重い靴を選ぶようになった気がします。昔ならどんな靴を履いても、気にならなかった。体がカバーしてくれてたんだと思います。今はああ、こっちの方が乱暴に下りても安定すると、違いがわかるようになりました。それだけ体力がなくなった、年をくったんだと思いますけどね」

次にザック。「白山行くんですけど、どれくらいの大きさがいいですか」と、来る。彼が、25~30lのザックを見せると、「そんなの担げな〜い」となるようだ。

「『夏の白山なら、こういう物が必要だし、体調を崩したり、怪我をしたり、お腹を壊したりといった病気も考えると、これくらいの物は持っていけないと安心できませんよ』と言ってダメですね。うわの空です」

「で、そういう人には、『いきなり白山ではなく、それだけの装備を担いで行ける山からまず登ってみて、白山に備えて下さい』と言うしかないんですけど、なかなかねえ」

「私もそうなんですけど、この年くらいになると頑固というか、人の意見をいれてくれないとか…」

私もメモの手をとめ、大きく頷いていた。若



ければ、若気の至りもある一方で、先達の言うことにまず耳を傾けようの心もあるだろう。始末が悪いのが中高年。山では未熟のはずなのに世間では一人前だからの頭があつてか、聞く耳をもたない。

ガールスカウトの団長も言っていたっけ。子供はまだ、「ここで待て」と言えば待っている。手に負えないのが大人。「私はあだから、こうだから」と、勝手に変えて、それで迷惑になるかもの意識がない。

すなわち、靴もザックも軽い方がいい。その方がバテないではないか！バテたら登れないし楽しめないではないか！ではトラブルがおきたら…すべて人任せなのである。それが、あるいは死につながるかもとは全く考えていない。自分の入り込んでいる山とはどういう環境なのかが意中しない。

中高年登山ブームは、山道具店には嬉しいことに違いない。でもかえってそのエゴに翻弄されている生々しい現場かもしれない…の予想はあたっていたようだ。かつては経験を交えつつの商品説明は楽しかったに違いない。今は…。

「昔は、聞き方がすごくきちんとしていたように思いますね。こちら尋ねられれば、責任の持てる範疇でお答えする。知らないことは知らない、ということなんですけど」

「聞かれれば、ザックはこういう大きさ、持っていくのはこういうものと、ご説明する訳ですが、『どうして？どうしてそんな物があるの？』と…」

「きちんとした方と、きちんとしていない方が、はっきり分かれているように思いますね。夏なんか、特にそうですね」

いる物を聞いて、あれこれを手にした、彼、彼女達は、次には「高い」の、「あれこれ買わせようとして」の苦情を言うのだろう。吉田さんは、つい、

「お金は無理にかけなくていい。防寒具などは家の押入に汚れたのとか、穴があいて縫ぎをしたのとかあるでしょ。そういうのを山用に持っていけばいいんですよ」ともアドバイスしてしまうようだ。

すなわち吉田さんは、きちんと山に向き合い安全に帰れるを最優先に、体力・経験を積み、その過程で、相応しい装備・道具が揃えられていくことを望ましく思っているわけなのだが、今の登山ブーム層は、年代的にそう離れてはいないはずなのに、認識がずれているようなのである。

装備に関して、他にはどんな変化が見られているだろう。

「雨具は完全にゴアテックスが浸透しましたね。30年前の出始めの頃は、ジャケットだけで4万5千円ぐらいしていましたが、今は上下で2万、3万であります。たたくと小さく、軽く、よくなりましたね」

「ストックがよく出ます。聞かれれば2本の方が案ですとは言えますけれど、1本の方が片手が使えと云う方が多い。まあ好みですね」

「ピッケルも、もともと、ホールドとバランスを崩さないための道具で。まあ、滑りだしたら停められませんか。アイスピックも出てはいますが、まあ、氷や岩場へ行く人は減りましたね」

「クライミングやっている人はいるんですけど、人工壁とか、完全に独立したスポーツでやって…昔は登山のジャンルで、山の途中には岩もあるからと、ザイルワークも幅広く取り組んでいたように思いますが、今は別の層という感じですね」

「それでかどうか、店に来る層では、登山目的の若い男の人が少ないですね。それは山を歩いているのもそうで、見かけませんね。単独行してるのは女の人の方。でっかいザック担いで。それも綺麗な人が多い。店頭で若い女性に『あんた達みたいな綺麗な人が山へ来てくれていたら、若い男の人もあるようになるかもね』なんて、声かけています」

ワンゲル現役も、今年の新人は男子2、女子6の割合だった。その女子達は骨があって、元気だという。そして、夏合宿リーダーをやった3年生女子は「男二人がひ弱で、私は30キロ以上担ぐはめになって…。荷物の軽いパーティーに抜かれるのが悔しかった」と、頼もしい弁。女性の活躍大歓迎。しかし、それを上回っているはずの男性、人口の半分いるのに、大学なら上回る数の方なのに、どこへ行った？

「コンロは年配の方でもよく買っていられるようになりました。ガソリン系は非常に減りました。ガスに押されたんですね。何といっても便利ですからね。ただガスは、9月の黒姫でもお湯が沸きにくいことがありました。日帰り圏内の行動でも、使えなくなることがあります。便利な物には落とし穴があるもんです。私は、寒い時期は、ガスとガソリンと両方持って行くことにしていますね」

「水筒は売れなくなりました。ペットボトルで十分ですからね。そこそこ丈夫です。ただ、うっかり落とせば割れるおそれがあるし、気圧の変化も加わりますし。私は必ずアルミの1リットルと、ペットボトルという組合せにしています」



「衣類も次々新しい素材がでてきています。ただ、そんな化繊の肌着は-20℃までといわれています。結局ウールが一番で、-20℃以下になるとウールが良いと聞いています」

「ようするに、自分にふりかかることは、自分で注意する…その立場で道具を選び、使っていけばいいんです」

言葉の端々に「自己責任」の信念が通る吉田さんである。

「舟田さんは、鈴をつけて行けますか」山によりけりだけれど、まだ親の責任はあると思ひ、夫婦だけの時は必ずつけている。

「危険というと、すぐ熊と思う人が多いようですが、実際には落石とか、枯れ木の倒木とか、スズメバチとかの危険の確率の方が高いですよ」

ようするに、山の危険＝熊、対策に鈴をつけた＝それで山は安全と、あまりに短絡な安全概念のここのようである。

「前に女房の山小屋にいた時、いろいろ教えてくれる人がいて、黙って後ろを付いていくということもありました。そうすると、見通しの悪い笹藪、動物臭い所、あるいは道が急に曲がるような所で、その人は声を出していましたね。ホッホーという感じで。相手に、熊とかなんかに『私達がいるぞー』という合図を送っていたんですね。だから私も、見通しの悪い時や、けもの臭かったり、糞を見たり、風が向こうから吹いてきててやばいなあと思うような時には声を出すことにしてるんです」

ああ、なるほど。山には先住人がいるとの認識。地形、風、状況といった我が身が今どこにいるかを五感をとぎすませての確認。そういったマナーも、保身の技術も警戒心もなく、「綺麗!」「健康的!」「快適! (軽装備、清潔、温泉付きなど)」で山へ入り込んでいるのが今の登山者なのである。

今、情報はあふれている。その一方で「人から人への本当の知恵」のようなものは伝わっていないのではなかろうか。

「自分で得るより、習う知識の方が多いと思います。自分でできる経験なんてわずかなものです。本も読んでます。読んでわからない所があったら、幸い親しいのがありますから、電話をかけて聞いたり。昨日もこれ(先にお届けしてあったOB会の会報)読んで、なるほどと」

編者はテレテレ、汗顔の至り。それでも読んでもらわなければ伝えられない、間違いの指摘もしてもらえないと、恥をかくことにしているのだ。

そろそろ電話が繁く掛かりだした。最後の質

問のあたりである。この後にいただいた山行予定表を掲載しておくが、山行数から、その行き先から、しかもその多くが「日帰り」には唖然である。今年海の日には舟田夫婦は、猿倉～白馬～清水岳～不帰岳～祖母谷～樺平を歩いたのだが、二日目の長かったこと！そこを日帰りしたという。正確には、女房と黒部駅で別れ、自分は糸魚川で泊り、電車がなくて翌日車をとりに行ったということだったが…。前回の買物の際、思わず

「それじゃ、ほとんど走っていたんじゃない？」と、聞いたら、そのコースは女房は20年ぶりくらいだったから、清水から不帰の避難小屋まではとぼし、そこからはメドがたって、歩いたのだという。もちろんそんな精鋭ルートに同行したのは奥様の友人一人だけだったそうだ。

「日帰り」を頭においてコースをもう一度見ると、「釘を刺される」以前に御辞退申し上げなければならない所ばかり。

「あの…トレーニングは…できるはずないですよ、お店がありますし。ようするに、これだけ行かれています、山行そのものがトレーニングってことですよ」

「舟田さんが想像されてるほどすごいことはやってないです。老夫婦がちゃんたら歩いているだけのことで…」

「コースはどうやって決めておいでるんですか」

「だいたいこいつがこの山行きたい、あの山行きたいって言って（奥様の方を見てニコニコ）、来月の終わりは早月やなとか、二人で行く時なら、そろそろ体力つけんなんとかお店中でしゃべってたり」

「まあ遅くなってもヘッドランプをつけて、安全にゆっくり下りればいから。そんな感じですよ。そんなむづかしく考えてないですから」

「ただ、夜遅く山から下りてくると、食事する所がない、風呂入る所もない…それが一番あいそむくないですね。コンビニじゃ味気ないし…と言っても、帰りはいつもラーメンです」

ウワワ…である。誰にでもお勧めできることではないが、ヘッドランプを持つ、非常食を持つ、ツェルトも持つなど十分な備えをし、コースを熟知していれば、日帰り圏にも随分と余裕が出来、安全の幅を広げて考えられるということなのである。

それにしても、そういうシオリーを持つ旦那はいいとして、それに付き合っている奥様ももっとすごいではないか！



さっきとは反対側から。いよいよスキーシーズンです

「山へ行きたい気持ちは私より、あいつの方が強いと思いますよ。」

そりゃあ、女性は妊娠の育児のと、拘束される時間が多い。「行きたい」が暮る所はわかりますけど…。

「女房もね、佐伯さんの魚津岳友会に入ってたんですよ。だけど自営業だったから、普通のサラリーマンが行けるような時にかえって休めない。行きづかったみたいです」

その、かもしかのような奥様はあちらでニコニコと笑っていらっしゃる。

今年の日帰り圏で一番遠かったのは越後駒、鷲羽岳になるらしい。あんな所が日帰り圏？ とも口がぼかんとあく私に、やはり見通しがつく所まではとぼして、後はヘッドランプつけて歩いていたのだ…の返事。

聞いたところで真似はできない。ただ、たしかにそうやって装備をきちんと持てば、不測の事態がおきてもパニックに陥らずにすむかもしれない。

道具がどれだけ、山での安全を拡大してくれるか…それを日帰り登山で実証しているのが吉田さん夫婦なのだった。

骨の髄まで「山道具屋のオヤジさん」なのだった。

1999 山行予定表

月日 曜日	山 名 (行 程)
4.10土～11日	蓮華温泉(桐ノ森 天狗原 フナ 沢 小屋 天狗庭 乗鞍 天狗原 桐ノ森)
4.13火	日照岳(尾神橋 送電線巡視路 山頂) 往復
4.20火	笈ヶ岳(中宮温泉 地雷谷 冬瓜山 シタカ山 P1626 山頂) 往復
5. 4火～ 5水	燕岳(中房温泉 合戦小屋 燕山荘…泊 山頂) 往復
5. 8土～ 9日	立山御山谷(室堂 室堂山荘…泊 一ノ越 御山谷) 往復 Mt.SKI
5.11火	頭巾山 八ヶ峰(野鹿ノ滝 登口 山頂) 往復(染ヶ谷 分岐 山頂) 往復
5.15土～16日	立山剣沢(室堂 みくりが池山荘…泊 雷鳥沢 御前小屋 剣沢) 往復 Mt.SKI
5.18火	三周ヶ岳 夜叉ヶ池山(岩谷川登口 夜叉ヶ池山 三周ヶ岳) 往復
5.20木	別山(一ノ瀬 チブリ小屋 御舎利 山頂) 往復
5.23日	毛勝山(片貝山荘 阿部木谷 杓ヶ谷 稜線 山頂) Mt.SKI
5.25火	高三郎(犀川弘 金山谷 石楠花尾根 山頂) 往復
6. 1火	川上岳(位山山荘 山之口川登口 P1617 山頂) 往復 200名山
6. 6日	粉糠山(天生峠 天生湿原 フナ分岐 山頂 分岐 小平湿原 登口)
6. 8火	権現岳 鉾ヶ岳(棚口登口 胎内洞 権現山頂 突鷄峰 鉾ヶ岳 島道鉱泉)
6.13日	赤兎山(小原林道登口 小原峠 山頂 避難小屋) 往復
6.15火	漆山岳()
6.20日	僧ヶ岳(烏帽子分岐登口 前僧ヶ岳・仏ヶ原 山頂) 往復
6.22火	北ノ俣岳(飛越トンネル登口 飛越新道 寺地山 避難小屋 山頂) 往復
6.29火	笠ヶ岳(新穂温泉 登口 杓子平 山頂) 往復
7. 1木	鋳崎山(ゴンドラ山頂駅 瀬戸倉山 大品山 山頂) 【重広恒夫氏ふるさと名山登山】
7. 3土	別山(市ノ瀬 祝 フナ小屋 御舎利 山頂) 【重広恒夫氏ふるさと名山登】
7. 6火	霞沢岳(上高地 明神 峠 P242 K1 K2 山頂) 往復
7.13火	蓮華岳(扇沢 大沢小屋 大岩 針ノ木峠 山頂) 往復
7.14水～16金	烏帽子 野口五郎 水晶 赤牛 奥黒部ヒツテ 平渡し 黒四弘 立山室堂
8. 6金～ 8日	白馬岳 【中日白馬登山】
8.17火	浄土山 龍王山 雄山 別山(室堂 浄土 龍王 雄山 別山 雷鳥沢 室堂)
8.24火～27金	祖母谷 清水岳 白馬岳 朝日岳 犬ヶ岳 白鳥山 親不知
8.31火	前穂高岳(上高地 岳沢小屋 山頂) 往復
9. 5日	唐松岳(第一ヶルン 八方池 上ノ樺 丸山ヶルン 唐松山荘 山頂)
9. 7火	剣岳(馬場島 早月小屋 山頂) 往復
9.14火	薬師岳(折立 三角点 太郎小屋 薬師峠 薬師小屋 山頂) 往復
9.21火	蝶ヶ岳 常念岳(須砂渡 三俣 前常念 常念 蝶ヶ岳 ヒツテ 三俣)
9.28火	釈迦岳(分岐 山頂 北龍 大汝 御前峰 室堂 加わ 別当 分岐)
10. 5火	猫又山(取水口 フナ谷 峠 山頂) 往復
10.12火	金山 雨飾山(大海川登口 天狗原山 金山 笹平 雨飾 荒菅沢 小谷)
10.17日	人形山(中根山荘 宮屋敷 分岐 山頂) 往復
10.19火	三方崩(平瀬林道登口 四等三角点 P1624 基準三角点 P1956 山頂)
10.23土	経ヶ岳(保月山 杓子岳 中岳 山頂) 【重広恒夫氏 ふるさと名山登山】
10.26火	別山(市ノ瀬 フナ小屋 別山 三ノ峰) 往復
11. 2火	青海黒姫山(鉱山事務所 前山 山頂) 往復
11. 9火	位山(スキー場登口 P1233 天ノ岩戸 山頂 天ノ泉) 往復
11.16火	浄法寺山 丈鏡山(旅行村 冠山 フナ背 浄法寺山 丈鏡山) 往復
11.23火	立山 雄山(室堂 一ノ越 雄山) 往復
11.30火	奥医王山(見上峠 医王ノ里 西尾平 白π山 夕霧峠 奥医王) 往復

☆ 一般装備(必ずご用意下さい)

登山靴 雨衣上下 防寒具 下着替(含靴下) 手袋 地図&コンパス ナイフ ハンドランプ(予備バッテリー) 水筒 弁当 非常食 嗜好品 常備薬 保険証写 洗面具 筆記具 時計 マッチライター ロールペーパー

☆ 特殊装備(季節 場所等による特殊装備 必要時はお知らせします)

ビッケル アイゼン ザイル スリング カビナ ハーネス シェラフ マット テント ゴーグル スコップ目出帽 オーバーグローブ 羽毛服 コンロ 鍋 etc.

☆ その他の装備(一般に有ると便利なもの)

ザックカバー スタッフバッグ ステッキorストック スパッツ ゴミ袋 サングラス コップ コンロ ラジオ 電話 無線機 高度計

☆ 上記山行を希望の方は、事前にコース等を検討の上、無理の無い山行にご参加下さい。尚万が一に備え、山岳傷害保険等の加入をお奨めします。(10日前迄にお申し込みください)

☆ 装備は山中で良くあるトラブルを最小限にとどめる為必要な物です、必ずご用意下さい。

ケルン 2001 年 山行予定表

Date	Mt.NAME
4.17 火	口三方岳 (直海谷登口 烏帽子分岐 口三方山頂) 往復
4.24 火	初雪山 (滝淵発電所 林道 山頂) 往復
5. 8 火	高頭山 (熊野川第3発電所 滝分岐 ノ平 前頭 山頂) 往復
5.12 土	立山 Mt.SKI (御山谷 浄土西面 国見)
13 日	(雷鳥沢 剣沢)
5.15 火	岩籠山 夕暮山 (林道登口 堰堤 分岐 岩籠山頂 夕暮山頂 分岐 登口)
5.20 日	金剛堂山 (栃谷 前金剛 山頂 奥金剛 林道 東俣谷源頭 林道 栃谷)
5.22 火	朽木山 (吉野東猪谷林道登口 山頂) 往復
	六谷山 (茂住峠 P1370 山頂) 往復
5.27 日	鳴谷山 (百合谷登口 鎧壁 分岐 山頂) 往復
5.29 火	小秀山 (キノ場 夫婦滝 三の谷分岐 カサ岩 山頂) 往復
6. 5 火	三国山 赤坂山 (黒河峠 広場 分岐 赤坂山 分岐 三国山 広場 黒河峠)
6.10 日	天蓋山 (山ノ村キノ場 P1380 雀平 山頂) 往復
6.12 火	銀杏峯 (小葉谷橋登口 鉦山跡 大雲谷分岐 山頂) 往復
	僧子山 (ゲト 登口 神社跡 山頂) 往復
6.19 火	僧ヶ岳 (東又発電所 成谷山 山頂 仏ヶ平) 往復
6.24 日	赤兎山 (小原林道登口 小原峠 山頂 避難小屋) 往復
6.26 火	四阿山 根子岳 (菅平登口 P1992 根子岳山頂 南峰 北峰) 往復
7. 1 日	大門山 赤摩木子山 (カオ 峠 分岐 大門山頂 分岐 赤摩木子山頂)
7. 3 火	有明山 (黒川沢登口 前山 P1714 落合分岐 北岳 中岳 南岳) 往復
7.10 火	鳥甲山 (貉平登口 白ヶ山 剃刀岩 山頂 赤ヶノ頭 屋敷山 屋敷)
7.17 火	越後駒ヶ岳 (駒ノ湯登口 栗ノ木沢ノ頭 小倉山 前駒 山頂) 往復
8. 7 火	お花松原 (別当出合 殿ヶ池ヒツテ 黒和 室堂 大汝分岐 お花松原) 往復
8. 8 水	お花松原 (同上)
8.14 火	白山 (別山 南竜 室堂 大汝 四塚 釈迦岳 市ノ瀬)
8.21-24	中央アルプス縦走
8.28 火	白馬岳 (猿倉 白馬尻 大雪溪 清水岳 不帰岳 祖母谷 樺平)
9. 4 火	鷲羽岳 (新穂 ヲヒ 平 秩父沢 鏡平 双六小屋 三俣山荘 山頂) 往復
9. 8 土	白馬岳 (猿倉 白馬尻 ヲカ 平 白馬山荘) 泊
9 日	(白馬山荘 山頂 三国境 小蓮華 大池 梅池自然園)
9.11 火	笠ヶ岳 (笠新道 杓子平 山頂 刈谷 槍見温泉)
9.18 火	剣岳 (早月尾根) 往復
9.25 火	鹿島槍ヶ岳 (大谷原 西俣出合 高千穂平 冷乗越 冷池山荘 山頂) 往復
10. 2 火	黒姫山 (御巣鷹林道登口 姫見台 黒姫乗越 山頂 峰ノ大池 乗越 登口)
10. 9 火	岩菅山 (一ノ瀬登口 聖平分岐 岩巣護橋 ノキリ 山頂) 往復
10.16 火	涸沢岳 (新穂高 白出沢 奥穂山荘 山頂) 往復
10.20 日	中山 (馬場島 後本松 山頂) 往復
10.23 火	火打山 (笹ヶ峰 黒沢 七曲 富士見平 高谷ヶ池 天狗ノ庭 山頂) 往復
10.30 火	鉢伏山 (フナ谷登口 亀谷分岐 鉦山跡 山頂) 往復
11. 6 火	奈良岳 (奥池林道登口 奥三方分岐 山頂) 往復
11.13 火	飯綱山 (大鳥居登口 飯綱神社 山頂 神社 分岐 戸隠中社)
11.20 火	火燈山 (吉谷不動登口 火燈山頂 小倉谷山頂) 往復
11.27 火	十二ガ岳 (八本原分岐 山頂) 往復

上記山行を希望の方は、事前にコースを検討の上、無理の無い山に御参加下さい。尚、万が一に備え、山岳傷害保険等の加入をお奨め致します。又、下記の装備は必ず御用意下さい。

装備 (必ずご用意下さい)

登山靴 雨衣上下 防寒具 下着替 (含む靴下) 手袋 ハンドラップ ナイフ 地図 コンパス マッチライター
 水筒 弁当 非常食 常備薬 保険証写 時計 洗面具 筆記具 ロールペーパー ゴミ袋 etc.
 その他の装備 (有ると便利なもの)
 スティックストック チェックカー カメラ コンロ コップ 携帯電話 無線機 高度計 雪ガラス etc.

詳しくは右記迄 ケルン 金沢市高柳町2-7-1 TEL 076-252-5255 営業時間 平 日 10:30-20:00
 FAX 076-251-0832 日祭日 10:30-19:30



スキー・登山・キャンプ
大幅割引中

山とスキーの専門店
ケルン CAIRN

〒920-0005 金沢市高柳町2-7-1
 ☎(076)252-5255 FAX(076)251-0832
 ●営業時間/10:30~20:00 ●定休日/火曜日

1999.4.20撮影 シリタカより笈ガ岳 2000.6.20撮影 釈迦新道下のオオサクラソウ



**冬山用品・アルペンスキー
 テレマークスキー・山岳スキー
 新春セール**

山とスキーの専門店
ケルン CAIRN

〒920-0005 金沢市高柳町2-7-1
 ☎(076)252-5255 FAX(076)251-0832
 1月4日より14日まで休まず営業
 ●営業時間/10:30~20:00 ●定休日/火曜日

山下 忠

(やました ただし)

略歴 昭和6年生まれ。犀川ダムに水没した二又新町出身。元金沢市役所職員。昭和40年頃より狩猟を始める。今も倉谷に日参し豊かな自然を楽しんでいる。

「日中はクマ撃ちに行っとるから、夕方なら暗なってしもうし、うちにおるやろ」

え?!クマ撃ちの話は過去形で窺うつもりだったのに…そんな現在形の話なの!と、びっくり。日曜の夜にと話を決め、行く直前に在宅確認の電話をいれるとしたが、7時を過ぎてまだ不在。ようやくつながったら、

「熊が獲れて、解体していたら遅くなった」という。ウー!テレビの向こうで「マタギが…」なら、ともかく、今日の金沢で熊を撃てきたなんて…。明治時代まで遡らなくても、青森・秋田まで北上しなくても、そんな生々しい話が聞けるのだ!

「ねえ、ねえ、熊が獲れたんだって!お父さんも聞きに行こうよ!」旦那はため息をついて「わしゃ、送ってだけはやる」

私って物好き?

なお、山下さんと私は、倉谷近辺ではとりあえずの顔馴染みである。先の高三郎標柱設置作業の際には舟を出していただいていたし、秋の山小屋酒場では、車の入れる終点までザックを運んでもいただいていた。その軽四ジープには、七つ道具ならぬ不思議道具が一杯積まれていて、それも興味深かったのだが…。

ともあれ、田村教祖の80日間倉谷修業中にも、貴重な隣人であられた。教祖様から、彼が野外研修施設・金沢市少年の森では炭焼き指導をされていること、ボランティアで倉谷廃村までの草刈りをされているなどの情報ももらっていた。

いくら物好きでも、いきなり「熊ハンター」に取材はできない。どんなおっかない人かと、こっちがビビってしまう。あの小柄で、温厚そうな山下さんなら…。こんなご縁を高三郎の神に感謝!

やたら探し回った涌波のお宅の玄関には、弟の嫁さんに分ける熊肉が、本当に置かれていたのだった。

テーブルをセットしたら、畏まってしまった山下さん。まず11期長岡先輩の撮影された、昔の倉谷廃村の写真をお見せしてスタートとする。

「これが、水上正太郎、尾崎、宮崎、東…」と、すらすら戸主の名前が出てくる。部誌ベル



クハイム13号では尾崎義雄さんにお話を窺っている旨話すと

「義雄さんは炭の検査員をやっていて、廃村の時はそのまま、県の林業事務所の職員になって…」

スポーツ振興課の尾崎敬志さんに、助成金のお世話になった話をすると、

「尾崎の家の弟の方の、その弟の方。兄の、のりつぐも市役所やったな」

山下さん自身は倉谷出身ではなく、手前の水没した二又新町の出身である。10人兄弟のおじま(家督相続から外れる弟)であったため早くに町へ出たという。

廃村の際、倉谷住民はばらばらに移住したが、二又民は集団移住をしており、涌波4丁目11番のこの辺り一帯全部が二又出だという。山下さん自身は高尾に自宅があり、ここにも別家を構えて元住民の輪に加わり、倉谷通いの拠点としているのだった。

山奥の倉谷、二又、日尾、見定は、濃厚な血縁関係で結ばれていた。外との交流が少ないうえに、この環境で暮らせる相手であることが条件になる。不便で、社会保障もない時代には、濃厚な親戚関係による共同体を形成することが生きる知恵だった。

昭和38年、犀川ダム建設により二又は水没し、その上流にある倉谷も廃村になった。日尾、見定はそれ以前に廃村になっていたという。拳原山中腹には、私の現役時代にはまだ、見定の茅葺屋根を認めることができた。これも、山下さんは「下沢、羽場…」と、指折り数えることが出来る。沢沿いに3軒、山上には12~3軒の家があり、電気だけは入っていたという。

高度成長の時代、特にオイルショックの直前の日本列島改造論が飛び交った時代、金大ワングルがキスリングを列ねた山域でも麓村が進んだ。医王山麓の栃尾、小矢部川沿いの下小屋、中ノ河内…。

小学校がなくなると、もう麓村は避けられないと聞いたことがある。子供という未来が育てられないとなると、その親世代は麓村を決断できる。子々孫々のために、父祖伝来の地を去って行くのだ。単純に考えれば、車の普及は従来より山村の生活をも便利にしたはず。その便利は、より「不便感」を募らせ、町への麓村力を加速したようである。

ところで、そもそも昔だって、平地より山は不便だったはずである。「平家の落人」のように命が危ないから、人目を避けた山奥へ…は、その当座の理由としては納得できる。それが昔話になってもおかつ、なんで不便な山に住み続ける人がいたのだろう。鉱山があった時代は別として、その後もどうして住んでいたのだろう？聞く方が恥ずかしいくらいだが、やっぱり私は当事者に聞いてみたかった。

「ほうやね。住めば都やさかい、それなりにこんなもんやと満足出来とったというか。なぎ畑もあったけれど、本業は炭焼きやったね」

「当時は、暖房は炭しかなかったさかいね。15kgを4貫というて、それが1俵やけど、少ない家でも5~600俵、多い家なら、1シーズン春から秋にかけて、1200俵出荷しとったね。一括して犀川農協に納めとった。寺津から下でない米はとれんし、馬車で炭を納めて、帰りは農協から米をこうて。ほうや昔は馬車駅もたくさんあって、10台も停まっとったかね。わしが車の免許とったんが、28年。ということは26、27年頃までは毎日馬車が通とったね。」

化石イメージの炭焼きが、基幹産業のうちであったこと、馬車が走っていたこと、そういう交通ルートを支える人達がいたことも、すでに私の「常識」の中にはない。すなわち、ほぼ自給自足で賄い、現金を山の炭焼きで得れば米他を購入できて、暮らしが立った。だからダム建設で麓村になるまでは山に住み続ける選択が続いていたのだ。疑問が解けてスッキリした反面、自分の常識の欠落ぶりに冷汗が出た。

山下さんは野外研修施設・少年の森での炭焼き指導もされている。「体験」のみが趣旨だから、焼いた炭は、施設内のバーベキュー用に回される。窯出しまで結構時間がかかることもあってか、昨年、今年、炭焼きコースはなかったそう。

もちろん山の暮らしで身につけた技術だが、

昔の炭焼き窯の跡は、こんな所だと思う高所にまで残っているという。山人達は原料、燃料を現地で調達し、仕上がった製品のみを担いで運びおろす。天の又のすぐ下にも窯跡があったそう。倉谷が鉱山だった頃、精錬のためにも多量の炭を必要とし、奥へ奥へと入り込んで行った時代があったのだ。

炭のために伐られ、精錬の煙で枯れ、樹木を失った禿山はしばしば雪崩・洪水をひきおこしたらしい。鉱山がなくなり、人が減り、山は緑を復活したが、ついには麓村で人はいなくなった。すべてが昔話の域になり、わずかの石垣のみが倉谷集落跡に残る。

今、高三郎周辺は、犀川源流自然環境保全地域、犀川源流森林生物遺伝資源保存林と何重もの規制がかけられる山域になった。

さて、倉谷といえばオロロである。

「オロロも、昔は今以上に多かった。やっぱり人がおらんがになってから、おらんがなったような気がするワ。」

「わしらも夏は避ける。あれおったら、何しとっても気が散る。特に倉谷部落から上行ったとこなんてたいへんやもん。目も口も開けとられん。尻こうすりゃ、一つかみ取れるもの。8月は行っても3回くらいや。行ったときやあの河原の発電所の跡の、わしら物置にしとるコンクリの建てもんあるやろ。あそこに梯子掛けて屋根上がってビール飲んどりゃ、オロロこんワ。オロロでもんな、下にワーワーておっけど、2~3mもたこなるともうこん。ほやから屋根にゴザ曳いてゆっくっとしとっけど。ほんでも夏は行かんワ」

山下さん達も、夏は20人程の仲間で、北アルプスへ出掛けているという。

その小さな発電所は自家発電であった。それがついてわずか3~4年で、倉谷は麓村になった。当時は二又も自家発電、見定は寺津に発電所があったため、もっと早くに電気はついていた。真下に取水口があったため、馬車道もない最も不便な集落であったに関わらず、番外の早さでついたので。そして日尾は、電気のつかないうちに麓村になった。

昨年2月私と学研の友人は、ヒマラヤトレッキングに出掛け、いかにも懐けっぽく、電気がない寒村を旅行記に描いたのだが…。日本だって30年前の山村はそうであったことが、もう抜け落ちていく。昔から経済大国であったような錯覚を私自身がやっている。

昔話を語る人もあとなずかなのだ。そんな車のない時代には、月ヶ原山を越えて、下小屋、滝谷、福光の方が金沢へ出るより近かった。ちなみに二又新町の者はほとんど、福光祖谷の本経寺の門徒だという。

「ダムからちょっと上手のカンダンという谷を詰め、尾根を越えて、オコダン、中ノ河内、滝谷、刀利、立野脇を通して。あんで半日ぐらいありゃ、朝ちょっと早出りゃ午前中に着いたらしいワ」

「年寄でも、ちょっと寺への土産持っても登って行けたらしいワ。金沢な、半日ぐらいで着かんわいネ。わしらかて、今でもホンコサ（本恩講）いうたら、福光や。金沢にあってもよさそうやけど。昔はそっちがあたんまいやったがや」

「二又からやったら、ちょっと下がって、カンダン上がって。きれいな道ついとった。尾根んとこは今見ても、堀り割りみたいが見えるワネ」

昨年、標柱作業の帰りに田中さんが迷い込んだ谷だ。秋草が茂っていたばかりではない。私が山菜採りの踏み跡とばかり思っていたのが、昔の山越え道だったのだ。

車では大回りの必要な場所が、山の反対側にあってびっくりすることは多い。とんでもない辺鄙な所へ来てしまったように感じていたのにそこから今度は別の文化圏が始まり出すことがある。人がもっと速者に歩いていた時代、山奥は決して行き止まりの山奥ではなかったようだ。他国への最短距離、それゆえの人の行き来もあったようである。

私は、力丸さんの調べられた犀川ダム周辺の谷名図を広げた。力丸さんは、これを調べるために、仕事ですんでからの夜、倉谷を何度も訪ねた時期があったという。住民の方は、谷名を知っていても地図の見方を知らず、何度も訂正するはめになったそうだ。その上、谷の名前なんて、面白くもない話より、熊撃ちの自慢話の方にすぐ脱線してしまったという。

撃ち方は雪庇の蔭に隠れ、追い上げられてくる熊を待つ。自分の方へかぶさっている雪庇に立往生した熊に、銃を押し当ててズドン。それでも、右往左往しかできない熊にさらにズドンで仕留めたそうだ。

「はあ、よお調べてあるもんやね。日尾の池も出とっし。ほやけど、今日わしらが熊獲ったとこは、ここに出とらん。あんまり里すぎで」

「熊は、だいたい今年らも、犀川ダムから上流で全然気配ないね。何でか知らんけど、里ば



これが、私がお邪魔した日に獲れた熊。

12月16日15時30分頃 雌 63kg

平沢川上流 尾乃谷 赤倉展望台の向かい

参加者15名

っかし。こないだから2～3頭獲ったがも里ばっかし。この地図に出とるとこで、一つも獲とらんわ」

《里とは、つまり、人馴れしたとか、そういうことなんですか？》

「何か、人間のおらんとこに熊もおれんがな。昔や、倉谷、二又、見定や日尾にも人がおったさかい、そこらにも熊はおったけど。何かそんな気がするわ。獲かてほやろ、山におれんで里へ出てきとる」

「倉谷の辺は、昔植えた天然の栗やらたくさんあっけど、全然出てきとらんさかいね、熊は。今年の猟期は11月15日から解禁で始まっとるけど、この地図ん中では獲れとらん。ゲートよりこっちはっかりや」

初耳ながら、すごいことを聞いた気がする。人を避けてひたすら深山に籠もってもよさそうなのに、人が出沒するような環境でないと熊は住んでいられないらしい。つまり、人の作った物を食べるという意味ではなく、人が出入りするような環境で育つ類の野生植物が、熊の食性に重なっているのだ。人が町へ出てしまい、その結果、熊も町近くにひっぱられて、一般人とまで異常接近してしまうケースが増えた。それが、人馴れしたとも見えてしまうらしい。

山下さんは「熊の方が人間を恐がっている」という。熊が人間を襲うのは、自己防衛。この

頃は、温泉街で熊が出た、襲われた、人馴れしたのとやかましい。しかし根本的に、「熊は人を食わないが、人は熊を食う」の食物連鎖上の上下は決まっている。だから人馴れしたの、鉄砲で撃たれた経験があるののないの、人が鉄砲を持っているのいないのに関わらず、彼らの本能の中にまず「ヒトは、自分を襲って食べる恐い動物」が、刻みこまれている。だから、襲われる前に、牙や爪で応酬、逃げようとするのだ。そもそも食物にもならないものを野性動物が狙うはずはなく、不意に出くわして吃驚するのは熊の方であって、恐怖のあまり向かってくる…それを人間の方が「襲われた」としているらしい。

今日は12月16日。温暖化したとはいえ、もう医王山は白い。《熊も、もう冬眠しているんじゃないんですか？》

「いや、もうしばらくは…。もちろん冬眠に入ったのもおるやろうけれど、まだうろうろ歩いとる」

「今日は丁度、近い犀鶴林道（駒形の橋を渡り、鶴来につながる林道）を上がっていく足跡を見付けて、追い掛けて追い掛けて…。仕留めたんが夕方遅かったから、帰日も遅なってしもて」

《お仲間は…。やはり、元倉谷住人、二又住人ということなのでしょうか？》

「ほうや。金沢市内やったら、どこに住んどっても、石川県猟友会金沢支部の会員にならんなんし、ここらだけでも10人はおる」

「わしに、隣に、ぶしさんに、荒井保に…このへんぐるうっと。昔やもとおったけど、やっぱ年令的なもんもあっし。わしかてそろそろ引退せんなんと思とっけど」

「ほうや、昔は各家庭に、免許持っとる持っとらんに関わらず、銃があったもんや。子供時分から、親の見よう見真似で、こっそおっと、撃てるがになっとった。昔やそなんして、のんびいっとしとったもんや」

「ほうや終戦頃までは、そんなもんやった。戦後になってからや、銃刀法やが決まって。終戦前までは、免許がどうのやとか言うたらんかった。霞網かて、ほうやった」

山の住人には当然の生活道具として銃が入り込んでいたのだ。《それはどんな銃だったんですか？》

「やっぱ旧式のもんやった。今とは全然。たまにカチンと不発やったり、あてがいなもんばっかりやった。今はほんなことない。銃の性能なんてものすごお、いいがんなった」

「熊であろうと猪であろうと、今はライフルやし。200mから300mくらい訳ないし、眼鏡もつ

いとるし、問題ならん」

「私らの子供時分な、銃なんて槍と変わらんようなもんでなかったかな。勢子かけて、追うて、追うて、よお接近してから撃とったもんや」

《いったい、一シーズンにどれだけ熊は獲られるものなんですか？》

「11月15日から翌年の2月15日まで、これは許可制限なし。グループであろうと、個人であろうと、何頭獲ってもいい。それ以降は、石川県の場合、金沢以南ということやけど、金沢支部、石川・松任支部、それは白峰も含めてやけど、加賀・江沼支部、小松・能美支部、その4つの支部にそれぞれに頭数を制限しての許可が出る。それは4月1日から5月31日まで、有害鳥獣駆除という名目で」

「金沢の場合、今年は6頭、去年は10頭やった。しかも団体で獲ることになっとる。それは、先の猟期中に獲れた数で調整しとるみたいやね」

山下さんの目から見て、熊は里近くへ出てきているだけではなく、頭数が増えていると感じるとのこと。ちなみに有害鳥獣駆除の猟期は4月1日から、5月31日までであるが、今年は制限数の6頭が初めの2週間のうちに、里近くですぐ獲れてしまったという。小さい熊は獲らない、親子熊も獲らない…そうしてさえ簡単に目標数に達してしまう。

「昔、春の熊いうたら犀滝やら、犀滝の上までも行ったもんやけど、今そんなどこへ行かんでも、里山でもう頭数制限に達してしまう」

「昔はいくら獲ってもいいという時期でも、倉谷、二又のあった時分でも、10頭…10頭獲れた時と獲れなかった時があった。そんなこと思や、今はすぐ獲れるさかい、増えたんやないかね。保護に重点をおいとるから、増えたんとちごかね」

「おとついても、湯涌の畠尾の陶石山からと、高尾山からと吉次山へ上がる、あそこに登山道あるやろ。あそこすこーし上がって行った所の登山道にきれいに踏み跡があって、誰やろおっかし、こんな時分にもう登っとる人がおるがかと思うたら、熊の足跡や。登山道をきれいにあがっとるがや。ははん、これやったら、登山する人が熊におうたということになるんやなど、わしや思たわ。道のあつとこばっかり歩いとるもん」

「熊かて、やぶのないとこの方が通りやすいしね。あの少年の森とこの、あんな近いこの登山道も、きちいんと歩いた跡あったわ」

えーっ！昨年、私達が標柱を立ててきた所だ。何か身震いの心地である。《いつまで、熊は出歩いているものですか？》

「20日頃までは出とるね。正月まで、歩いとるのもおるわ」

《それはまだ食物を探してるんですか？》

「その頃はどのみち食べもんはないわ。一頭一頭の性格やね」

「柿とつとるとかの騒ぎになるがは9月10月の猟期前や。11月になったら里（人家のそば）へは出てこん。葉が落ちてしもやろ。山が明るうなって、身隠す所がなくなってしもと、もう近寄ってこん」

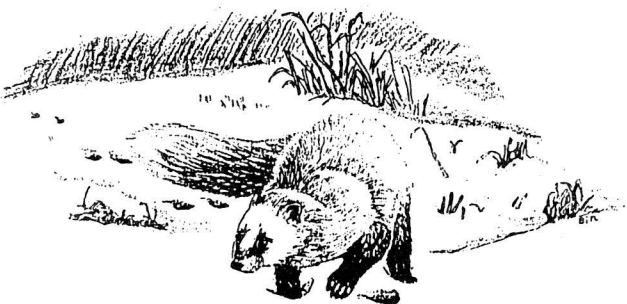
「夏から、9月下旬、10月までや。蜂蜜が狙われたやら、柿食われたやら。猟期の頃にはそんな近くには出てこん。猟期になったら、こっちが熊を探しに行くさかい、熊が出たの情報も入ってこん」

「熊が出た…の騒ぎになるのは猟期前の話やから、その頃は団体行動しか出来ん時やし、行政の市役所から電話が入ったり、農林総合事務所から連絡があったり、地域の人からの電話があったり。そうなると、有害鳥獣駆除という名目で出ていくことになる」

「猟期を聞いた後には、また何で冬に？の疑問がわいた。農閑期にあたるからか？とまで思った。」

「猟期については、猟を生活・趣味にする側と、世論や世界的要請の野生動物保護の立場をとる行政との間に、当然の攻防があったらしい。昭和40年代までは11月1日からが猟期であり、それが15日に繰り下げられるにあたっては、では終わしも2月末日まで繰り下げにと、猟友会も粘ったらしい。そのもっと以前は無制限であった訳だが、すでに時代は動物保護に向かっていた。すなわち、動物の子育てが終了している冬であればと、猟期が定まり、免許を持つ人達に許可が出るのだ。熊、猪以外の毛皮獣、キツネ、テン、イタチ、トバ、ハクビシン…すべて、11月15日から、1月31日までが猟期だという。」

「その頃、動物達は雪に足跡を残すことになる。「とんでもない動物・人間」は、彼らと知恵を絞っての狩りをやるのだ。気の合ったメンバー同士で、或いは単独で。」



「そんな猟で山中に入る時はスパイク長靴を履いているとのこと。年内はそれ。もうしばらくしたら、長靴にかんじきとなる。スパイク長靴はかんじきの紐を切ってしまうためだ。そして雪のしまる春はまたスパイク長靴に戻る。」

「ライフルは3kgぐらいあるという。それに弾、食料、結構ザックに担ぐことになる。それでも登山をする人に比べれば軽いもんやという。熊を追い続けなければならないのだから。といっても、今はハンディの無線がある。常に仲間と連絡を取り合い、ロスなく追い詰められるようになった。」

「山下さん達は犬を連れていくことはないという。犬に追われると、熊はすぐ木に登ってしまうらしいが、狩猟犬としての訓練がいるらしい。犬を持たなくても、地形を熟知している彼らは、無線も駆使して、追い詰めて行くのだ。」

「もちろん彼らは目がいい。「あそこにおる」「おお、おるな…」と、分かるという。」

「知らん人が見てもわからん。ハンターの目がある」という。

「単独で狩りをする人には、料理屋に売る人もいるらしいが、売るほど獲れるわけではない。彼らはグループで獲って、飲んで、騒いで、回りにも戦果を分けて、それでおしまいということだ。」

「私なんかも、たかが、ワラビ、ウドが獲れただけでも結構嬉しい。食費がういたという換算した喜びではない。また、そんなわずかな山の幸を、山仲間達はいとも簡単に分けてくれる。」

「私達の記憶の底の底に、遠い昔の食物を見付けた喜び、それを仲間でわけあって今日の恵みを喜びあった記憶があるようにも思える。」

《もちろん地図なんて、使わないんでしょうね？》

「また、馬鹿な質問をやってしまったみたい。いかにも可笑しそうに」

「ああ、山行くもんな、地名なんて全部わかってる。『どこそこの、こんなとこや』言うたら『ああ、わかった』て、もんや。そつりゃ詳しいって」

「『カシノダンのここや』『イヤダンのここ上がったとこの、檜の木んとこや』とか『日尾の尾根の、オビヨダン上がったこんなとこや』言うても、全部分かる。そりゃ、山入るもんやったら、深瀬であろうと、内川であろうと、ずうっと、みんなわかっとる」

「まさに我が家の庭のごとく…その中で、熊追いのゲーム(?)が始まるのだ。」

《もちろん、登山と違って、全部、藪ですよね？》

「ほっぴや藪ばっかりや。上がったり下りたり…。今日なんか雨よりわっきゃ悪い。枝にみんな雪ついとるやろ。滑るワ、合羽着とっても衿とこからザーと入ってくるワ…もう、ずっくずっくや」

「こんなひどいこと何でせんなんがやと思ひながら、一晚寝りゃ、まった行かんなんて気になつても…やっぱ、病氣やワ」

もう何でも聞いてみる。《じゃ手の方は、皮製のとか、何か?》

「軍手や。猟友会のもんはみんな軍手や。ずくずくになったら、絞って、また絞ってでつことる」

「銃持とるやろ。引き加減やらあるし、厚手のもんな使えん。ほんとは素手が一番いいがや。足なら厚手の靴下やらあるけど、手はそんなもんや」

「それでも、追うとる間は汗もかいとるし冷たない。終わってから、背中から何から、そくそくになんがや」

《特に変わった持ち物とか…》

当たり前のお握りやら、缶コーヒーやらだという。もちろん各自、一晚以上過ごせるだけの食料は持っている。酒は持っていない。せいぜい車まで。すべてが終わってからの楽しみの時間になってからだ。

《一晚以上の食料…テントは持たないですね。予定外の山泊りになるなんてことはありますか?》

「一年に一べんあるかないか。そうなりゃ、火たいて、雪の上でも火たいて。そんなための灯油やら…あのガムテープもよお火つくがいね。あんなもん必ず持とって」

「生木に火ついたら、がんこに火おこしゃね（テントを持たなくても十分暖を取れる）。鉋は必ず持とるし、折り畳みの鋸も、山入りや持とるし」

「ほやけど、ほんなことは何年にいっぺんや。無線あるものの。『ここにこんなになった。弱ったあ』て言や、町からでも走ってきてくれるものの。車の性能がよくなったんと、連絡網が発達したがと」

「わしの軽四でも、今日や40cmの雪やあつても行くものの。ジープやら何やら変わったもののついとる車かて友達や持とって、今じゃブルドーザーなみやぞいね。」

「昔や、わが足しかないものの。よお、泊まらんなんことはあつた」

「ガスバーナーやは、持てかん。それは車には置いてある。ラーメンから、缶ビールからワンカップから。それこそ車には、何日でも泊まれるほど積んである」

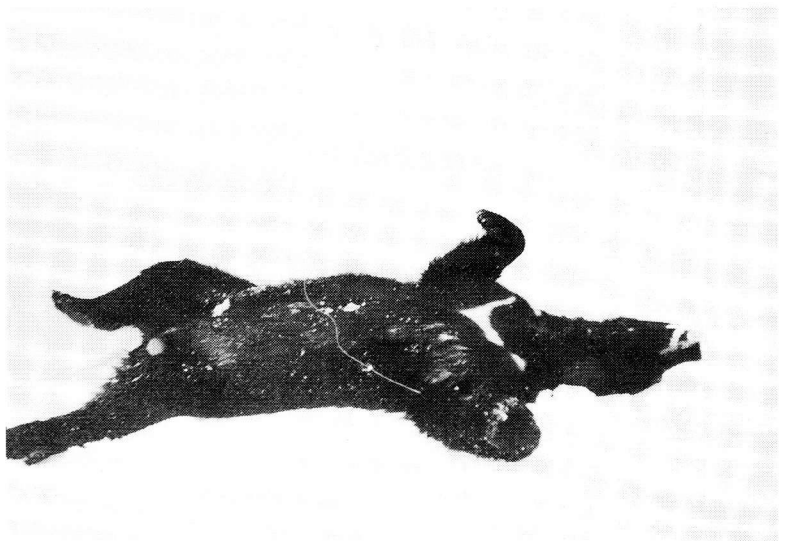


ここに見覚えありますか?そう、あそこです。

12月22日13時30分頃 雄 75kg

犀川ダム下流1 km オビヨ谷入口

参加者16名



山下さん達は、福井、京都へ遠出することもあるという。それは当然狩猟期間の間ということになるが、福井へ行けば福井の免許、京都府なら京都府の免許を取り、25,000円から6,000円以上の免許料を払うという。

狩猟期間では北海道が特別で、10月1日から1月31日までとなっており、主に鹿が獲物になる。ワゴン車に食料から、寝袋からを乗せ、何日も狩猟を楽しむ。山下さんの近くにもでかけていく人がいるという。

《熊の解体って…どれくらい時間がかかるもんですか?》

「ほんなもん馴れとっさかい、30分から1時間。そんなもんや。後は肉の仕分けくらい」

「今日は、安全週間やし、年の暮れやし、あんまし遅ならんと言うて、帰ってきたんやけど」

「いつもは『上がり』いうて、熊の骨から何からいっしょくたに煮て…飲んで、ああやったこうやったと話しとったら、ほんな『あがり』やとったら、いつも10時やら11時やらになつてもわいね」

わかる気がする。知恵と体力で追い詰め、仕留めて、獲物を分かち合う喜び…ずっとヒトはそんな狩りをやってきたはずなのだ。熊がヒトを恐れるはずなのだ。

《まず、熊胆を探るもんなんですか？》

「ありゃ、今の時期はないもんや。ないていうか、人間もほやろけど、物を食べとる間は溜まらんもんや」

「こんで小さい方やけど」

つぶれた風船、サボテンの干乾びたような実物を見せていただく。中は艶のある暗緑色の結晶だ。胆嚢と、胆汁ということである。

「これを米粒ほど削って。にっがい、にっがいもんや。こんで、干す前は、茄子くらいのもんや」

「毛皮は、今で、欲しがらんわ。欲しかったら何枚でもあげる。わしら山行く時は尻にしとるけどね。今、尻皮しとらんもんけ？」

機能的だと思いますけど、ちょっとスタイルとしては…。

熊の写真は、証拠として出さねばならない場合もあって、何枚も映したのがあるそう。黄色のパンフレットのような書類には熊の形が描かれていて、そこへサイズを書き込むことになっている。熊の大きさは、手、そして、年令は牙、さらに大腿骨でわかるのだそうだ。

さらに雌の場合、局部、子宮、卵巣を調べ、お産の経験も報告する。雌は四個の乳首をもち、経産熊はその回りの毛が白くなっている、それでも分かるという。

年令は肉の色にも出るそう。若い熊なら、ピンク色、年をくったのはどす黒い烏の肉のような色をしている。さらに肉に虫が入るようになる。木綿糸のような寄生虫で、煮たり焼いたりして食べるからいいものの、虫がいるのが常識だ。寄生虫といえば、10m以上もある腸から、これまたミミズのような虫が山ほど出てくるそう。こんなに腹にわいていたら、栄養をとられてしまうのではと思うほどだが、熊はころに太っているという。

もちろん胃の内容物、何を食べていたかも大事だ。今日の熊の胃袋からは棒ダラの黒い実が黒作りのように出てきたという。



そうやって熊を撃っていたら、怖い目にあったことだってあるのではないだろうか。

「やっぱ、熊に謝ったことある。ああ堪忍してくれ。わしゃもう、こんで、こんなことしんさかい…言うたこともある」

「ほうや、山ぶどうが棚のようになってひょいと見上げたら天井の高さから熊の足がぶら下がって、熊な、腹ばいになって食べたわいね。熊かてびっくりしたがやろ、フー言っておっかけて来たわいね。でっかい立ち木の蔭に隠れたら、あらあつてもんで、そんで避けて向こうへ行つてもた」

「1回、背中のごこんとこ、縦に爪跡ついたりワ。あん時、チカーとして、あら痛かったなと思って立ち上がったら体中、血だらけ」

「ありゃわしが悪かったがや。遠いとこの熊撃って、熊なころころと落ちていったさかい、ありゃ、あんなんでも当たるがやなと思たら、すぐそこへ熊が来てしもた」

「熊にすりゃ、どこでそんな目におうたがや、どこに人がおるがわからんがやね。ただもう痛いし」

めくら減法逃げた先に、山下さんが居合わせたことになったのだ。

「見ったら目の前に熊が来とるがや。もう銃撃つヒマもないし。あらあ、こりゃ駄目や思て銃も捨てて、そこにあったブッシュの蔭に伏せたがや。その上をこうして乗り越えて行ったわいね。ほしたら背中がチカーツとして。起き上がったら、春の残雪期やったさかいね、そこらじゅう血だらけ。こんな大怪我してしもたか思たら、そりゃ熊の血やった」

「その熊のこっちゃ射止めたけど。背中まくってみたら、何枚も厚いの着とったがに、みんな切れてしもて、黒いがに爪痕ついてしもとった。オロナイン軟膏塗って、2、3日したら痛いも治つてもたけど」

「熊はやっぱ、人を襲うがでないとわしゃ思いうわ。自分を守るために、むこてくるがや」

「熊におうた現場見たら、女の人の髪、かつらにしたほど落ちとった。爪で引き裂かれて。去年猟友会の人で、長いこと入院しとった人も、鼻と目玉とこんなにえぐられて」

「ひどいこっちゃひどいわね。ほんでも熊にすりゃ自分を守るため。決して最初から人を襲てやろと思て、狙っとるがではないとわしや思うわね。肉食でないがやしね。熊は人間がおとろして、そうするがで」

「ひどい怪我は何べんも見とる。中には死人もおる。医王山のばあちゃんも気の毒なこっちゃったけど」

「ほんとの奥山やと熊も住めんし。人里にちょっと出てくりや、ゴルフ場なとるし、尾根越えてあつりや賑やかやと思やスキー場になつとつし。熊かて、おとつとこがないがや。奥山やいうたかて、そこらじゅう林道入つとるし。林道歩いとりや、今日みたいなもんや。わしらに見付けられて殺されてしもし。熊かて気の毒なもんや」

「ほうや言うて、山の住人にすりや、ゴルフ場やらスキー場作らにや、人來んし、暮らしていかれんし。一概に言われんけど」

「林道かてそこらじゅう入りすぎとるがや。町も山も一緒や言うて、どこんでもドライブに入ってくる。ほして『熊出た、熊出た』言うて騒いで。熊が出てあたんまいのそこへ入って来て、騒ぐがや」

猿は狩猟対象にはなっていない。この頃は暖冬のせいもあって、かなり数が増え、離れ猿が町中まで出没するようになった。昔はサルも貴重な蛋白源であった。

「わしらの子供時分な、『今日は猿獲りやぞお』と太鼓たたいて触れまわって、みんなして猿獲りしたもんやった」

人間に食われなくなった猿は確実に増えており、山下さんもしばしば山中で遭遇するという。もちろん猿は人間を食うわけではないから、襲ってはこない。体も小さいし、威嚇するだけである。ただ彼らは伶俐だから、こちらが鉄砲を持っていれば遠くで、持っていなければ近くまで来て牙を剥き出して威嚇してくるという。

山下さんが子供の頃には、猿だけではなく「今日はシシ狩りや」の触れが出てのカモシカ狩りもあったという。そのカモシカは保護獣となって増え、セドで見かけるほど里近くに生きるようになった。猪も増えたが、内川、犀川あたりに出没で、まだ里には近付いていないようだ。

「雪に弱いとは？」と、また、愚かな聞き方をしたら



12月21日11時頃 猪 雄 約 180kg
内川ダム堂町地内 風嵐林道2号線

参加者15名

加賀市や小松市の山間部では良く見られますが、金沢市では珍しい。京都や福井など他県へ出られるベテランハンターも、こんな大きいのは珍しいとのこと。

(写真の日付からも、猟期には頻繁に山に入られていることがわかる)

「餌がとれんやろいね。あれら、葛根やら、山芋やら、沢蟹やら食べとるし。猿みたいに木の皮を食べるわけでもなし。熊みたいに冬眠できるわけでもなし…。餓死してしもがワネ」

本当によく、動物の生態をご存じである。寒さが苦手なのか？と思う自分が恥ずかしい。ようするに私の発想の中に「頭痛のタネの食欲」の悩みはあるが、「食べられなければ死ぬ」の発想はゼロなのだ。生き物として、もうおかしい方なのだと思う。

猪の肉は、京都、福井それぞれに味が違うそう。それも食べ物の違いからくるのだという。その点、山の物を食べていた昔のカモシカの肉はうまかったという。畑の物を食べるようになった動物の肉は、においがするそう。におい？これも高い牛肉なら柔らかい程度の味覚しかない私にはわからないことだ。

兎はめっきり減ったそう。…実は、この日の取材の帰り、タクシーを呼んだのだが、「熊撃ちの話聞きに行っていた」

と話したら、運ちゃんの幼い日の兎狩りの話が
始まってしまい、降りるまで興じてしまった。
私も蛙爆弾で遊んだ（程度の）話で応じていた
が…。

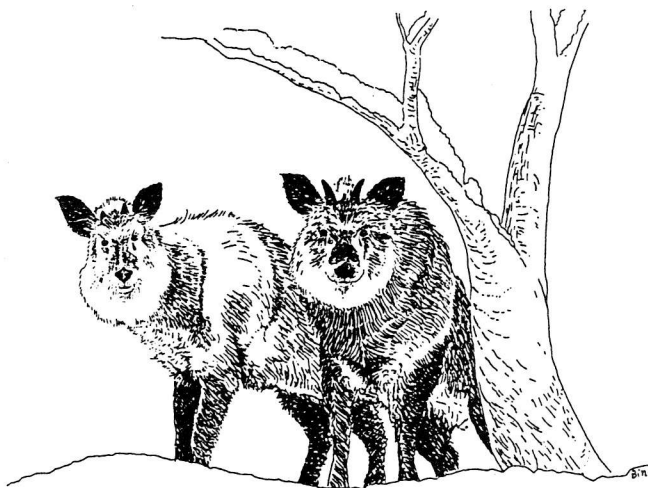
そうなのだ。昔は、子供でも回りの動物と知
恵比べをやり、動物を狩って殺すことも、皮を
剥ぐことも出来た。それは家族の称賛をあげ、
家族の食卓を潤した。新しいゲームソフトを買
ってもらったこととは比べものにならない、喜
びがあったのだ。

閑話休題。ともあれ、兎が減ったのは、キツ
ネ、テン、イタチなど天敵が増えたためではな
いかとのこと。兎はそれら肉食動物の主食にな
っている。また、トンビ、タカなどの猛禽類に
も捕まってしまうとのこと。

畑を荒らすといえば、養殖していたのが逃げ
て野性化したハクビシンは、人を怖れず畑に近
づく。これは木に登る習性があるという。

すなわちハンターは、それぞれの動物の食べ
物、習性を熟知している。どんな所に棲んでい
るのか？どんな行動パターンをとるか？その知
識と地理を頭において、獲物を見つけだし、追
い詰め、仕留めるのだ。まさに、全ての動物に
おいて恐ろしいのは、知恵を持ち、共同戦線を
張る「ヒト」である。

山下さんは明日県庁の「カモシカ学会」に出
られるそうだ。元々は、白山自然保護センター
が主役で、教育会館の文化課が窓口になってい
る。今から8日間…2日間は聞き取り調査、6
日間は現場の跡どり調査をやるのだという。カ
モシカの分布は、ひがな双眼鏡で確認している
訳でも発信機をつけている訳でもない。ハンタ
ー達、カモシカの習性を熟知している人達が、
カモシカの出没しそうな地形の、餌となる木な
どを見回って、ここまでは分布しているの判断
を下すのだ。山の民の知恵と経験に頼り、薄謝
程度で行なわれているのが実態である。



そんなふうには山は、生き物がからみあって生
きている所だ。ちなみに山下さんは、湧き水は
ともかく、沢水は飲まないそうだ。

「年に何頭も見つかる。沢の中にカモシカが死
んどって、腐敗してぶくぶくになって。熊の糞
から、兎の糞から、猿の糞から、ありや全
部沢へ流れていく。沢で、そんなものの集まる
ところや。イワナも住んどるってことやけど。あ
まり飲まん方がいいやろね」

水場の基準は、大腸菌がいるかないか？上
流に小屋や牧場、メインの登山道が交差してい
るかないかで判断されているようだ。そんな
視点の中にも、山に他の動物がいることや、地
形的に沢というものは山の下水道も兼ねている
ことへの意識が抜け落ちている。

もっとも「泥水だって、水は水」の地域・状
況もある。職業病かつ汗掻きの我が家は、当然
ペットボトルを山小屋で買うことになるが…

「大きなグループなんですね」

「はい。代表して…」

恥ずかしくて二人分だと言えなかった。

「カルキもトリハロメタンも入っとらん分、
水道水よりきれいや。うまい！」

よりは

「線虫も回虫も、自然の一員や。お互い様や
と思うて飲もう」

が、より正確である。（これでまた、飲めな
くなった…）

今、倉谷に通う人は限られているようだ。い
わゆる若い人達には、そうも懐かしいと思える
場所ではなく、古い世代の中での、特に山が性
にあう人に限られているらしい。誘っても、ポ
ートが横付けできる時期でないと嫌がったり、
年中倉谷通いの山下さんは、やはり珍しい方
の人なのだ。

冬至に近い今も、朝6時には家を出て、山を
めざす生活だという。もちろん雪がきて、そ
ろろ軽ジープも動かし辛くはなってきた。今の
ところは山雪という感じで、意外に山の方は積
もっているという。

「山雪やね。今時分に倉谷に行って、一人し
ずかめに泊まると、楽しみなんやけどね」

うわ！そこまではやれません。ほんとにお好
きなんですねえ。

熊の他にはゼンマイ採り、舞茸採り。年2回
7月と9月には、ボランティアで、ダムから登
山道までの草刈り。県から頼まれれば、それは
日当つきだが、砥倉の雨量計までの草刈りもさ
れているという。

また、倉谷通いをしていると、年に四人程は不審行動をとる人を見かけ、保護することがあるそうだ。およそ山へ行く格好ではない老女、青年が、ひたすら山へ向かっており、声を掛けても辻褄があわない。見過ごせば死んでしまうことになるから、宥めて、警察へ連れて行くという。ヒトもおかしくなると、山奥へ行って身を隠さねば…というような動物の本能めいた物に憑かれるらしい。

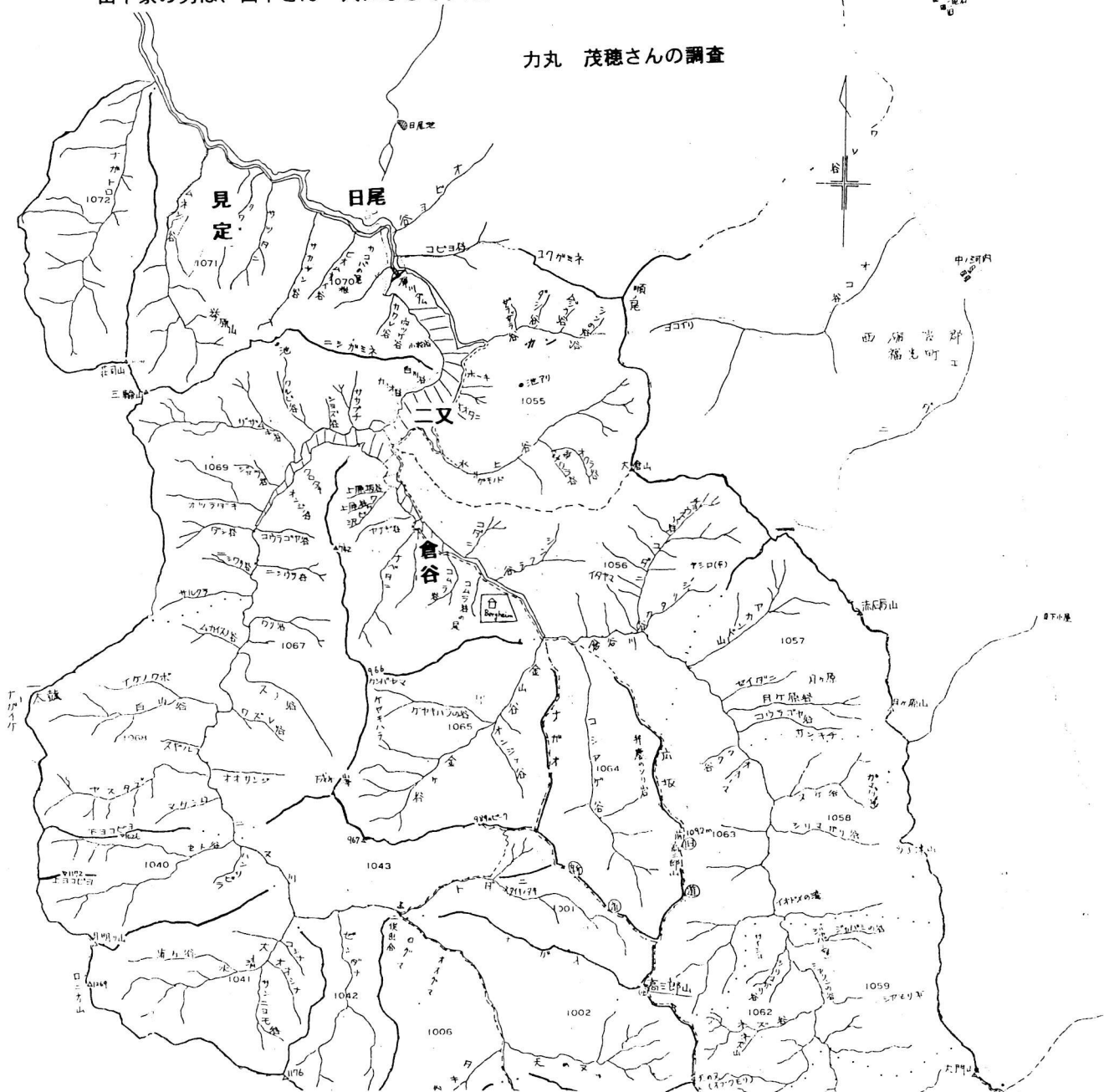
本当に長い時間お邪魔してしまった。おそらく、私が父の昔話をじっくり聞いたことがないように、山下さんの息子さんも、こんな倉谷の話、熊の話を聞かれたことはないと思う。まして、銃の撃ち方、犀奥の詳しい地形を伝授されているはずもない。それどころか、来年から息子さんの長期の単身赴任、孫の遊学が始まり、山下家の男は、山下さん一人になるそうだ。

昔、生きる技術は、親から子へ、孫へ、見よう見真似で伝えられていった。村という共同体の村をあげての行事の中でも、生きる知恵が譲られていった。今、家族は生きるために、ばらばらで暮らし、ばらばら暮らしを可能にする「便利さ」は技術も知恵も伝えてはいかない。

共同体を作るはずのヒトが今では、無干渉を好み、ひき籠もりにもなり、生殖本能があるはずなのに、結婚もしたがらない。「技術や知恵」とともに、何かが伝わらなくなってしまったのであろう。

不便ゆえに「技術と知恵」の宝庫であった山の暮らし、見よう見真似の中で伝授されていたそれらは、もう、山の語り部の記憶をたどるのみになろうとしている。

力丸 茂穂さんの調査



力丸 茂穂

(りきまる しげほ)

昭和10年生まれ。昭和26年より金沢在住。
昭和38年～50年白山室堂診療所所長を務める
日本山岳会会員。白山会主宰。

にわかインタビュアーは要領悪く、再度時間をあけていただくことになってしまった。お約束時間よりやや早くお宅に到着。機手で待機していたら、ガレージのあく音。恐縮しつつのご挨拶のおり、目に飛び込んできたのは、ガレージの梁に並べられたかんじきの数々だった。それも、矯めを加えての乾燥中のものまで、材質も変えての、こだわりの品がぞろり…。以前も通りがかりに、感嘆して眺めていた元早稲田大の山岳部員がいたという。

初めての山は、昭和23年。地元熊本・金峯山だったそうだ。昭和27年、泉丘高校に転校。昭和31年5月、金大医学部教養課程時代の白山が北陸の山始めとなる。すでに野鳥の会会員だった力丸さんは、木村久吉先生達と、野鳥の鳴き声収録のために登った。

なお日本野鳥の会初代会長中西悟堂氏は石川県出身であり、昭和30年には白山で綿密な鳥勢調査を行っていた。その翌年には、白山が国立公園となり、石川野鳥の会も発足し、国立公園昇格をめざしての活発な調査が行なわれていた頃にあたる。

次には剣岳。続いて高三郎山が出てくる。「出てくる」とは、克明な山行記録のノートを手にして、話しておいでするからなのだが、通しナンバーで550回、うち白山は3分の1の168回になっている。

その白山に次ぐ回数となる高三郎山は、まず、「見栄えのいい山」として心惹かれたようだ。金沢から山を見る人なら、まず大きな医王山、次に、台形の大門、そしてアルペンの山容の三つ峰に目が行く。それが高三郎山だ。

まず10月に偵察がてら、石楠花尾根の炭焼き小屋まで。当時、それ以上には炭の材料になる木がないためか、そこからは杉道もない藪になっていた。翌年4月には、残雪の頂上を踏んでいる。

数回目で、高三郎。それも残雪期の単独行…当時の金沢の岳人はそんなものだったのだろうか？

もちろん、ガイドブックもなければ、山岳会も少ない時代だった。活躍していたのが、駒草会。見せてもらったその会報が情報源だったという。道のない藪山には残雪期に登るが常識だったし、当時まだ山友達がおらず、また、若く



て、体力に自信もあつての単独行であつたようだ。

ただ、それは身内にも心配をかけることになった。入山中に悪天候の一晚があつた。心配した兄上が、当時県内ナンバー1登山家とされていた長崎幸雄氏の所へ

「弟が一人で、高三郎という山に登りに行っているが大丈夫だろうか」

と相談に行かれていたのである。下山後、力丸さんは

「ご迷惑をおかけしました」

と、彼の勤務先の図書館まで謝りに行ったという。それが、5歳年長の山の師「長崎幸雄」氏との出会いであつた。

当時、すでに彼は有名人だった。白山頂上の方位盤を担ぎあげたごとく、根性と体力に恵まれた岳人であつた。かつて岳人はしばしば文人でもあつたが、やむなく進学を諦めた長崎氏の場合も、図書館を職場とする境遇にも恵まれ、綿密な考証も加えた文才を発揮しており、ただの山屋ではなかつた。かねてからの憧れの人・長崎氏は、力丸青年の下山報告をニヤニヤと聞いていたそうだ。

「この人が有名な長崎さん」「一緒に山へ行けたら、教わることが一杯あるのに…」の彼の夢は、これをきっかけに実現していくことになる。

写真ではわからないが、長崎氏は堂々たる体躯の持ち主であつたそうだ。一緒に急坂をラッセルをすると、力丸さんの方は足が上がらず、前進できていない状態になった。彼の業績の数々がどれだけ非凡な体力プラス努力で成し遂げられているか…知る程に畏敬の念は深まった。

そんな長崎氏も病魔には勝てず39歳で夭折。力丸さんは主治医として看取り、奥さんから預

かった遺稿を18年後に出版した。倉谷通いをしていたのは、その遺稿集「犀川をとりまく山々」の補完調査のためだった。

白山との付き合いは、昭和32年からの白山室堂「兵隊」職でさらに深まっていく。まだ臨床をやっていなかった氏は、診療班に加わったのではなく、一兵隊（一般アルバイト）として、夏と秋、室堂で過ごし、食材確保（山菜採り）にも精を出した。国立公園に制定されるまでは、山小屋は山で採れたものを提供するのが常識であり、サービスでもあった。この時に、木下幸雄主任とのご縁も始まっている。

インターン時代には山とはやや疎遠にならざるをえなかったが、剣岳を仰ぎ見る地で研修に励んだ。

金沢大学に戻ってからの、昭和38年から50年頃までは、室堂診療所所長を兼務するようになる。その間は、白山での医療に関する情報は全て耳に入る一方、どんな場合にも二つ返事で山に上がってくれる医者として応えるべく、常にサブザックが用意してあつてのスタンバイ状態を維持し続けた。

山小屋に某大学医学部診療所がある…一般登山者の側にはたいそう心強いことだが、医療者には「赤ひげ」的行為であろう。ちなみに知人のロック氏は慈恵医大OBで、槍ヶ岳診療所へ毎夏3度通っている。金沢でも出くわさないというのに、先年槍平小屋で交差してしまった。

「僕がこのコースでしか槍へ行った事がないって事、知ってる？」

との禅問答(?)を残して、駆け上がって行ってしまった。あれだけ達者ならどこへだって行けるのに…。

さて、室堂診療所ではどのような活動をされていただろう。

まず、怪我、病気の場合。手当のために室堂診療所へ運ぶ。それで一刻も早く下へととなると、ヘリのない時代には、当然ながら担いで下ろしていた。歩荷さんもいたが、夜にはもう下りていないし、連絡をとる手段もないしで、しばしば、診療班員や兵隊が担いで下ろすことになったという。

連絡手段は、夏山であれば、電電公社（現NTT）の無線があり、永井旅館と結ぶ有線電話もあったという。ただし無線は、発電機が回ってからでないと使えず、有線は台風などで断線すると使えなくなった。それらはとりあえず連絡がとれるというだけであって、現場は常に迅速な状況判断と行動を強いられるものだった。

検死要請の際には、そのように夏山であればまず無線で連絡が入る。勤務をすませてからで

ないと出るわけにも行かず、暗くなってから室堂着とか、暗い最中に上がったりのあった。その頃には「仏さん」は室堂に収容されていた。法医学的には、現場で検証かもしれないが、山では、捜索隊もそこに続けるわけにもいかない。室堂で死因、死亡時刻を推定することになる。法医学教授に、凍死の所見を聞きに行ったこともあるという。ちなみに凍死は、めだった外傷がないのは当然として、皮膚が白い、死斑がない…で、決まるという。末梢が収縮し、血流が阻害されてしまうためだ。

昭和41年8月19日の遭難も凍死だった。場所はカンクラ雪渓源頭部。雨風の中、昔の平瀬道に迷い込んで道を失い、青年は一人用テントの外で果てていた。やはり室堂で検死した力丸さんは、ジュークジュークに濡れていた綿のジーパンが印象的だったという。

珍しい例では、美大の教授で、室堂のすぐ傍で、花の写真を撮っている最中に、脳出血で死亡したという例があった。夜中に担ぎおろし、別当出合で簡単な検死をし、某医師が硬直した遺体の足2本を乗用車の窓ガラスから突き出したまま、金沢まで搬送したという。

ヘリを力丸さんが初めて要請したのは、南竜の小屋建設の際の韓国人労働者の症例。日本脳炎と思われるギランバレー症候群（手足の麻痺）を呈しており、重症との判断で要請した。入院後、死亡した。

ちなみに、ヘリは生きている人間なら収容するが、死体は収容しないのが原則だという。

ヘリが使えるようになると、室堂職員で、騒いで、ヘリで下りた人もあるそうだ。

周知のごとく、自衛隊のヘリなら無料。但し出動は、県の消防防災課が判断して、自衛隊に要請するものであって、室堂から直接お願いしてそれで飛ぶものではないそうだ。

県のヘリ「いぬわし」が入ったのはもっと後のこと。ただしそれは南竜まで上がるパワーしかなく、それ以上の高度での出動はやはり自衛隊のバトルに頼むことになった。



昭和46年5月連休の滑落事故の際には、医者が同行してほしいとの要請があり、力丸さんもパートルに乗った。夜中に小松基地に赴き、3時まで待機、室堂へ向かったという。事故者は室堂アルバイトの学生、十二曲がり上で作業中に滑落。ゴム合羽を着ていたため止まらず、岩にもぶつかりバウンド。肋骨3本骨折の重傷ながら、ヘルメットをかぶっていたため、それ以上の大事にはいたらなかったという。

「それって、鈴木良紀さんのことですね」

「え？知ってますか？」

「はあ、ワングルの同期です」

実は、3週間前の同期会で、木下主任・力丸さんのインタビューをやったと話したら、彼はとても懐かしがって、そのうえに新事実を暴露したのだった。

30数年前のあの日、それまで慎重に赤旗竹竿立ての作業をしていた彼が、ひょいと見上げると、長靴でちんたら上がっていく人の姿が見えた。あんななめた恰好でも大丈夫なんだと気を抜いて、不用意な一步を踏み出した途端ツルツとってしまったのだという。その長靴の主が力丸さんだったということだった。

思わぬ濡れ衣(?)を着せられていた力丸さんの方は、あの時はヘリで駆け付けた側だったそう。大騒動の当事者になってしまった鈴木氏の方は、気恥ずかしさと、痛みと、混乱の中で情報が混線してしまったのだろう。検分した力丸さんによると、十二曲がりの上部から、夏道のトラバース道も越えての大滑落で、ヘルメット様様の命拾いだったのだという。

ミレニアム記念白山の時、私は彼とそこを登っていた。私は事故現場を定かに知らず、仲間も話題にせずで通過したのだが、彼の方はきっと思い出の渦中にいたに違いない。なお、白山観光協会の30周年記念誌、50周年記念誌に、遭難事故記録がまとめられているが、この滑落事故は載っていない。

しつこいが、「長靴でちんたら上がっていった人」とは、木下道雄さんのことらしいとなった。実際、力丸さんも、長靴、地下足袋で上がったことがよくあったそう。ただし、物のない時代に育ち、履き慣れたの山での使用であって、足の置き方、力の入れ具合、微妙な年季が入っている。うわべだけみて真似ればとんでもない目にあう…それが遠因の事故だったということになった。

「検死」は死亡後まもなくの場合であって、白骨死体などは医者が出る幕ではない。警察のお仕事ということになる。

力丸さん自身、死体発見者になったことがあるという。場所は丸石谷、百四丈の滝のちょっ

と下、岩に埋まって手だけが出ていたという。細く白い手には橙色のカビが生えていた。まず見つけた同行者が逃げていってしまい、任せたとばかりに遠方から覗き見る中、掘ってみると肩も出てきた。その岩の上流側に回ると流れの中に足も見えた。手だけなら持ち帰られないわけでもないが、一人分の死体が流れの中で岩にもぐりこんでいる状態。あきらめて、また今さら慌てたとてと、目的の百四丈の滝までは行くことにした。帰りに遺体の場所にケルンを積み、鶴来署に寄って届けたという。死体は、前年行方不明となった大阪の歯ブラシ屋さんのものだったそうで、奥さんが丸石谷の出合まで、花を供えに来ていたそう。

それは沢へ直接滑落したものだったかどうか…ともかく沢は究極流されてくる場所になってしまい、遺体が見つかることが多いという。だから捜索も、沢を重点的にやることになるが、遭難者の物ではない物もあれこれ流されてきているという。

私も山で死体を見たことがある。高1の時のカベツケ原付近で。交差した二人組のザックから、ミイラ化した手足が突き出ていたのだ。あまりのことに、咄嗟に「ありゃマネキンだよ」と弟とひきつりを笑いとばしたのだが、山にマネキンが必要なわけがない。ソーツと顔を見合わせ、異様な後ろ姿を見送ったのだった。気温が低い高山では、腐るというよりミイラ化していくようだ。



白山での遭難事例は、白山観光協会の冊子にも載っているし、鶴来署勤務だった東さん自費出版の回顧録にも詳しい。

力丸さんの経験からの白山遭難をまとめていただこう。

まず、白山は、槍・穂高といった岩峰と違い、転落死などは極めて少ない。ほとんどが行方不明。山がだらんとしているために、ルートを見失い易い。また、だらんとしているとは、谷が深いということであり、滝がある。行方不明になる人は沢伝いに下り、滝場で進めなくなり、登り返す気力も体力もなしで、遭難となる。

力丸さん自身何度か捜索隊に加わったことがあるが、5m間隔でのローラー作戦をとっても、人は歩き易い所をと選ぶ結果、みんな一箇所に集まってしまったものだったという。遭難者もおそらく同じ思考パターンをとり、知らず知らず沢に吸い寄せられて行くものらしい。

また、ガスにまかれた場合、笹原、雪渓、雪渓の消えた砂礫地でルートがわからなくなる。中宮道のお花松原への雪渓のあたり、大汝の裾、千蛇ヶ池のむこうなどはわかりにくく、特に下りが迷い易い。山慣れない人は天候があやしければ出歩かないことだ。

また、最近の中高年は行動期間が拡大している。文化の日の白山、勤労感謝の日の頃の白山など、無謀極まりない。

実力・経験が伴っているならいい。みんなで夏山へ行ったから、次も一緒に…と誰がリーダーかもはっきりしなかったり、5年ぐらい山へ行っていたらもうベテラン扱いをしてみたり、不測の状況に対応する術をもたないまま、季節の変わった山へも入り込んでいく。

典型的なのが、平成元年10月の立山遭難。交通機関が発達しているために、簡単に3000mの稜線に出てしまう。それでいて基礎体力のない中高年達は荷物が持てず、最低限必要とされる装備ですら持って上がっていない。ツェルトでもあれば死者は出ずにすんだ。

「僕はその点、クラシックなんかかもしれんけれど、というか、不便な時代に育ってきてその癖が抜けんというか、どうしても荷物が多くなる。医薬品まで持っていくし。」

「一人で行くと、テントからカメラから、携帯電話から、グループで一つあればいいような物も全部自分で担ぐことになって、体力的には不利になる。ただし、昔はそうできる人が山に入っていた。山はそれが出来る人しか行けない世界だった。小屋をあてにして山に行くような人は、雪山なんかには行くべきではない」

「だけど、来月号の岳人のサブタイトルは『雪の山小屋に泊まろう』でしたね」

こちら反省！である。綺麗なカラー写真のガイド本作りに手を貸して、おいでおいでをやっているのだから。資本主義経済において、登山熱を煽っている側…出版社、登山家、写真業界、スポーツ用品業界、ツアー会社、山小屋、さらには新聞社等があり、恩恵を受けている。

それらは、事故が起されれば批判側にも回っているが、「健康的」「綺麗（快適）」「軽装備（気軽）」の誤解を助長させてもいるのだ。危険の方を学ぶことなく行動を拡大してしまう人達は、それでも概ね事なきですんでいるけれど、中には貧乏籤をひく人も出てきてしまう。最

後には「自己責任」という「葵の御紋」が通ってしまうけれども…。

要するに不幸な結果が出てからの「自己責任」ではなく、「自己責任」からスタートすべきが本来「登山というスポーツ」なのだ。最初の自己責任部分が欠落しての遭難・事故が増えていく現在、煽る側にも、自覚が必要であろう。

さて、医者としての話題から離れて、道具にこだわりをもつのが力丸さんのキャラクターであられるようだ。

かつては、地下足袋にビッケルでグリセードもやられたそうで、ベストマッチばかりでなく、ミスマッチもなるほどと楽しんでいるのが力丸さん流というイメージである。

熊撃ちが使っているスパイク長靴はもともと釣りの世界から入ってきたものらしく、営林署もそれを履いているらしい。登山靴より、日本の湿った樹林帯向きといえるが、笹の根、跨ぐような木の幹をひどく傷めることになる。人間が快適・安全であることと、自然が保全されることとは、また別問題であって、道具の世界にはまだまだ、決定打はでてこないようだ。

力丸さんは長靴愛用派で、雪山でも1000mまでは、長靴にかんじきというスタイルだという。長靴はテントの出入りに何とも便利で、しばしば同行者の小用時にも「貸して」となるそうだが、中に布の張ってない物だという。それなら、タオルで拭くだけで、乾いた状態を維持できる。また素材が生ゴムであれば冷たくないそう。それは高山で売っている紺色の品で、ビブス底を貼ってもらった特注品だという。なるほど、「長靴」だけを真似てはいけない。山中ではそれに、スパッツか、毛糸編みの脚絆。ごぼって抜く際には、やはり雪が入り込んでしまうからだ。

かんじきには特別こだわられているようだが…。スノーシューは持っておらず、聞いたままだが、まず重く、下りは滑り易く、平原向きと思うとのこと。ショートスキーは林道を下るなら便利かもしれないが、自分の行く藪山にはやはり不向き。スノーラケットという皮編みのカナダのかんじきは土産品で持っているが、軽い雪の平原向き。何といてもかんじきが日本の山には向いており、こだわってみたいとのこと。

かんじきは、結局足を置く位置は定まってしまう。足先が長くなると、足を上げる際に先端が雪につかえてしまい持ち上げられない。後ろが長くなると、これまたひきずるだけ。最初は嬉々と長いものを作ってみたそうだが…一歩も歩

けない。あれこれ試してみて、歩けるための靴先からの長さは決まるものだと分かった。

ちなみに新潟には煤竹製の「すかり」という、前に手綱のような紐をつけた長いかんじきがあり、北越雪譜に絵が出ているし、地酒のラベルにもなっているという。それは村内の道つかけの道具ということだ。

低山も好き、植物にも詳しい力丸さんは、「かんじきにいい材料だ！」で、木を見てしまうことが多いそうだ。木の種類について、一覧表も作ってあるとのこと。「折れ易い」「曲げにくい」「水に沈む」など。

ちなみに、かんじき作りの師匠は、見上山荘の故湯原忠政さんである。私の知る限りでは、芦峯寺のわかんが一番湯原さんのに近いように思うが、芦峯寺のわかんには「反り」がないのだという。

凝り性と自称する力丸さんは、その芦峯寺のわかん作りの佐伯さんの店も何度も訪ね、自作のわかんも見せに行ったそうだ。佐伯さんの方が「反り」を恰好いいねえと惚れ込んでしまい、反りのあるのと二種類作るようになってしまったという。それでも、生業とするからには大量生産であって、湯原さんの物とは比べ物にならない。湯原さんののは芸術品の域に達していたという。

湯原さんが亡くなってからは奥さんに教えてもらうこともあったが、彼女は再婚して、氷ノ山の麓に去ってしまった。かの地にも雪は積もるそうで、反対に「わかんを作ってくれ」と頼まれてしまった。目が肥えているから気が張ってしまい、故湯原氏の物と、自作の物と、それは旦那様用ということにして送ったという。

わかんの爪はアカガシを使う。佐伯さんののはミズナラ製だが、それだと柔らかく摩滅が早くなる。わかんのわっぱを曲げるのはたいしたことではないが、爪をつけるのが実はたいへんな作業なのだそうだ。

大量生産の方は爪の溝を15mmに切っており、対するわっぱの径は22mmから16mm。それを15mmに合わせて削り込んでしまい、それでわっぱの耐久性は格段に落ちてしまうとのこと。

湯原さんの方はわっぱの強度のために、一つ一つの爪の方を、それこそ左右の取り替えも出来ない程厳密に削っていたという。ゆすってぐらつくようなら金はいらんと断った程だった。コンクリートに飛び降りても壊れない。左右4本の爪を、わっぱの厚みに合わせて削り込む…それが大変という意味なのだった。絶対ぐらつかないためには、わっぱも乾燥していなければならない、爪も乾燥していなければならない、木のタチを知り尽くしての仕事だった。また、爪の両側を締める針金も、湯原さんの美学とし



カケス

て、錆びるような普通の針金は厭と、真鍮の針金を使っていた。アカガシの爪の赤、クロモジの茶色の肌、黄色の針金は何ともいえぬ調和であり、反りも絶妙。爪でちゃんと立ち、カタツとならない。また、そうでありながら、左右の重さの違いは15g以内。「うち行って量ってみまっし」と言われて、そうしたら本当だった。それに相手の体重も見て作っていた。

私が現役の頃、わかんは冬期活動の必携道具だった。だから、医王山の新歓の帰りに、「今年の新人は何人くらいは残るだろう」と3回生が予約していったものだった。30年前の当時で、3000円。卒業時には12,000円もして、かなり痛い出費だった。でも、もう一つ買っておいでもよかったかもしれない。まさに一生物といえる価値ある品であったのだ。

ミズナラの爪は磨耗が早く、かつ、水分が多いために、乾燥しての曲がりも出てくるという。アカガシは今は入手出来なくなり、力丸さんはシロカシを使っているそうだ。強度的には同じで、まず鋸で粗く型をつけ、その後、鬼目やすり、さらに目の細かいやすりと、形を整えていく。直線でない美学が許さず、マンリキで締め付けての作業。だから「爪が減ったから替えて」と言われても、そう簡単に返事が出来ない。「大量生産」といった佐伯さんの所にしても一日に3個のペース。休日利用の自分だと1月以上もかかってしまうことがある。今は化繊の紐で締めて、バックルで留める仕様になっている。バックルは昔の紐よりはるかによい。一日歩いても外れることがない。

そのようにこだわったわかんには、焼印を押して出来上がりとする。湯原さんは「医王山」だったが、自分は「白山」。そうやって、こだわりを楽しまれている。

大町の山岳博物館に行っても、湯原さんのわかんにかなうわかんはなかった。おそらく日本で一番強いわかん、つまりは世界一強いわかんということだと、力丸さんはほほえまれる。

今さらですが、「わかん」で通る言葉なんだろうかとお聞きすると、わかんとは、輪かんじきのこと。かんじきには輪になっていない

物もあり、棒を並べて編んで、簀子のような四角状で使用する物もあるという。また、泥田に入るためのかんじきもあった。

そのように日本の雪質にあった山道具のわかんであるけれど、近年はコストダウンのために粗悪品が出回り、それがさらに道具としての評価を下げる悪循環を始めているという。日本の伝統的登山道具の技術が残って欲しいと願う力丸さんである。

さて、先日の熊撃ちの話をして少し報告すると、私よりずっと倉谷に詳しい力丸さん。

「加賀藩の租税の所を見ると、倉谷・二又熊胆（クマノイ）どれだけと書いてありましたね。米が取れないから、熊胆が年貢の代用になっていましたね。」

さらには、なんで山に住み続けたのかと、問の抜けたような質問もしてきたと言うと、

「昔は、米が給金だったから、とりあえずは士農工商とおだてられて、農民は年貢を納めていた。その下に…」

それこそ、インドやネパールのカーストどころではない、階層差別が日本にもあったのだ。轆轤師（ろくろし・または木地師）、山窩（さんか・または養作り）、その下は「非人」となり、焼き場、履物作り、肉屋などが、人に非ずとされた。彼らは土地を持たず、手仕事で世渡りをする自由人であった。為政者は、それらの人を蔑むことで、土地に縛られる者を慰撫し、年貢を納めさせ続けたのだ。川の土手に住む山窩は、神代の代の言葉を使い、山窩同士でなければ結婚できず、また、非人は四つ足を食う者としても卑しまれたらしい。

かつて、身分が固定していた時代があり、人はその環境・生業を変えることが許されず、その土地を離れれば、非人となり、流れ者になるしかなかった。

私も「サンカ」は初耳ではないのだが、それは白土三平の漫画「カムイ」で知っていた言葉…恥ずかしながら、時代物は山本周五郎ぐらいで、思考の際に出てくる単語ではなかった。

それより、ついこの間聞いたネパール弦楽器サランギの奏者。彼らは最下層カーストに属し、生まれた時からサランギを弾くしかなく、村をまわり両手一杯の穀物の施しを受ける…先祖伝来そんな暮らしをたててきた。それが急激な観光化により民族楽器奏者としてもはやされるようになる。町で現金収入を得るようになった彼らと、これまで同席を拒んできた村人達が一緒にお茶を飲むようなシーンが見られるようになったらしい。異国の差別を「何と下等な国」と蔑み、そんな話を面白がって聞いている私は、終戦まで、そのような差別が日本にもあっ

たこと、稼業も土地もそこで守り抜く物であったこと、外れた者が土地を離れていく定めであったこと…わかっていないのであった。

なお、サランギ奏者にも、かれらだけの業界用語とも重なる言語があり、第三者の入り込めない情報交換に使っているらしい。

となると、人の社会にはさして人種の違いは存在せず、社会の成熟課程の、その段階が様々ということなのかもしれない。「何が物好きで、山に住み続けるの？」と、ノー天気な質問を発してしまった私。本当に勉強になった。



アカネズミ

力丸さんは、今、明治39年発刊の高頭 式（しよく）編「日本山嶽志」という本の改訂版中「笈ヶ岳」「大笠山」「白山」を担当され忙しい。インタビューという私の勝手なご縁で、ほやほや草稿を拝受してきた。まだ手直しがあるとのことで、次の機会に紹介させていただく。

もともと凝り性で、中途半端に出来ない性格と自称されるが、特に本になると、一行一行に責任がある。後世に残す真実として、調べて、調べて、膨大な時間を掛けておいでるようだ。

その点今時のメール、IT情報というものは便利であるけれど、「お手軽」「お気軽」「無責任」である。現代的山登りの姿勢に通じるものかもしれない。

「笈ヶ岳」「大笠山」は、近年五箇山の山との誤解もあるようだ。

ちなみに、分県登山ガイドの山選定の際、「登山道が石川県側になく」が理由で「大笠山」を加えることが出来なかった。

「笈ヶ岳」に至っては、深田久弥がその時までには登っていなかったが理由で「百名山」から外れ、「道がない」が理由で、全国網羅の「分県ガイド」からも外れたのだ。お陰で秘境の山を保っているけれど、本当に人間様の勝手である。

すると、この際、中高年ブームに乗じようと、「五箇山の山」と言い出す人も出てくる訳である。

力丸さんの語調は、にわかに「歴史を知らぬ不届き者めらが！」の語調に変わられた。根拠はそのほやほや草稿にある通り、修験者の時代から、四高旅行部、金商山岳部、また駒草会、長崎幸雄氏らの活躍に至る、長い歴史が石川県側にあるのだった。一部のみ紹介させていただくと

『山岳修験の時代、中宮は笥笠（けがさ）神社を中心に、加賀馬場における白山禪定の登山基地として大いに栄え、僧坊が軒を連ねていた。一方藩政時代の越中五箇山は加賀藩に所属していたが、陸の孤島として藩の流罪人を封じる地になっていくくらいアプローチが悪く、近年でも車社会を迎えるまでは遠隔の山村僻地で、訪れ難い土地であった。加えて笈ヶ岳の東面は、雪庇の崩落によって生じた断崖地形となり、登路が全く得られないので、往時の笈ヶ岳登山への入峰は西面から中宮雄谷經由で行なわれたと見るべきである。』

とある。この秋にもお仲間と、清水平から西尾根の修験ルートを確認に行かれたらしい。

力丸さんは数年前の四高記念祭に、四高旅行部残党の話し相手を頼まれ、参加したという。

かつて、岳人と文人が重なっていた時代、今の中高年登山ブームとは明らかな一線を画していた時代の、最後の登山家が力丸さんであると私も思った。

◇ ◇ ◇

おまけ、アンコールは「大汝のコマクサ」の話。これは、初対面の日の二次会のスナックでお聞きした。

コマクサは、現在、大汝の避難小屋の横と、登山道から外れた某所のニヶ所に増殖中である。某所では、その付近にも飛んで、登山者を喜ばせているらしい。

国立公園法の「一木一草採取まかりならぬ」が、持ち込みを禁止していないのが悪いとか、「登山道に砸く石でさえ、焼いてから搬入している。従来の植物層を攪乱する行為は困る」との批判もあった。

某所に植栽したのは力丸さんらであるが、大



汝に植えたのは福井の人だということだ。

コマクサが昔立山にあったという古文書があるという。だいたい高山植物というのは、氷河時代からの生き残りで、温暖化にともない高地に残された植物群。人が文字を持つ以前から、繁茂した植物もあれば、消えていった植物もある。植物分布が調べられるようになったのはごく近年のことであって、その時点で「あった」「なかった」「変えてはならぬ」というのは、狭い見の生物観であると言う。

昭和天皇の植物指南役里見教授も「移植したもの」と明示してあれば、学問上も支障なしとされていたとのこと。

だいたい、コマクサは高山植物の女王とされるように、他の植物が生えぬ砂礫地を好み、気高く咲くものであって、他の植物と混生するものではない。すなわち植物層を攪乱する…も、根拠のない批判である。

つまりは、歴史、植物学、他何ら思考のためのカードを持たない者が、今時点のことだけで騒ぎ立てている話と、力丸さんは受けとめている。

私の方は無難に「皆さん、白山が好きなんです」にしておこう。コマクサが嫌いな人はいないだろうし、「自分の好きな白山に、誰かが勝手に手をだした」ことの方に、きっとムツときているのだ。

これから殖えていくかどうかは、コマクサの勝手の話なのだから。

また、大汝に建つ避難小屋は、昭和18年10月に設置された、かつての気象庁のロケット雨量計観測所の小屋を、緊急避難用に維持しているもの。

その維持責任者の白山会は、「百引く一は白」ということで、白山に九十九回登れば入会資格のある会なのだという。他には、「砂防新道では一般登山者に抜かれてはいけない」の付記もあったそうだが、会員が高齢化した今は、すべてまあまあにしてあるという。

先年、力丸さんは、大汝の避難小屋を当てにしてとしか考えられない場所と時刻に、登山者とすれ違ったそうだ。こいつ…と思いながら

「今晚、大汝泊りけ？」

と声を掛けたら、

「はい、力丸さんに許可を貰ってきました」と答えがきたそうだ。

何といても、たくましいのは、60億を越えた「ヒト」であるようだ。

山男、有情、厚し

山を愛し、山の本を書こうとし、志半ばで病に倒れた金沢市内のアマチュア登山家の遺稿を、2人の友人が18年がかりでまとめ、故人の命日に合わせて近く出版する。

志受け継ぎ遺稿出版へ

「犀川をとりまく山々」と題して出版の準備をしているのは、金沢市城南千目、医師力丸茂雄さん(左)と同市西金沢新町、インテリアデザイナー古川博さん(右)。共通の友人である同市森山千目、長崎雄雄さんが病気で亡くなったのは四十四年。三十九歳になったばかりだった。「県内ナンバー1」と賞われた登山家で、八十もある方位を担いで白山に登ったことも知られていた。ホームグラウンドは、度々一様に山へ行った。長崎さんが病倒し、犀川院に入院、力丸さんが主治医から預かった遺稿には、長崎さんがこれら欄へつづり付けてあった。力丸さんは仕事の間を縫って、古川さんと一緒に物を書くのが好きで、一緒に「やまなみ」という雑誌を出していたから。お互いに登山が好きで、一緒に登山をする機会が少なかったが、心が通い合う仲間の人だった。



三月十二日の長崎さんの命日に間に合わせようと、二人は今、校正と最後の仕上げに追われている。この本には、犀川付近の山や川、谷の地形的な特徴や名前の由来、山々の村の古い話や言い伝え、クマ狩りや近代登山の遭難のいきさつなど、犀川とそれを取りまく山々にまつわる様々な話が収録されている。古川さんはこのほか、長崎さんが山岳雑誌などに発表した短編も集めて、「やまなみにする」「山にすける」友へ」「山男の迷い」の計五冊も完成させておいた。

本を完成させてワープロを打つ古川博さん(金沢市西金沢新町の自宅)。



自分で運んだ方位盤の前に立つ、在りし日の長崎雄雄さん(左)と力丸茂雄さん
—34年10月、白山御前峰の頂上で



「やまなみ」出版でき、ほっとしています」と話す力丸茂雄さん

川金沢市城南千目、自の自宅で

18年がかり資料集め

校正など二人三脚
「犀川をとりまく山々」

「古川さん、長崎さんの本にしてくれんか。昨秋、力丸さんは一も二もなぐさねた。古川さんは力丸さんとはまた別の形で長崎さんと付き合っていた。ともに物を書くのが好きで、一緒に「やまなみ」という雑誌を出していたから。お互いに登山が好きで、一緒に登山をする機会が少なかったが、心が通い合う仲間の人だった。

故・古川 脩さん

(ふるかわ おさむ)

手元に「夏山懐古」という本がある。古川さんからどの機会に頂いたものかの記憶は定かではない。限定 100部のこの本と、湯原さんのわかんを持っていたら、一目置いてもらえるような(?) そんな類の品である。ちなみに、

『大門山遭難略記』遭難顛末報告 能 登志雄
『白山地獄谷の日御子峰探険録』 丸岡 栄一
『死線を越えて』加飛越国境調査手記

北村 清太郎・出村 健次

と、石川県山岳史に残る事件の記録が列挙されている。

古川さんはそのように、かつての山記録を大事にされ、世に残すことをリタイア後の生き甲斐とされた方だった。たった三度しかお会いしていない私が語れるような方ではないのだけれど、この機会に紹介しておきたい。

ワングルの35周年記念誌を作ろうとした時、実行委員会には全く先立つ物がなかった。どうしたら安価に制作出来るか? すぐ思い浮かんだのが、山関係なら喜んでという噂の古川さんだった。彼は四高旅行部の部報ベルクハイル全巻を自費復刻されていた。

19期OB 梶さんの橋渡しで、書齋にお邪魔する。そこには退職金をはたいて買ったというドラム式コピー機があった。焼き付けコピーで原板を作り、後は紙代だけになるという機種だった。どの大きさを印刷用紙とし、そこにどんな順に印刷原稿を貼り込めば、紙代と製本代のみのお出費に納まるかを伝授された。結局はあまりにページ数が増え、上下2巻にもなり、専門業者に発注することになってしまったのだが…。

あの時機の上には、昔の草草会の会報があった。かつての会報は孔版印刷でかすれ、紙も黄変していた。古川さんはそれをワープロで打ち直しておいでた。



ウサギゴウモリ

山行記録を活字書籍とし、会員に配布すると同時に、足跡として残したい…山岳会の会報はその発行部数からは極端な割高になり、かつ、出来てから欲しいという部外者が現われても、配布できるだけの余裕部数を持てなかった。

山行記録を大事にされた古川さんは、そのような資本主義経済ではペイしないような記録が世に出ること、読み継がれることを願い、リタイア後の時間を惜しみなく使って下さる方だった。

岳人はどのような老後を送るのだろう。山に散った人の中には、「老後」など考えられない遭難で締め括った方達も多い。いつか無理が効かなくなる。いつか無理が出来なくなる…思い出を肴にだけでも侘しいではないか! そんな漠然とした私の不安・疑問に、壮快な老後を示されていたのが彼だった。

あれから、わずかの間にIT化が進んだ。多くの人が、デジタルカメラも駆使しての山行記録の編集を楽しみ、瞬時に配信出来るようになった。今では、ミニソーラーを広げればリアルタイムで山記録を配信も出来る。

しかし、軽薄短小というのだろうか、便利になる程、薄っぺらさが見えてしまう気がする。メディアが不便であった頃の方が、人は文章を練り、また、そう練られたかつての記録を大事にしていた。今情報は溢れ過ぎ、却って「消去」「削除」でバンと消えて行くものになってしまった。玉石混淆…どれが後世に残るべき情報かもよく分からず、一方、金沢の岳人なら当然知ってしかるべき人や歴史も抜けてしまう。「当然」が、単に私の価値観であるとなれば、どうしようもないのであるけれど…。

なお、古川さんの業績、他輝かしい時代の書籍類は、彼の尽力により、県立図書館の「長崎文庫」に収められている。彼はそれらを「国会図書館」にも収め、安堵の息をついていた。ちなみに彼のアドバイスで、ベルクハイム35周年記念誌上・下も、国会図書館に入っているのがある…私が安堵の息をついている。

ご本人にもうインタビューは叶わないので、丸さんに、補足をお願いした。

戦前、金沢には、一中～四高の裕福家庭のエリートコースがあり、次なるエリートがめざすのが、金沢商業高校(以下金商)であったという。当時の四高旅行部、金商山岳部は、めざましい活動と同時に記録を出すことで「岳人=文人」の時代を築いていた。うがって言えば、日

本が貧しかった時代に、遊びに山へ行けるのは、限られた若きエリート達であった。よって山記録も、文才きらめくレベルになりうるのである。

長崎氏も古川氏も、そんな時代の金商卒だった。古川さんは、生涯どの山岳部に所属されることはなく、杉村ケースK、Kに勤務し、インテリアデザイナーだった。

山路の会（やまみちのかい）を結成したが、それは山の本を作るための会であったという。

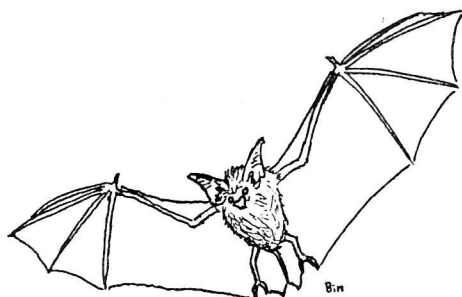
当時の岳人達の憧れであった、笈ヶ岳の地図を表紙バックとした原本を見せていただいた。寄稿者は駒草会、二峰山岳会、他個人。初版本には深田久弥も寄稿しているが、所属山岳会を問わずに、山記録を公開し、残していく会であった。その頃の岳人数は限られ、お互い顔も分かり、どこへ行くの、誰が行ったのと、すぐ情報交換も出来たという。彼らより少し世代のずれる力丸さんには「やまみち」は、バイブルといえる本だった。

リタイアし時間が出来てからの古川さんは、自分の現役時代の記録や、当時の会報からこれと思うものを集めて、ワープロで打ち、印刷機で刷り、配布していた。初めはホッチキス止めであったが、見栄え悪く、所蔵に耐えないということで、製本だけを外注するようになったという。四高旅行部のベルクハイルはページ数がありすぎ、それはワープロで打ち直すことなく、そのままコピーで、復刻とした。

売りに出すわけではないから、自腹を切った限定部数で作り、興味ある人に分けて楽しんでいいたい。個人の山記録、還暦記念の冊子の依頼にも快く応じていた。

平成7年夏、彼の不調は力丸さんにより膀胱ガンと診断され、手術。以後ワープロを病室に持ち込んでの、抗癌剤治療を繰り返されるが、平成9年4月不帰の方となる。享年68歳。

終生、見事な岳人であられた。



書斎の岳人 古さんのこと

力丸 茂穂

（平成9年8月発刊「加賀藩士人別帳」
上下2巻の巻頭の文より）

この度上梓された加賀藩士人別帳 上、下2巻の内容の一部は、すでに平成2年に「加賀藩士檀家別名簿」という私家本として限定発刊されているが、これは加賀藩士の旦那寺を各宗派別に分類したもので、収録されている寺院数は151、檀家数は1,449名と、今回に比しかなり小規模なものであり、本番前の小手調べのような本であつたらう。

また同じ年、「城下町金沢町割覚書」も限定出版されているが、これには町割（旧聯区）ごとの地図とともに、町名の変遷・由来およびその町内に居住していた加賀藩士の名簿などを記載し、さらに、加賀藩の政治や城下町の風俗などについても、平易にかつ興味深く述べてあり、その3年前に出された「チョン髭歳時記」とともに、あまり肩の凝らない内容のものであつた。

今回出版の2巻は、このような一連の郷土民俗史関係の最終判ともいべきものであり、彼が宿病を得てのちに、入退院を繰り返しつつ、その闘病の病室にまでワープロを持ち込んだうえ、病苦に耐え、主治医の目を盗みながら夜遅くまでキーを叩いた、まさに生命を賭した執念のライフワークである。

巻末に付けられた索引は、利用者にとって非常に便利なのは勿論であるが、本文についても、人名あるいは旦那寺を発音順に並べ換え、しかも横読みにも編集してあり、1名につき1行に制限したうえ、各項目別に縦の野線で仕切つてあるので、人名以外の知りたい項目について、縦読みにも通覧することが出来るようになっている。

たとえば家祿については、末尾の文字の位置を揃えてあるので、数値というよりは横棒グラフを見るようなアナログ的感覚で、家祿の高低がある程度察せられる。

これは著者自身が、既刊の文献を利用する時に、かなり苦勞された経験に基づいているらしい。

このような編集方針は、長年に亘って著者自らがワープロを打ち、多数の私家本を製作・出版された過程において生まれた、アイディアで

あろう。ワープロは手書きと異なり、常に文字の桁、行、字数などが揃って印字されるので、原稿用紙を用いなくても、碁盤の目のように縦と横がきちんと並んでいる。

また、最新のワープロでは、最初の入力方法をうまく考えておけば、表計算ソフトを利用して、各項目ごとの並べ換えが容易に出来るが、果たして著者がかかる手段を用いられたのかどうか、幽明境を異にしてしまった今となっては、確かめる術がない。

このようなきちんとした整理方法は、著者が若い頃製図の技術を学んでいたからというより、むしろ著者自身の折り目正しい性格によるものである。

長い頭髮に不精髭を伸ばし放題にしていた、あの風貌だけしか知らない者には、そのような性格は到底窺い知ることはできない。

著者の古（フル）さんとは、山岳を通しての友人であり、休日に限って朝早く起きる特技と、山へ登ること以外に能のない私にとっては、またとない良き話相手であり心の友であった。

しかし振り返ってみると、彼とは、越中桂から飛騨加須良への峠越えの山旅に同行した記憶があるだけで、ついに一度も本格的な登山には同行することがなかった。

彼は若い頃からむしろ単独行を好み、山岳会に所属しての登山活動は最後までなかったのだが、「日本山の書の会」という山の本に狂いまくっている人々の集まりに所属していたので、山岳書に関する知識と関心は誰にもひけをとらず、かなり高額の山岳関係の稀覯本を古書店から取寄せては、私を羨ましがらせた。中でも彼のお気に入りのひとは、田淵行雄の著書であり、この点でも、彼と私とは馬が合ったのである。

登山者としての現役時代には、河内村の笈山付近にある修験道の遺跡「うまやのつぼ」へ谷川沿いに登りつめて、これを詳しく報告したり、県内屈指の秘境である瀬波谷を遡行して大笠山に達し、当時は国土地理院の5万の地図にも記載されていなかった「大笠池」を初めて報告されるなど、ユニークで価値ある登山活動をされた。

本来登山は反社会的な行為であり、そのような遊びにうつつをぬかす者は、昔から一風変わった人物が多く、その上、凝り性で書物好きというのが通り相場であるが、彼もまたそのような評価から免れることはできないだろう。

50代後半であっさり勤めをやめ、埋もれたま

まにしておくには惜しいが、採算性と時間の点からそれまで誰も顧みなかった郷土の古い登山記録を編集・復刻する仕事に熱中し始めた。

ワープロとコピー装置の出現はまさに彼のためにあったようなもので、二階の書斎に高性能のコピー機を持込んで、次から次へとワープロ打ちの私家本を作り始め、「山路の会」という実は彼一人しかいない会の名前で、山岳書の限定本を矢継ぎ早に発刊した。

中でも洛陽の紙価を高めたものは、長崎幸雄著、古川 脩企画・編集、北国出版社発行の「わが白山連峰」であり、また郷土の登山家に久しく待ち望まれていた四高旅行部の「ベルクハイル」全13巻の復刻であろう。

このような彼の道楽は徐々にエスカレートし、いろいろな人々が持込む会報や自費出版本などの製作を全くのボランティア、いや少なからぬ自費を投じてでも引き受けるようになった。もともとヘビースモーカーであったが、このような肩の凝る仕事の合間に吸う煙草の量が、彼の健康に少しずつ悪影響を与えた可能性は否定できない。

その後の闘病生活の合間にも、この道楽は絶えることがなく、時折自分の名前の「脩（おさむ）」をもじって「長夢（おさむ）」のペンネームを使用したりしていたが、ある時「長無（おさむ）」（たぶんもう「長くない」の意味であったろう）のペンネームで、主治医の私をドキリとさせる悪戯っぽい精神も最後まで衰えることがなかった。

今後彼のような仕事を、一体どなたが引き継いで下さるのであろうか。われわれ岳人仲間は今途方に暮れている。

（日本山岳会々員）



ハシブトガラス

林 正一

(はやし しょういち)

略歴 昭和11年生まれ 元金沢市企業局職員
昭和37年「中尾グループ」(昭和54年より
金沢ナカオ山岳会)を結成、約40年指導に
あたる。環境庁自然公園指導員。元石川県
山岳協会事務局長。石川県自然保護協会、
白山の自然を考える会、中高年の登山クラ
ブ・くろゆりクラブ設立を提唱。共著に
『石川県の山』、『白山を歩く』(以上
山と溪谷社刊)、『石川の自然百景』、『
かがの自然』、『医王山の自然ガイド』(
以上石川県監修)、『かが・のと百山』(
金沢ナカオ山岳会編)がある。

林さんには、今回のインタビュー記事におい
て、最初の「餌食」(?)になっていただいた。

シーズンにはそれこそ毎週のように同行して
おり、これまで18年、どれだけ林節を聞いてき
たかしの。それなのに今回照れ照れでイン
ビューし、「聞く」に徹してみても、改めて得心
できたことが多かった。

この特集を発売しておきながら、相手がある
からには、〈蓋あけにゃわからん〉〈無謀かも〉
の不安と疑念にかられていた私。「よし!」の
エネルギー湧いた初体験であった。「聞かぬは、
一生の損!」と、このプロジェクトをやりぬく
決意を固めた。

その後、私は「金大ワングルOB会報編集長」
に徹して、インタビューに励んだつもりである。

たいした雑誌でもないのに、お時間を割いて
頂くことへの気苦労。相槌を打ちつつ、次の質
問へ繋いでいく、思考回路のフル回転。それら
テープを繰り返し聞いて…。金太郎飴ならぬ、
頭のどこを切っても録音テープが弾け出てき
そうな正月休みを過ごした。皆さんに拙い原稿の
校閲をお願いし、ようやく目処がたった。

そんな、自分をちょっと誉めたい時間が戻っ
てきて、テンションが下がった時気付いたのだ。

私は金大ワングルOBと名乗り、ナカオの会
員であることは、「今も山の現役です」と同義
で使ったつもり…。

でももし、この私にインタビューを受けた方
々と林さんが出くわしたら、「うちの会員がご
迷惑をかけまして」と林さんが挨拶しなければ
なくなる。それが世間というものだ。

ようするに、皆さんが突撃レポーターに快く
応じ、きちんと答えて下さったのも、林さんと
いう後ろ盾あってのことであったのだ。

反省!陳謝。そして感謝します。



「俺、ナカオ辞めることになったワ」

「え?!」

予定外の妊娠で休会中の私に、久しぶりの仲
間からの電話は、意外な切り出しで始まった。

聞けば、その1年前から面倒をみることにな
った初心者対象のくろゆりクラブの山行日に、
別の山に登りに行っていた。それが林さんの耳
に入り、今日臨時集会所が召集され、売り言葉に
買い言葉でこんな結果になったという。そのK
氏のみならず、くろゆりの面倒をみるために入
会したわけではないとする実力派グループも、
その日脱会することになったとのことだった。
彼らは私とは年代も近く、親しい方の仲間達だ
った。

もう「卒業」はないのだから、今度の仲間達
とはずっとずっと一緒に山に行ける…出産とい
う事態をどう乗り切るか、そのみを難題とし
ていた私には、晴天の霹靂の別れ話であった。
学生時代のようにぼろぼろ涙のこぼれる私に、
今度は林さんから電話があった。何の間にも合
わない私であったのに…。それほどに林さんも
動揺し、苦渋を伴った決裂劇であったのだと思
う。あれからもう16年が過ぎた。

そんな騒動の元となったくろゆりクラブは、
25年間ナカオを主宰し地元ガイド本を上梓して
きた林さんも選定委員に加わった、朝日新聞の
「北陸の百山」紹介企画によりスタートした会
であった。すなわち、彼は40年、山に関わり続
けてきている。

そのような犠牲を払って面倒をみてきたくろ
ゆりクラブも、昨年、どうにか生え抜き会員達
による運営が軌道に乗ったか?のところで、

「もう、ナカオの干渉は無用」

とする役員達により、一般会員には経緯も判ら

ぬまに絶縁となった。

そんな別れを林さんは何度繰り返してきたのだろう。

ワングルの新陳代謝を繰り返しながらの40年と、社会人山岳会の、個人が主宰してきた40年の歴史とは違って当然である。

ワングルは、知識を蓄積できない、常に新人育成に追われてしまう替わり、その時代時代の部員の指向に沿っていくことが可能だった。そうしてきたから、今年の46期生も迎えられている。

一方、社会人山岳会は、「三人寄れば山岳会」「三年もたない山岳会」と揶揄されるごとく、大人ゆえの個性のぶつかり合いがある。さらには、「仕事」「結婚」「子供」と、多くのブレーキを抱え込んでしまう。個人的に主宰していく意志さえあれば…で、続けられるものではない。

どうして、林さんは続けてこられたのだろう？青臭い質問にお答えいただいた。

「仲間に恵まれた」
と林さんは言う。

「去った仲間もいた。しかし、それ以上に、多くの仲間が残ってくれた。」

40年の間にどれだけの人が会から、山から離れていったことであろう。それでも

「続いたのは仲間がいたに尽きる」
のだそうだ。

「登山者は個性が強い。協調性も不足しがちである。しかし、長続きのためには仲間がいる。3人ぐらいでは何の都合で中断するかわからない。10人以上は必要だ。」

ナカオは創立10周年記念に、犀川源流域での活動をまとめ、これが山溪エバンニュー会報奨励賞を受賞。「石川県の山岳研究を進める」とした内規の方向性が評価を受けると同時に、以後の会のカラーを決定づけることになる。その頃から、活動しつつ、記録も出版していくに足る会員数も維持されるようになった。

私自身は、せめて山行の連絡ぐらいは誰かが肩代わりすればいいのに、させればいいのに、と、何度か思ったことがある。そうすれば少しは楽になるのに…。だが、彼には1本1本の電話連絡が仲間の絆との認識であり、面倒ではないらしい。

また、ナカオの登りのスピードにはついていけず、植物名に詳しくもない私が、同行したとて何の間に合うのか？と思ったこともあったが、彼は

「複数の目があれば、いろんなことに気付くから」と、さりげなく言った。

つまりは、去った仲間より、残っている仲間。いろいろな能力を発揮してくれる、違っていてこそ味わいも出る仲間…そんな前向きの仲間観が、会を維持させてきたようだ。

金沢ナカオ山岳会の「ナカオ」は、医王山の中尾尾根に由来し、そのナカオ新道を開いた4人で、昭和37年に発足している。

「犀星の本に何度も『鹿江りの峡谷』が出てきた。『鹿江りの峡谷』とは何処なのか？豊吉川の上流と見当がついた。しかし、そこへは、福光側からしか道がない。では、金沢側から行ける道を作ろうではないか、が動機だった。」

「あの頃自分達も若かった。医王山の一般ルートが物足りなかった。さりとて遠くへ度々行かれるものでもない。豊吉溪谷の急峻さ、美しさに魅せられた。」

流紋岩質の医王山は、多様な植物に恵まれている。沢や谷筋を好んで歩く青年林さんは変わった花を見かけては興味を持つようになる。また天気構わず出掛けていれば、景色が見えない日は、植物観察に専念することになる。湯原さん（故見上山荘主人）に聞いたり、図鑑で調べたり、さらには大学へ木村さんを訪ねたり…。興味をもてば、さらに遠いにも気付き、隣のページの植物にも目とまる。そうやって、医王山では初めて、それが広がり、石川県では初めて、などの植物の発見者にもなった。

医王山は、林さんに仲間の妙味を教え、山を愛する湯原さんと巡り合わせ、また、植物への造詣をも養った大切な山である。今も、夏のナカオ新道整備と、初冬の納山会は医王山で定例化しており、新年もそこでのわかんハイクでスタートすることが多い。

「会員にも常に言っていることだが、近くに自分の好きな山をおいておくこと。人生にはいくつもの変わり目がある。就職、結婚、子供の誕生…。生活のパターンが変わり、相手の居る人生になる。遠くの山、たとえば北アばかりを対象としていれば、それで山をやめなければならない。近くにあれば、短時間で、夕方から仕事であっても、登りに行ける。」

「とにかく身近な山は馬鹿にしてしまうが、自分は、医王山や犀川源流といった魅力的な山に恵まれ、そこへ登り続けることで、山に関わり続けることができた。」

「いわゆる藪山にも、その山の匂というものがある。その山の輝く時を見つければ、藪山にも十分な楽しみがある。身近な山を馬鹿にせず、



医王山での納山会

魅力を見付けては、楽しむようにした。それが「山が続いた」ということだったのだろう。」

北陸が自然に恵まれているのは自他共に認めるところである。林さんは、それを続けられた根拠としているが、同じく自然の豊かさを認めても、決して行動には移らない圧倒的な層がある。「いつでも行ける」「いつかは行ける」の油断なのだろうか。

山へ行く、それが続く…は、やはり別のファクターもあるようである。

林さんのそもそもの出発点は、どんなシーンだったのだろう。

「山の初めは、父親に連れられてのゼンマイ採りだった。吉次山のあの平沢さん達が開いた道の谷辺り。一面のカタクリの群生だった。子供心にもこんなきれいな所があるのかと感激した。まさに桃源郷だった。思えば、それが、山への興味の出发点であり、植物への関心の出发点だったのかもしれない。」

還暦を過ぎたというのに、林さんは足の回転数も速く、脇道を見れば調べに入り、図書館への文献探しも欠かさない。

それらが山ガイドの執筆のためのみかといえ、生来、何にでも興味を持ち、じっとしてはいられない子供だったのだという。国語の教科書に載っていた笛吹川を渡れば鉄道がある…の話信じ込み、友達と鍋、米抱えて川を渡ったこともあれば、夕刻にまだ医王の里辺りをうろついていて、引き戻されたこともあったのだという。

そんな小さな冒険を好んだやんちゃ坊主は、青年時代には医王山へ通いづめ、ナカオ山岳会への結成へと、自分の道を歩み始めたのだった。

ナカオの30周年記念誌の初めには、中尾新道の道標を手にした26才の精悍な林さんが写っている。林さんの40年に渡る活動、発行本、表彰歴については、本稿の後に付記しておく。

40年の間に、林さんも会員もまぎれもない中高年になった。そして、思いがけぬ中高年登山ブームのただ中にある。かつて基礎訓練を受け「山こそ我が命」としてきた者達が山離れをし、「あれは昔の話」としている一方で、猫も杓子ものごとく山が人で溢れ返っているのだ。

実はナカオも「生涯登山」「社会性ある登山」を目指してきていた。その努力の甲斐あってというより、気づいたら、そこらじゅうの山が人であふれてきたのだった。いつものつもりで出て行くと、もう駐車場が一杯で停められない。

そんな中高年登山ブームは、今逆に、ナカオを縛り始めてきているようである。

すなわち、「犀奥特集号」「ふるさとの山Ⅰ・Ⅱ」「かがのと百山」などの実績は、地元よりむしろ中央の認める所となり、出版依頼を受けるようになる。それは、地元山岳会の雄と認められたことでもあり、「ナカオ山岳会員です」がステータスの響きをもつような快感が我々会員にもあった。

ただし、先の自費出版本が、エッセープラスわずかのガイド、「自分達の活動記録」であったのに対し、依頼本は報酬がある替わり「全面ガイド、期限つき」。山は「趣味」ではなく「仕事・ノルマ」に変貌せざるをえなくなかった。

分県登山ガイドの四分の1を担当させていた私はその仕事で、自分ながら成長したと思う。さすがにガイド本になる責任は重く、そして要領悪く、また写真が思うように撮れず、1山に5回足を運ぶこともあった。

それが本になった時、そして、今も書店に並

ぶのを見る時、嬉しさは格別である。しかしながら、最終責任の重さ・苦痛を担っていたのは林さんであり、私は「その下請けですら、すこぶるきつかった」というしかない。

「今も原稿依頼がきているのだが、『読者が選ぶ百名山』のタイトルで、白山が10位に入っている。従来なら30位がせいぜいだったものが、そんなふうに好みが変わってきている。白山関係の出版物も増えるということになる。白山が愛されることは嬉しい。自分達の活動の評価も嬉しい。収入がありがたいのも事実。ただ…」

「ただ、ガイドは小説とは違う。書いた後に書きっぱなしという訳にはいかない。つまりこちらは書く時の取材だけでなく、その後のメンテナンスにもずっと縛られっぱなしになる。白山周辺から離れられなくなる。そのような宿題を抱え、さらには加齢で体力・脚力に自信がなくなりノルマを頭に浮かべれば、ますます地元の山しか行けない状態に陥る。会員をも縛ることになる」

すなわち山を続け、それが外部評価を受ければ、今度はそのことに拘束される。

山屋には本来、まだ見ぬ山、登ったことのない山への「はやもせかる次の山」的飽くなき中毒症状があるはずである。先はかの深田久弥の句だが、「そこに山があるからだ」よりずっと、日本人のせっかちさ、豊かな自然に恵まれた日本の風土、また修験道の奥駆けにも似た求道要素もこめた名言であると思う。その「次の山」が、林さんの場合、さらに外圧の加わる形で、地元限定されることになっていった。

しかし、そのことは、身近な山が自然豊かな山であってくれてよかったの思いも深めることになったようである。事情があつて山を離れていく人達、それ以上の何とはなしに山から離れてしまった人達を見るにつけ、次の一步が出る自分は恵まれている…。つまり、林さんには、「打たれ強さ」ともいうべき、常にマイナスを上回るプラスの価値を見付けては邁進していけるキャラクターがあった。

ここで誤解され易いのは、「邁進」が相手をねじ伏せ、ただ我が価値観を押しつけ抜くことであったのかということである。ワングルは、世代交替で時代に適應していった。個人である林さんは、家族、仲間といった生身の、感情ある人間との「協調」「誠意」をモットーに、会を維持し続けてきていたのである。

無論、多様な会員がいれば、いわゆる上司への不満も湧く。結局、筆頭の大量脱会劇も

「上司がはいはいボランティアを受けてきて、我々の意見は無視で、利用されるばかり」といった、複数人が会を組織するゆえにもたら



毛勝山。風景写真ばかりで、勢揃い写真は意外に少ない。

されてくる不満であった。

そのような組織内の批判ばかりではない。本も名声も、本人を離れて一人歩きを始める恐ろしさがある。

林さんは山で、一面謙もない人が、本人を目の前にして「林という男は…」の蘊蓄を垂れ始めるのを何度も耳にしたことがあるという。人のねたみ、そねみ。有名人をこき下ろせば、あたかも自分がその上に立てたかのような錯覚…大人でありながら、大人になりきれない、自分勝手のみを正当とする人間が増えているのであろう。

それでもなお

「自分一人ではおそらく続けてはこれなかった。仲間がいてくれたから」
のことばが出てくる林さん。

「独善家」「ナカオ山岳会ではない。林山岳会だ」と陰の非難を浴びつつも、「協調性」を筆頭にあげる林さん。すなわち、短いスパンでの当人にのみ都合のいい仲間、うわべの妥協の協調性というのではなく、いわば、山を通しての「求道」の長い過程の中で、真にそれらを大事にし続けてきたのだった。

「仲間」も「協調性」もありふれた返答であろう。長い濾過の時間を経て、なお残るもの。その意味を真に悟りうる人間はわずかである。

「残念なことに、山が好きになる人は3年ぐらい登ると、それでどこへでも登れる気になってしまう。自分の登りたい山、より遠い山、有名な山…たしかに、そのように登りたい心が湧く人間でなければ、山のように苛酷で、賞もつかないようなスポーツは続けられないであろう。しかし、より遠い山を目ざしていればいづれ続かなくなる。目的のために年寄の会員は面倒とすれば、それは自分が年老いた時、登るべき山

を見つけれなくなるということでもある」

「自分の登りたい山は、会の山行のない日に、同じ志向の会員と登りに行けばよいのだ。会には会の方針、会のかかえる仕事がある。様々の年代の会員もいる。会は多くの会員が登れる山を基準ともしていかなければならない。」

「今の自分が登りたい山とは違う…そのことで会に不満を持ったり、あるいは多数の会員がいることを忘れて、自分達の登りたい山へ行けるように会を変質させてしまおうとする…そのように協調性を忘れた者達が、会を離れたり、騒動をおこしてしまう。」

「そうであっても、続けばよいのだ。ただ、自分がなぜ山が続いたのかと省みれば、それは身近な山を大切に、協調性を重んじてきたからだというしかない。実際、山でなくてもよいのだ。継続していけばわかっていくものがある。社会に還元していくことも。自然を利用させてもらう替わり、大事に守り残していかなければならないことも。」

「人の付き合いにも損得はないのだ。サポートしても、得られるものがある。自分がサポートされる時期もくる。」

「ただ、そうではあっても、老いた人が、家族が単独行では心配だから入会させてくれと依頼してくるのには困っている。会がそこまで背負うわけにはいかないのだ。」

「かつての自分は百名山巡りには感心しなかった。しかし今は、赤線つなぎであろうと百名山であろうと、やりたい、やれると思うジャンルで、続けばよいと思う。山のレパートリーは広い。花、写真、スケッチ、山の歴史…一つでも好むことを長く続けてみれば、それは60になっても70になっても楽しめるものとなり、それぞれの達成感につながるであろう。」

ちなみに、筆頭決裂劇のKさんはその後、通っているジムで初心者向け山岳会を結成。さらには教会牧師からも野外活動リーダーを頼まれて、自分達だけの先鋭登山にはめったに行けなくなった。気のいい彼の主宰者側に立つ悩み・奮闘ぶりを聞く度、ままならぬ世を思う。人と人との出会いにも「匂」がある。その「匂」を味わうには相応の努力、年季も必要であろう。

私もナカオで18年。古い方から数えられる「重鎮」になった。それでいて、林さんの立場を理解できたのは、OB会を再興してから。苦渋を含めて真に理解できるようになったのは、さらに5年後。引継ぎが円滑にいかない事態に陥ってからといってよい。

金大ワングルで育ち、卒業までまっとうした…十分なスクリーニングをうけたはずの集団においてさえ、世代毎の価値観、ワングル観、OB観があり、翻弄された。さらにはOB会歓迎の人達であっても、世話役がでてこない。なぜ？の怒り、悲しみの中で、「会というものは全ての会員の価値観を満足できるものではない」ことを達観し、また、自分も同様に、「利用する立場でしかナカオに関わってこなかった」ことにも気付かされた。

「子をもって知る親心」という。不満を持つはたやすい。我々も、何か一つは面倒を見る立場に立ってみて、自分が受けている様々の恩に気付けるのではなかろうか？そのお返しをして、私達は人生をまっとうしたとすべきであろうと思う。大人になったから、家族を養っているからだけでは、まだ私達は「人の道」を極めてはいない。

さて林さんには、いや林さんなればこそ、これから「老い」へのチャレンジが始まる。少しは老いのブレーキもかけてもらわないと、熟年太りの加算した身はついてはいけない。彼のチャレンジに同行しつつ、「その後」のインタビューも心に秘めて、人生を味わっていききたい。

以下の資料は、林さんが環境庁長官表彰受賞の際の祝賀会パンフ（古源良三氏監修）から、転用した。

《林 正一氏の活動歴》

◎印は金沢ナカオ山岳会関連事項

昭37年9月 医王山・ナカオ新道を開き（林、宮本、吉野、川場の4氏と）一般に供用、「中尾グループ」を結成する。

40年5月 市内高校山岳部と医王山清掃登山実施。清掃登山の草分けとなる。

40年7月◎会名を「山岳会グループ・ナカオ」に改称する。

42年5月◎日地出版「白山」地図発行に協力する。

45年8月◎全日本ユースラリー「白山登山」に協力する。

45年9月◎白山清掃登山を実施する。

46年12月◎白山の自然保護について環境庁に意見書を提出する。

47年4月 環境庁より自然公園指導員に委嘱される。

48年1月◎金沢市等へ犀川源流を石川県の自然保護策に指定するよう要望。後に自然環境保全策に指定される。

49年3月◎“山と溪谷”社のエバニュー会報奨励賞を受賞する。

50年11月 北陸中日新聞「北陸の自然歩道ハイク、医王山コース」を歩くに協力する。

54年7月◎会名を「金沢ナカオ山岳会」に改称する。

54年7月◎石川県健民運動推進本部主催の「はたちの健民登山」に協力しその登山を援護する。以後毎年協力する。

55年7月◎北国文化センター登山教室の指導を担当、以後昭和60年まで続く。

55年8月◎全国レクリエーション大会・白山登山に協力する。

57年6月◎医王山清掃登山を実施する。この年より環境週間に合わせて県内外の清掃登山を実施する。

57年7月 環境庁自然保護局長賞を受ける。

58年4月◎日地の登山地図『白山・医王山』の執筆をナカオが引き継ぐ。

60年4月 朝日新聞連載の『北陸の百山』の記事執筆に協力する。

60年7月 北陸の百山を登る会「くろゆりクラブ」が結成される。相談役に就任。

62年5月◎金沢市文化活動賞を受賞する。

62年5月◎中尾新道を延長し、「ナカオ新道」に改称する。

63年7月 第30回自然公園大会で石川県知事表彰を受ける。

63年10月 春から協力してきた『医王山の自然ガイド』が発行される。(翌年3月ナカオの代行発行で市販される。)

平1年5月◎金沢市の依頼で医王山豊吉川鹿滑りのへつりに、鎖の取り付け工事を施工する。

8月 石川県主催の「第一回自然に親しむつどい」に協力する。

9月 朝日新聞に「在所の山」連載開始、林ほか会員が執筆する。

2年3月 白山の自然保護を目的に設立を提唱してきた「白山の自然を考える会」が発足。

4年10月 山と溪谷社から『日本の山1000』が発行される。石川県関係の山を執筆する。

5年7月◎石川県健民運動推進本部主催の「親子白山登山」に協力しその登山を援護する。以後毎年協力する。

6年4月 『いしかわ人は自然人・特集医王山』に林ほか会員が執筆する。

6年4月 健民運動30周年記念大会において石川県知事より表彰を受ける。

6年4月◎中日文化センターが登山教室を開設、ナカオより講師を派遣する。

6年10月 金沢市長表彰を受ける。

8年5月◎第19回石川テレビ賞を受賞する。

9年4月 山と溪谷社の『白山と北陸の山』の調査を開始する。

9年4月 中日文化センター登山教室の講師に就任する。

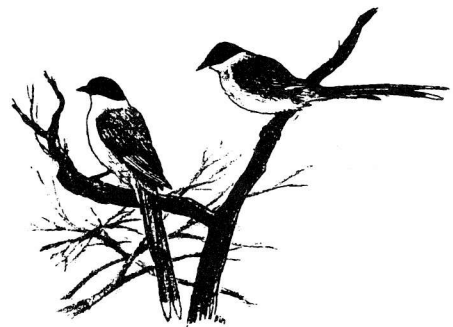
9年7月 第39回全国自然公園大会において環境庁長官表彰を受ける。

9年8月 林ほか会員が調査を進めていた『白山を歩く』が山と溪谷社より発行される。

11年12月 第47回中日社会功労賞を受ける。

《林 正一氏が主に執筆編集した山の本》

本の題名	発行年月日	発行所
①犀奥特集号	昭48・3・31	山岳会グループナカオ
②ふるさとの山特集号	51・3・31	山岳会グループナカオ
③ふるさとの山特集号Ⅱ	54・10・1	金沢ナカオ山岳会
④かが・のと百山	58・4・20	文芸集団
⑤県境踏破 250キロ	62・4・6	能登印刷出版部
⑥医王山の自然ガイド	63・10・1	石川県環境部・金沢市
⑦新かが・のと百山	平3・4・20	高島出版印刷株式会社
⑧白山国立公園とその周辺	4・6・30	高島出版印刷株式会社
⑨加賀白山(地球の風22)	7・6	日地出版株式会社
⑩いしかわの自然百景	8・3・30	株式会社橋本確文堂
⑪分県登山ガイド石川県の山	8・5・10	株式会社 山と溪谷社
⑫白山眺望登山・泰澄大師 ゆかりの地をたずねて	8・10・10	高島出版印刷株式会社
⑬白山を歩く	9・8・30	株式会社 山と溪谷社
⑭白山と北陸の山	12・8	株式会社 山と溪谷社
⑮石川の自然公園 医王山	13・3・10	金沢ナカオ山岳会



オナガ

《林 正一氏の受賞歴》

1、昭和57年7月21日 環境庁自然保護局長表彰

あなたは長年にわたり自然公園の利用指導を通じ 動植物の保護自然環境の美化清掃及び利用者の事故防止等適正な利用の増進に寄与されました。ここにその功績をたたえ功労記章を贈り表彰します

環境庁自然保護局長 正田 泰文

2、昭和62年5月20日 金沢文化活動賞

貴会の多年にわたる誠実かつ真摯な調査登山自然保護活動は本市の市民文化の向上に寄与することまことに顕著なものとあります よってここに金沢文化活動賞を贈りこれを表彰します

金沢市長 江川 昇

3、昭和63年7月23日 石川県知事表彰

あなた 多年にわたり自然公園の保護と適正な利用の推進に尽力し自然保護思想の普及啓蒙に寄与されました その功績はまことに顕著であります よって第30回自然公園大会にあたり これを表彰します

石川県知事 中西 陽一

4、平成6年4月24日 石川県知事表彰

あなたは健民運動の実践活動に尽力され その功績はまことに顕著であり 他の模範とするところであります よって健民運動30周年記念大会にあたり これを表彰します

石川県知事 谷本 正憲

5、平成6年10月18日 金沢市長表彰

あなたは日頃職務に精励するかたわら 長年にわたりボランティア（社会教育）活動に尽力してこられました このことは他の職員の模範となるものであり ここに表彰します

金沢市長 山出 保

6、平成8年5月17日 石川テレビ賞

貴会は地域の登山道の開拓や白山調査登山の活動を出版を通し紹介するなど登山界の振興と自然愛護の啓蒙に尽くされています その活動に深く敬意を表し ここに第19回石川テレビ賞を贈り その功績を讃えます

ITCクラブ代表委員 金子 曾政

石川テレビ放送株式会社代表取締役社長 榎本 喬

7、平成9年7月23日 環境庁長官表彰

貴殿は多年にわたり白山国立公園において利用者の指導に努められるとともに 美化清掃に尽力され その功績は誠に顕著なものとあります よって第39回自然公園大会にあたり表彰します

国務大臣 環境庁長官 石井 道子

8、平成11年12月3日 中日社会功労賞

あなたは岳人ならではの豊かな経験から奉仕の自然公園指導員として 白山国立公園を中心にゴミ持ち帰り運動や安全登山の先達となられ 自然保護思想の啓発に尽くされました。ここに第47回中日社会功労賞を贈り、その功績をたたえます

中日新聞社代表取締役社長 白井 文吾



番外編

根深 誠 (ねぶか まこと)

「めくら、蛇におじず」とは、言ったものである。編者は「ルポライターをルポ」の暴挙をやった。勝手な考証もやってみた。

ただ、素人なりの良心があって、拙文であろうと、たかがOB会会報であろうと、ご迷惑をかけては…と、校閲をお願いした。それも「蛇におじず」に当たることではあるけれど。

ネパール出兵前の多忙に関わらず、彼からお返事をいただいた。ほんの数ヶ所しか赤ペンはなく、それは「時代の寵児→?」の箇所以外は訂正した。校閲済みの本文である。

あれから注文した本も入手できて、確認した結果、「遙かなるチベット」には、はっきり「明治大山岳部」と出ていた…もう、赤面。

著者略歴をこれだけ見比べてみたことはない。その結果、当然のことであるけれど「ルポライター 根深誠」が確立するにつれ、前歴が省略されていく過程を知った。それは著書が増えたら、字数がはみ出して…の単純な理由でもない、はからずもかいま見た一人の岳人の自己実現の道程でもあった。

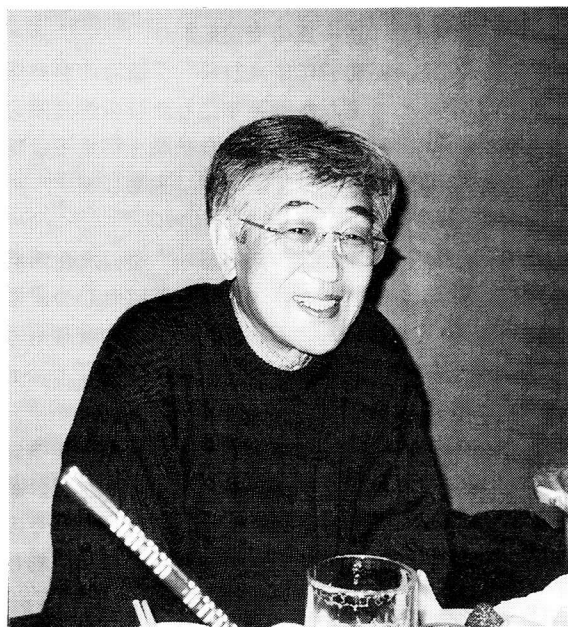
今回の未熟は許していただこう（とりあえず、了解済み）。

未熟といっても、「植村 直己」が、彼の心にある…この直感正しい。根深氏が、辺境の旅にある時、またマスコミにさらされる時、それが孤独で、辛ければ辛いほど、浮かび上がってくる男…。

それは、私が「人対人」の言葉の中から、思考の闇合いから、たかが半日の出会いであろうと…。直接お会いすることで、キャッチし得た「真実」である。そしてそれが「ルポの真髓」であると思った。

なお、本文に氏の白神山地での活動の情報は抜けている。曲解を避けるべく、インターネット上の公開情報（金沢クンプ協会玄田幹夫氏提供）を先に掲載しておく。

よって、続く本文は「お笑い」で、お読み下さい。



《東奥日報・20世紀の群像》

1999年11月20日掲載<82>

根深 誠 (ねぶか まこと)

～白神山地のブナ林守る～

略歴1947（昭和22）年～。弘前市生まれ。

登山家。弘高、明治大学農学部卒業。

ヒマルチュリ東尾根（ネパール、77）、エベレスト西稜（同、81年）などの登山隊に参加。86年ゴッラソム（パキスタン）初登頂、88年シャハーンドク（同）では隊長として初登頂に成功した。84年に「白神山地の自然を守る会」と「青秋林道に反対する連絡協議会」を設立、ブナ原生林保護運動に取り組む。95年、河口慧海のチベット潜入ルートを解明した「遙かなるチベット」（山と溪谷社）でJTB紀行文学大賞を受賞。

●世界遺産への道開く

1987（昭和62）年、青秋林道（広域基幹林道「青秋線」）の建設問題は緊迫した局面を迎えていた。82年から始まった林道工事は、秋田県側が既に県境に迫り、本県側に入り込んで建設を進めるため、赤石川源流部の水源かん養保安林の解除を申請した。認められると工事は白神山地のブナ原生林に突入する。

●青秋林道に異議

追い詰められた根深誠ら「青秋林道に反対する連絡協議会」は保安林解除に反対する異議意見書の提出を目指し、10月19日夜、赤石川流域では最奥の集落・鯉ヶ沢町一ツ森地区で「赤石川を考える会」を開く。ブナ林の保護を訴える根深らに対し、住民は伐採による山の保水能力

低下、川の汚濁や水量減少、木材の県外流出など林道建設の影響を次々に指摘。出席した50人のほとんどが反対署名に応ずるという予想外の展開になった。ブナ伐採による山の変化を住民は敏感に予測していたのだった。

ブナ原生林を守るという自然保護運動が赤石川流域の住民運動と一体となり、青林道が中止に向け大きく動き出した瞬間だった。連絡協議会のメンバーは半信半疑だったが、根深だけは反対運動の勝利を確信し、気持ちの高ぶりを抑えられないまま家路に就く。

その夜の出来事を根深は「最終キャンプから山頂を目指したアタック隊が悪天候に遮られて遭難寸前、一瞬、雲が途切れたら頂上が目の前にあった」とヒマラヤの高所登山に例え、「登山家として初登頂は最高の栄誉だが、一ツ森の集会は初登頂と並んで人生最大の喜びだった」と表現する。

集会はその後も続き、異議意見書は最終的に14000通に達した。結局、これが北村正哉知事の柔軟発言を引き出し、県議会をも巻き込んで世論は急速に林道建設中止へと傾いていく。

白神山地のブナ原生林は守られた。90年、林野庁は17000㌔を森林生態系保護地域に設定、92年、環境庁が自然環境保全地域に、93年、白神山地は屋久島とともに日本の世界遺産登録第一号になった。

根深が山に熱中し始めたのは弘高時代。岩木山には3年間で百回以上登った。高校二年の時、秋田県立大館鳳鳴高校の五人が冬の岩木山で遭難、四人が凍死した。たまたま登山中の根深らが事件を通報したものの、同じ高校生が、通い慣れた岩木山で遭難死するという衝撃が、逆に根深を山に駆り立てる。

山岳部の名門明治大学に進学。学生時代は岩登りや冬季縦走など合宿に明け暮れた。

念願のヒマラヤ遠征も果たし帰郷した根深は、イワナを釣りながら沢や山を登る“山釣り”の魅力に目覚める。沢登りは日本の伝統的な登山スタイルだが、釣りと沢登りを組み合わせた登山は当時珍しく、最も適したフィールドとして目に留まったのが、沢が複雑に絡み合う白神山地だった。

白神山地と本格的にかかわる中で、根深はマタギの存在を知る。高堰辰五郎（岩崎村大間越）大谷石之丞（鰻ヶ沢町一ツ森）鈴木忠勝（西目屋村砂子瀬）工藤成元（同）。中でも工藤とは山と一緒に歩き、「砂子瀬マタギ」最後のシカリ（統率者）鈴木からは白神の沢一つ一つに付

けられた名前のほか、マタギの儀式や山の伝説、イワナ捕り、杣（そま）道などの知識を吸収する。鈴木から得た知識を確かめるため山に入り、また新たな疑問をぶつける、という日々が続いた。

白神山地の中核部には、登山に使う道はない。沢を道代わりに進み、尾根をたどって、やぶをこぐ。根深は、沢が複雑に入り込んだブナの密林を地図やコンパスにほとんど頼ることなく、縦横無尽に歩き回る。こうした知識は、学生時代から培った登山技術を下敷きにマタギとの親交の中で身に付けたものだが、根深と山を歩いた登山者は、白神山地を知り尽くした才能に、だれもが驚く。

●入山規制を批判

白神山地で新たな難題が持ち上がっている。核心部の入山問題で、根深は一貫して「規制反対」の立場をとる。根深は「ブナ原生林では古くからマタギが猟を行い、地元の人もキノコや山菜採りで入山し、登山者も受け入れてきた。入山を規制したから原生林が残ったわけではなく、まして、だれもが簡単に入れる山ではない。人が自然と親しんでこそ世界遺産」として、世界遺産を理由に地元民や登山者を規制する在り方を批判する。

青秋林道が正式に中止に追い込まれた90年は、南アルプスや白山など「スーパー林道」事業が、自然保護団体の激しい反対を押し切って完了した年に当たる。その後、90年代後半になって、ようやく各地で「大規模林道事業」や「奥地等産業開発道路」（奥産道）など林道建設を中止する動きが相次ぐ。スーパー林道よりさらに大掛かりな大規模林道の見直しには「時のアセス」も適用された。

青秋林道の建設中止は、大規模な自然破壊をもたらす「峰越し」林道を拒否した先駆けとして、わが国の自然保護運動史上に燦然（さんぜん）と輝く。（工藤弘之）

文中敬称略

【社会全般 7】

白神山地を縦断する青秋林道に、まず秋田県の自然保護団体が1982（昭和57）年5月に反対の声を上げ、本県の保護団体は同年7月から行政当局に林道再考の働き掛けを始めた。本県の反対運動の母体になったのは青秋林道に反対する連絡協議会で、初代会長には県自然保護の会会長で弘大教授の奈良典明（ならのりあき）（1931～・弘前市）がなった。二代会長は三上希

次（みかみまれつぐ）（1945～・弘前市）、三代会長は村田孝嗣（むらたたくつぐ）（1949～・尾上町）と続くが、いずれの代のときも運動の中心に根深誠がいた。

87年になって鱸ヶ沢町赤石川の流域住民が「林道開発で川が汚染されるのでは」と立ち上がり、赤石川を守る会を発足させた。会長には、赤石川の漁業監視員を25年間務めてきた石岡喜作（いしおかきさく）（1923～・鱸ヶ沢町）が就任した。

保護団体と地元関係住民が手を組むという新しい運動体制がつくられ、林道建設に伴う水源かん養保安林の解除に対し、わが国林政史上空前の数の異議意見書を集めた。

もともと木材の流通に関心があった知事の北村正哉（きたむらまさや）（1916～・三沢市）は意見書の数を重視し87年、林道建設に疑義を投げかけた。

この発言を契機に流れが白神保護に傾き、当時与党の自民党県連政調会長・金入明義（かねいりあきよし）（1944～・八戸市）が実質的に保護側に軍配を上げ、青秋林道問題に終止符を打った。

根深 誠氏（ねぶか まこと）

1947年弘前市に生まれる。1973年以来、ヒマラヤの旅と登山を続ける一方、国内では白神山地のブナ原生林保護に挺身する。現在はフリーのルポライター。著書に、『みちのく溪流釣り』、『ブナ原生林白神山地をゆく』、『ブナ原生林白神遭遇』（立風書房）、『風の瞑想ヒマラヤ』（立風書房・中公分布）、『白神の四季』（白水社）、『山の人生』（NHKブックス）、『ヒマラヤを釣る』、『過かなるチベット』（山と溪谷社・中公文庫）、『北の山旅釣り歩き』（無明舎出版・中公文庫）、『北の山里に生きる』（実業之日本社）などがある。

氏は、石川ネパール協会発足一周年記念行事のメインゲストとして招かれ、12月1日、「ヒマラヤを旅して」を講演された。

「山の語り部に聞く」のルポに、相応の行き詰まりを感じていた編者には、行間が判るともいべき講演であり、また、そのお人柄に魅せられて、格違ひも省みず、三次会まで、しっかりお供をしてしまった。

この出会いのために自分の企画も、また行き詰まりもあったのだ！会報の出来など二の次で「運命」に酔えた私。無謀登山は出来ないけれど、無謀ルポなら…。



「登山家」を肩書きとできる根深氏の、山との出会いは小6に遡る。戦後の食料難をまだ引きづる時代に、彼は奥山へ入り込めばあけびが取れるかもしれないと、秀麗な岩木山を目指した。ひたすらあけびを求めた末に千mを越し、おののきつつも、這松をはじめ見慣れぬ植生、変わりゆく景観に感動を覚えたという。この岩木山には、高校の3年までに百回は登り、四季を通して山の基礎を体得することになった。

その途中には、冬山で4人の高校生遭難に遭遇。通報したものの、それは保身を図る校長の「冬山は従来本校では禁止していた」の弁明から、処分対象とされた。結果、彼は県警から表彰を受けながら、停学処分の措置を受ける。

彼はそれ以来勉強が苦手になったと笑うが、上辺の辻褄合わせには迎合しない生き方を選ばせていく、節目となる事件であったようだ。

大学は、植村直己＝明治大学山岳部の連想となる明治大。そして当の山岳部に明け暮れた青春だった。その植村氏は、根深氏が3年生の時、世界放浪から帰ってくる。大学合宿に遊びに来た彼は深夜まで話手を求め、彼らの翌日の行動にしばしば支障をもたらす事態になったという。

明治大のしごきは並ではなく、13人入部した同期のうち、晴れてOBになれたのは彼一人であった。みんなからは、「さすがその頃から根性があったんですね」と言われるが、単に「辞める」が言い出せず、そのうち「辞める時」を失ってしまった結果だと茶化す。もちろんそれも理由の一つではあったろうが、「辞めなかった」根深誠氏がいたのである。



中央：駐日ネパール王国大使館 特命全權大使
ケダール・B・マテマ氏
左：ソバナ・バジュラチャリヤ
金大文化人類学講座修士
ネパール語講師
右：吉田淑子 学研指導者仲間兼山仲間
松本市のネパール写真展で大勝獲得
現在内田良平氏のおっかけを自認。
こういう方達の身近にいとネパールは
「行けそうな国」の気になる。

その後の彼の記憶は何年度はどこそこと、きわめて鮮明である。それは充実していた日々の証であろう。卒業してすぐの1973年、明治大ヒマラヤ遠征隊の下見・交渉役として、ネパールに赴く。結果は、肝炎を患い、カトマンズで寝付くこととなり、病み上がりで1974年には帰国。翌年のチューレンヒマールは参加できなかったが、1976年ヒマルチュリ偵察、翌年には本番、1981年にはエベレスト西稜と、計7回のヒマラヤ登山が連なることになる。

それらで、彼は常に輸送係を担当することになる。年季をあてにされると同時に、彼自身ポーターと接するのが好きであった。彼らの時間観念、倫理感、交渉術など、体得したものは多く、ヒマラヤルポライターの素地が出来ていった時代でもある。

もちろん先の植村直己氏の存在は強烈であった。彼のマッキンリー遭難時には、夜召集の電話がかかり、個人装備だけで空港へ走ったら、すべての手続きがすんでいて驚いたという。そうやって突然冬期氷壁に挑むことになった彼は若手に工作させて、ジッヘルに回る立場であったが、寒さと難度に閉口し、その時、こんな所

をたった一人で挑んだ男「植村直己」に圧倒されてしまったという。

それまでの彼は、およそ世間に属したことのない先輩植村氏には、攪乱された思い出の方が多かったようである。おそらく向田邦子が「字のないはがき」の中で「ふんどし一つで家じゅうを歩き回り、大酒を飲み、癪癪をおこして母や子供達に手をあげる父の姿」と書いた、そんな面の方を見ることが多かったようだ。

そのような鬱屈した先輩観が、「こんな所を、たった一人で！」で、碎け散る。頂上に日本国旗が翻っており、登頂を果たした後の遭難と確認したのも、彼ら捜索隊であった。

植村直己の生きざまに強烈なインパクトを浴びた根深氏は、「人がやった後をやるのは意味がない」の価値観にまず染まり、先鋭登山をめざすようになる。その志向は、1981年初めてのエベレスト隊も、おばさんも登れた東南稜など…と、西稜選択の機となった。

その当時彼は、またも輸送係であったが、その任務で早めに現地入りすれば、高度順応にも有利となり、登頂隊に加われるかもの下心があったという。しかし運悪く選挙にぶつかり、ポーターが確保できず、1ヶ月後到着の本隊の方が見切り出発をしてしまう。やっと全ての荷物を送り出し、個人装備をヤクにつけて出発したものの、ヤク遣いの女の子とさらにトラブルがあった。そうやってようようベースキャンプにたどり着いたら、西壁にとりついているヘルメットが見え、第一キャンプも設営済みになっていたそう。その遠征は、8750mでの敗退となる。

今も「おばさんも登れた」などにこだわらなければ頂上を踏めていただろうに…の、思いは蘇るらしい。

ただ、当事者ではない私は思う。頂上を踏めばそれで完結してしまう。なぜ、そのルートを選んだのか？どんな背景があったのか？不完全燃焼である方が、多くの逡巡に、秘められた物語があることに気付けるのではなからうか。なぜ？どうして？が、ルポライターの必須資質であることを思うと、このエベレスト西稜隊の件も、やはり、彼の素地になっているように思えるのである。

ともあれ、彼の登山目的のヒマラヤ通いは、天安門事件の年1989年、東側の谷に入ったのが最後となる。その後は、登山隊解散後に楽しんでいた個人旅行の方が主体になり、ルポライターの地位を固めていく。

もちろん誰もが、体力的、時間的、経済的に無理となり、ヒマラヤからはいつか離れなければ

ばならない。彼の場合は、「自己実現」の場がヒマラヤ山岳での「先鋭的」「バリエーションルートによる登攀」から、スムーズに「ヒマラヤ地域でのルポ活動」に移行できたのだといえよう。

愛するヒマラヤを巡る紀行なら、日本人の中でも、自分にしか「行けず」「聞けず」「書けず」の世界である。ヒマラヤが好きで、現地人にも溶け込める自分が、見て、聞いて、埋もれかかっていること、文字のない社会で、消えかけている事実を伝承を、自分こそが掘り起こせる人間である…そんな自己実現を彼は手にし、山から遠のいたのだった。

もちろん、5000mを越える峠越え、ロープを張っての激流横断など、「山から遠のいた」の表現はやや不適であるけれど、頂点を求める旅から、線へ面へ、記録をたどり、人の記憶をたどる旅に、心踊らせていった。

ルポライターの地位を揺るぎないものとしたのは、「選かなるチベット〜河口慧海の足跡を追って」の著書であり、JTB紀行文学大賞を受賞する。この本は彼の先輩がおもしろいと、寸借していったもので、彼はノミネートされたことも知らず、最終選考の5冊に残ったところで報せを受けた。選考順位はその5番目であり、また、過去の受賞者の名前を聞けば壮々たる面々で、座興に紛れこんだと思えなかったそうである。結果は、5番の順位であったに関わらず、この大賞のねらいとする所に相応しいのどなたかの一声で決まっただけ。当時借金ダルマであった彼は、嬉しいより何より「いくらもらえるんですか？」と聞くのが先だったそうである。

「あれって、いつもは賞を権威づけるために有名作家が選ばれて、ほんのたまに新人をとることがあるらしいんだけど…幸運だったねえ…。それに、賞を取るための運動とか、誰かの弟子であるとか、当然あるんだよね。俺、何にもなかったから…」

「時代と寝た女」という表現がある。特に秀でた歌唱力・美貌とも言えないのに、次々ヒットを飛ばし、時代現象にもなってしまった山口百恵…。電車の乗降口が、なぜかその人の前で停まった…。そのようなことが人生には起こってしまう。実力、努力、人脈、…どう並べてみてもそれを上回る人材がおり必然の理由が見つからない。多くの人がそのために泣き、転身も余儀なくされるであろうに、晴天の霹靂で手にする人もいる。…と書いてしまうと、恐れ多いのであるけれど、彼の関わった「ヒマラヤ・チベット」「白神山地」は、まさに時代と寝ると



石川ネパール協会の綺麗どころ。

左から3人目がネパール大使夫人。

左端：協会会長夫人 左から4人目 筆者

1年前の事件が観光に影を落とすことのないよう、大使は積極的に活動している。今回も自ら参加を希望。ために協会事務局の仕事は倍増程度ではすまなかったが…これが交流。

もいえるジャンルであり、はからずも根深氏は「自己実現」の選択が、食っていける以上に時代の波に乗り、名声の階段を登らせていくことになった。

時代の寵児、根深氏はかくして、羨望・誹謗を浴びる立場となり、受けた取材を故意に曲げて報道されてしまうことも多くなった。

「変な電話もかかってくるんだよ。『あんたの書いたのは嘘だ』って。『だいたいあんたはチベット語が話せるのか?』とかくるんだよ。

『じゃあ、そこへ行ってみたことあるの?』と聞けば『行ったことない』なのよ」

「そりゃ今じゃ、そうであろうまでで、何も慧海が『ここです』と言ってくれるわけじゃないんだよ。わざと書いてないくらいなんだから。でも、俺が聞きまわって、そこへ行って、これだと言ってることを、何でそんな現地を見てもこない人が、『嘘だ』なんて決め付けられるんよ」

おそらくは、机上学者のあたりが難癖をつけてのことだったのであろう。その人なりの「自己実現」の領域が、軽い奴らに侵されて、マスコミまで急に「慧海は…」と訳知り顔にはしゃぎだてる…我慢ならず電話に手が伸びたのであろう。

名声は、そねみ、ねたみ、誹謗も巻き起こす。それらが、人間の劣情であると糾弾すべきか

といえば、我知らず、相手の自己実現、経済領域を危うくした結果であることも多い。

ちなみに、根深氏の精力的な取材、裏側へも果敢に潜り込んでいく取材は、ネパールの多くの腐敗をも目にするようになった。先の王宮の惨事も、「意外」の範疇に入ることではなかったらしい。

彼は言われたそうだと。「人の国の汚い所を描いて、あなたはそれで楽しいのか?」。食べていくため、仕方がないならともかく、その国の既成のイメージで食べていかねばならない人が大勢いる。ましてネパールは、観光立国をしていかねばならないのである。彼の愛する国を苦境に落とす訳にはいかない。だから彼も書いてはいないそうである。

また、次なるテーマ「雪男伝説」も、もう彼は突き止めてしまった。何のことはない、既に1937年には実態を報告されていたし、現地の人には「この冬も、たくさん出たよ」と、相応にあったのかとしたものである。しかし、「雪男伝説」も観光資源なのである。汚いゴンバに安置された、「雪男の頭の皮」。それをもっともらしく外国観光客に見せることで、潤う僧院、食べていける老婆達がいるのである。

もう書くだけにまでなった「雪男伝説」。どんな切り口なら、かの国のロマンであり続け、かつルポライター根深誠の夢を追った一作とできるのか?二兎を追う思案に暮れる氏である。

そのように、「ルポライター」が遮二無二に「事実でさえあれば」の突進では済まないことにも気づき、「ルポライターの正義」に迷いも交じってしまう氏のようなのである。ただ、氏の迷いは、相手を思い、伏せた方が…の迷いであって、売名が主意で、事実を曲げてまでも「迷い」ではない。

そんな氏を怒らせる「やらせ」が、名声を利用する形で、また、誰がみても張本人としかいえないような「白神山地」報道でも繰り広げられることになった。

氏を代表するもう一つのジャンル「白神山地」の運動については、ここではあまり触れない。ただ、ヒマラヤに比べれば 豊かすぎる自然に恵まれ、豊かすぎる社会に生き、言葉も十分に通じうるはずの日本社会。それなのに、かえって心貧しく事実の歪曲化がされ、視聴率さえ上がれば正義となり、40何分の中でまとめればよしの切り口がなされて、それが問答無用に視聴者に「事実」で刷り込まれる。報道の正義はどこにある?訂正はどこまで責任をもって

なされるのか?

ヒマラヤと、白神山地をめぐる活動…世界遺産である以外はあまり脈絡なさそうであり、彼の行動においては十分の必然性がある。圧倒的な自然の中で、生き抜くために生き、そんな厳しさを知るゆえに、外国人であっても心開き、言葉の壁を越えて語ろうとしてくれる人々…。無人地帯で出くわし、お互いを盗賊団か、警察かと警戒したあげく一夜を共に過ごし、別れいくまさに一期一会の異境の人々。

「これまでに4人殺しました。何回盗みをしました。これから人も殺しますから、どうぞこんな私でもお助け下さい」と祈るような、生きることあまりに正直な辺境の人々に、彼の心は渴望し、日本をあとにしてしまうのだ。

さて、私はいとも簡単に「明治大山岳部出身」「植村直己氏との関わり」を冒頭にあげている。

しかし、講演会で、彼は「山岳部」としか言わず、植村氏については触れなかった。二次会で、下調べ済みの主宰者による「明治大山岳部なら、植村さんとも接触があったのでは?」の質問で、少し。総勢4人になった三次会においてようやく、「植村さんはね…」と自ら語り出したのである。三次会まで付き合えば、やはりとっておきの話が聞けるもんだと、南中の満月にも笑みを送った私だった。

ところが、このルポをまとめるにあたり、講演中はメモ。あとは記憶のみであった私が、いくらなんでも照合してと、手にした著書2冊においても、そうだったのである。略歴の次には本文を確認してみた。「明治大」も「植村直己」もでてこない。「あれ?」が「れ、れ?」「どうして?」…。普通なら、略歴に「明治大山岳部」があっても、「後輩として植村直己氏捜索に関わる」とあってもなんらおかしくはない。むしろ出版界で食べていくために、そんな話題の種があった方が有利であった頃もあったはずだ。講演だって、超有名人の裏話に聴衆を沸かせられたはずだ。ちなみに、植村直己著書には、略歴にも本文中にも「明治大山岳部」となっていて、書かないのが常識な訳ではない。

「なぜ?」にわかルポライターは、閃いた。根深誠は「故意に」伏せているのだ!それは、彼にとって「重すぎる植村直己」が存在し続けていることに気づかされた瞬間であった。

前述の報道トラブルにおいても、白神山地がどんな存在であるか、どんな開発の歴史があり運動の歴史があったのか…そのような下調べもなしの男が、所用時間内に口ケを終え、40数

分にストーリーがつながることだけを目的に、浅いインタビューをやり、曲げて流布させてしまう。

おそらく彼は、「根深誠＝明治大山岳部＝植村直己」の安易な等式だけで「植村直己さんてどんな人でした？」の質問が寄せられることが堪え難いのである。一言で言えるくらいなら苦労しない。彼をさておき、植村直己が話題になる不快・無礼ばかりではない。彼にはおいそれと言葉にはできない、口にすれば、沈殿した涙がまたも舞い上がるような男。それが「植村直己」なのである。

少なくとも、「年間7合宿があり」や、その後の「ヒマラヤ遠征」の記述で、自分が明治大山岳部出身であることぐらいは予想でき、植村直己がやっていたことも知っており、その年代なら接触点があったはず…相手がそれぐらいの素地をもっていてくれないと「植村直己はね…」を語り始めることができない。わざわざ「明治大山岳部なら…」と攪乱の種を提供するまでもない。そうと考えなければ、あまりに不自然すぎる伏せ方なのである。

かつて根深氏は、まさに「植村直己遭難」直後の現場に立った。彼ら以外に、あの植村直己が、「どんな時期に」「どんな場所を」「一人で」登って行ったのかを検証した者はいない。それは、とにかく彼の禪姿の方を目にし、おそらくは下級生ゆえの嫉み、羨望にまみれ、次々の冒険を売名行為のうちと見ることもあったであろう根深氏に、あまりに壮絶な現場であった。

ルポライターとして、現場主義に生きる彼には、あの検証を語ってこそ、「ルポライター、

根深誠」が完結する。

しかし、彼はまだ書きえない。自身が、名声を手にし、かつ、ねたみ、嫉み、誹謗を受け、我欲に事実を曲げて平気な人々に翻弄されるにつれ、以前より、植村直己を理解してきたのだ。名声の陰で、どれほどの世間の烈風が彼の回りに吹いていたか、利用されたか。しかし、あの男はそれらをも、帆に受けて次の冒険に漕ぎ出ようとする男だった。

冒険の借金を返すために、次の冒険のスポンサーをつかむために。ほとんどが単独行であった彼が、書けば、語れば、それ以上の真実を誰も語れるわけではない。では、彼はそれで全てを語りつくしたといえるのだろうか。

無事帰国した後の彼は、それこそ商品の価値の下がらぬうちに、言われるままに各地の講演に飛び歩いていた。空旅で一日2会場をこなしてもいた。憔悴を漂わせながらも遠い視線の彼が、空港で見られたという。

ちなみに慧海は、命を賭した辺境の旅と言われるけれど、根深誠の調べた限りでは、あの多民族国家にあって日本人であることは黙認され、僧侶としての喜捨も受け、異境の旅を楽しんでいたらしい形跡があるという。

すなわち根深誠において、彼が年を経るほど植村直己という男のジグソーパズルは埋められつつあり、彼がピースを手にも思案している間は安易な詮索を逃れていたのだ。

「明治大学山岳部」と噂れて明記し、植村直己遭難現場の壮絶から語れる男…根深氏ならではの著作を待ちたい。



「ルポライターをルポ」おばさんと。

2001年OBスキー合宿

■時 2001年2月24日(土)～25日(日)

23日前夜祭

26日後の祭

■所 野沢温泉スキー場

■宿 ふるさと

■人 森川・青柳・加藤・小山・上村・井上姉妹・保田・片田親娘・奥名・松林・田村



保田 片田 奥名
上村 小山 加藤 田村 斎藤
森川 井上 青柳 片田

2001年OBスキー合宿

12/20森川です
野沢温泉の件、2/23(金)～2/25(日)
参加させていただきます。多分2/22(木)
夜名古屋を出発して、2/23朝野沢着の予定
です。

上村です。

私も参加したい。2/24(土)朝～2/25(日)になります。いつものとおり、夜行バスで行きます。

小山です。

2月の野沢に参加させていただきます。
24(土)～26(月)の予定です。

01/06舟田

兄嫁の3回忌が、2月24日になりました。
本来は早めになるものですが、学生の甥っ子、
姪っ子の都合をいれるとそうになってしまったの
です。ギャー、スキー合宿と重なる！

法事が済んでから…は、かなり難しく、そうや
ってソワソワは大切な家族を失った親族達には
、やはり失礼なことだと思ひ至りました。
一日ゆっくり故人を忍び、寂しさに耐えてきた
彼らの成長を温かく見守るべきでしょう。成長
を見届けられなかった故人の無念を思えば、
私の合宿に行けない無念などは、及びもつきま
せん。第一、3回忌後は、しばらく法事があり
ませんから、今回は(も)バスの結論に達しま
した。カービングスキーも、足も錆ちやいます
けど…。

スキー幹事は、森川さんにお譲りすることに
いたしましょう。彼のメールまめなら、負担にな
るはずなし。計算力が心配なら、それは青柳さ
んが、暗算でやったださることでしょう。

01/08

青柳です。

幹事長代理の代行は、ショウガナイな一と言う

気持ちで、引き受けましょう。

21世紀も20日過ぎましたが、皆さんお元気ですか？

今年は、暖冬の昨年の某国家機関の予想は大外れで、大変に寒い日々が続いています。特に金沢では、15年降りの大雪とのこと。積雪も70センチを超えているのでしょうか。でも、これだけ降れば、2月の中旬には、山の天気も安定するはず。最高の積雪で、バッチリのスキー環境間違いなし！！

で、皆さん、恒例の野沢スキー合宿は、エントリーなさいましたか？KUWVのHPによると、例によって11期・15期のエントリーのみの状況。でも、そろそろエントリーを表明して下さい。

11期は、井上夫妻がファミリー参加を表明しています。

昨年、8月の白山に参加した聖子嬢が、親を引っ張って連れていくようです。史三氏も、スキーでは娘には負けないと張り切っているみたい。あと、例によって、森川・小山・加藤・上村の面々に私。15期は、舟田事務局長は、法事と重なって不参加ですが、奥名会長は、律義にまた付き合ってくれるようです。

柴田さん、猪苗代で滑っていると思いますが、また野沢にご夫婦どうぞ。たしか、23日から志賀で全日本社会人選手権大会があったはず。その参加後、野沢に合流して下さい。去年のように。

保田さん、伊藤さん、やはり、お二人そろって、参加して下さい。11期達は、スキー合宿in若栗の2大先生のご教授を楽しみにしていますので。

また、村田さん、4期の高田昌嗣さんを、ぜひ誘ってください。昔むかし、野沢で一緒に滑りましたが、そのスキー姿はあまり覚えていないんです。昨年の白山で、野沢の約束も取り付けていると思いますが、参加を決めるよう、もう一押しお願いします。では、エントリー表明は、eメールで、青柳または奥名会長へ。

01/22舟田です
スキーは物置に入ったままですが、学研のおばさん山の会の恒例新年会を湯涌温泉で楽しんできました。金沢は15年ぶりの豪雪。でも、客足確保にノウハウを持つ山の湯は金沢市街以上に除雪が行き届いて、楽々の車道でした。暖冬慣れしたための後手対策が、混乱をひどくしたようですが、それでも震災よりはましですね。森川さんの「ツキ」は、朝には着いたんだから、やっぱり「ツキ」のうち。奥名会長もこの雪で戻ってこれないでしょうね。

さて、パスした幹事職ですが、青柳副幹事発表の他には0期田村御大と、15期松林氏の参加を聞いております。なお、まだふるさとには申し込んでいません。公表締切の2月15日までに参加者があれば、逐次お伝えします。

01/25
青柳君を始めとして皆様方からお誘いいただいているOBスキー合宿ですが、今年は残念ながら参加できません。24日にちょうど結婚式と重なってしまいました。もちろん私のではありませんが、昨年より要請されていたものであり、調整が不可能となりました。悪しからずご了承

ください。

野沢グレンデにおける平均年齢50才の滑降も格好を除けばなかなか見捨てたものでないことは、昨年で十分に承知しております。しかしトレーニングを積んだ人も、出たとこ勝負の人も身の程を知って楽しんで下さるよう切にお願いいたします。新世紀になったからといって急に体が柔らかくなったり、技術が向上する訳ではありませんから・・・・

お酒と温泉とスキーとそして仲間が大好きな皆様の顔と、まとまりもなく、とりとめもない会話を思い浮かべながら、すべてに無事であることを祈っております。

お土産話を期待しています。

01/27保田
連絡遅くなりましたが、下記日程で参加したく宜しくお願いします。

2月23日(金) - 25日(日)
残念ながら我が同期は忘年会と新年会で勤めたが、当方のみ出席の見込み。
当方スキー靴を新調し、先日単身赴任寮の近くの狭山人工スキー場で足慣らしをしました。しかし去年と同じく、風邪を引きやすく、今冬3回も体調を崩しています。体調に気を付けますが、昨年のようにドタキャンになった場合はあしからず。

01/27森川です
野沢では、またお世話になります。私も2/22(木)夜名古屋発で2/23(金) - 25(日)の予定です。八方でトレーニングをやったのでいいなと安心していましたが、保田さんが靴を新調して、人工スキー場で足慣らしをなさっているとの事。
おのおの方心してトレーニングに励みましょう。H氏は老いてますます元気ですぞ。私も明日から少しやろうと。

保田さんへ
いつも心に「かぜぐすり」を！酒をのみ過ぎない様に。靴だけの参加はいけませんよ。

01/28
久しぶりにメールします。
皆さんの元気なメールを楽しく拝見させて貰っていますが、今回の野沢合宿は残念ですが、私は仕事の都合で参加できません。足の方は、医者からは念のために簡易ギブスを装着すれば、ゴルフもスキーもいよいよと言われ、ゴルフは良くやっています。いま、米国シアトルからメールを送っています、商談のための訪問です。危惧していたのですが、やはり丁度、来月の半ばに最終プロポーズを行うことになりました。皆さんに宜しくお伝え下さい。以上米国シアトル市EXECUTIVE INNにて高田和守

01/29
やっと送信が復旧した加藤です。野沢の件今年は豪華に2/23金の夜~2/26月の昼までとしたいと思います。(卒業式が例年より遅れたのでこの余裕が生まれました)我が家も受験生をかかかえております。先日のセンター試験が悪く行くところがないといって泣いておりました。娘のことは娘。私の心は野沢に飛んでおります。野沢について、詳しい事をまた教えてください。



【23日夕食模様】

加藤 田村
斎藤 井上
保田 小山
森川

—01/31

幹事殿

11回生の片田です野沢合宿参加させてください。娘も同行したいと言っていますので2名お願い致します。クルマで朝出発して10時ごろから滑れるのではないかと考えています。よろしくお願ひいたします。

02/05青柳です。

本日、風邪で会社を休みました。従って、野沢の時期には、心身とも絶好調になるでしょう

02/11井上

悲しいお知らせです。

野沢に参加できなくなりました。何年ぶりのスキーをせっかく楽しみにし、フミゾウ氏と私（和子）は、カービングスキーを購入しな、なんとウェアまで新調したのに・・・フミゾウ氏は、ジャスコ野々市店閉店のための残務整理、和子は、検査入院の結果父の具合があまりよくないので、先日来毎週土日は富山に行っている状態です。聖子は一人では行けないので、思案中です。また、ムシコちゃんも結局行けないということで電話がありました。

ということで、残念ですがあきらめます。皆様どうぞ私たちの分までお楽しみ下さい。う、う、う・・・では又。 和子

02/12青柳です。

イヤー、ショックです。残念です。今回の野沢の大目玉である井上ファミリーが、参加できないなんて！！カービングスキーとウェアを新調して、しっかりトレーニングもしていたはずなのに。史三さん、残念です。最新カービング術をじっくりコーチしてあげたのに。和子さん、残念です。温泉道のコーチを楽しみにしていた同輩がいましたのに。また、加賀茶道のお手前を期待していましたのに。さて、聖子ちゃん。ご両親が、不参加で、心細いのは判りますが、思い切って1人ででも参加したらどうですか？思案の必要はなし。昨夏の白山で、すでにワングル入門済みです、遠慮はいりません。カービング道、温泉道その他たっぷりコーチさせていただきます。史三・和子さん。聖

子ちゃんの1人参加を認めて下さい。奥名会長か小山さんが、野沢まで同行してくれるでしょう。

02/13加藤

実に残念です。私は、野沢に向けひくべき風邪は先週ひいておくなど万全の備えで臨んでいるんですのに。せめて聖子ちゃんだけでも参加できませんか。

02/13森川

本当に悲しいお知らせです。でも、聖子ちゃんだけでも参加下さい。青柳コーチが白山での名誉挽回と張り切っているの。方法は2/24（土）、25（日）なら金沢からの松林便があるはず。また2/23（金）、24（土）なら高岡からの小山便があるはず。す。奥名会長は千葉から参加するか金沢からかは不明）2/23～2/25でもOKのはず。聖子ちゃんの予定に合わせて連絡をとって下さい。

02/16井上

井上家次女の聖子です。最近メールをすっかりさぼってしまつて・・・これでは、メル友の森川さんに怒られてしまうわ。さて、両親が野沢を断念したので、またしても名代で、姉妹2人で参加させていただきます。まだ、間に合うかな？姉も旦那さんの了解をちゃんととりました。ただ、交通手段がないので、みなさんのお言葉に甘えさせていただこうと、思います。まだ、詳しい日程を姉と話していないので決まり次第ご連絡致します。

02/16小山

今晚は、小山です。

親愛なる井上家の姉妹の御ために長野方面の下見をしてきました。昨15日（木）朝5時半に高岡を出て、凍結した北陸道を4時間かかって志賀高原に着きました。志賀は快晴でした。ワールドカップの大回転も見ました。ヘルマンマイヤーが優勝しました。志賀で新しいチャレンジを始めました。3月までに志賀に75本有るリフトに全部乗ることです。今日16日は終日吹雪だったので2日間で24本乗ただけでし



【24日夕食風景】

青柳	奥名
保田	松林
森川	片田
上村	片田
	加藤

た。そして、吹雪の高速を走り、8時半頃に帰ってきました。

23日(金)から野沢へ行きましょう。
22日の夜は、浅野川の近くの鈴見にある娘のアパートに泊まります。23日の朝5時頃にお迎えに行きます。帰りは、24日に私と帰っても良いですし、25か26日に他の人と帰る方法もあります。如何ですか。もし宜しければ、23日の日中は志賀で滑って夕方野沢へ行きましょう。

02/17森川

幹事長代行の森川です。
慣れない幹事長代行と、会長との連絡不十分でみなさんにご迷惑をかけることになりましたがご容赦願います。24日は和室を確保できませんでしたので、「ちょっと怪しげな部屋」で我慢願います。なお、毎日部屋を替わってもらわなければならないのでその点もお詫びします。後は天候の良いのを祈るだけ、私のSKYは今日か明日出発します。「中尾の湯」でお待ちしております。

KUWVの皆様

きょう、両親は2人で医王山にスキーにいつてきました。(私は用があり不参加)野沢によっぽどいきたかったんだろうと思って、「都合をなんとかつけられないの?」と、聞くと「今日(スキーに)行って、滑れない事がわかったから行かない。(行けない)」(母)と言っていました。なにはともあれ、あと一週間体調に気をつけ、姉は10年ぶり、妹は2年ぶりのスキーを楽しみにしています。でも、私も毎シーズン半日づつしか滑っていない・・・2人とも初心にかえって、ボーゲンからだわ。皆さんやさしく教えて下さい (*^_^*) せいこ

02/18森川

みなさん、風邪をひかないように!体調と行いにはくれぐれも気を付けて。野沢では温泉と雪だるまがみなさんをお待ちしています。

02/18辰野

私、ぎりぎりまで今回のOBスキー合宿に参加したいと、あれこれやりくりしたのですが、やっぱりちょっときついものがあり、やむなく参加を辞退させていただきたいと思います。まことに残念なのですが、舟田様、田村様はじめ皆様によりしくお伝えください。今朝ようやく結論を出し、ご連絡申し上げる次第です。私個人としては、今年は雪も多く長く滑れるので、まだ行く機会はあると思いますが、OB会のスキーはまた別物なので、とても残念です。それでは、お気を付けて楽しんでてください。

02/18舟田

節子です。(森川さん宛) 参加しない人間が仲介しても、連絡漏れや二重予約のトラブルがでてしまうと思い、タッチしなかったのですが、私の引継ぎ方が不十分でしたようで申し訳ありません。でも、毎日違う部屋を体験するのも、それを口実に他のグループと部屋間違いでのミスが生じて、まあ楽しいではありませんか! (森川さんが間違えて入った「昨日の」部屋には、ピチピチギャル達がいって、それがご縁で仲良くなれると、信じています。くれぐれも、無害を感じさせる加藤父さまと一緒に間違えて下さい。)

02/21加藤

幹事様

さて、野沢スキーの件2/23(金)1~2時間の授業終了後直ちに野沢に向かいます。と言っても、野沢到着は早くて夕方6時頃になります。遅くても晩飯はそちらで食べますのでよろしく。1年ぶりのスキーにワクワクしています。しかし、鬼の保田さんが恐いな。何せ、1年の合宿のリーダだったからネ。また、田村さんの今年のファッションに興味津々です。では、野沢にて

02/22柴田(8期)

ご連絡有り難うございます。去年は、突然お邪魔してご迷惑をおかけしました。今年は、参加

できないのがとても残念です。年の初めには、2月に野沢に行き、その後に妙高池ノ平の大会に行きたい思っていました。板も新調し張り切っていましたが、1月以降、急に公私ともに忙しく、これまで2回もスキーをキャンセル（お金を払ってから）することになってしまいました。それでも、先週の土日によく職場のバススキーツアーで安比高原に行くことができました。初めてのスキー場でしたが、天気も良く、雪質も良く楽しむことができました。東北のスキー場は、雪質が良いのです。新調の板（ロシニョール9X）は、最初だいぶ違和感が有りましたが、少し慣れると大変切れがよい事がよく分りました。しかし、カービングのテクニックは、外足荷重に慣れた従来の技術とは少し違うようで、未だ滑りかたが良くわかりません。マスターするには少々時間がかかるようです。今回、参加できず非常に残念ですが、シーズンは、3月、4月もあるので、計画があれば小生にも是非ご連絡下さい。

2001年OBスキー合宿 当日 その後

02/25小山です
思い出深い2日間、ありがとうございます。

井上さんへ

いろいろお心遣い、ありがとうございます。昨夜、お母さんやおばさんを写してあげれば良かったですね。後で思いつき、悔やんでいます。今日、メガネのレンズを注文しました。2日ごろに出来る予定なので、今のところ、2日の夜にプリントした写真をおみやげにお返しに行く予定です。聖子さん、それまでお貸しください。

野沢の仲間の皆さんへ

野沢ではお世話になりました。

昨日は、田村さんと直江津駅の改札でお別れし、富山の井上さんの実家に、暫しお邪魔しました。今日の高岡は、晴れたり雪が降ったりしていました。

02/26井上

楽しい楽しい2日間もあっという間に過ぎ去りももっとも鍛えようと心に誓ったわたしです。それにしても、年齢が倍のはずの皆さんはどうして、そんなに元気なんですか？姉と私は、その日の夜から筋肉痛に苦しみ階段の上り下りもやっとでした。その横では、ちっとも疲れがみられない小山さんの姿・・・今日になってから、さらに首と背中中の痛みが加わりました。これは、普段の鍛え方がたりないのか、それとも、変なところに力がいっていたのかどちらでしょう。

加藤さん

カメラマンご苦労様です。でも、なぜおじちゃんになったのですか？私たちの帰った後一体なにが起こったのでしょうか？

小山さん

2日（金）の夜楽しみに待っています。母も「それまでに風邪治さなくっちゃ」と張り切っています。

ところで、奥名さんに送っていただいた昼食のようすを見た井上家の会話。

母「ねえねえ、どっちが加藤さんでどっちが松林さんかわかる？」

父「ばかだなあ、決まっているだろ」

母「え～、そっくりだよ」

姉も、日曜の朝元気に大阪に帰っていきました。タフな人だ・・・

02/26片田

皆様

大変御世話になり有り難うございました。30年ぶりでしたが皆変わっておらずなつかしさより昔に帰った感じでした。娘もスキーを充分楽しめたようです。帰りは上信越道が非常に混むので峠を越えて塩沢へ出たのですがどの道も正月以上の混み様で8時間もかかってしまいました。クルマが好きでないと勤まらない作業です。峠越えではスキー並みに滑りを堪能できま



青柳 奥名
保田 松林
森川 片田
上村 片田

した。この時期は予算作成で苦しんでいるのですが2月末はちょうど終わる時期ですので来年も2月末でよろしく願いいたします。来年も予算を成立させ参加させて頂けるよう一年かけて頑張ります。

02/26井上

皆様お帰りなさい。
そして子供たちのお世話ありがとうございました。二人ともスキーだけでなく、皆さんと過ごした二日間の楽しさ、おじさん達の若さ、スキーの上手さに興奮して帰ってきました。加藤さんのビデオを楽しみにしていたのですが、残念です。次回のお楽しみということで・・・

来年は参加できることを願って。ではまた。
P S 私のスキーのレベルは、子供たちと同じくらいだと言ったらしいのですが、もちろんかいます・・・ 秘密練習しなくちゃ。
和子

02/26松林です

お疲れさまでした
そして、どうもありがとうございました
おかげさまで、3年ぶりの野沢温泉のスキーを堪能することができました。もっとも、今日はふくらはぎが痛くて、やっとの思いで職場へ行きましたが…帰りは上信越道が地吹雪で渋滞まったく前が見えない状態で、スカイラインより怖い思いをしました。これに懲りず、次回もぜひ参加させていただきたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします

02/27節子です

昨日、松林氏から、返却・お土産・残金を受け取りました。彼も元気な11期にはまいっていました。でも、上の方が元気なのは、嬉しいことです。こっちはいつまでも若輩気分です。いきがかり上、志賀高原をOK。それからスキーパンフを見たら、どの停留所かすらわからん。広すぎるではないか！場所を知る興味はあるけれど、下手プラス昨年以來ブランクの身には超つらいぞ！早々にお兄様達とは、はぐれた方がかえって「安全」な気がする…。地図を頭にいれて、非常食携帯して、備えとこつと。

02/27加藤です

2/26(月)視界良好
やまびこゲレンデでは
気温零下16度。

新雪。

しかも、ゲレンデー杯に圧雪のためコブ無し。
青柳氏と快調に飛ばす。

やまびこ第2ゲレンデ外のブナ林の新雪滑降を試みる。青柳氏のスキーが2000年森川氏状態になる。20分かかって転倒場所より上方10mの場所でスキー発掘。さらに、加藤氏のスキーが2000年森川氏状態になる。つぼ足で胸までの心地良い新雪の中30分かかって転倒場所より上方15mの場所でスキー発掘。疲れたよ。考古学の研究じゃあるまいし。

それにしても平日は本当に人がいない。

皆様

楽しかった日を持てて感謝しております。

天気は、冬ですから仕方ありません。

沢山参加すると、そのうちいい日にも出会えるはず。また、来年もお願いします。

せいこ様

ビデオの件ですが、

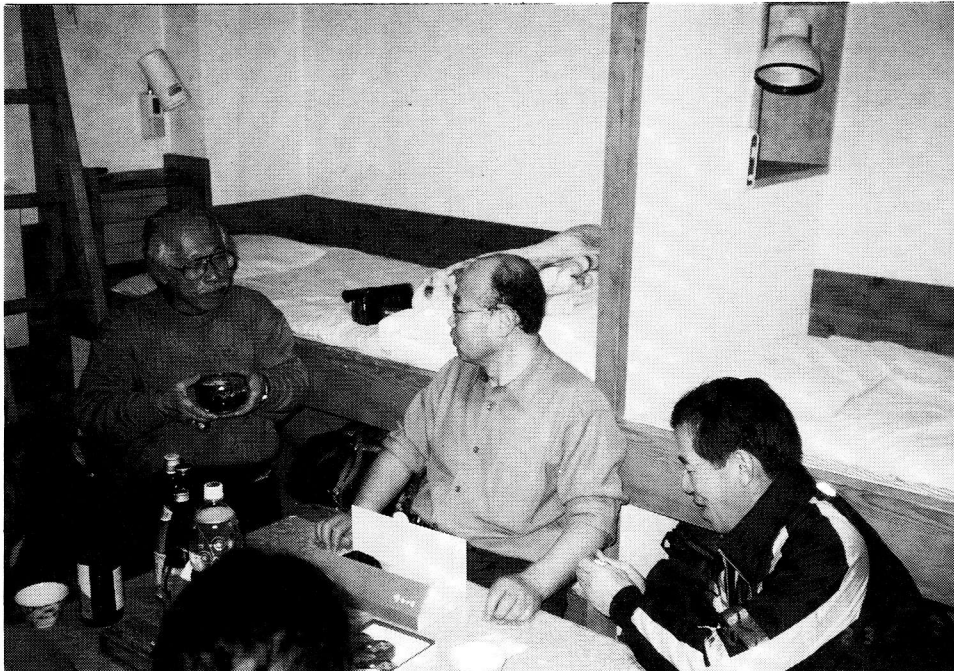
朝方の雨の湿気がビデオ入ったのかどうもその結露が録画ヘッドの周りについていたまま昼頃の寒さで凍っていたようです。テープは順調に回っていたのですが、テープとの接触が悪く全く信号が出ません。非常に残念です。宿舎に戻ってからは、再度ヘッドの結露が融けたらしく長い間結露の表示が出ていました。ビデオは異常ありません。また来年来てくださいという神のお告げのようです。でも、どうしてその情報がわかってのですか。

小山様

そういうわけで、薫ちゃん、聖子ちゃん、小山氏、田村氏のスキービデオが欠落しております。ごめんなさい。最悪なのは、田村さんにどう伝えるべきかということです。何せ、愛用のストックを折ってまでの真迫の演技でしたからこれを知ったときの落胆が目に見えるようです。

青山羊さん

昨日、宅急便の荷造りを頼んですみませんで



【喫茶もたしなむのが
恒例 スキーヤーズ
ルームもまたよし】

田村 加藤

小山

した。丁度バスが来て間にあいました。明石到着は夜の11時頃です。それから、生徒に出した問題の解答を作って（これを野沢でするつもりだったが暇がなかった）3時ごろ寝ました。今日は眠いよ。でも、足はちっとも痛く無し。年をとると、後日痛くなるようですが。あなたのスキーの映像は良く撮れています。あなたに撮ってもらったのはムムです。また、撮ってください。慣れますから。

—02/27森川です
みなさん、お疲れさまでした。メガネが2個壊れるというアクシデントはありましたが、無事みんな帰宅された事と思います。今回は若干、段取りが悪く高年齢の人には暗い部屋で申し分けありませんでした。その分、若い潑刺とした女性陣と2～3の人が明るく照らしてくれました。節ちゃん、和子様差し入れありがとうございました。酒とお茶と甘いもの、両刀使いの人は堪能してもらいました。また、一番乗りのお陰で、お日様のもと、青空と妙高と北アを見ながら午前中はのんびりと、そして午後は保田専属コーチのもとまた、足を磨いてしまいました。帰りは飯山線、中央線とも計4時間立ちっぱなし。（過去2回は全部座れたのだが）本当に疲れました。
2002年も野沢で会いましょう。

—02/28青柳です
あー、楽しかったですねー。野沢では、いつも思わぬ出来事があり、いつも2倍以上楽しめですね。今回は当方は後発隊で、先発隊の事件には立ち会えなかったのは残念でした。残留隊の最終日には、大事件になりそうところを加藤大先生に助けられ、大汗をかきましたが。恒例になりそうな、加藤撮影監督の「シーハイル」では、井上姉妹の女優賞と田村教祖殿の演技賞が露に消えたのは、残念。次回に期すとのことのお告げ。演技向上にさらなる努力を期待します。今回は撮影監督に最後まで付き合った、この私めが、「シーハイル2」の主演男優賞となったと思われます。赤いウエアを新調した価値があったと自賛しています。
さて、野沢スキー合宿は、終わりましたが、今年のスキーは、これで終わりじゃないですよ。

*加藤大先生殿

最後まで、大変御世話になりました。ビデオの撮影の方は、おいおい練習させていただきますのでまたご指導下さい。なお、お忘れのお菓子を、バックに入れておきました。お菓子は、シッカリ飲んで、かつ食事の量は減らし、減量により被写体としての魅力アップにも心がけて下さい。

—02/28上村

参加は4回連続ですが、スキーよりも皆さんとお会いし、話すことの方が楽しみになってきました。スキーの方は眼鏡を壊し、目も開けられない吹雪の中でボーゲンという無様になり果ててしまいました。

—03/04井上家姉こと齋藤薫

こんばんわ。井上家姉こと齋藤薫です。楽しいスキー合宿からはや一週間、大変遅くなりましたが、改めて幹事森川さんならびにKUWG諸先輩の方々に飛び入り参加で遊ばせていただいたことに御礼申し上げます。聖子から皆さんのメールを転送してもらい写真やメールをうちの旦那さんにも見せたのですが、悲しいかなスキーをしようという気は全く起きないようです。子供ができたならスキーの指導は史三、和子夫妻にまかせるしかないようです。

聖子がメールで送ったかもしれませんが、2/24金沢についてから、父の大学時代のアルバムで皆さんの若き姿を二人で父母の解説つきで拝見しました。上村さんなんてぜんぜん変わってませんね。すぐにわかりました。あと森川さんの七三分けもグーですね。皆さんタフな方たちばかりで帰り道すでに筋肉痛の私たちですがまたそのうち登山orスキーで参加させていただけたら幸いです。それではまた。志賀でもがんばってください。



【2世代トレーン】

青柳 保田
小山
松林
奥名
上村
井上
齋藤
加藤

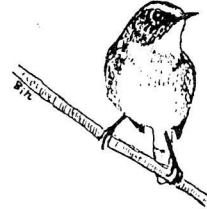
石楠花の宴

平成13年5月12日(土)～13日(日)

先発隊11日(金)～

- ◇参加者 10期木津治男 11期…加藤忠好、長岡正利
13期…辰野隆義、吉田穂積 15期…奥名正啓、舟田節子、松林知一
16期中野淳一(中野里穂 小4) 18期…岡部伸一、椿川利弘
26期畠山潤 ゲスト田村厚子
運搬バイト 41期竹内利行 43期…小倉亮、加藤菜就
44期日野鋼資 45期竹内雅幸

- ◇その足どり(昼…昼個人入山 タ…夕方個人入山 他は朝集合で入山
山…高三郎登頂 屋…小屋作業 運…運搬作業
()はその日宿泊なし ()なしはその日宿泊あり
例: 椿川氏は12日朝入山、登頂し、日帰りした)



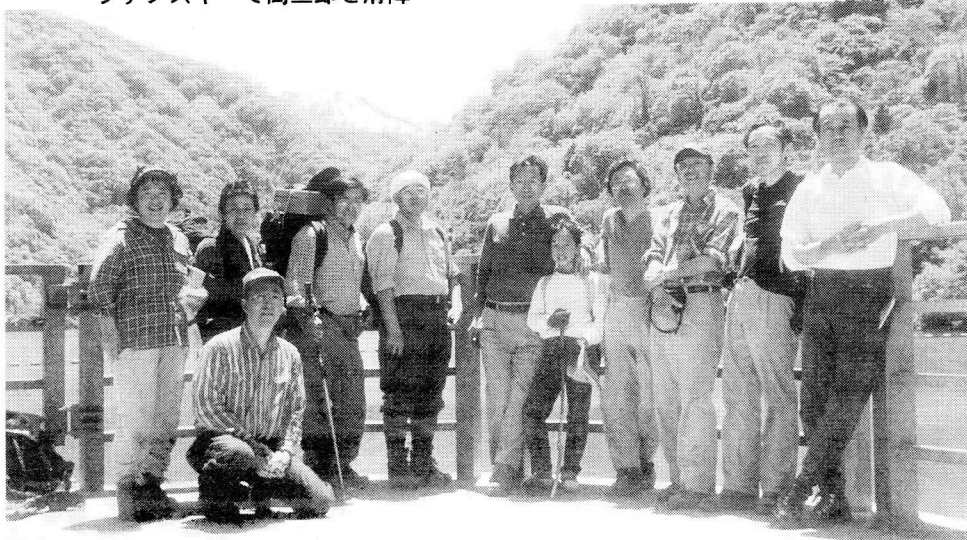
加藤 舟田 岡部 椿川 長岡 木津 田村 辰野 吉田 松林 中野 中野 奥名 畠山
11日 タ 運 運
12日 山 山 (山) 山 山 山 タ 屋 屋 屋 屋 屋 タ
13日 (屋) (屋) (屋) (屋) (屋) (屋) (屋) (屋) (屋) (屋) (山)

◇酒場メニュー

- 11日夜: 牛丼 味噌汁 漬物
12日朝: ラーメン 昼: パン カップ麺 ウィンナ バナナ ジュース 菓子
夜: ご飯 天麩羅(海老、ウド、コゴミ、薩摩芋) 豚汁
きんぴら、ホタルイカとワカメ酢味噌和え カタハ煮物 ワラビ酢の物
13日朝: ラーメン 干鰯 10時のおやつ: ホットケーキ ドリップコーヒー

◇やったこと

- ・囲炉裏用他補修資材を運搬
- ・屋根ペンキ塗り 梁他構造材補強 登り口整備
- ・倉谷の春を五感で愛で、堪能
- ・高三郎山頂にOBの足跡をつけ、歴史を確認かつ追加
- ・ワングル超大作ビデオ“倉谷春の歌”(仮題)ならびに、“残雪の高三郎を行く”(仮題)計6本を撮影
- ・フアンスキーで高三郎を滑降



高三郎山

舟田 田村 木津 加藤 中野 吉田 松林 長岡 辰野
奥名 中野 -60-

お金じゃ買えない ものがある

45期 竹内 雅幸

気持ちのよい青空、快適な気温、豊富な水、青々とした新緑、ボートで楽々。この時期のベルクハイム周辺はとていい感じでした。一年で一番身頃だというこの季節に、高三郎に登ってみたい気がしました。

部室にカメムシを連れてきてしまいました。大変なことにならないければよいのですが。

今回いただいた7500円（日当+車代）のうち7000円を、その日のうちに部費+保険料として部に徴収され、財布のあたたまる暇もありませんでした…。

しかし今回参加したことで、ベルクハイムと高三郎に対する想いが変わりました。次に行く時に、小屋がどんな風になっているか楽しみです。

写真を送っていただきありがとうございます。た。



【今も変わらぬダム管理事務所前】

岡部

日野 竹内（利）

小倉 竹内（雅）

【快適 ボート遊覧。

倉谷のイメージが変わる】

日野 小倉 竹内（雅）



日野 岡部 竹内 加藤 竹内
小倉

感想

44期 日野 鋼貴

山に登るのは歩荷トレ以来で、体力に不安を抱いていたのですが、ほとんどボートだったのでホッとしました。

ボートはとても面白くて乗れました。特に、新緑と青空のコントラスト、水の中に半分埋もれた木々の景色がなんとも言えず、違う場所にいるような印象でした。小屋作業で、苦勞して登る道のりがたった10分で終わってしまうのは衝撃的でした。

普段はOBの方とお会いすることがないので、これを通じてお会いできたことはいい機会だと思いました。ベルクハイム並びに、現ワングルもOBの方々の色々なサポートや努力があったりたっていると感じます。小屋作業の重要



加藤 長岡
奥田 村岡
吉田 山田
奥野 名田
辰野
木中 舟津
野野田

(撮影 松林)

【芽吹き頃の犀奥の山はいい。
木も、風も、鳥も、空も
春だ！春だ！の合唱になる。
左：高三郎Ⅱ峰 右：高三郎Ⅰ峰】

性を改めて認識しました。

写真ありがとうございます。遅くなってすいません。

運搬バイト

43期 加藤 菜就

ボート搬入は気持ち良いの一言に尽きます。そこに中国の大河を思わせるものがあるからです。行ったことがないので、もちろん僕のイメージの中ですけど。

気分を満喫するために三国志でも頭に浮かべながら

「あっ、白帝城がっ！」

と山の上方を指差してみました。

「劉備玄德の？」

同期の小倉が問うてきたので、頷いてみました。奴考えることがあったのでしょうか、一緒に上の方を見上げました。綺麗な所もあるもんだと思いました。

＜本文とは関係ありませんが、ビール券ありがとうございました。今度集まった時などに使わせていただきます。＞

昨日、部室に行くと、新入生もきちんと来ているみたいなので、何か用事がありましたら、僕も下の学年を紹介していくつもりです。これからもよろしくお願いします＞

(菜就君の運搬バイト原稿への返信)

舟田です。

ワングル二代も珍しいながら、そのお二人とそれぞれに付き合って高三郎に登ってしまった私も、なかなかのものです。(自画自賛)

ビデオが無事撮れていたらしきは、同期の青柳さんがわざわざ明石まで確かめに行かれたらしいです。そういった同期の付き合いは、人生の味わいとして得難いものです。老婆心ながら、



現役時代を中身濃く過ごしてほしいと思っています。

さて、お父様の高三郎登頂により、父子の力関係の方は、かなり父優勢に傾いたのでは？と懸念しておりますが、その駄目押しのようになんと、お父様の頂上勇姿の全紙パネルができる予定です。これは、「高三郎のビデオを！」の私の願いをかなえて下さった父さまへのお礼の気持ち。明石の自宅でご覧になって下さい。

青春の地・高三郎に再来できた喜び…プラス息子の担ぎあげた道標(ただし写っていない)が立っている山頂。加藤家のお宝になることまちがちなし。

(ただし、このお宝は、超大作「春の歌…倉谷・高三郎」を気合いを入れて編集せい！のど圧力になるんですね。ああコワ！)

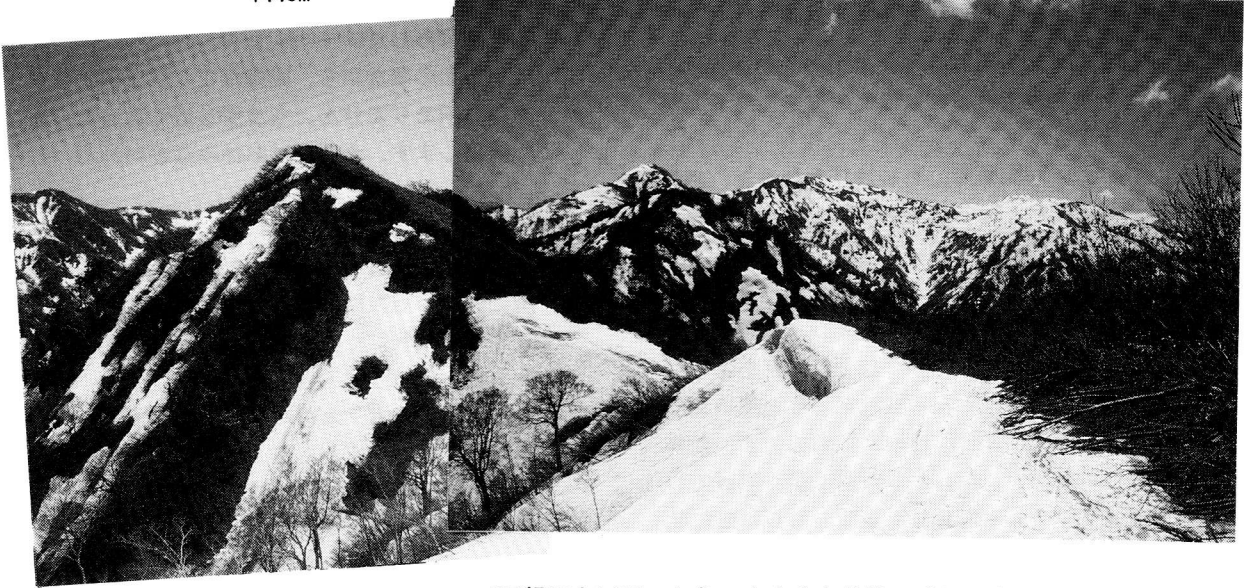
(OB用…なお、上記全紙パネルの原画は、リバーサルフィルムの方でして、父さまがメールで流布されているものとはやや違います。白山も青空もくっきりタイプにつき…そう、また明石へ見に行かなくては！)

高三郎Ⅲ峰

天の又

高三郎Ⅱ峰
(ホイクラ)
1445m

見越山 (オブクモリ) 奈良岳 大笠山 白山 奥三方山
1621m 1461m 1644m 1822m 2702m 1601m



【高三郎頂上1421m から、白山北方稜線の眺望。春霞の時期にこれだけクリアに見えるのは珍しい。ただ、現役達の中に、この時期のこの眺望を目にしている者はいない。高三郎山～白山はかつて長崎幸雄氏が初踏破。金大ワングル部には、春から秋、計6回の踏破記録がある。】



←大門山をバックに高三郎山頂上

18椿川 11加藤 11長岡
15舟田
10木津 ゲスト 田村

↓今度は標柱を入れて
(2枚とも木津さんのCDから)

1/2 ページ

加藤父さんが手にしているのはメロン。椿川さんからはドリップコーヒーも。グルメで君臨するのがOBです。一方現役の場合は…「高三郎は金沢市の山だからな。頂上には自販機があるのだぞ」「さすが金沢市は違う」と、100円玉を握り締めて整備作業に登る新人達。もちろん先輩は裏切らない。ジャスコの2缶いくらを、こっそり、ザックに担ぎあげ、頂上で(定価)販売するのである。この件で辞めた新人はおらず、固く伝統は受け継がれている…と、聞く。



あら、今回は辰野おやじの原稿が…。

でも毎度もお気の毒ですし、連絡メールでご登場していただきましょう。

13期 辰野 隆義

さて、今回の荷物の手配ですが、囲炉裏用の煉瓦が重いので約 200kgほどの重さになると思われます。

私は5/10出張で。もし泊りとなると、11日に間に合わなくなるので、それ以前に荷物をダムに置いておこうと思います。

段取りですが、5/3午前中に穂積君と買い出しを行い、その足でダムへ運び込む積もりであります。連休中のためそれぞれ予定もあるでしょうし（私はほとんど会社だろうと思いますが、せめて1、2日は休みたいものです。前半は休めませんでした。）なるべく早くやってしまおうということになりました。もし11日に私が行けなくてもよろしくお願いいたします。

また、出来れば椿川君からダムの方へ一言伝えてもらえるように段取りをとっていただける

とありがたいのですが。なにせ、一週間以上も荷物を置いておくと迷惑にならねませんので、よろしくお願いします。それに現役ボッカの手配もよろしく。

いつもの事ながら、面倒なことは全部お任せで申し訳ありません。もう少し近くなったらまた連絡します。それではお休みなさい。

本日朝から穂積君と買い出しに行き、昼過ぎにダムへ搬入しておきました。ダムの管理事務所においでた方に、了承を得て、入り口の横にブルーシートにくるんで置いてあります。シートも持って行って下さい。

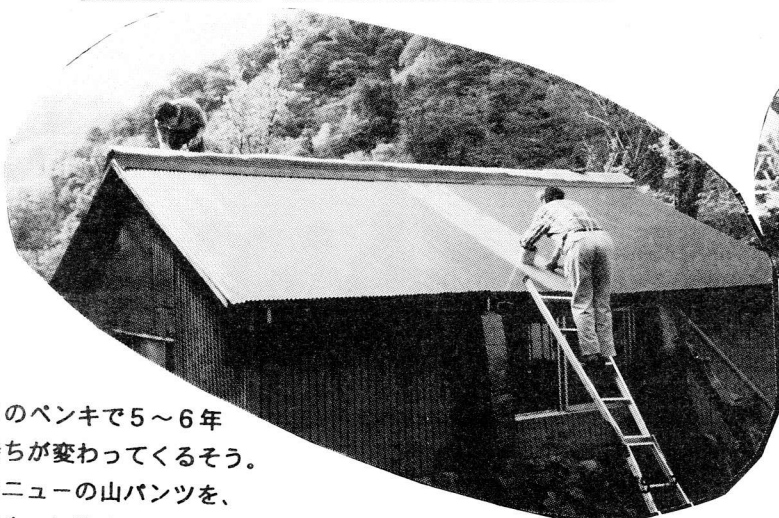
荷物は柱1本、木のバー材4本、ポリカ波板曲げ材12枚、ペンキ1缶、ペンキ用バケツ、刷毛その他小物のビニール袋1袋、煉瓦（段ボール箱割に14～21枚入れたもの）6個、以上です。総重量は 200kg以下だと思います。思ったより量は少ないと思います。運搬よろしく願います。



働いてます！

波トタンの重ねの部分から雨漏りをするのでは？

辰野 吉田



このペンキで5～6年持ちが変わってくるそう。おニューの山パンツを、ブルーに染めてしまった松林氏。



登り口も補修。杭を締めています。「山へ来てても働くんだねお父さん」

松林 中野

奥名

中野

水場の補修・草刈りも…

■シャクナゲの宴■

— 10期木津

舟田女史より、以下の歓迎メール入りましたので、転送いたします。12日(土)は早朝に出ないと、工学部発8:00では、遅いと言ってきました。

長岡氏が富山県内よりやはり12日に立出とのことなので彼に尋ねてみます。

長岡様

12日早朝にたたる由、舟田女史より連絡ありましたが、どこかで落ち合うことは可能でしょうか。

また、携帯お持ちでしたら、番号を教えていただけたら幸いです。

ところで、高岡を何時頃立出すればよろしいでしょうか。当方、マイカーなのですが。

舟田様

歓迎メールありがとうございます。

ところで、

> 公称コースタイムは、

> 犀川ダム-倉谷集落跡-旧道登山口-高三郎山

> 1:00 0:40 →3:30

> ←2:30

となっておりましたが、犀川ダムに何時頃まで到着すればよろしいでしょうかね。

また、

1 ダムに駐車できますか

2 ダムからBHまでの徒歩タイムは?

3 BHからの、同行者は? 等々

倉谷、BHと言われても、30年以上経過した記憶の彼方の出来事なもので多少心配です。山小屋酒場「シャクナゲの宴」に参加して

30年ぶりの高三郎は最高でした。よき友、よき仲間、よく整備された山小屋、そして高三郎。お天気にもめぐまれ、気持ちよく登れました。久々に、登った一、という気分になりました。十分な、中高年トレとなりました。節子さんの言われる通り、高三郎の神が今後の中高年登山の守り神となってくれんことを。

最高の気分で下りてきて、また山小屋酒場で最高のもてなしを受けました。奥名会長、舟田事務局長、有り難うございました。犀川ダムから、高三郎山頂まで先導していただきました11期椿川さん、ガイドしていただきました11期長岡さん、助かりました。また、心地よき環境にベルグハイムを支えていただいている、13期の辰野、吉田穂積の両氏には感謝&感謝です。また、小生の持参した、40人前のコーヒーをすっきりすっきり、おいしいと、味わっていただいた、メンバーの皆さん、ありがとうございます。「シャクナゲの宴」の監督、11期加藤君、国際映画祭ドキュメンタリー部門賞の受賞を期待しつつ、ご苦勞様でした。木津および、+の田村厚子さん、ともども、感謝&感動と、充実感につつまれつつ金沢を後に、高岡に無事帰ってきました。ご報告まで。山小屋酒場「シャクナゲの宴」に集いし人々の記念写真集全29枚、容量1.5MBのメール希望の方下記まで返メール下さい。但し、1メールの添付画像にて送りますのであしからず。

— 11期加藤

高三郎というのは、現役時代にトレーニングで登っていたためかキツイ事が先行し、あまり良い印象を持っていなかった。しかし、今回は違った。この季節、花はあるし(節ちゃんに沢山教えてもらった)残雪のおかげで思わず景色が良かったせいか悪印象どころか、非常に好印象に変わった。

新緑の中に適度に雪の残るタコツ、大門が素晴らしくまた、別山、白山、大笠などの白き故郷の峰の懐かしさ遠く春霞の中に北アルプスも見え忘れかけていた素晴らしい眺望に感動した。1000mの登りに5時間半を費やしたがもう登る事のできないと決めている山仲間のためにビデオ撮影のゆったりとした時間が流れていたのを感じていた。

編集は何時のことになるのかわからない。しかし、また山に登れるかもしれないという自分自身の存在の再発見と青春はまだそんなに遠くに去っていないのを実感した山行でもあった。

当初迷っていた参加だが、終わってみて感謝の念がこみ上げてきた。

奥名会長、今回の企画ありがとう

辰野さん、吉田さん、BHの保守(死守)管理ありがとう

中野さん、可愛いワンゲルII世候補のお嬢さんをありがとう

畠山さん、山スキーの紹介ありがとう

椿川さん、犀川湖遊覧船ありがとう

岡部さん、カメムシ掃除ありがとう

松林さん、ごはんの歌ありがとう

長岡さん、わざわざ高三郎まで付き合ってくれてありがとう

木津さん、下りに花をもたせてくれてありがとう

田村厚子様、また何処かで会いしましょう

そして舟田事務局長、

あなたの予言通り、高三郎山頂まで連れていかれていました

素敵な詐欺山行ありがとう

小山、森川、上村、芝田、青柳、井上をはじめとする同期生諸氏精神的なサポートありがとう
昨日、木津さんから例のCDが届きました。
あまりもの素早さに驚愕しています。

はたまた、昨日

青山羊さんが証拠調べにきました。「加藤、本当に高三郎まで登ったのか」と・・・ちょうど、節ちゃんからの写真があったのでこの動かぬ証拠で無事、査察をパスしました。それくらいに、登らなかった人はショックを受けたとき。当分、この爽快さは持続するでしょう。青山羊さんへのお手紙「さっきのお手紙食べちゃったのでピントはずれかも知れませんが お返事出します。」

年をとってくると友人が財産です。

私の場合、例えば、夫婦喧嘩したときにやはり緊急避難場所が必要です。行き先がないのでは、その時点で喧嘩に負けたのと同じです。この場合、気の弱い私には自殺という道が考えられます。負けない喧嘩をするためにも一つでも多

くの緊急避難場所を持っている事が必要でしょう。そして、そこで友人と喋り憂さ晴らしをして、意気揚々と家に帰る。将に、「夫婦喧嘩の美学」というべきでしょうか。相手も、何処かで憂さ晴らしをしているという安堵感があれば精神的にも、よろしかろうというものです。このような点で、学生時代の友人というのは最もありがたい存在です。そして、人生は知的活動よりも経済活動よりもこのようなユーモアのある美学に生きるべきでしょう。他人の少々迷惑など気にしてはいけません。所詮、我々が存在する事そのものが罪悪なのですから。友人と一つ釜の飯を食っていた吾が青春時代に感謝します。というわけで、何時でもいらしてください。緊急でしたので神戸牛(??)を出せなくてゴメンナサイ。次回は、シュラフ持参で庭にテントを張り青春を懐かしむというのはどうでしょうか。中間考査の問題作りで毎晩徹夜状態の加藤です。BHでの規則正しい起床時刻に就寝しているこの頃です。都会人の生活ってのは、やはりいびつのです。

節ちゃんが撮ってくれた高三郎山頂での写真が上出来なので再度送ります。いいでしょう。長岡氏もカメラを3台持って登ってような気がします。木津さんに見せびらかしただけのようで人物像は望み薄のようです・・・長岡正利テーマ写真集「原始から続く白山麓の生活」によって我々は文明開化しすぎたようです。

長岡様
縄が池へのお誘いを断って温泉に行きましたが曲水温泉はよかったよ。安い(300円ぐらい)泉質(苦土の味がする珍しいもの)展望(湯涌温泉行きのバスがズーッと見える)の三拍子そろいだった。山の後はやっぱり温泉だな。それから、ピンクの本、表紙が萩市の地図のがありました。

みなさーん
先日の写真よろしければCDromで送ってください。貴重な映像をビデオのタイトル画や花の場面に使えればと思いますのでビデオの件、あまりストレスをかけないで下さい。髪の毛がなくなってしまう。

ビデオの方スキーと違って一応映像はありますが動きが少ないのでちょっと単調かなーと思います。といっても節ちゃんに谷底に落ちてもらうわけにもいかなかったし・・・急なコースでは、撮影者もカメラを回す余裕が無いし、素人というのはこんなモンでしょう。

木津さんからの映像をどう使うかです。木津さん、メール添付の写真ファイル全部見えました。欲しかった高三郎の道標と私が同時に写っている高三郎登頂の証拠写真があってほっとしています。
節ちゃん、木津さん&松林さん
どうもありがとうございます。

下界に下りてから、息子に聞いたのですが新道との分岐の雪に埋まっていた道標も高三郎山頂の道標も途中まで息子がボッカしたとの事です。父親が見てきたので喜んでいました。

11期長岡
爽やかな朝から、夕方には珍しくも雷雨、そ

れが上がって再び爽やかな空の日暮れ。

今週末も、先週に続いての好天。山々では、遙かに望む残雪と新緑の日々・・・

先週末催行のベルクハイム「シャクナゲの宴」につきましては、関係者間でメールが飛び交い、いずれ、奥名さまのご尽力によりHP上に写真なども紹介なされましょうから、小生の方からは、それ以外の話題などを主に。

犀川ダムへの最後のカーブを廻ると、ダムの上に突然に見える高三郎山は、豪雪地帯ならでの、まだたっぷりの残雪。

晴れ上がった空、まだ寒い早朝の天気。倉谷までたどれば新緑はまさに盛り。集落跡の家屋敷地石組みにはコゴミ(クサソテツ：山菜)のあざやかな緑の群生、サワクルミの大木と谷奥に丸い頂部を覗かせる多古津山は昔に変わらず。

旧道尾根に登るにつれて、喘登の樹間から前高三郎のなだらかな尾根へ。その残雪の中にすっきりと立つブナの新緑。さらに登るにつれて、ちょうど満開の石楠花、コブシ(タムシバ)、マンサク。山頂直下では、まだ芽吹きわずかの梢と一面の雪。

昼近くになって登り着いた高三郎の山頂からの白山までの眺めは、3月頃の残雪期春山とはまた違った、おだやかさにあふれた春そのもの。遙かに望む北アルプスは、春の空に淡くかすみつつも、槍ヶ岳あたりまでの一望。

山頂や小屋でのコーヒー、皆様、昔にお変わりなくの会話と山菜などの食事に、ゴハンの歌。楽しい山歩きの日半でした。メールでお送り戴いた当日のデジタル写真からも、山頂での雪の感触、出発間際的小屋でのウグイスの声など、よみがえります。

あれから一週間。小屋の上手にちょうど咲いていたウワミズザクラに変わって、今頃はニセアカシアの白い花が咲き、下の河原にはタニウツギが一面に咲いていることでしょう。

水場導水管の再埋設のため掘り返しているうち、旧トイレの廃材を動かしたところ、ヤマカガシほか1匹の蛇(今後のためにご注意)。再び静かになったあの辺りでの、春の惰眠をむさぼっているのではと。小屋掛けでの山菜取りの方もおられましたが、人も動物も、蛇もカメムシも木々の緑も、それぞれに倉谷での長閑な春が過ぎつつあることでしょう。

旺盛な生命感にあふれるこの時期のブナ林の新緑は、本当に美しく、毎年のことながら見るたびに心躍り、嬉しくなります。

15期松林
こちらこそ青春の息吹をありがとうございます。

先輩諸氏の若さと元気さに接し、こちらも若返った思いです。3年ぶりのベルクハイム。もう2度と登ることはないと思っている高三郎ですが、加藤さんのメールを拝見して、せめてあと一度、挑戦してみようかな、という気にさせられました。
秋にまた、お会いしたいものです。

16期中野
久しぶりに訪ねた山小屋は懐かしい臭いで一杯

でした。仕事を忘れて久々にのんびりリフレッシュできました。山菜のてんぷら、美味しいコーヒーとお菓子。
今回は山小屋酒場というよりは山小屋喫茶の雰囲気でしたね。諸先輩達の面白いお話に本当に楽しいひと時を過ごせました。多少の強制労働もありましたが食うためには仕方ないですね。それから娘の里穂が大変お世話になりました。気楽に連れて行ったのですが、まだ無理なところがあったようです。途中のガレ場や沢では相当に恐かったです。家に着いてからもう一度山へ行くか？
と聞いたら「いやだ」と即答されました。でも時間が経てば行きたくなるかも。
みなさま、本当に御馳走様でした。お世話になりました。

26期 畠山

ベルクハイムの新緑の宴に参加させていただき有り難うございました。小屋作業もせず、招待頂いた形になり、申し訳ありませんでした。
しかしながら、先輩方のベルクハイムにかける情熱、苦勞話、昔の山行の話など結構刺激的でした。高三郎山頂を踏んだのは15年振り、白山-ベルクハイム以来です。在学中10回ぐらい登っていますが、旧道を登ったのはたぶん初めて。新道は荒れていてお奨めできないとのこと。昼寝岩上部の崩壊が大きくなってきているのでしょうか。

今回のテーマは高三郎頂上からスキー滑降を行うこと。基本的には、山スキーの本に紹介されているルートは、ある程度の標高があつて雪が多く、雪が消えても登山道が確保されているところばかりです。そういうことでは屋奥の山は、たぶんスキー滑降には好ましい場所ではありません。滑降コースに登山道がないし、沢の下は崖になっていたりするので、滑った分だけ登り返さなければならぬ。しかし、雪があればどんなところでも滑ることが出来ます。いくら豪雪の年とはいえ、ここ数日の陽気で融雪が進み、ゴールデンウィークの1週間後は時期的に遅すぎたと思いましたが、頂上の東側斜面はべったりと雪が付いていました。見越山や奈良岳、大笠山の東斜面も真っ白です。奈良岳の奥三方分岐から犀滝に至る谷も雪に覆われています。滑降可能なコースはいくらでもあるではないか。見越山から南東斜面、開津谷方面などは豪快に滑れるでしょう。高三郎東側は、傾斜は大体40度、多少の凸凹と灌木がありますが、雪面が緩んでおりジャンプターンの可能な快適斜面です。手元の硬度計の標高差で300m程を滑降しました。ここより下はルンゼとなり、まだ細く雪が続いていてその先は見えない。倉谷核心部魚止めの滝に落ちる沢です。滑りすぎると登り返しが大変なので、適当なところで打ち止めにしました。
思ったより滑れました。再び頂上で遠くに見える白山に挨拶した後、ブナの新緑とシャクナゲの花を楽しみながら帰路に着きました。

モモンガ



ありがとう

田村 厚子

ステキな出会いを作って下さり、感謝で一杯です。山も天気も感動的でしたし、学生時代に戻って会話が弾み、嬉しい顔を見ながら、自分も居たかのような錯覚を覚えてしまいました。OB会ってこんなに良いものなんですね。お世話していらっしゃる舟田さんに、改めて敬意を表します。

食事美味しかったですよ。山菜などの旬の一番美味しい物を集めて下さり、どれも中年には嬉しい味で、木津さんも褒めていました。

それにベルクハイムは最高ですね。特に水洗トイレは素晴らしい。皆さんの団結力を象徴しているようですね！囲炉裏が出来たらもっとステキ。また、木津夫妻と見に行けたら…な～んて思っています。本当にありがとうございました。

山情報などメール交換出来たら嬉しいです。

石楠花の宴：関連お便り

1期 仙田 厚太郎

拝啓 初夏の候 ますますご清栄のことと、お慶び申し上げます。平素はOB会のお世話大変有り難く感謝申し上げます。

さて大変遅くなりましたが、今回のイベントの件、都合がつかず出席できません。参加各位に宜しくお伝えしていただきたく、願います。ここもと、少しばかりの酒代同封しましたのでお納め下さい。盛会を祈念しています。

先ずは、ご連絡まで。

敬具

追伸 この連休に、中国「黄山」に行ってきました。好天に恵まれ山水画の景色満喫してきました。何とか登りきり、ギブアップもしませんでした。さすがに疲れ、平素の不摂生を思い知らされました。次回皆さんとお会いする時には、少し鍛えて迷惑のかからないようにして行きます。

3期 登内 郁夫

今回は思っていました、タイミングが合いませんでした。7、8と西尾兄、田村さんと一緒に山の坊から小谷温泉でした。昔のスキー合宿の跡を訪ね、久しぶりに雨飾を見てきました。スキー合宿では雪のモノトーンの素敵な山でした。少し霞んだ雨飾でした。石楠花の宴にご出席でしたら、皆さんに宜しくお伝え戴けましたら 幸甚に存じます。

4期 高田 昌嗣

石楠花の宴の件、連絡有難うございました。残念ながら欠席です。これに懲りずにまた連絡して下さい。メールアドレスを追記お願いします。

4期 森島 稔

前略 只今右手(肘から指まで)故障につきメールもペンも不自由になっています。12、13日の集いも欠席しますが、気持ちのある分、差し入れします。天候に恵まれることを、祈ります。

5期 金岩 孜

桜の季節からサツキ、藤、ボタンの頃に移ってきました。毎回ご案内頂き感謝しています。只、山歩きから遠ざかってかなりの年になり、今回も欠席になります。

いつも皆さんのお元気な様子を聞き知り、数年後自由を弄ぶようになった時に備え、足腰に筋を付けておきたいと思っています。その時はまたどうぞ宜しくお願いいたします。参加方々に宜しくお伝え下さい。

6期 合津 尚

毎度 お世話になっております。年末でしたか、「やまざと」最新号を受け取りました。皆さんの活躍に勇気づけられました。

長い冬が過ぎて山菜採りのシーズン到来で4/22は、近くの山に入りました。熊がでるので案ではないのですが、体が動いてしまいまして。そんなところに、5月12、13の「石楠花の宴」の案内をいただき、心惹かれること多多ですが、時間とお兼ねの都合がつきかねますので、不参加とします。

さて、そろそろ退職がどうのとか、年金のはなしんとかが同僚や家族から持ち出される世代となりました。ひたすら前にむかって走るのみでしたが、少し立ち止まる時期かなと思ったりもしております。

こんな時期に、最近ベストセラーになった、池宮彰一郎さんは興味ある一人です。1923年生まれ、1922年68才で第二の職として作家デビューし、文学賞受賞という経歴の方です。現在78才で「島津奔る」等々を執筆するエネルギーはどこから来るのか、大変な人です。この作者の短篇に「受城遺異聞記」という文庫本(文芸春秋社)があります。中身は1760年頃の大聖寺藩士による冬の白山越えの話です。地図を手元に一読をお勧めします。まずは近況報告まで。

9期 白井 勇

拝復 ご無沙汰いたしておりますが、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。いつもOB会の運営にご尽力いただき感謝申し上げます。

この度は「やまざと」をお送りいただきありがとうございます。金沢の近況そして「石楠花の宴」ご案内楽しく懐かしく拝見いたしました。立原道造の詩の一節に「夢はいつもかへっていった 山の麓のさびしい村に…」再訪したい所No.1の倉谷ですが、残念ながら、只今は「会社の雑事最優先」の身です。倉谷再訪はもう少し先になりそうです。まずは 取り急ぎご案内お礼まで。 敬具

11期 小山 清

KUWV・OB会のお世話ご苦労様です。先日の赤倉ではすれ違いとなり、残念です。石楠花の宴には参加できませんが、小額を差し入れとして同封します。2度目の転職をしましたので、名簿の変更をお願いします。

重ねてのお誘いは有り難いのですが、欠席させて下さい。4月26日の立山スキーで痛めた左ふくらはぎが少しはよくなったのですが、なかなか治らず、今も膝から下がむくんでいます。それが最大の理由です。とても、ダムから倉谷まで歩けません。では、参加されるみなさんに宜しく。

11期 森川 功

やっと、5/4～5と1泊2日で、かの小山さんでもふくらはぎを痛める程の御山谷へ行ってきました。今年は過去3年で最も雪が少なかったですが、小山情報の通り御山谷出合まで雪があり、御山谷を渡る橋は壊れてありませんでしたが、なんとかスノーブリッジを渡れましたが、あと2～3日するとダメでしょう。今年の御山谷は途中でナダレの跡があり、暑いぐらいの好天に恵まれたこともあり、ゲレンデとしてはイマイチでした。出合から黒部湖までの徒歩中、沢を横切った10m後の小さな雪崩があり、少し涼くなりました。今年はアルペンルートの中のボッカを連れて行った事もあり、荷物は最小でそれなりに快適なスキーでした。(今年もここに連れて来てくれた小山さんに感謝)

4日10時頃、ケーブルを降り美女平についたらあたり一面ガス、バスの中から称名の滝は見え(バスの中のビデオの観光案内もそう説明。見える時と見えない時と2バージョンあるのかな?と感心的一幕)感心していると、弥陀が

という事で12日は参加できません。ごめんね！
来年は連休後1週間を置いてくれば…。

せっかくのお誘いをいただきましたが、13日は姪の結婚式があり、参加できません。「山小屋酒場（修繕班？）」を支える地元組としては、お手伝いをせねばならないところですが、ご容赦下さい。皆様によろしく…。

懐かしのベルクハイムに行く機会を失いましたが、次の機会に是非参加させて下さい。本当に残念です。代わりに本日、六甲山を妻と歩いてきました。参加された皆様によろしくお伝え下さい。

BH行きの案内ありがとう。残念ながら参加できそうにありません。GWを久し振りに海外へ行こうと計画中。スペインをさまよってこようと思っています。BHでの盛会を祈念しています。

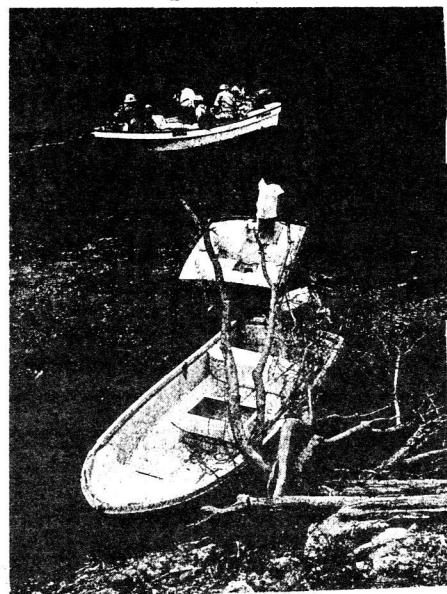
「石楠花の宴」のご案内をいただきありがとうございます。奥名からも毎月OB通信をいただき、1年に1度くらいはと思っているのですが、なかなか思い切れないでいます。皆さんの楽しそうな集まりの案内や報告を見て、とても羨ましく思います。そのうち、必ずやそのうち参上しますので、今しばらくお待ち下さい。ま

せっかくのお誘いですが、添乗帰国後間もなく、結局週末の勤務調整がつかせませんでしたので、今回は不参加とさせていただきます。またの機会をと思いますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

残念ながら5/12は究極の家族サービス？が控えています。5/11に第2子が誕生するので。5/12はベルクハイムではなく、産婦人科に宿泊します。残念ながらそういうことです。ので、よろしくお願いします。妻とこどもは、親元にかえっているので、今は独身です。ときどき、体力作りに励んでいます。

長期にわたって係留されている小型ボート

金沢市の犀川ダム



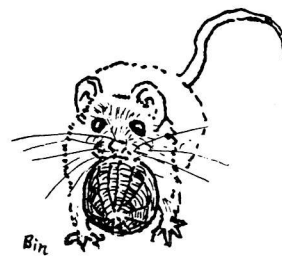
金沢の水がめ、ボート不法係留

秋の山小屋酒場

◇10月13日(土)～14日(土)

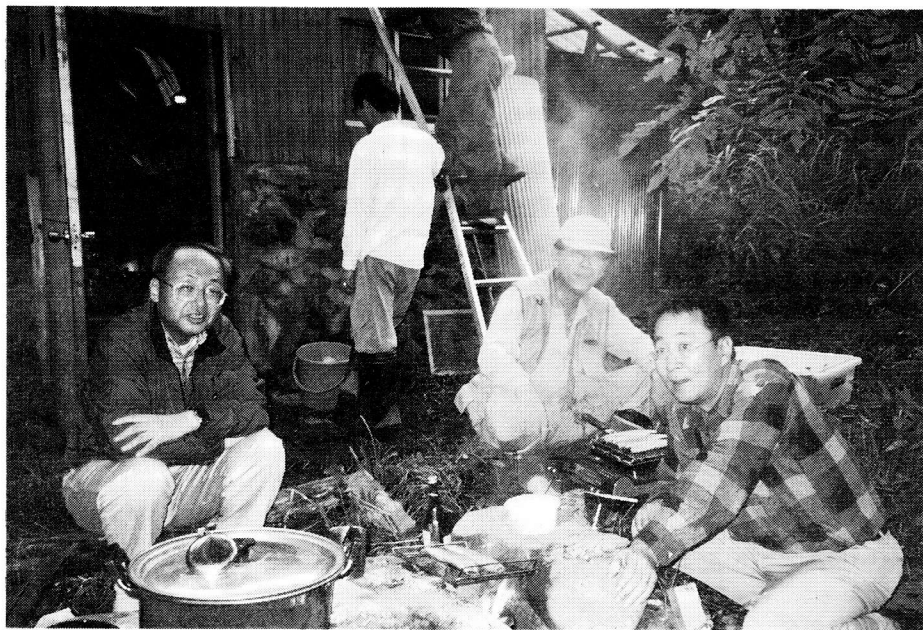
◇参加者

0期 田村昭夫 13期…大島良治、辰野隆義、吉田穂積、吉本良治
15期 奥名正啓、舟田節子、松林知一 16期 北川隆次



「刷り込み」って恐ろしい。13期が技術集団であることはさておき、15期が指先しか使えない集団であるのは、さておき、食事に就かねばの脅迫観念に捕らわれる。だってホラ、慣れないことすっから指先切っちゃった。

辰野 吉本
北川
松林 大島 奥名



15期 舟田 節子

メールは便利といっても、話を決める時には間に合わない。中学生指導後もたつて、くああ、ちょっと電話かけるには遅いな…でも、明日にのぼす訳にも…>と、辰野オヤジに掛けたのは9月11日夜10時半を過ぎていた。予定通り10月13日決行とし、早速HPに、KUWV-MLにも流す。床についた時、日付は変わっていた。(たぶん電話の時点でテレビには速報が流れていたはずである。)その夜多くの家庭がテレビに釘付けになっていたであろうことを私は知らない。

翌朝、特大活字が朝刊を埋めていた。米国同時多発テロの勃発。最新情報をとテレビをつければ、何度も何度も繰り返される衝突シーンに、崩壊シーン…。現実と思えない…。

でも、やるしかないサ。大出さんの時だって、やったんだもの。中止して事態がどう変わるというものではないのだから。

ただ、恒例のように参加した人達に、元気がなかったのは事実。まだ毎日のニュースがテロ事件のその後で始まる、そんな頃の山小屋酒場であった。

今年の現役の小屋作業は、好天に恵まれ順調だったようだ。ダムサイトが整備された事にもびっくりしていた。だから私も、念のため、あほらしと思いつつ「あの…犀川ダムへの道の件ですが」と、金沢土木事務所に確認の電話を入

れたのだ。

「今週初めから通行止めになっています」

「重機が入るから、通れませんよ」

エーッ!?もう…こんなのほんと、やってられない!でも、私だって、年季が入ったのだ!

犀川ダム管理事務所に電話を入れる。職員はゲートに鍵のかかる前に入り、仕事後に通過しているとの返事。それ、通れるではないか!一瞬安堵の息をついた私に、もう馴染みになった所長さんは言った。

「それ以上は、椿川さんにたのんまっし」

結局、集合時刻を繰り上げて、対処とした。

10月13日。松林さんの車で工学部へ。田村教祖が早朝着でお待ち。でもそんな無理で、もう風邪気味であられるよう。

北川さんを乗せて奥名さん登場。彼も今朝、千葉帰りで、北川さんの電話がなければ寝過ごしていたかもとのこと。辰野さんも昨夜遅くの、時刻変更の連絡の際に、まだ帰宅していなかった…。別にこの小屋酒場、誰が無理させているというものではないが、仕事は控えめにしておかねば…。

電話で確かめてよかったといいつつ、走ればどこが工事とも気付かずダムに着いてしまった。(ほんと、やっておられん!)今日の厄介は長物が1本。前方に軽ジープが1台。昨年標柱運びを手伝って下さった山下さんだった。

彼はざっと7人と見るや、「荷物だけ乗せて
ったげるわいネ」「最後までつっこんで、鍵か
けんと置いとくさかい、出していきまっし」

行きは、食料があつて重たいのに、急にラク
になってしまった。余計、厄介物になった長物
を蹴く押しつけ合いながら、それでも3人ずつ
がぶら下げ前進。

当然ながら、あっけなく慰霊碑前に着き、さ



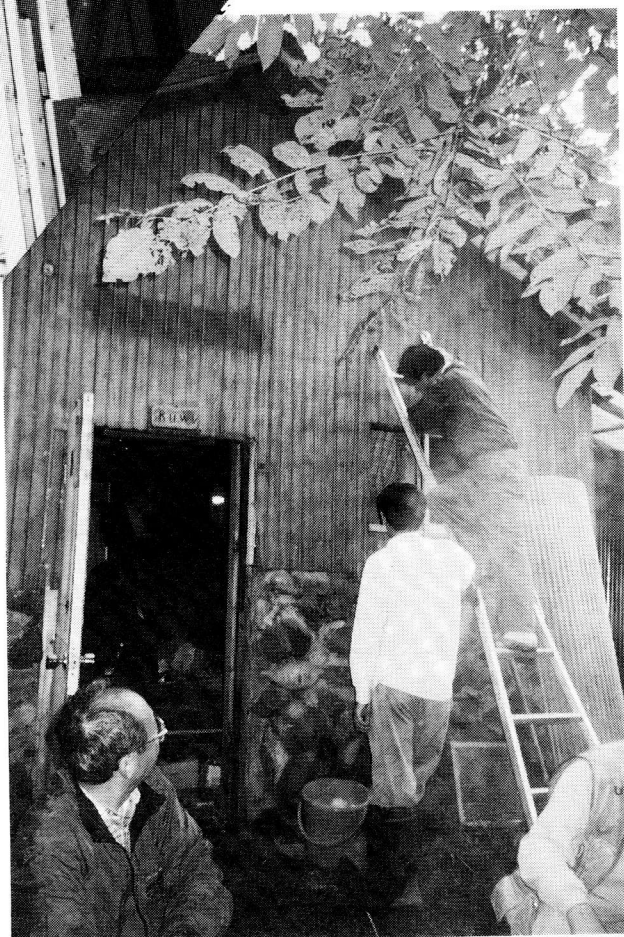
北川
辰野 吉田



グレードアップ
した流し

水上谷（二つ目の切れ込み）
いつもはこの沢で休ん
でいたのに。通過
するしか…。

内・外、呼応して
通し釘を。



て水上谷をどう処理してあるかと前進すれば、
4本の導管の上に道路が通してあった。はれー！
ワンゲルにご縁が出来て以来の、平坦車道歩き。
「車道」は出島を廻り込み、あと少しで吊橋が
見える所まで延びており、そこに、山下さんの
車は停めてあった。

そこからも手作業での拡張がなされており、
体軸を傾けることなく、倉谷に着いてしまった。
啞然。嬉しいような、もの足りないような…。

だから、早速実働が始まってしまった。春の
石楠花の宴では、お客様多数につき、内部を触
れなかった。今回、遠慮なしに、構造部をいじ

くるようである。こんな時、私は、小間物の整理に専念するのであるが…。あれと思った。すごく綺麗に整頓されていたからである。女子の入部の方が多かったと聞いていたから、そのせいかもしれない。

でも、そのさらに1カ月後の現役3回生との懇親会で、聞いた。小屋作業の1日目、テントのようなバラバラではなく、一つ屋根の下に全員入ってワイワイがすごく楽しくて盛り上がったそうである。(2日目は見込み違いで、暗くなってからの下山になり、大変だったらしい)水が出るし、水洗トイレはあるし、テーブルコンロが使えるし、小屋って面白いと思ったという。さらには彼らが1回生の時、床がボスボスと穴があき、どうなるかと思っていたら、翌年にはちゃんと白木の床に修復されていた。こんな事をしてくれるOBが自分達にはいると、親和感を増したらしい。

この点は、辰野さんを筆頭の13期の皆さんに感謝するしかない。「いざという時のOB」など、空手形である。活動やサポートが、現役の目に見えなければ、「OBがいる」ことにはならないのだ。

ただし、小屋酒場の時点では私はそれを聞いて

ていない。大工仕事の間には合わないしで、雑巾を手にして、あれ、以前とちゃうぞと、感じたことだった。

小屋の方はさわる程に傷みが露見してくるようで、あるいは、余計に全体バランスが狂ったかも。

大島さんは、さらに流しの快適さにチャレンジしておいたが、器用というのか、遊んでいるというのか…いずれワングル風システムキッチンがお目見えするかもしれない。

その日は早々の就寝になった。久々の小屋酒場だった大島さんが

「あれ?もう寝るの?」

と、がっかりしていたが、何せ体調不良に、テロ事件の気鬱に、明日は8時半前にはゲートを通過できるよう、早立ちしなければならぬの事情があった。したがって殺戮を免れたカメムシは多数が越冬できる模様。

翌朝焦って歩いたのに、重機の影も形もない。「土、日は工事せんと違うか?」

ほんと、もっとまともな情報が欲しかった。家人はまだみんな寝ていた。今日、ナカオのみんなは、海谷山塊の駒ヶ岳へ出掛けははずだ。シュラフをベランダに干す空が、青かった。

北 陸 中 国 1999年(平成11年)1月6日(水曜日)

クサギカメムシは体長一四一ハ、のカメムシ科に属する昆虫で、クサギなどの植物上でよく見かけるが、果実(カキ、モモ、リンゴなど)の害虫としても知られている。ところで、平成四年ごろだったろうか、河内村内尾にある「ふさ」と保護センター・清流」の支配人であった水上潔さんから「清流の中にヘクサンボが多く湧いています。何かよい退治方法がありませんか」と尋ねられ、「退治方法はありません」と返事をした記憶が残っている。平成九年の十一月にも「家の中にヘクサンボが多く湧いていました」、平成十年の十月には鶴来中学校の教頭さんから「教室内にクサギカメムシが入って困っています。防除の方法はありませんか」という質問を受けたが、この時も「方法はわかりません」という素っ気ない返事しかできなかった。

ヘクサンボ、すなわちクサギカメムシは、冬になると集団で越冬のために家屋内に侵入し悪臭を発するため、不快昆虫として知られている。この不快昆虫であるクサギカメムシは、「清流」でもそうであったが、日当たりの良い場所に多いようである。

悪臭発するクサギカメムシ

冬には集団で家屋内へ

ワングル教養講座

*カメムシは、見晴らしが良くて日当たりの良い場所に集合する。即ち、ベルクハイムは、倉谷における、カメムシの最適シェルターである。

*ウィスキー壺に捕獲ならびに、ローソクによる執拗な火あぶりの刑…期せずして、最適の防除法である。

ヘクサンボの異名をもつクサギカメムシ。悪臭を発する不快昆虫である

この返答に基づけば、捕獲が最高の防除法といえることになるであろう。

能である。

入して来るク

サギカメムシ

を捕獲してゆ

けば防除でき

る。薬剤によ

る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。

入る防除は不可

能である。



に電話で伺ったところ、次のような返答を寄せられたのである。
「クサギカメムシは太陽光を受けているような場所、言い方を換えれば、見晴らしが良く日当たりの良い場所に集合する。しかも、少しづつ侵入しはじめ次第に多くなるものである。ある時侵入個体数がピークに達した後、また減少してゆく。だから、毎日侵入して来るクサギカメムシを捕獲してゆけば防除できる。薬剤による防除は不可能である。」

館長さんの昆虫記

県ふれあい昆虫館 富樫 次

★★13

『山の坊』スキー場を訪ねて！（１～３期、同期会）

３期 西尾皓史

ワンダーフォーゲル発足の年の、第１回目のスキー合宿は、湯煙の赤倉温泉でしたが、第２回目からは、『山の坊』に場所を移し、民宿の吉田さん宅にお世話になることになった。

吉田さん宅を紹介してくれたのは、糸魚川出身の工学部２回生（当時）田沢明夫君で、「大変空いていて我々のスキー合宿には最適なスキー場である。」という理由で選んだのである。

それから数年の間は毎年、年末になると、吉田さん宅へ炊飯用具、食料、シュラフ、防寒具などを持ちこんでのスキー合宿が恒例となり、『山の坊』から帰らないとお正月を迎えられない年が続いた。

その中で、昭和３５年１２月のスキー合宿は今も強烈な印象として残っているのも、当時のクラブ誌『B e r g h e i m』３、にもう一度目を通して見た。

その年は１２月２７日に『山の坊』に入り、雪の多い４日間のスキー合宿を終えて１２月３０日お昼の１２時３０分平岩発の汽車で帰る予定であったが、大雪に見まわれて平岩駅を発車したのが何と２１時４０分、それから我々の乗った汽車は大雪と悪戦苦闘の末、糸魚川に到着したのが夜中の１２時頃であった。

しかしながら、ここで汽車はストップしてしまい頑として動く気配もない。お寺で仮眠する者、買うつもりもないみやげ物店で暖をとる者、暖房の効かない列車の中でシュラフにもぐりこむ者などそれぞれに時間をもてあましていたが、そんな時、電灯もつかない車両の中でおにぎりの炊き出しを頂いた時は、本当に美味しいと感じたことが今も思い出される。

３１日の大晦日の午後１１時頃ようやく汽車は糸魚川駅を発車して金沢へ向かったが、途中で何度も停車し、炊き出しのおにぎりやお味噌汁を差入れてもらいながら、金沢駅に到着したのが、何と、１月３日午前１時のことであった。



【旧 民宿 吉田さん宅前で】

	岩井	下出	田村	
安藤	北	鈴木	高島	仙田
佐々木	吉田さん	近所の人	吉田さん	登内 西尾
	(主人)		(奥さん)	

約40年前のこのような強烈な思い出を胸に、平成13年8月25日(土)午後1時過ぎに、12名のメンバーがJR平岩駅に集合した。全員が時間に遅れることなく集合し4台の車に分乗して、先ず『山の坊』の吉田さん宅へ直行した。

吉田さんは民宿を止めてからもう何年も経過しており、現在は平岩駅の近くに住居を移しておりますが、旧民宿の建物はそのまま残っていて、電気、電話、ガスも通じており、夏の間だけは、『山の坊』の旧民宿で生活をしておられるとのことであった。

吉田さんには事前に連絡をしてあったので、ご主人と奥様が暖かく迎え入れてくれ、西瓜、とうもろこしを沢山テーブルに並べ、「西瓜もとうもろこしも山の坊で獲れたもので、美味しいからどうぞ召し上がって下さい。」と勧めてくれた。新鮮でみずみずしく本当に美味しかった。

また、吉田さんの、先代のご主人は昨年、94歳で亡くなられたということでしたが、現ご主人から当時のお話をいろいろと伺い、旧民宿の部屋にも入れてもらい、お風呂、いろいろなどを覗いて見てみると40年前の記憶が懐かしくよみがえり、思わず胸が熱くなったのは、私一人だけだったでしょうか。

それからスキー場を案内して頂きましたが、『山の坊』スキー場も閉鎖されて久しく、スキー場跡は木が生い繁り、当時の面影を偲ぶには植林された杉の木があまりにも大きく育ちすぎており、わずかに木立の間から見える緩やかなスロープが、スキー場らしさを訴えているようであった。

『山の坊』を後にした12名は、一路、小谷村の来馬温泉「風吹荘」へ向かった。

学生時代によく利用した大系線の汽車から眺望したあの頃の景色が懐かしく、車窓を走る大きな山々の雄姿に、改めて感動した次第であった。

来馬温泉「風吹荘」は姫川を眼下に臨む小奇麗で静かな山宿であり、夕食は名物の手打ち蕎麦、馬刺し、山菜などの山の幸に舌鼓をうち、地酒、地ワインを充分に堪能する事ができました。

また、その日は我々のグループ以外の宿泊客はなく、夜遅くまで時間も年も忘れて、歌い、踊り、そして語り合い、一見おじいちゃん風の集団が、変身して現役の学生がするような議論を大声を出してやっている、といったアンバランスな雰囲気、宿のおかみさんも腹をかかえての大笑い、「でも、同級生のお友達って良いわね。本当にうらやましい!」と、しきりにつぶやいておりました。

翌日は、朝8時30分出発して、白馬村岩岳ゴンドラリフト“ノア”に乗って岩岳山に登り、山頂付近を散策したが、残念ながらガスがかかっていたため、白馬連邦や唐松岳の雄姿を眺望することが出来ませんでした。

お昼になったので山麓駅に降りて、みんなで手打ち蕎麦を食べ、来年の再会を誓い合っ

て解散したのであります。

来年は、ワンダーフォーゲルクラブの生みの親、田村昭夫兄、鈴木兵一兄の故郷である『会津若松』に集うことになり、期日は平成14年5月18日(土)19日(日)20日(月)に決定しました。

詳細スケジュールについては、鈴木(案)が既に提示されておりますので、登内兄は、「早く下見ツアーをやろうよ。」というさいが、雪が解けてからになりそうです。

さて、岩岳山麓で解散した後、鈴木、登内、岩井、西尾の年老いた4羽の渡り鳥は、「このまま帰るのは勿体無い。この大自然の中でもう一晚沈殿しよう。」ということになり、『大町山岳博物館』を訪れた後、八方尾根のゴンドラ“アダム”の近くの八方温泉の小奇麗な

民宿にお世話になることになった。

『大町山岳博物館』では、北アルプスの自然や登山に関する歴史などに触れることができたが、中でも、井上靖の小説“氷壁”に登場する切れたナイロンザイルがモデル展示されていたのを、食いいるように見つめる4人の目は真剣そのものであった。

八方温泉の民宿では、ゆっくりとお風呂を浴びて地酒、ビール、山菜をエンジョーイしながら、まじめに来年の『会津若松』OB同期会の打合せをしたが、そうしているうち睡魔に襲われて一人、二人と眠りについたのであります。

(参加メンバー)

第1期：仙田厚太郎

第3期：安藤道子(旧姓：柿谷)、岩井 修、北 正昭、佐々木美穂子(旧姓：宇野)

鈴木兵一、高島 誠、田村昭夫、登内郁夫、西尾皓史、

(特別参加) 田沢明夫、

第4期(特別参加) 下出明憲、



【岩岳頂上付近】

北 鈴木

登内 佐々木 安藤

下出 仙田 田村

西尾 田沢

3期 岩井 修

会社を辞めたので“田村教祖よりでかいことをやります”と宣言してもう1年が経ちました。しかし現実には厳しいですね。さまざまなボランティア活動をしています。山口の田舎ではでかい事はありません。

でも私は老いたりといえども“ワングル”です。歩くことが人生でした。今、3才の障害児(ケン君)のリハビリのお手伝いをしております。“この子が歩けるようになったら”が私の夢です。私が若い頃歩いたように、心臓の音を聞きながらこの子が歩けたら、この子は素晴らしい夢を描けるのではないのでしょうか。“鹿は生まれた時から足跡を紡ぎ始め、死んだ時にその足跡は途絶える。”40年前にそんな文章を、シートン動物記の中で読んだ様な記憶があります。

さて、話題を変えて“日本IT革命”について一言。日本日とのIT文網盲率が政府の“日本IT革命”によりどれだけ改善されるか？IT講習のボランティアを続けている私にとって、これも一つの問題です。来年からは政府の一般大衆IT教育予算が相当カットされるはず。一年や二年で一般の人がパソコンが使える

ようになるわけがありません。いわゆる竜頭蛇尾となる可能性が大きいと思います。ボランティアによるフォローが必要と考えてやっていく予定です。ここにも“地球を我が縄張り”とするワングルの出番があります。

しかし、何をやるにしても“人”が問題です。人間性、哲学、宗教…若きワングル達よ“夢”を持ち続けて下さい。老いたワングル達よ“夢”を忘れないで下さい。

宮島ハイク ITボランティア



寮歌祭

0期 田村 昭夫

11月23日に、日本寮歌祭祝賀会に参加させてもらった。四高の大先輩方達と声高らかに「南下軍」と「北の都」を歌ってきた。

寮歌は大きく分けて、4種類に分けられるそう。その代表として、一高は自治、二高は勤勉、三高は自由、四高は抒情である。他校の寮歌は全て、これら4校の寮歌を範として作られている由。

加藤登紀子さんが特別ゲストとして招かれていたが、彼女が最も好きな寮歌は、わが四高の「北の都」だと云って、ギター片手に歌ってくれた。参加者約300名の全員合唱となってしまった。

もぐりのニセ四高生の私を加えて、四高勢12名は特別な感慨をもって歌ったことは云うまでもない。「吾永遠に緑なる」をこの時ほど、誇らしく歌ったことがなかった。

日本寮歌祭は、今回40回を以て終了し、今後は「日本の高等教育を考える会」として、政府に教育改革に関する提言をする民間団体として生まれ変わるそうである。

寮歌を一部の旧特権階級のノスタルジーで終わらせてはいけない。教育問題こそが、旧制度から問い直されなければならない。

機軸

今の日本に志のある人間がいない。サラリーマン社会に生き残る為に、志を捨ててしまった。日本は今、世界中から、その無規範さ故に、軽蔑されている。

このような日本にしたのは、我々、60年代安保世代の責任である。その次は、70年代安保世代、つまり団塊の世代。

平成革命は、両安保世代が起こすべきだと思う。日本革命軍は今こそ国会に乱入して、政治屋達を縛り首にして、その勢いで霞が関を襲い、木っ端役人達を血祭にあげる。

総決起の日は、平成〇年〇月〇日とする。ワングル〇B、〇Gの諸君！暴徒達の先鋒となって、私について来て欲しい。

諸君！体を鍛え、知力を磨いて、その日に備えてくれたまえ。

人生古へより誰か死なからん
丹心を留守して汗青を照さん

文天祥

グアムで思う

長女の結婚式で11月末にグアム島へ行った。結婚相手は現知人でないのに、何故か式はグアムなのだ。おやの財布を思いついてのことなのだろう。家族だけのミニ結婚式だった。

ホテルの庭に建てられた小さな教会堂で式は執り行われた。式が始まる間に駆け込んできたのが、腕に刺青した米海軍兵隊員のニセ牧師。簡単な式が終わって、シャンペンで乾杯。その間15分。

グアムの海は美しい。環礁で波頭が砕け、岸近くの浅瀬は淡青色である。

浜辺に白い安楽椅子があったので寝転んでいたら、30ドルくれと云われた。折角のいい気分が壊された。

波打ち際にはモヤシのような日本人の若者達のはしゃいでいた。

その横を行ったり来たりしている、網を肩にしたマッチョがいた。1回の投網で、10cmほどの魚が10匹も獲れば良い方だ。網からこぼれ、白い砂浜に跳ねる小魚を、嬉々として拾う母と子を、満足気に眺めているマッチョ。

50年前の日本にもこのような光景があった。

次回グアムに来る時は、永住権をとってこよう。そして、横井庄一さんの後継者となろう。

暑中お見舞い申し上げます。

瀬沢での写真は良いですね。私の方はロンドンのテムズ河畔での写真をお送りします。ロンドンに新しく親戚が出来ました。次女の旦那の実家です。最近ではイギリスに暮まっています。

同封の「改革」原案は小泉首相に送付したものです。乞御批判。

白山に今年も行きたく存じます。 敬具

「国は経済によりて減びず、
敗戦によりてすら減びず、
指導者が自信を喪失し、
国民が帰趨に迷うことによりて減びる。」
中野正剛（政治家）

【日本改革十ヶ条】

原案 田村昭夫（64歳）

- 1、私有地を国家へ返還。
- 1、金融業とその関係者の財産没収。
- 1、老人医療廃止及び安楽死認可（65歳以上）
- 1、都会老人の農山村疎開。
- 1、自家用自動車の廃止。

1、年金制度の廃止。

1、大学の地域化、民営化

1、国内廃棄物の再生、再利用。 (原材料の鎖国)

1、京都へ首都返還。

1、大統領制度の導入。

[日本の教育改革五ヶ条]

原案 田村昭夫 (64歳)

1、授業料は成績不良学生と社会人学生から徴収して、教授と優秀学生がそれを使う。

(高等教育)

1、子供の教育は本来親の務めである。教師の役割はその補佐とする。

(初等・中等教育)

1、入学試験・卒業証書を廃止する。

1、初・中等教育修了後、高等教育予科(独：ギナジウム)と職業教育校(独：リアルシユーレ)に分離する。

1、文部科学省を廃止し、教育は民間又は地方自治体にまかせる。

北辰(四高同窓会報) No. 41より

◆憧れの四高生
田村昭夫(金大OB)

私の母方の叔父は昭和10年春、四高に入学しました。しかし、5月に大門山登山した折の怪我が元で急逝しました。現在85歳の母のすぐ下の弟で岡田正俊と言います。長男でもあり秀才の誉れ高い叔父だった由。私は叔父が亡くなった次の年、昭和11年に母の実家(金沢市木町一番丁百番地)で誕生しました。昭和30年に金沢大学に入学した私は母の実家に下宿して、祖父祖母に正俊叔父の生まれ代わりとして可愛がられた学生時代でした。

金沢は学生を大切にするとと両親から聞いていた私は「学生なら何をやっても許される」と勘違いして、今思うと全く恥ずかしいことばかりをやっていました。愚かなことを大真面目にやり、大学在学10年間という当時での新記録を立てていました。教養部で7年半、専門課程(工学部工業化学科)2年半です。従って教養だけはたつぷり身につけた？つもりです。

その間、金沢の人達が愛した四高生を私は後輩として演じ続けてきました。「善の研究」を読み、井上靖の足跡をたどる日々でした。しかし、それは幻でしかありませんでした。私は時の流れに逆う「ドン・キホーテ」でした。サンチョ・パンサ役を演じてくれた後輩と共に幾度か現実の悲哀を味わいました。

それから40有余年、平成12年11月23日、学生会館で開催された日本寮歌祭祝賀会に友人に誘われて参加しました。それからの私は寮歌の虜になってしまいました。そして私が抱きつづけていた四高生の姿は決して幻ではなかったことを知ることが出来ました。春の西丹沢ファイアー寮歌祭では、東京四高会の皆様方にやさしく迎え入れられて、感動に涙しながら共に歌った寮歌の数々でした。私は命ある限り、寮歌に濃縮された青春の理想を唱い続けるつもりです。正俊叔父が天国から見つめてくれていることを信じて。

(会津若松市在住)



檄

日本寮歌祭四十年 往年多感至醇の三春秋を追懐し 同儕相擁して
玉杯を舉げ 青春に奠して放歌高吟 鑿々たる鞀鼓に和して 拔山蓋
世の正氣を恢弘し來れり

漸くにして 同儕悉く老境に入り 茲に其の幕を閉ぢんとす 是に
於て 原点に還り 有終の美を濟さんとするは何ぞや 蓋し 憂國の
至情 凝つて一丸となり 祖國再生の礎とならんとするに非ずや

吾人は 其の青春を戦火の中に喪へり 一旦の敗戦 塗炭の苦しみ
を脱して 半世紀の間に 東亞の一角に復興を遂げたりと雖も 吾儕
百年の後を思へば 正に疎然たり 教學の道頽廢して 道義を遺れ 一
億の民 苟且摸索して 其の趨くところを知らず 今ぞ蹶然起つて 大
義に立ち 眞の獨立を回復するに非ずんば 國際場裡に孤立して邦家
百年の生命を喪ひ 亞細亞のドンキホーテと終るに至らん 斯くの如
くんば 何を以て百萬の英靈に應へんや
彼を思ひ 此を按ずれば 茫然己を失ふに近し 大起一番 掉尾の
勇を振って 歴史の大道に 雄々しき一步を進めん哉

平成十二年十月

日本寮歌祭

目次

檄	御挨拶	顧問名簿	出場校寮歌	蛍の光ほか	日本寮歌祭略史	広告	役員名簿	協賛者名簿	実行委員名簿	運営委員名簿	日本寮歌振興会規約	平成十二年度各地寮歌祭	参加校座席配置図
	委員長 神津康雄												
	1	2	3	32	33	42	82	82	83	84	86	87	



寮歌祭行脚に励む
田村教祖
加藤登紀子と

2001年15期会 顛末記

15期 鈴木 良紀

21世紀最初の15期会は11月24～25日、主幹事鈴木のフィールド北摂で、昔ながらのメンバーの協力・天候に恵まれ、充実した時が過ごされました。来年は金沢、北海道の2ヶ所で開催される予定になっています。

行事を滞りなく終える事ができ、ほっとした鈴木が、本業（産婦人科診療所）のスタッフ連の正月勤務のやり繰りに頭を悩ましているおり、同期の元マドンナ、現カリスマ？の舟田節子嬢からレポート提出の内示が下されました。机の上に放置していましたが、月末・月始めの仕事が一段落した今、嫌いな作文作りのためワープロに向かっている次第です。

最近新聞の統計を見て不思議な思いにとらわれています。50代の男の1割は未婚（15期は全員伴侶に恵まれている。）、5組に1組は離婚が現実であるそう。

互いの伴侶も飲み仲間にし、それであたりまえに思ってきた私には意外な数字なのです。

（もっとも、今回参加の女性軍は、彼女らの寛容と忍耐を強調していたそう。おかげで離婚のうわさを聞かない。男性軍の相手を選ぶ眼の高さのゆえか？）

昨年の白山行で、初めて私が次回の主幹事に指名されました。大学時代、人の立てたパーワン企画に乗っかるばかりだった私を指名する事は、同期の諸君にも冒険だったと思います。

私自身不安でした。高村さんの

「大山崎山荘に行った事ないけどいいらしいよ」



松林 鈴木 高村 鈴木 松林 松縄 坂尻 宇野 間所 宇野

祖父江 間所 坂尻 金井 佐野 舟田

の一言でポイントは山崎に決めました。それまでに2回行っているの、土地勘はあります。ゆとりを持って計画するため、1年以上先、秋の紅葉の時期にねらいを定めました。

次の難物は宿泊先・宴会の設定です。京・大阪の間ゆえ、交通便利なホテルは多々ありますが、宿舎で飲み明かすスペースを確保しづらく、街に出ると高くつきます。高槻に名物料理旅館がありますが、郊外の上、ワングルの予算ではおさまりません。民宿でもないかとガイドブックを見て初めて知ったことですが、大阪府下に民宿はありませんでした。

結局以前から眼をつけていた、茨木市営竜王山荘に、夫婦そろって下見に行きました。地元グルメガイドには一押しで載っていますが、亀岡市との市境近い山奥まで、食べに行き酒を飲むと日帰りでできず、利用した事ありません。清潔で風呂が思ったより広く、一応及第としました。

しかし、車がないと宿に入れません。金井・宇野君に車を提供してもらう事でプランがなりました。JR東海道線山崎駅近くの観光に車を動員するという奇妙な計画です。（のち山崎駅周辺に荷物を預ける所が無く、荷物置用に車を持ちこんだ方が便利と判りました。）

茨木ー山崎間には渋滞の名所がありますので、抜け道を多々研究しましたが、結局日曜朝9時頃渋滞はさほどではなく、正道を走る事になりました。

当日、参加者は佐野・松縄・金井・祖父江・舟田・高村・坂尻夫婦・間所夫婦・松林夫婦・宇野夫婦・鈴木夫婦の16名です。他にも参加予定者がいましたが仕事の都合などで残念ながら来れませんでした。

夕食後館内のカラオケルームを占拠。宇野・佐野君等の選曲が昔の歌ばかりで、不思議なノスタルジアの世界にひたりました。部屋に帰りもうしばらく歓談した後、久しぶりに佐野マスターの紅茶をいただき就寝。

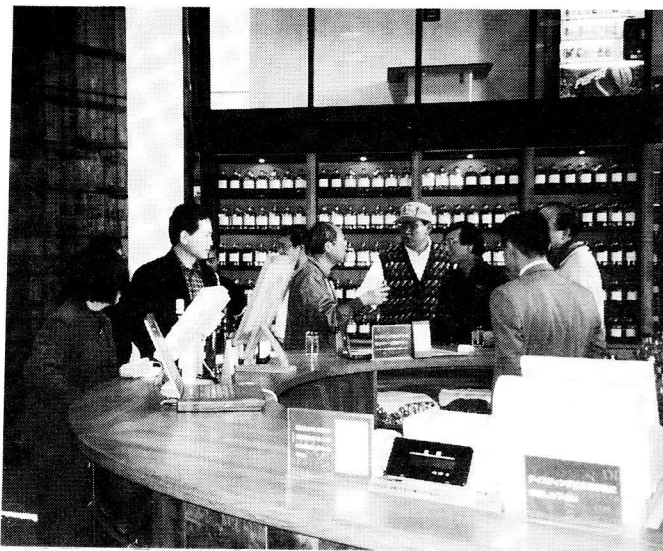
翌朝、朝食後も、15期専属マスターの香り高いコーヒーを頂戴しました。

会い集い、一緒に雑魚寝するだけで満足なのに、ワングル同期会の場合、観光プランにも幹事の評価がかかります。

観光ノルマを実行すべく、朝8時半に私の車を先頭に5台を連れ、宿舎を出立しました。

下見済みのコースを快走。国道を離れ後続の車を待つと、後に付いてきた松林車から一言「速すぎて後続がついてこれないがや」。

あわてて、昨日もそれなりに役にたった携帯電話連絡網を駆使。ばらばらの道を走った後続



たかが無味無色アルコールでも30年たつと、コクと味わいがでてる。いわんや人生おいてをや!

車の方が、先に山崎の駐車場についた事が判明、合流できました。

サントリー山崎蒸留所見学・無料試飲へ。下見、及びパンフレットで1時間20分のコースが、先方の都合で50分に圧縮され終了。「こんな時間に昼食会場に連込んで、食べられへんで」と、販売見本の古樽製椅子に座り込んでしまった私。

金井君が救ってくれました。あらかじめ下見をしていた彼は、テストングコーナーに眼をつけており、“大学入学年度1970年物の原酒を仲間と味わう”という彼の企画を実行。気がつけばテストングコーナーを、笑いさざめき、眼をかがやかせ頬を赤らめた同行者一行で、占拠していました。



宇野 金井 松林 坂尻 松林 高村 舟田 坂尻

鈴木 祖父江 鈴木 佐野 宇野 間所 間所

昼食は、以前伴侶が利用したことがあるという湯葉料理屋。ここで、今回は「毎度遠くて参加できない」という北海道の渡辺君に、幹事を回し、押し掛ける…も、決まりました。

午後からは紅葉の大山崎山荘へ。美術鑑賞の前に、昨日の宴で食べきれなかった持ち寄り食料を、舟田嬢以下女性軍の手で衆人監視の下、芝生広場で山分け。早退の佐野君に、比田井君の13回忌用に、会費残額と、カンパを委託。

さあ、メインの山荘へ。ミロの彫刻、モネの絵、バーナードリーチの陶芸etc. 諸君、諸嬢20分も巡り歩くと、もう飽きられたようで。何といってもワングルの同期連ですから。それでも、芸術の秋を堪能いただき、仲間の教養アップに貢献できたかと。

踏切を渡れば、右JR組、左駐車場組。安堵と寂しさと、また来年もの期待で手を振った、鈴木夫婦でした。

2001年ワングル15期会参加の皆様へ

各地から御多用の中、はるばる当地へ来てくださり有難うございます。皆様の御協力と天気に恵まれ、つつがなく終える事ができ幹事ほっとしています。多くの方からわざわざ帰着の連絡をいただきました。皆様強行軍にも関わらず無事帰着され一安心です。坂尻君のジャケットも竜王山荘で保護されていたそうです。

坂尻君が能登で会を催した時から、幹事の役が巡ってきたら竜王山荘を利用しようと考えていました。当時は東海自然歩道を歩かそうと無茶な案でした。いざ幹事の鉢が回ってきた時、山崎に結びついたのは高村さんの一言がきっかけです。ラフなプランで車移動時のトラブルを懸念していましたが、小生のミスを各ドライバーが機転でカバーしてくれました。感謝しています。

私自身は日常の煩雑さから逃れ、計画作成・資料収集という非日常の時間を持つ事ができ、立案の段階から楽しめました。

今回総費用を安く押さえる事ができ、石田君の十三回忌費用に一万二千円回した以外に四千円程余しています。次回会合時幹事に渡します。

強行軍で風邪をひかれたり、こじらしたりされていない事を願っています。また次回会える事を!

平成13年11月29日
鈴木良紀



50歳のウォーキング事始

15期 松林 知一（石川県野々市町在住）

伊能忠敬が測量器をかついで歩き始めたのは50歳のときだったといいますが（実際は55歳だったが、お上には許可がもらいやすいように5歳若く申請したらしい）。家業を息子に譲り、単身で江戸へ出て、文字通り第2の人生をスタートさせたのです。以来、日本全国を歩き回り、わが国初の本格的な測量地図を作り上げたことはよく知られていますが、11月に封切られた映画「伊能忠敬—子午線の夢」（主演：加藤剛）を見ると、あの時代に蝦夷から屋久島まで、何度も死ぬような目に遭いながら、延べ17年、約4万キロを、よくぞ歩き通したものだと感じます。

北国街道参勤交代の旅

そこで私も50歳という人生の節目の年を迎えて、新たな一步を踏み出すことにしました。新聞社をクビになり知的障害者の施設で働くことになったのも、その第一歩を踏み出すための何かの奇縁であろうと勝手に解釈したのです。なにしろ、それまでの非人間的な労働環境から一転して、人間らしい生活を送れるようになったのですから。

第一歩は、わが家のすぐそばにある野々市町文化会館（フォルテ）前から踏み出しました。フォルテは旧北国街道に面しており、右へ行けば野々市の中心部を通って金沢城下へ。左へ行けば松任、小松、大聖寺を経由して近江から京、または途中、木之本から関ヶ原、中山道を通って江戸へとつながっているのです。

金沢城下から倶利伽羅峠を越えて江戸へ向かう道を下街道、逆に近江へ向かう道を上街道というのですが、加賀藩主の参勤交代はほとんどが下街道経由だったそうです。（記録では、江戸時代の参勤と交代を合わせて全部で190回のうち181回が下街道、他に中山道経由5回、東海道経由4回）

で、私の一步も下街道をできるだけ忠実にたどって江戸の日本橋をめざすことにしました。名付けて「北国街道参勤交代の旅」の始まりです。腰には万歩計、手には国土地理院の二万五千分の一の地図とコンパクトカメラ、背中のザックには傘とポカリスエットのペットボトル2本とおにぎり3個を入れ、一人寂しく（？）歩き出したのです。

たった18キロでダウン

参勤交代の前田のお殿様は、江戸までの120里（約480キロ）を12泊13日で歩いたといいますが。一日におよそ40キロ。今のわれわれに比べるとかなりの健脚と言っていいでしょう。ところが私は、というと、野々市から金沢までの最初の6キロは元気いっぱい歩けたのですが、大樋町の松門（金沢城下の入り口）を過ぎて森本へ着くころにはトボトボ歩きとなり、森本の跨線橋を渡って下口往還の松並木（北国街道沿いに植えられた当時の松並木＝県史跡）から花園にかけては足を引きずる状態となり、津幡にたどりついた時にはもう一步も歩けないありさまでした。野々市～津幡間は、たった18キロしかないというのに、です。

これではとうてい江戸までたどり着けそうもないので、心を入れ替え、毎日のトレーニング（ウォーキング）に励むことにしました。そこで導入したのが「12週間30万歩プログラム」です。

12 週間 30 万歩プログラム

これはミズノのホームページで提供しているプログラムで、段階的にレベルアップしながら、とにかく 12 週間で 30 万歩を達成しようというものです。ホームページを開いて会員登録をすると（もちろん無料）自分だけのカレンダーを使えるようになり、このカレンダーに毎日の歩数を記録していけば、トータル歩数と歩行距離がたちどころに分かるという仕掛けです。5 万歩、10 万歩、20 万歩と節目に到達するごとに、事務局からは激励のメールが送られてきます。逆に一週間書き込みをしなかったら、安否を確認するメールが届きます。つまり、いったんプログラムをスタートさせると、続けざるを得ないようになっているのです。

その上、意思の強い(?)私のことですから、途中で挫折することなく、目標より 2 週間も早い 10 週目に 30 万歩を達成することができました。ミズノ事務局からは、開くとクス玉が割れファンファーレが鳴り響く「お祝いメール」が届きました。

この間、野々市町の健康のみち「富樫の里コース」(一周 4.3 キロ)と「白山やまなみコース」(3.8 キロ)、この二つを組み合わせさらに距離を伸ばしたオリジナルの「上林コース」(9 キロ)の 3 本をせっせと歩き、職場でも昼休みに施設の周辺 30 分の散歩を欠かさずに歩数を積み上げていきました。

235 万歩、1900 キロに

こうして 30 万歩プログラムは終了したのですが、不思議なことに、毎日のウオーキングは終わらずに習慣となって今日まで続いています。

ミズノのホームページにはウオーキングカレンダーのほかに「ランクボード」というコーナーがあって、カレンダーに書き込んだ歩数を通算して毎日、その月の順位が掲示されます。もちろん、みんなニックネームですので、自分の成績は自分にしか分からないのですが、全国の会員の中で自分が何番目に位置しているかが分かるというのは、ちょっとした刺激です。一日さぼると、たちどころに順位が大きく下がります。一日 5000 歩なら順位は変わらず、8000 歩でようやく何番か上がるといった感じでしょうか。

第一歩を踏み出して一年余。平成 13 年 12 月 29 日現在の総歩数は 235 万 3042 歩、歩行距離は 1898 キロとなっています。伊能忠敬の 4000 万歩、4 万キロとは比べるべくもありませんが、自分では「よくやったなあ」とほめています。いつの間にか、金沢～江戸間を 2 往復した距離を歩いていたのですから。

最大の障壁は？

ところで、その「北国街道参勤交代の旅」ですが、実は直江津で足踏みしているのです(実際のルートは直江津には入らず、その手前から右に折れて高田城下を目指すのですが、その日のスタートとゴール地点の出入りに列車を利用せざるを得ないため、JR 直江津駅を仮ゴールとしたのです)。ここまでは毎回日帰りで距離を伸ばしてこられたのですが、信越線に入ると日帰りで踏破は困難になります。できれば 2 泊 3 日、せめて 1 泊 2 日の計画で一気に進めたいところなのですが、ここに来て、大きな壁が立ちました。

それは、わが家の「山ノ神」です。私も一時は抱き込むことに成功したのですが、山ノ神は 2 週間私といっしょに歩いても体重が減らなかったことから、あっさりやめてしまったのです。せっかくウオーキングシューズやウエア、万歩計などの道具を買いそろえたの

に、何と言う無駄遣いでしょう。それだけならまだしも、私が天気のいい日曜日になると一人で「参勤交代の旅」に出るのを、冷ややかな目で見るようになったのです。たった2週間、それも一日30分程度のウォーキングにつきあったぐらいで体重が減れば苦労はしません。まったく、どうしたらこの「山ノ神」のご機嫌を取ることができるでしょう？

夢は四国遍路の旅

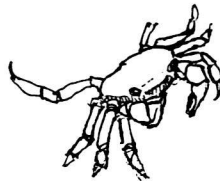
でもまあ、この旅も最難関の親不知を越えて半分まで来たので、そのうちに日本橋へゴールできるでしょう。本当は日本橋にゴールしてから、みなさんにご報告したかったのですが、「いつになるか分からない」との編集長の判断だったようです。

日本橋にゴールした後は、引き続いて東海道、中山道と踏破し、最後は四国八十八カ所1400キロのお遍路に出たいと念じています。お遍路を無事結願したそのときには、あらためてみなさんにご報告させていただきたいと思っています。十年後を楽しみにお待ちしております。

(丁)

※ご参考までに、ミズノのホームページアドレスは以下の通りです。ウォーキングコーナーの「ランクボード」を開いて「きぼうにん」というのが私です。激励のメール等いただければ幸いです。

<http://spocom.mizuno.co.jp>



幻の同期会

15期 横井 裕子

ずっと気持ちの中で大きく立ちはだかっていた7回忌を、先週の日曜日、丁度命日の日に、佐屋の家で無事に終えることが出来ました。

子供の部活や夏期講習などで日程が変わったり、東京の父が入院したりとアクシデントがたくさんありましたが、なんとか家族全員で当日を迎えることが出来てほっとしています。

奥名さんに15期会の皆様からのお心遣いを送っていただきました。いつも温かく見守っていただいて本当にありがとうございます。忙しさを理由に、ご無沙汰と失礼を繰り返してしまっているのを、昭次さんに怒られてしまいそうです。

フルタイムで働くようになってからは、毎日が精一杯で精神的にも身体的にも余裕がありませんが、幼稚園だった三女も来年は中学生になるので、少しずつ変わってくるかなとも思っています。

今年の法事を一区切りに、また新しい気持ちで頑張っていきます。これからどうぞよろしくをお願いします。とりあえず、お礼まで…。皆様どうぞよろしくお伝え下さいませ。

8月19日

23期 石地 隆司

新年おめでとうございます。年末に大掃除をしていたら、レターケースの中からこの葉書がでてきました。メールアドレスの追加を送ったはずなのに何で載らないんだろう？と思っていたら、こういう訳だったんですね。たぶん裏に何書こうと思って置いたのをカミさんがケースの中に紛れ込ましてしまったようです。せっかくなので、賀状として送りました。

23期は今年は金沢支部主催で同期会をやってくれるはずですが、関西支部は年末恒例の忘年会(2000年の)を草津でやる予定です。

(以下は、同期会報告は誰に？の返事)

23期 名倉 均

残念ながら、宿予約係であった「中川」が日を間違えたため、(皆には7月下旬とアナウンスしたが、本人は、8月下旬と思い、宿を予約していた)今年はずつになり、来年、改めて開催になりました。8月下旬では、皆の都合がつかなかったのです。

お便り

元顧問 松尾 秀邦

拝復 “やまざと” No.14 拝受致しました。名簿を見ていると、昔を思い出します。当時の部員の方々が社会を牛耳っている様子が伺えて懐かしく拝読致しました。

ところで、金沢市の委員会の席で定塚君や中川君とご一緒に過ごされた様で、彼らには小生の若い時の悪事(?)の数々を知り、さぞや…と存じます。これから何かと会をもたれることと思いますので、よろしくご放声下さい。

左膝を痛めてもう山歩きは…と断念しております。まだ車は動かしますので、たまには遠出します。(往復 200kmはありません)

年末ご多忙中のところをお騒がせ致します。よいお年をお迎え下さい。 頓首

(編者注：筆者は昨年から金沢市環境保全審議会委員を引き受けることになった。器も何もやってみるのが、一番わかると、受けたまで。居並ぶおじ様方の肩書きからは、明らかに格落ち。男女共同参画の時代の流れのとはばっちり！と割り切ったものの…視察旅行中の長い同席時間を、どないしょ…であった。

それが何と皆さん、松尾先生のご後輩ばかり…というか、毒氣に当たったことのある方ばかりだったのである。私達の視察旅行の間中、はるか松山の地で、くしゃみを連発しておいでたとは思えない。という訳で、思いがけぬ同窓会気分を味わってしまった。その話を同封して会報をお届けした。)

8期 伊予 欣二

立秋、盆が過ぎても連日この暑さは…という大阪の毎日です。

今年から少し山歩きをということで、奥さんの山歩きに同行して、少し歩いています。高三郎の石楠花を見には行けませんでした。今年の山歩きで、花を楽しませてもらっています。

7/20~22の連休に、どこへ行こうかと迷っていたのですが、赤石、悪沢岳や餓鬼岳が候補に上がっていたのですが、結局白山になりました。直前に、室堂、南竜に皿を入れても、予約はすでに満杯。まあなんとかなるさと用意にかかると、飯盒が見当らず、久しぶりにコッフェルで飯を炊くことになったりの準備。

7/20 大阪吹田を5:30に出発。途中トラックの自己などもありましたが、10:00 市ノ瀬着。バス待ちなどもあって、別当を出発したのは11

:30。普通のペースで基之助の小屋跡でのたつて、15:00 前に小屋に到着。小屋を覗くと、先客は1パーティ4名のみ。昭和38年に白山オープンボッカで小屋に泊まって以来の基之助小屋泊まり(最後は定員オーバー)。

久しぶりの炊飯となりましたが、コッフェルの底がボコボコで焦げが真っ黒の仕上がりになり、何とか無事食事終了。早々と就寝。

7/21 3:30起床。4:30出発。のんびりとエコーライン経由で、お花を楽しみ乍ら、室堂へ、6:00前に到着。前日のゴハンの残りに餅入りおじや。ザックを室堂に置いて、お花畑巡りのワンデリングへ出発。(ザックは3人で1個だけに。ちなみに、メンバーは私と奥さんと、奥さんの山友達の3人)。こんな時期に白山へ来たのはほとんどなく、こんなに花を愛でてのんびり歩いたのは初めての白山??

コバイケイソウがこんなにカワイいらしいと思ったこともなかったし、白山石楠花がこんなに咲き誇っているのも初。(去年は雪が多くて、8/4、5、6でもきれいだったのですが)黒百合に4つも花をつけているのを見たのも。ピークには一つも立たず、お花畑巡り。お花松原まで足を延ばし、さらに平瀬道の方へカンクラ雪渓を覗きに行き(雪はありませんでした)展望台コースを少し歩いて、8:00~17:00 頃までノンビリ歩きました。

この日の夕食はコッフェルの底の平らなやつでキッチリ炊き上げました。室堂は連休2日目で何とか泊めてもらえそうで、2人分3人ということで、私は玄関の板間でユックリ寝ました。トイレに行く人の戸の開け閉めがうるさかったのですが。

7/22 3:30起床、4:30出発。15:10 市ノ瀬着
今回の大汝峰が初めてのピーク。ここで北アや白山北部の山を眺めてノンビリユックリ。

帰路はお花を眺めてノンビリで釈迦道を。人も少なく、砂防や観光の道とは違う、本来の山を楽しみながら、2つ目のピークが釈迦前岳のみと、最後の車道を除けば、素晴らしい山歩きでした。最後に永井旅館でユックリ汗を流して終了。

報告が一つ。白山に「コマクサ」

お池巡りコースの千蛇ヶ池の室堂よりの所に2株花をつけていました。(見付けたのは女性二人)。解説の人によると、他所から移植したらしいのですが。

今年は春から御在所アカヤシオ、比良でシロヤシオ、稲村ヶ岳で石楠花、イワカガミと、花には随分ついてます。9月10月には穂高と、一度も行ったことのない戸隠にでもと考えています。

小屋泊りは仕方ないですが、餅を自分達で作って食べるのが一番いいですね。10数年ぶりに背負子型のザックを引っ張り出して 担ぎました。まだゆっくり歩けば、しばらく楽しめそうです。

奥様は相変わらず元気で、気の合う山仲間と二人で羊蹄山、北ア（双六～水晶～赤牛～黒部）と出掛けています。

今度いつ〇Ｂの皆様にお会いできるかわかりませんが、白山は、年に1回位楽しみたいです。いつも白山を知らない人の案内役で、砂防

・観光ばかりでした。釈迦道はS38年の道作りのバイト以来でしたが、毎日の作業のことしか記憶になく、シゲジを少し覚えている位。少しずつ違ったルートも歩いてみようなどと、考えています。

出しそびれているうちに台風11号。でも、去るとやっぱりすぐ暑さは戻ってきました。いろいろお世話になると思いますが、よろしくお願いします。白山でコマクサを見たので、報告を兼ねて…。乱筆で記しました。

12期 小西 外士郎

いつもお世話ご苦労様です。再び16年振ですが、北海道に来ることになりました。人口より乳牛が多いという広々した酪農散った行で気持ちいい所です。

26期 浅井 浩一郎（内）



恒久永く
幸福を
祈る

Merry Christmas
and a
Happy New Year

いつも遠くにお越し
本当にありがとうございます。
ます、相変わらず山好き
の主人と一緒にあちこち
遊んでいます。日本へ
帰ったらぜひ御一緒させ
て下さ。良いお年を...

戦

2001年はこの字でしめくられる事になりました。9月11日、アメリカでおきた同時多発テロ。

ワングルの連絡網も1ヶ月以上フリーズしてしまいました。世界がどうなるのか？日本がどうなるのか？あすがどうなってしまうのか？

ただ、現在の所、グラウンドゼロに眠る〇Ｂはいない模様です。

この〇Ｂ会報は、浮き世離れしていることも一つのよさかだと思います。しかし読み返した時あの事件のかけらも見られない…であって、なるほど、知性・常識の欠落した集団と受けとめられかねません。よって一〇Ｂのメールを掲載し、困惑の記録としておきます。

11期 青柳 健二

SUB:雪の降る前は（この1ヶ月半の哲学的思考の報告）

青柳です。あの9月11日の忌まわしい事件以来、宗教学的、文化人類学的かつ哲学的にいろいろと難しい問題を沈思黙考してきた。

- ・物質的な豊かさを追求してきた近代文明は、全ての人類に幸せを与えたのか
- ・コンクリートの巨大タワーで構成された大都会は、幸せを約束してはいない
- ・全世界をアメリカ的にしようとするのが、人類にとっての成長なのか
- ・ビンラディンの放った（とされる）自爆テロは、単純なアメリカ文明への反逆であろうか
- ・ブッシュが、「善と悪の戦い」と図式化し、タリバンを滅ぼせば問題は解決するのか
- ・アフガンのイスラム原理主義者が求める幸せとはなにか

・自爆テロリストは、本当は何のために自爆したのか

様々な事を考え続けた。夜も寝ずに考えたので、昼は仕事に時々眠った。そのうち、寝ながらも考えられると思ったので、夜は眠ることにした。考え続けると、頭にも休息が必要だと気付いたので、テレビは見ることにした。

イチローの野球を、朝の5時に起きて見た。天才が努力すると英雄になると思った。

高橋尚子のマラソンも見た。目標を達成した女性は、次に何をするのか気になったが、一週間後に記録がアッサリ破られたので、また走れると思い、安心した。

長島監督が突然止めると宣言してから、ヤクルトが負け出したので、長島は早まったのかと心配した。でも結局ヤクルトが優勝したので、長島はそれで良かったと思った。

重要な問題を考えるためには、本を読む必要があると思い、テロ事件の記事が載った本を3冊買ってきた。

難しい本を読む前に、活字に慣れないといけないと思い、直木賞を受賞した恋愛小説も買って読んだ。今年の夏に行った上田の塩田盆地が舞台になっていて面白かった。

同じ作家の、リハビリ中の野球選手と神経を病んでいるピアニストの恋を描いた文庫本を買ってきてまた読んだ。ハッピーエンドではなかったので、ガッカリした。

新書本のタリバンという題の本を買ってきて机の上に置いた。

哲学的な問題を解くには、教科書が必要なので、「われ笑う、ゆえにわれあり」という女子大の哲学教授の文庫本もついでに買って、真剣に読んでみた。

考えたり、本を読んだり、テレビを見たり、夜は寝たり、昼は仕事をしたり、仕事にも重要な問題を考えたり、重要な問題を考えると眠くなるので、仕事にも寝たりしては体に良くないと気が付いたので、やっぱり山にも行くことにした。

10月になっていたのも、紅葉が綺麗な所が良いと、今年のコダワリの尾瀬に行った。沼山峠から尾瀬沼に入って、長蔵小屋に泊まって、燧が岳に登った。ブナやナナカマド、ダケカンパの紅葉がピークの時期なのだが、今年は霜が早く来たとのことで、尾瀬沼の紅葉は今一つ本当の輝きがなかった。燧が岳では山頂でガスが巻き、夏に登った至仏山の勇姿を眺められず、満足度不足だった。勿論カメラを担いで、写真も一杯撮ったが、KUVVのHPに載せられるような傑作はなかった。

やっぱり紅葉を愛でるなら、天気が良くないと駄目だと思ったので、天気予報で快晴を約束

された20日に、西沢渓谷に行ってきた。快晴で、紅葉も丁度良く、水量豊かな溪流には、所々に豪快・華麗な滝があり、楽しかった。帰りは雁坂トンネルに抜け、秩父に出て、道の駅大滝で温泉に入った。温泉のある山しか登らないというオジサンのがんが、よく判るほど気分が良く、このままビールを飲んで眠られたら幸せだろうと思ったが、お金もないので、暗くなった道を家に帰った。夜のドライブでは、眠くなるので、重要な問題を考えたが、やはり眠くなり困った。

9月11日を境に世界が変わった、と言われるので皆やはりこの重要な問題を考えているのだろうと思っていた。皆同じようにメールを出す気力も出ないほど考えているのだろうと思っていたが、金沢のおひい様は、毎週毎週、山に、ハイクに出掛けていたようだ。桑名のオジサンも、やっぱり毎週どこかに出掛けていたようだ。でも、みんな、山に登っていても、倉谷で栗ご飯を食べていても、紅葉に歓声をあげていても、あの9月11日のことは、気にかかり、哲学的に考えているのだろうと思う。田村教祖さまは、倉谷に定住し世を捨てたテント生活者と、この大問題を語り合っていたとの報告も受けている。

だが、ニューヨークの巨大瓦礫の下に、今だ4000人を超える死体が眠っている現実があっても、季節は着実に、また冬にむかっている。

冬が来るとまた雪が降る。雪が降れば、足がウズク、足がウズクのを放置すると体に良くない。体に良くないと、大事な問題を考え続けることができないので、スキーに行くことが必要だ。冬にスキーに行くには、秋にその準備が必要、だから重要な問題を考えながらも、大台が原に行く人に別に文句も言わない。配偶者の許可があれば私も行きたいと思う。

だが、9月11日を境に、やはり世界は、歴史は変わっている、今年は年賀状を書くのを止めるかもしれない。大晦日に紅白を見るのを止めるかもしれない。何十年も続けてきた習慣を止めることが、重要な問題を考え続けるには必要だと思う。そろそろ重大な決定をしなければいけないと、今覚悟している。

山登りとスキーと、一般的な尺度では変な人達とのメールを止めると体にも精神にも良くないことはとっくの昔に気がついており、重要な問題を考え続けるのには、かえって役に立つのが、この1ヶ月半でまた確認できたので、止めてもあまり問題のないことを止めたいと思っている。

人間にとっての美味しさだけを求めて育てられて牛達には、狂気がとりつく。

右上がりの成長なんて幻だ。

6月23日（土）5時に起きて近くの米山（よねやま）に登った。6月の末は定例の人事異動の時期であり、社内でも山好きのN君が3年の任期を終えて出向元へ帰っていくはずである。（その前に）近くで有名？な米山に登ろう、と言ったのは5月初めの山菜取りに行った時であった。6月に入って内示の日が近づいてきたので、地元採用の女性で山菜取りや山が好きなMさんにそっと23・24のどちらかにしようともちかけた。もちろん人事事項は機密事項なので理由は言わない。しかしお天気が悪そうである。この企画もお流れか、思いつつ20日から3日は出張で留守にして22日の遅くに帰ってきたらMさんから「雨は大丈夫みたい。行きましょう」と電話が入る。慌てて押入れの登山用具を引き出す。靴、ボンチョ、カップ、手袋、一式入っている。家内は「本気？」と言う顔で見ているが言い出したなら聞かないことは知っている。

翌日我が住まいを6時に出て、N君のほかにS君が加わってMさん宅に回って、彼女の愛車（ホンダCRV）に乗り換え米山に向かう。急遽加わったS君も今回の異動で3年の出向を終え帰る事になった人で、前日5時以降に参加が決まったと言ういきさつであるが何しろ今回の趣旨にぴったりである。さて米山の紹介はパンフレットにまかせよう。

〔米山〕

柏崎市と中頸城郡柿崎町との境界に位置する標高993mの山で、その姿は秀麗である。海岸からそそり立つようにそびえ、地元では親しみをこめて「米山さん」と呼ばれる。

「米山さんから雲が出た…」と三階節、「行こか参らんしょうか米山薬師・・・」の米山甚句などの唄の魅力で全国的にも知られています。頂上のお堂には日本三大薬師の一つである米山薬師がまつられ、古くから信仰の山として有名で、雨乞いに靈験があるといわれ、土地の人の信仰は厚く、また毎年12才になると十二薬師の加護を求めて登山する習わしがある。山頂からは刈羽平野と頸城平野が一望でき、晴れた日には日本海のかなたに佐渡を見ることができる。



（米山伝説）

仏師として有名な泰澄が、修行もかねてこの山にこもり、薬師を刻んでいたときのことである。

その弟子である沙彌は、托鉢で師と自分の生計をまかなっていた。

伝説によれば、毎日海岸の岬まで下山し、沖を通る船乗りたちに鉢を飛ばして（？法力で・・・と言われている）施しを受けていたという。

そんなある日、米俵を山と積んだ船が通りかかった。

沙彌は『鉢一杯で良いから、米をわけていただけないか？』と、丁重に頼んだのだが、強欲な船主は一粒もわけてくれなかったという。沙彌がなにやら真言を唱え、と、どういう訳か船上に積み上げてあった米俵が次々と舞い上がり、山の頂上に積み上がってしまった。困った船主は上陸し、えっちらおっちら登山して、沙彌に自分の欲深さを詫びたところ、またもや見る間に米俵は船上に

戻ったという。

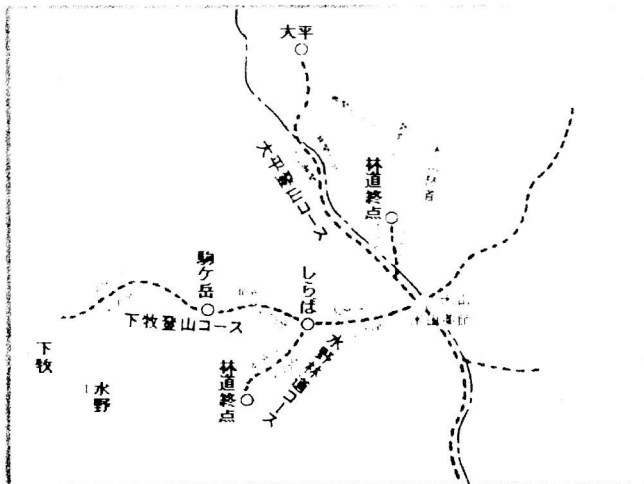
以来、米俵の積み上がったこの山を、人々は親しみを込めて『米山さん』と呼ぶようになった。(あくまで『さん』が付くのである)そして、その間に刻まれて完成した薬師は米山薬師と呼ばれ、現在も米山山頂に奉られている。

また、沙彌が鉢を飛ばしていた土地は、『鉢崎』と呼ばれていたのだが、戦後の町村合併と地名改変で『米山町』となった。だがしかし、郵便局はいまだに「鉢崎郵便局」の名を使っており、地元民もその名を使うことが多い。

さて我が家を出発してから1時間ほどで登山口に着く。水野林道である。林道のおかげで中腹まで入れる。すでに何台か車が入っている。「福井」のナンバーもある。

今回のコース是水野コースと言う。

米山の登山口はいくつかある。柏崎側から行けば頂上近くまで車が入るとMさんが言う。彼女は小学生の頃から登っていて今回は5年振りとのことである。



道はよく整備されているが、取りつきは階段の連続で最初に「きつい」と言わせる尾根登りである。雨は降らないが完全に霧の中状態で周りの景色は見えない。出張の疲れや4月から痛めた首・肩をいたわりながらマイペースで歩く。

若い3人は、と見ると、最後に参加を決めたS君はきつそうである。

(S君 私 Mさん)

今回2回目で前回も同じコースだったことが思い出されて前回のきつかった思い出と一緒に蘇ってきたようである。

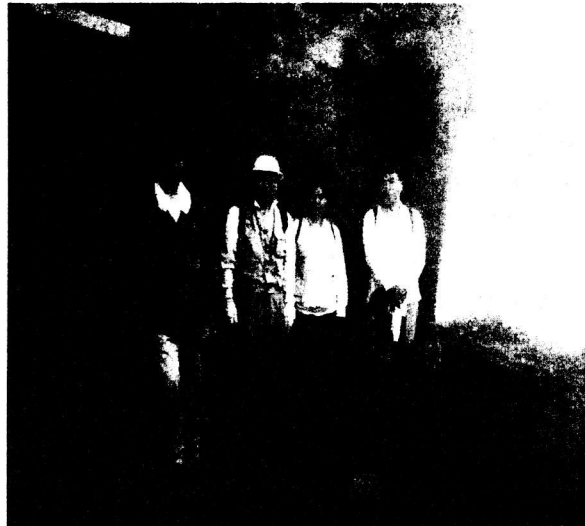
私は初めてであり、ひたすら、我慢、我慢と言い聞かせてマイペースを守る。昔の弱者先頭を思いだし一番をキープする。

途中休憩をはさみながらも1時間10分ほどで頂上993mに着く。

冒頭に紹介した薬師堂がある。お参りして避難小屋(ログハウスで広い)で登山張に記入して休憩する。周りは全く見えない。もちろん佐渡も見えない。



休憩しているうちに冷えてきた。お互い持参のおやつで50分の休憩をした後、8時10分下山開始。もと来た水野コースを下る。途中に下牧コースとの分岐点がある。これを下ると車のある所からはるか離れたところへ下りてしまう。S君が仲間とはぐれて前回これを下ってしまったと言う。下りは速いが途中の草花を見たりしてゆっくり下りてくる。ちょうど1時



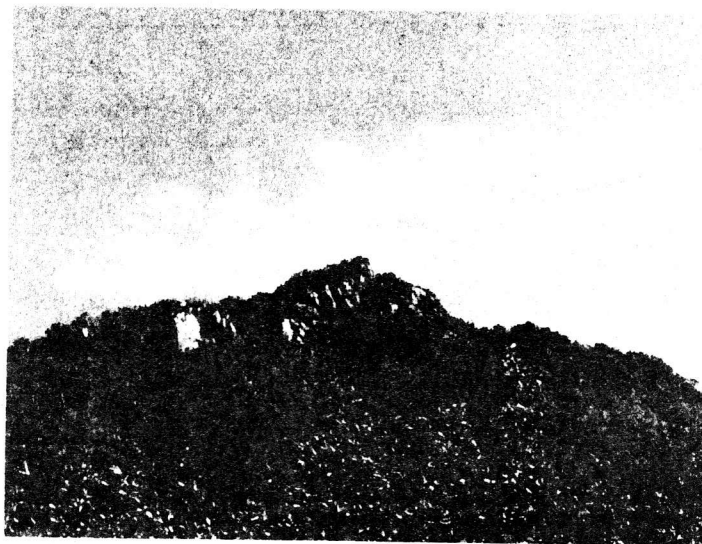
(N君 私 Mさん S君)

間で林道の駐車場に戻った。まだガスっていて雨がパラパラしていたが、車で帰途に着く。往きと逆に回り、自宅に帰ったのは10時過ぎ。早朝ゴルフをやったような気分である。

「越後富士」と呼ばれる姿・形のいい米山を毎日自宅から眺めていたが、まず一つ登れた。周りの景色が見られなかったのは残念であるが、この近さを考えればいつでも…と思う。周囲には妙高、火打、黒姫、雨飾、などなどいい山がある。この次の誰かの送別登山になる前に、と、Mさんと話し合っているところである。

妙高山(2454m)に登る

4期 森島 稔



2001年もあと1ヶ月を残すころとなった。1年前は2000年最後ということで「ミレニアム」が氾濫していたのだがずいぶん前のことのように思える。

今年の初めに宣言していたことが3つ(①スキーをやる。②米山に登る。③妙高山に登る。)ある。スキーは晩冬の3月に残雪の中、生まれて初めてスキーを履いた。滑ったとは言わないが、60歳にして初めての挑戦?であった。

米山はすでに報告済み(今回のやまざと?)である。そして今回の報告が妙高山である。

上越市に来て2年が過ぎた。周りは山と日本海である。中でも妙高山は日本百名山のひとつであり、わがマンションから毎朝眺め観天望気している山である。上越に住んでいて妙高を知らずに済ませられるものではない、と意気込んで宣言した次第である。

「妙高山の由来について」

妙高山は古くから越（こし）の中山と呼ばれ、その中山が名香山（なかやま）となり漢詩を詠みこむため、音読して名香山（みょうこうさん）となり、字を飾って妙高山となったといわれている。

わが国には、その土地の名山を中山と呼んだ慣わしがあり、命名の流行がこの地にも及び「こしの中山」となった言い伝えがある。

さて今回も社内の（職制と慈悲による）有志5名との6名で 9月29日（土）の朝早く自宅を出発して妙高山の麓 「燕温泉」に向かう。6時集合に全員意気込んでそろった。

天気も上々である。

6時きっかりにスタートを切って、短い温泉街を抜け、薬師堂で拝み、野天風呂の「黄金の湯」（無料）を横目に見ながらスキー場中をあるく。温泉の原水を引く「湯道」に沿って歩いていくと「源湯」に着く。ここらあたりから硫黄のにおいがきつく



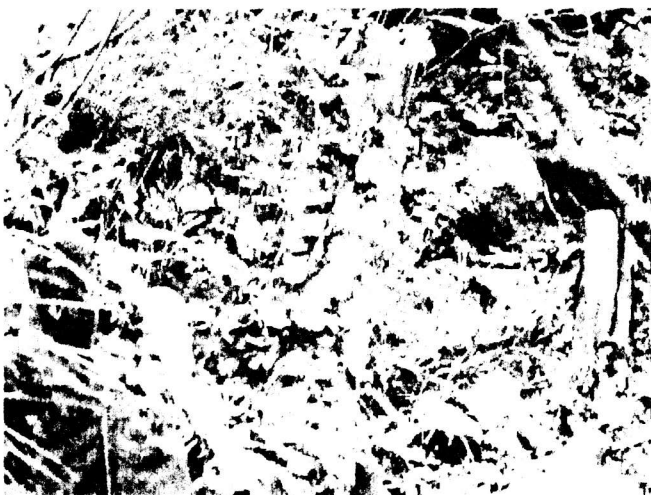
（後列中央 が 私）

なっている。燕温泉は白濁の典型的な硫黄温泉である。妙高山には、水呑場が少ない。写真右に見える水と黄金清水しかないのではないだろうか。沢の水は、硫黄分を含み飲むことができない。

光明滝、称名滝の横からは頂上まで登りが続く。日本海側の山はほとんどが独立した山でなだらかな縦走路はないようだ。

登り始めて2時間半で天狗平に着く。ここはわずかな平地で犬小屋程度の祠がある。赤倉から大谷ヒュッテ経由で登ってくると天狗平にくることになる。

休憩の後いよいよ頂上目指す。ひたすら急なのぼりを黙々と登る。この山には「*合目」の標識がない。地図に書いてある時間が目標である。途中できのこ（やぶたけ）を見つけ、しばし、きのこ狩りをしながら登っていく。





1800mくらいの高さが紅葉として最も見ごろであった。

頂上直前で鎖場に出る。
麓から4時間経っている。

この鎖場は名前のとおり直登のため鎖やロープがかけられていて上り下りともこれを使わないと危険である。
風も少し出てきた。
周りは紅葉してきて大変美しい。



そのくらいの余裕があったのである。

ようやく頂上に到達。妙高は頂上を2つ持っている。新潟・長野方面に来ると画廊に飾ってあるのは妙高山ばかりでイモリ池から見た馬の背のような姿が特徴である。最初に到達したのは南峰(2454m)である。



山頂の気温は3.5℃。20cmくらいの霜柱が解け始めている。

時間は10時35分。日当たりをさがしておにぎりを食べるが寒いので落ち着かない。

三角点は北峰(2446m)にある。

11時45分山頂を後に「燕新道」側を下る。長助池分岐までは急峻であり、こちらから登って来る人たちも苦しそうだ。我々の燕登山道側が苦しいと言われていたがどっちも同じだ。

長助池に出て1時間で黄金清水(こがねしみず)に出る。ここが水場だ。名のとおりうまい。

途中、川原に出たところ
に野天の「河原の湯」がある。混浴である。本来これに入
って帰る計画であつたが
すでに日暮れが近いので断
念する。登山口の燕温泉バ
ス停に着いたらちょうど17時。



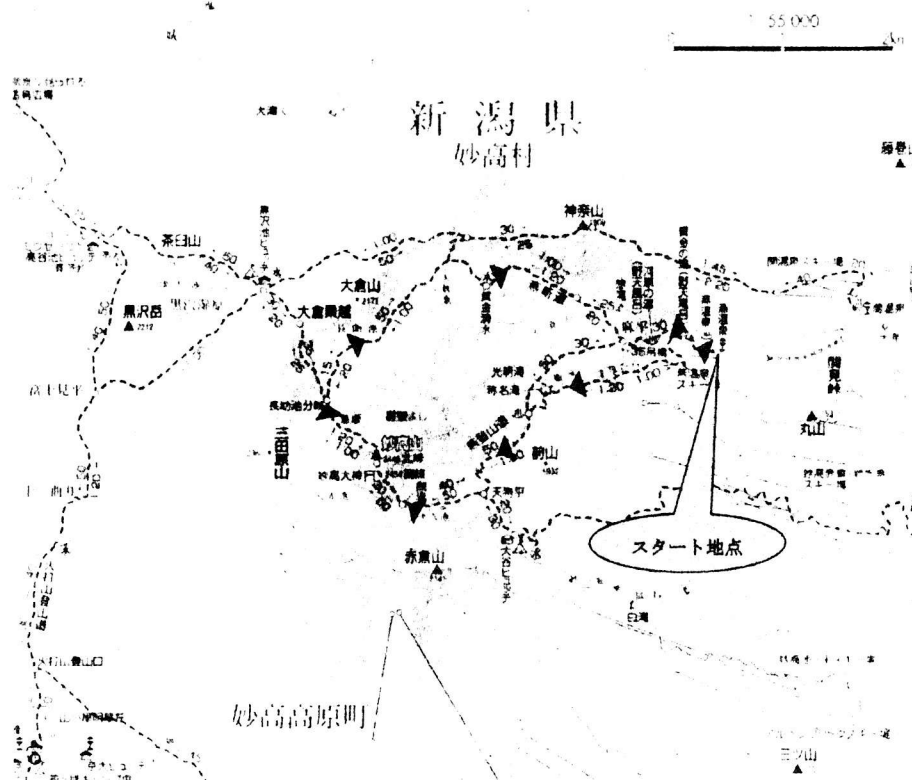
天候は終日快晴で青空の下気分よく登った。帰宅が 18 時。自宅からまだ夕闇に包まれた妙高が見える。なんというツキのよさであろう。これで今年の山は目標完了。ゴルフは肩をいためたこともあってこの登山の前前日に今年最初で最後の 1 回であった・・・。

来年のことは言うまい。船田事務局長からの（原稿の）召集令状が怖いから。

「コース&タイム」

平成 13 年 9 月 29 日

6 : 00 燕温泉 ⇒ 7 : 25 湯道分岐 ⇒ 8 : 30 天狗平 ⇒
10 : 00 鎖場 ⇒ 10 : 35 妙高山山頂 (昼食) 11 : 45
山頂出発 ⇒ 12 : 50 長助池分岐 ⇒ 13 : 24 長助池 ⇒
14 : 20 黄金清水 ⇒ 16 : 15 麻平 ⇒ 17 : 00 燕温泉



大辻山に登ってきました 投稿者：木津 治男

大辻山は、立山連峰の前衛峰で芦峠寺近くの低山です。

標高は1,361mと、低山ですが、立山連峰が一望できる原始の山として人気の高い山です。物の本によると「立山連峰の概念を知るのに好位置」と、「地元の者でも、目印を付けておかないと戻れなくなる」と、何かそそられるものがあります。

最近では登山道も整備され目印も多くなったそうですが、やはり、4月～5月の残雪期が一番だそうです。それで、この22日(日)に登ってきました。

立山少年自然の家に駐車し、積雪の林道を歩くこと1時間余り(約3km)、登り口の長倉峠から頂上まではずっと雪上でしたが、やはり雪山は足にやさしいですね。野球で言えば、人工芝に対する土のグラウンドです。木立の中をアップ&ダウンで、約2時間(コースタイム30分含む)の中高年むきの登りでした。一番の特徴である、「見事な眺望」は残念ながらガスの彼方でした。少し、晴れ間もあったのですが、毛勝山三山、立山、剣というわけには行きませんでした。でも、再度登ってみようかという気持ちになる山ではありました。原始性は、トレースのみが目印で、リボンや標識の類は見かけませんでした。新しいトレースを目当てに歩いたら、登り口とは違う方向に下ってきてしまいました。でも、そのお陰で、ミズバショウの群落に出会い、花の咲がけで、なかなかの見頃でした。

HPは部室、掲示板は連絡帳感覚で 投稿者：10期 木津 治男

昔の昔のことだった。講義に飽きると、一人部室にふらりとやってきた。着替えるや、卯辰山に走り、所定のトレーニングコースを廻った。学食で昼飯を食うと、部室に戻り、一人、また卯辰山へむかった。何かに、つかれたように、いつも走っていた様な記憶がある。一日に、卯辰山往復3回をこなしたこともあった。

体育の講義は、サーキットトレを選択し、Aクラスで、懸垂10回、50kgベンチプレス5回、60度腹筋30回etcを、2セットこなすと、吐き気がするくらい、バテた。たしか、横でベンチプレスと一緒にやっていたのは、ボート部所属のでっかい男だったのを覚えている。これを、1年間通した。

今から思えば、ただ山に登れる体力が欲しい一念だったような気がする。

1年生の頃は、私にとって、部室は居心地悪く、ゆっくり座っておれる場所ではなかった。いわば、トレーニングの為の更衣室であった。どっかと、座れるようになったのは3年生ぐらいからだ。

夏休みの、久しぶりの部室は、たしか大学ノートが連絡帳として置いてあり、それを、読むのが楽しみだった。上級生にも、下級生にも、筆達者がそろっていて、それぞれ健筆を振るっていた。

かつて、KUWVで活躍していた、OB連よ、HPを覗いたら、部室に入ってきたのと同じだよ。連絡ノートならぬ、この掲示板に、ラブレ

ターの一つも書いてみよう。

奥大日岳縦走 投稿者：10期 木津 治男

この土日に、ある中高年登山グループに誘われ、28日(土) 立山室堂→雷鳥沢→奥大日岳→大日小屋29日(日) 大日小屋→大日岳→大日平→称名登山口を縦走してきました。

大日岳は、初めて登る山です。

北ア、南アとアルプス連山は殆ど登っていたはず、なのにです。

*

学生時代より同期の吉野君より、そのすばらしさについてはしょっちゅうレクチャーされていたのですが、いつか登れるわいで早、30年を越えました。

*

昨年より、夫婦で登山再開しましたが、カミさんは昨年友人と二人で、称名登山口より大日岳には2回も日帰り登山を果たし「吉野さんの言われるのはよくわかるわ、素晴らしい山よ、何回行っても飽きないわ」と聞かされておりました。

*

今回、土日ということで、カミさんも厚子師匠も勤務であいにく不参加でしたが、こしゃくにも、二日目の下りで、大日平よりワンピッチ程度のところでバツタリ通り過ぎました。二人共謀して日帰り登山を敢行したものでした。私等が厚生年金休暇センタで入浴直後に、大日岳から称名に下りてきたと連絡入り、一同でその健脚にびっくりしたのでした。恐るべし、奥様パワー。

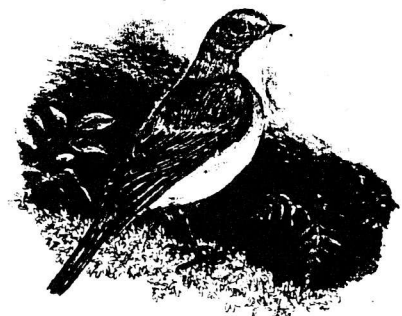
*

今回のメインイベントは、大日小屋より望む剣岳の見たこともない先鋭なオベリスクでした。昂が輝くオベリスクのシルエットと朝焼けの剣をゲットしました。しかし、あいにく、厚い雲でご来迎には至りませんでした。

それでも、前日はガスが切れず、視界不良のママ小屋入りしましたので初めて荷揚げした三脚の出番がありホットしました。使わず終いだったら泣くところでした。

*

早朝4時にリーダーから、木津さん星空だぞとたたき起こされて朝食まで小屋前で震えながらカメラにかじりつきながら撮影してました。大日岳は私にとって、いい山になりました。皆様もどうぞ、お運び下さい、その時は縦走を勧めます。小屋に泊まって、ぜひ早朝の剣を堪能してみてください。





自炊のなべ料理を囲んで歓談する登山者

＝30日午後3時半、室堂センター

2001年 白山夏山開き

15期 舟田 節子

「一度、白山の夏山開きを見に行ってきたいんだけど…」

学研仲間とのお花見の帰り。山友でもあるYさんに、その頃の白山の様子を聞かれた。彼女は同行してほしそうだったが、私は普段はナカオの調査山行が優先と言ってある。彼女が同行する仲間達は、真夏の白山なら登ったことがある…とのことだった。

山開きの登山者は多くいるはずである。まず迷うことはあるまいと、防寒着のこと、残雪が多ければ、ルートは十二曲がり迂回している場合もありうることを言った。次の研修会時には、室堂に確認するよう言ったと思う。

6月になって、「同行者にはこんなリーフを配った」と封書が来た。中身には、「ベテランのアドバイスを、二度も受けたから」と書いてある。おいおい、何も太鼓判押したつもりないゾ！その後、彼女はインターネットで白山情報を楽しんでいたらしい。

2日前になって、また電話。

「結構天気が悪そうなんだけど、上に室堂があるし、大丈夫だわね？」
と言う。もう…。

「ナカオの予定ないし、私一緒に行くわ」

という次第で、夏山開きに行くことになってしまった。今年は丁度、土・日の巡り合わせ。仕事を持つ私にも、チャンスだった。奥名会長が登ることを私は知っていたが、そんな突然の決まり方だった次第で、あえて吃驚させようと伏せていた訳ではない。

その奥名会長とは、別当出合で早くも遭遇した。止みそうもない雨に多数が屯ろしており、諦めて帰って行った。

同行の二人はガールスカウトのリーダーをやっており、さっぱり、てきぱきタイプですぐなじめた。そのうちのAさんの知人I氏が、仲間が皆諦めて一人別当に残っており、彼も含めての、にわか5人パーティーで出発する。

別当からの最初の下りからして川になっていた。あとも、登山道＝川。なだらかな斜面になると滑滝のごとく水が走る。私自身は濡れると覚悟しての事だから、雨が降った場合の地形の変貌を「ああ、こんな所が川になるんだ」と、それなりに楽しんでた。

パーティの方は、I氏とAさんの二人、次Bさん、Yさん私の3組に分かれだすようになる。Bさんは時々後ろを確かめているようだ。

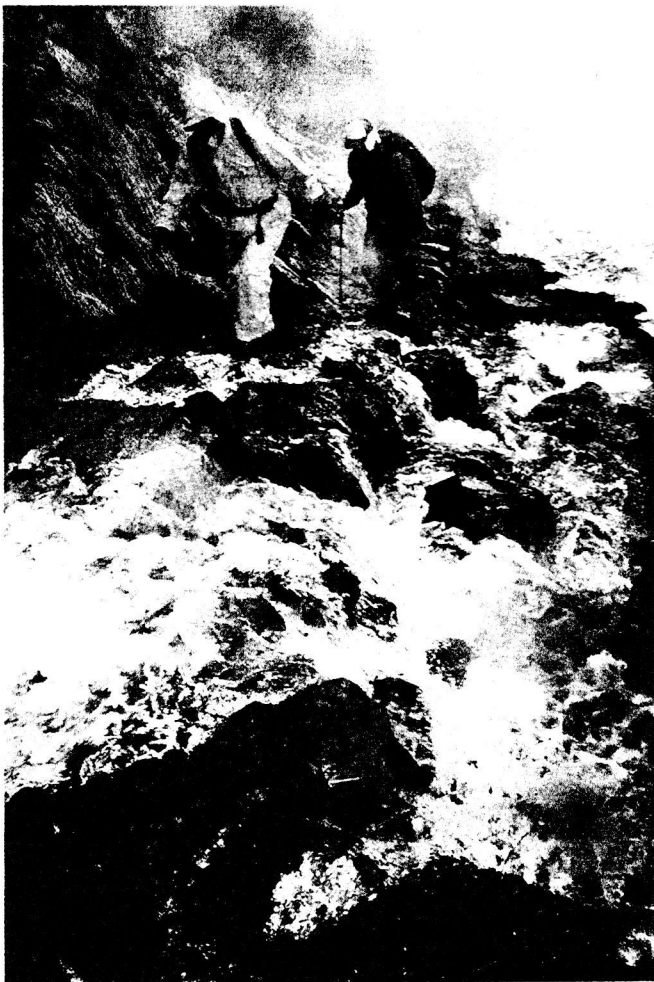
甚ノ助で昼食。テルモスのお湯でスープを作り皆に配ると、

「舟田さんの荷物どうしてそんなに重たいんかと思ったら、そんなんで担いどるが？」
ゆっくりとわかっている時ならね。

悪天候にもかかわらず続々と到着し、自炊場で
食事する登山客＝30日午後3時40分、室堂で



激しい雨にも白山ファン続々



激しい雨で川のようになった登山道＝30日午前、水屋尻雪渓付近で

他のグループの話も耳に入ってくる。

「神岡から入れるじゃん。寺地に避難小屋あるし、あとは小屋で縦走できるじゃん…」思わず、

「あの避難小屋は小さいから、誰か他のパーティが入ってたら、もう泊まれなくなりますよ」と言ってしまった。そんな予想をしない人は、どんな装備を担いで登っているんだろう？

御来光見たい！

夏山開き前日の三十日、白山は明け方から激しい風雨に見舞われた。登山道の一部はまるで川のように雨水が流れたが、熱心な山居ファンは、続々と登山基地の室堂センターを目指し、御来光を待ちわびた。

約五時間かけて登ってきた金沢市百坂、会社員大平雄さん(五十)は「大雨の中、雪渓を横切るのが大変でした」と、無事到着しほっと一息。大勢の登山者とともに、一日早朝の日の出を期待した。かれんな花を咲かせる高山植物も、我慢強く雨をしのいでいるかのようだった。

悪天候が続く白山だが、二十九日夕には、一時間ほど、別山と御舎利山が雄大な姿を現した。赤々と照らされたハイマツを手前にそびえる峰々

そこからはトラバース道を、何条もの水流が横切るようになる。疲労気味だったYさんは、フラッと、左カーブの登山道ではなくそんな沢に入りこんで行った。瞬時、悪路の迂回と眺めていた私は、慌てて呼び戻す。早めの訂正ですんだ彼女は

「やっぱりついてきてもらって良かった。全然気がつかなかった」

ああ、こうやって遭難予備軍になるんだなあ。

五葉坂整備中の今は、水屋尻雪渓横を迂回するルートになっている。そんな凹地に、豪雨は流れこみ、足を取られる程が、2箇所あった。

室堂は改築中で、センター前のプレハブが休憩舎、兼自炊棟になっている。中には奇妙な連帯感が漂っていた。みんな、あの豪雨について登ってきた数寄者同士だ。

I氏が早速「今年も来ました」と挨拶に行った。聞けば、毎年夏山開きに顔を合わせる連中で、実の所、全員の名前を完全に知っている訳ではない。それでも、一年に一度、七夕の様に夏の白山山開きにだけ顔を合わせる山仲間なのだという。へえ、面白い付き合いもあるものだ。徐々に聞いた所、壁屋のI氏はじめ、それぞれに自由業のようであった。

さて夕食。

「防災訓練でもらった即席炊き込み飯。あれ

なら軽いし、みんなの夕食分持って行くわ」
のYさんが、車に忘れてきたという。私は今回は道案内に徹し、リーダーをYさんとしてきた…構えば構うほど、

「また連れてって」

になる。彼女の集めたグループに、それ以上の責任をもてない、が私のシオリーだった。もちろん予備食は持っており、仲間も

「昼ご飯余ってるし、明日の分もあるし」

と、笑い合った。私も、仲良しで何かとお世話にもなる彼女を、なじろうとここに書いている訳ではない。シオリーのつもりでいて、用心が足りなかった。予備があると言いながら、急におなかがすいてきてしまった。

救ってくれたのは、先のI氏の七夕仲間のN氏。超数寄者であって、山開きの日の宴会を楽しむに、いつも凝ったメニューを担ぎ上げているという。今年はおでんで、十分下煮済みの物。それを発泡スチロール2箱に詰込み、温めて七夕仲間ほか皆の衆に供していた。

どっかりおでん鍋の前に座込み、感謝して頂戴した。せめてものお礼ばかりに、キャーキャー賑やかに頂戴し、この「楽しそうな光景」は、居並ぶ北国新聞、北陸中日新聞記者の取材する所となり、両紙面ともを飾ることになってしまった。

そのように、プレハブの一角を取材陣が占めていた。記事も映像も、ここから衛星を使って瞬時に送られてしまう。「今日の夕刊は?」「去年の山開きは?」と言うと、ノートパソコンの画面を次々に見せてくれた。天気が悪くて、待機しつつも時間を持て余しているお兄ちゃん達と、我々賑やかおばさんはキャーキャー歓談し合った。ちなみに

「こんなガスや雨の中、レンズの保守はどうしているのか?」

と聞いたら、

「乾いたタオルでこまめに拭く。それしかないんです。」だった。

修験者の3名も入ってきた。比叡神社の一派かと思ったら、長年、福井三國のお寺の北陸修験道白山会が、ここの開山を務めているとのことだった。先年より老山伏に代わり、「これが来てるんだよ」と、開山式のこだわり人N氏が言う。ガキ扱いされている二世山伏氏は案の定?法螺貝を忘れてきていた。明日は御来光が見えるはずがない。それでも朝6時には登頂して、読経と万歳三唱をやってくるという。

先の鍋席に実は、後で着いた奥名会長も同席していた。彼が

「彼女とは、同期。大学のクラブも、学科も一緒」

と紹介したら、みんな

「へへ、こんな所で会うなんて奇遇だね」と感心していた。何のことはない。下では会わなくても、山では会うことになっている、そんなワングルOB会の超腐れ縁だべ。なお、彼の方は自然観察会の仲間と奥さんとで来ていた。

外はまだ横なぐりのガス。それなのにやや改善したと見たか、40人ばかりの、静かな、東京からという中年グループが

「今から、お池巡りに出掛けまあす」

の一声で、そろそろ出て行った。呆れたが、1時間たらずで戻ってきたようだった。

翌朝もガスだった。6時少し前、お約束通り山伏装束に身を固めた3人が出掛けて行った。万が一と、日の出時刻に合わせて登頂を果たしていたという報道陣が、また彼らを追って出掛けて行った。その彼らは、薄日が差し出した8時過ぎには、この光景を撮影せねばと、また頂



二世山伏と言っても、これくらいのお年。頂上から戻ってきて、さっそくお肉をジュージュー、にこにこ眺めていたら

「お肉に見えるでしょ。でも、こんなにやく、こんなにやく」と言って、食べていた。

上を目指して行ったのだ。

「こんな仕事、若くなくちゃやれんね」
と、私達は感心して彼らの往復を眺めていた。
そして、彼らはまだ複数だからいいとして、単
独で取材に来ていた朝日新聞のお兄ちゃんに同
情して、熱いスープを勧めたりしていた。

奥宮社務所に人が集まりだした。開山式の祝
詞のあがる間に、すうっと外は明るくなりだし
、お神酒をいただいて外へ出ると、頂上奥宮が
光って見えた。

寝不足で体調が悪いというBさんを残し、頂
上ワンデリングへ。雨のせいもあり、甚ノ助上
からはあまり花を見なかったが、そこら中、水
滴をキラキラ光らせている黒ユリであふれてい
た。あの豪雨で洗い清められたような頂上に着
くと、さらに夏山到来そのものの景色が広がっ
ていた。たっぷりの雪や水をたたえるお池を巡
り、大汝にも足を伸ばす。

Bさんは、皆の濡れ物をすっかり干し上げて
待っていた。その頃には日帰りのくろゆりクラ
ブ一行が上がって来、ナカオのKさんも上がっ
てきた。知り合いだらけになってしまった。

席を空けるように、プレハブを後にする。日
は高く、雪の表面が緩みだしていた。キックス
テップを教え、快適に蕨岩コースで下る。夏よ
りずっと早く、南竜山荘に着いた。ここに備え
付けのKUWV連絡ノートに「21世紀一番乗り
！」（ノートの上では）と記す。

終わりよければ全てよし。汗ばむほどの陽気
の中、車に着いた。みなさんには

「やっぱりベテランと行くと違う。すごく楽
しかった。」

と言ってもらえた。私も、ナカオでもなくワ
ンゲルでもなかった白山が、楽しかった。白山を

好きな人がいっぱいいるんだな…そんな当たり
前なことに気付いたし、行って損した山なんて
ないもんだと、ご縁を作ってくれたYさんにも
感謝した。そして

「いやあ面白かった」

と家に入ったら、旦那も息子もニヤニヤ。机の
上の北国、北陸中日新聞ともに、おでん宴会中
の私が載っていた。もうバレバレだったのだ。
さらに翌日の北陸中日新聞の一面に、今度は頂
上での写真が載っていた。

その後も、何人にも「写ってたねえ」と言わ
れた。舌打ちするように出掛けた白山だったの
に…。21世紀初の山開き…ちょっと暗示を受け
たような気のしてしまった山開き…。

さて、おでんの恩人を調べて、104で確認し
お礼を送った。その返事。

暑い日が続き、次は何処と毎日山のことばか
り考えています。新聞とお菓子と山の本有難う
ございました。毎年の恒例の事で、自分として
は「分けてあげた」という気はなく、食べて頂
いたというのが本音です。（残ったらどうしよ
う。持って帰るのはいやだ！）ですから、あま
り感謝されると、てれてしまいます。有難うご
さいました。

自分は丸岡で丸岡山の会に所属し、地元の丈
競山（たけくらべやま）の登山道整備とか小屋
の掃除とか飲み会に忙しく（仕事より）活動し
ています。石川県境の富士写の隣の山で一昨年
小屋が出来、掃除とメンテナンスをうちの会が
受け持っています。そんな訳で、夏場は、白山
か丈競山というのが最近です。明日は天気がよ
ければ白山かな？海の日は西穂から檜なんて考
えています。とりあえずお礼まで。



まだ雪に埋まる蕨岩
コース。暴風雨を登
ったはずなのに、日
焼けして帰る。

03期登内

毎回メールと綺麗な写真とを有難う御座います。石楠花の宴に参加をと考えていましたが、今回も都合が付きません。一度も山小屋に行ったことなく、そのうちに参加させて戴きたく思っています。小屋までの所要時間(歩く距離と時間・交通機関が使えない区間)はどのくらいでしょうか？

03期西尾

いつもいつも、何かと、情報提供やお知らせを頂きながら、当方からは全く“NO RESPONSE”で、本当に恐縮しています。標記については、奥名さんからは何度もお知らせを頂き、また、舟田さんからも連絡をもらっていますが、今回も都合つかず出席できません。

昨日と今日の二日間(7、8日)、田村さん、登内さんと、長野で落ち合っただけの再会を喜び、まだ残雪の残る、小谷温泉へ行って来ました。

小谷温泉の山間のすばらしい景色を眺めながら、山の幸、地酒、そして、温泉を十分に堪能しました。

田村さんは、「しゃくなげの宴」に出席する為に、今日金沢入りしました。

登内さんは、都合悪くて欠席のようです。

07期村田

「やまざと」ありがとうございました。

お正月はアメリカはOregon州のPortlandで過ごしました。友人宅で11日間無銭飲食をしていました。これが敷地600坪の豪邸(日本では)で、私が使っていた部屋でも、バス、トイレ、洗面所付きで、20畳はありました。持つべきものは友ですね。ポートランドの空港に下り立って、最初に目に飛び込んできたのは、青空に浮かぶ、真っ白に雪を抱いた素晴らしい山でした。Cascade山脈の中の一峰、Mt. Hood

でした。標高3426米、アメリカ第二(第一はカナダにあり)の氷河を持つ高峰でした。この他、十数年?前の噴火で頂上が吹っ飛んだSt. Herens、そして、Jefferson、Three Sistersと三千米以上の山が幾つかあり、それぞれが単峰として聳えている姿は、山好き人間の心を揺さぶるには十二分のものがありました。早速、Mt. Hoodの地図を購入しました。山裾には三カ所のスキー場があり、リフトの最高地点は2400米、その上は道は書かれていません。頂上付近は、日本の山にたとえれば、剣のような険しさに見えました。例年ですと、この季節、Oregonは雨(雪)が多く、スキー客以外は、この山に近づく人はいないとのことでしたが、晴れ女の私が、日本から好天を持って行ったようで、滞在中はずっと好天に恵まれ、そのお陰で、Mt. Hoodへも行くことが出来ました。1800米辺りのTimberline Lodgeまで、四駆で楽々と登ることが出来ました。このロッジはあの世界大恐慌の時、公共事業の一つとして建設されたことで有名なものでした。ここからはMt. Hoodの頂上のみならず、はるか彼方の山並の向こうに浮かぶ、これまた素晴らしい姿のJeffersonは正に絶景でした。いつか、この山々に登ることが出来ればと、又一つ夢を増やして、短いアメリカ旅行を終えました。

09期保田

加藤さん

貴労作が名古屋の留守宅に届いたと連絡ありました。非常に楽しみにしていますが、帰名の予定は9月の敬老の日で残念です。ところで先週の土曜日に帰名した際に、同期の白井、吉田(洋)各兄と食事をしました。吉田(洋)兄は名古屋新空港建設の関係で逆に名古屋に単身赴任しています。白井兄も役員の風格がますます出てきたようです。皆さんの事も話題となり、その晩はくしゃみがでませんでしたか？

09期吉田

やまざと14号ありがとうございました。

犀滝への道作りを平村さんとしたのを思い出しました。又、山小屋作りの際50kgのセメント袋を倉谷部落から小屋位置まで背負って行ったのも思い出します。一杯思いでのつまっているBergheimです。昨年12月は東京で鍋島さん伊藤さん保田さんのお蔭で忘年会が開催され楽しいひとときを過ごすことができました。私の椎間板ヘルニアも手術せずに無事解消しつつありなんとか山登りの継続が可能なようでこれから頑張ります。

E-mailアドレスが一字抜けていましたので修正をお願いします。本年もよろしく御願います。9期 吉田幸造

10期木津

この、土日に立山室堂から、奥大日岳～大日小屋(1泊)～大日岳～大日平～称名登山口という1泊コースで初めての大日岳を満喫してきました。

初日は、稜線に取り付いたのが午後でしたのでガスの切れ間無く、奥大日岳からの剣岳は望めませんでした。

大日岳小屋は満杯で、食堂に寝かされました。午前4時にリーダーから「木津さん星空だよ」と起こされ、強風の中カメラにかじりつきながら、朝食に呼ばれるまで、剣岳をひたすら撮影しました。その刻々と変化する山の姿に感動しながら、「これでやっとお釣りが来たね」「三脚をボッカした甲斐があったね」等とリーダーや同好の皆さんと会話を交わしながら、早朝の一時をすごしました。

二日目は、大日岳に寄って、称名側に下ったのですが、土曜日勤めの関係で、参加できなかった、私のカミさんとその山友の、田村厚子さんが、案の定、11時頃大日平より登ってくるのとバッタリ出合いました。今日は暑いし、もうここから一緒に引き返したらと水を向けましたが、せっかくだからと、彼女たちは大日岳めざし登っていきました。

私等は、リーダーとサブリーダーを除き、私も含め4名は中高年初心者の部類に入るパーティーなので、称名から大日岳を往復するという計画には啞然とするわけです。だって、私を含め皆さん、足を引きずりながらまだかまだかと、称名目指し、下っていたわけですから。午後5時頃、厚生年金休暇センターで一風呂浴び、帰途につこうとしたときに奥様二人の大日岳に登ってきたよ、今から、温泉めざして立山町界隈を走っているよ。と連絡は行ったときには、さす

が一同、へーってなもんでした。

*

撮影フィルムはポジ8本、まだ現像中なので、とりあえずデジカメでゲットした、朝焼けの剣をどうぞ。

大日小屋からの剣岳の先鋭なピークは初めてみる剣岳の別の姿でした。早朝の剣は、あいにくと全くの逆光になるので、モルゲンローテンは見られませんでした。朝焼けを支えるシルエットとしてゲットできました。

また、4時頃には、明るく輝く2個の星が頂上の上に光っておりました。一つは、昂らしいのですが、私は普段でも点が3つほどに見えるひどい乱視なので、その特徴が今ひとつ、判別出来ませんでした。ポジが上がってくるのを楽しみに待つとして、デジカメ画像（未送信）をどうぞ。

11期青柳

7月に尾瀬至仏山に登り、夏は「花の山」に限るとナットクし、岳人の別冊2001夏山「百花繚乱フラワートレッキング」を買い込んで選んだ山が「白馬岳」。(この別冊には19期の梅さんが「加賀白山」を書いており、これは去年登ったんだ)

コースは、8月7日から、猿倉の駐車場を起点に猿倉―大雪溪―白馬山荘(泊)―白馬岳―杓子岳―鏈ヶ岳―鏈温泉小屋(泊)―猿倉と白馬三山を一巡りです。(雑誌は、梅池から入り、清水岳トレックだが雪と温泉優先が私流)

さて、前週までの猛暑の続きで、好天・猛暑を予定していたが、7日、早朝基地である麻績の別宅を出るときから雨が降り出した。結局7日の雪溪登りは、雨の中。8日は、朝は晴れるも、10時頃よりガスが湧き出す。最後の9日も、雨になって、天気は2敗1分け。白馬大雪溪は雨の中を登った。ワングル1年の夏合宿、針ノ木の雪溪を雨の中登ったことを思い出す。また、3年の夏合宿では、槍沢の雪溪を、台風の来襲で雨の中非難した。どうも、雪溪歩きは、ついていない。

でも、2時間半ほど視界が利かない中を、ヒイヒイ歩いたら雪溪の上に出た。雪は得意だから、アイゼン無しで問題なく歩けたが、雨と汗でメガネが曇るのには参った。雨が小止みになり視界が広がると、そこにはお花畑が広がっていた。

葱平から氷河公園とお花畑が続く。上部の小雪溪は消えていたが、その分お花畑が広がっていた。オタカラコウとクルマユリの群落。ハクサンフウロが色を添える。葱平の名の元になったシロウマアサツキの赤い丸花が愛らしい。ミヤマトリカブトの群落が現れ、お花畑が紫色に変わる。その先は、シナノキンバイの群落で黄色に輝く。標高を上げるに従い、花々が変わるのが楽しい。

今回白馬の三つの頂では、すべて視界に恵まれなかったが、お花畑の多彩さは、タップリ楽しんだ。

二日目、森川さん推薦の旭岳のお花畑は、ハク

サンフウロが満開だった。鏈温泉に下る大出原のお花畑は、チングラマ(の実の穂)が一杯。その下部は、ミヤマキンボウゲの黄色い原。さらに下るとハクサンコザクラが咲き誇っていた。

三日目は、雨の中を下ったが、まず斜面を埋め尽くすクルマユリに圧倒され、次にシモツケソウの赤い花、そしてヤマリトラノオの薄紫、さらに白い花のトラキボオシやシロバナヤマホタルブクロと次々にお花畑の色が変わる。尾瀬で馴染みのキンコウカと水芭蕉まで現れ、最後はやヤマアジサイの青い花に魅せられた。

白馬の稜線の花は、有名なウップルソウは青い花が終わっていたのが残念。チシマギキョウとミヤマリンドウ、トウヤクリンドウが可憐さを競い、特異な濃青のミヤマアケボノソウが岩間に咲いていた。そして、圧巻は山の花の女王コマクサの大群落。杓子岳と大出原上部にガレ場の上から下までコマクサが斜面を覆い尽くすさまには感激。これだけのコマクサを見たのは、そう1年の夏合宿の蓮華岳以来だった。

花の名は、山小屋で買った花の本と、飽きずに撮った写真を見て書いたもの。白馬はまさに花の山。花の写真を撮っていると時間を忘れるから大変。二日目、3時ごろには小屋に着く予定が、5時を超え、夕食が始まっていた。

白馬山荘は1500人収容可能な日本一大きな山小屋だ。雨降りの火曜日だったが、さすがに人が多かった。カイコ部屋のたたみ一畳に寝させられ、食事は3交替だった。1泊2食付き8600円なり。ここの売りは、雲上レストラン、スカイプラザ白馬。生ビール860円なり。鏈温泉小屋は、鏈ヶ岳の中腹2000mの岸壁に張り付いて建つ。収容人員150人で、白馬山荘と同じ経営で、やはり1泊2食付き8600円。45℃の硫黄炭酸水素塩泉で、標高は森川さん指摘のとおり日本2位だが、天然湧出量は標高日本一だと言う。源泉は、小屋の上の岸壁の割れ目で、透明な適温のお湯がコンコンと流れ出るさまはスゴイ。2000mのこの場所のどこにお湯を作り出すマグマがあるのか不思議だ。ヨシズに囲まれた露天風呂は混浴、ただし20時～21時が女性専用時間。別にベニヤ囲いの女性専用風呂があり、通常は混浴にはならない。この露天風呂から眺める御来光(戸隠連山から上がる)が有名だが、当日4時半に起きると無常にも雨が降っていた。それでも、小雨をついて風呂に入った。雨の中でも入る風流人は他にいず、一人でユッタリと霧で真っ白なスクリーンに御来光を想像していい気分になったものだ。

前日は、白馬岳山頂での御来光を見る予定だった。朝4時過ぎに起きると、前日夜中まで降っていた雨は止んでおり、満月に近い月が出ている。勇んで仕度をして、御来光を見に登った。妙高の頂きがわずかに顔を出す雲海が見事。4時57分、空が紅く染まって、日の出の瞬間を迎えるまさにその時、富山側からガスが吹きあがり、無常にも太陽を覆い隠す。雲海を昇る瞬間を捕らえるべくカメラを構えていたが、ガスの中に輝く紅い丸い玉にシャッターを切ることになってしまった。

なかなか思いどおりに行かないもの。ガスの中を山頂まで登った。山頂には、新田次郎の「強力伝」で有名な50貫の方位盤がある。その表面には佐渡ヶ島から能登半島、白山、槍ヶ岳さらに富士山まで見えることが書かれているが、それらはガスの中でまったく見えなかった。巨大な方位盤のシルエットを写真に撮って山頂を後にしたのでした。

初めての山で、期待したことの100%を満たしてくれることはまずない。今回は、期待充足度45%くらいか？ また来いよ！と山が言う。ただ、ガッカリさせた後に、別の楽しさを与えてくれるのが山。白馬山頂では、ガスのおかげで、ブロッケン現象を味わう。また、大出原では、雷鳥の親子が姿を見せてくれた。カメラの前では絵になるポーズを作ってくれなかったが。

白馬岳は、あまりに有名なため避けていた山だが、やっぱり魅力一杯。平日で天気も悪かったこともあるのか、登山道も渋滞になるほどの混雑はなかった。山の魅力を手ごろにタプリー楽しめる山として、やはりお薦めだ。雨の山でも、最新装備で武装したオバチャンたちは元気だ。でも白馬ではファミリー登山者と若い女性登山者も結構いたのが嬉しい。

私も去年の白山以降、最新装備を整えてきた。ゴアテックスのレインスーツとダクロンの速乾パンツ・シャツ。LEKIのステッキ（フォットシステム）。さすが、良いものはやっぱり良い。雨の中の山歩きに効果を発揮してくえた。もっとも、レインスーツは上着はほとんど着ず、ワングル流の折りたたみ傘で済まし、ステッキは、カメラの一脚として使う方が多かったが。装備は元気なオバチャンたちにほぼ追いついた。あとは、継続的なトレーニングと時間確保で、投資資金を回収しなくっちゃ。さあて、次の秋山は、どこに行こうか？

11期井上家

名カメラマンにして名プロデューサーの加藤さんいもうえです。

いやあ、大作ですね。これで、ドキュメンタリー大賞は、もうもらったも同然ですね

昨日届いてまず、和子&聖子で試写会をおこない、その後、フミゾウ父も合流し、そして今日、計3回のビデオ上映会となりました。何回見ても笑えるのは、やはり「他人とは思えない二人」です。

あの楽しかった2日間は一生涯忘れられません。そして、このビデオも永久保存決定です。それにしても、なぜ30年前の映像にはわが父&母の姿が欠片もないのでしょうか？

P. S. 先日の白山登山は、天候も悪く日帰りとなりました。おまけに、負荷を増した身体がたたり頂上は断念。さらに、デジカメの映像はおしゃかになりリベンジを誓いました。10月には妙高に行きます。そして、体力づくりのために、ジムに通う予定です（9月から）

11期片田

森川様

写真有り難う御座います。みんなの笑顔がすばらしいです。あらためて先日の御礼を申し上げます。

先日のmailで平日の空いてる状況を知り昨日12日工場が休みだったので福島県の羽鳥へ行ってきました。家から車で2時間半で4時間券を買い思い切り滑ってきました。バイク用フルフェイスのヘルメットをかぶり（まだバイク乗っています）上級コースを直滑降ですべってきました。高速リフト7分滑降3分で10分ピッチで10回クラウチングでの90km/h前後でのコーナリングを満喫しました。スピードに慣れるともっと急斜面がほしくなりまた学生時代に使っていた長く硬いスキーをもってれば良かったと悔やんでいるのでした。ただし疲れて3時間で終わりにして帰ってきました。

11期加藤

立秋を迎え、暦の上ではもう秋です。

あーあー夏休みという期間ももう2週間となってしまう。

夏休みから本格的に始めたVTR野沢スキーがようやく7割方完成までこぎつけました。何せ、映像が無いのが致命傷です。苦労の跡がわかる作品となる事でしょう。2分間の編集に何日もかかったりVTR編集というのは、ただのダビング作業と違いホントに時間がかかります。少々お待ち下さい。

舟田事務局長様

BHの方はさらにもうちょっと待ってください。遅いので何もしていないのではないかと疑っておられることと存じますがそれでも能力的には精一杯なのです。

11期小山

暑中お見舞い申し上げます

新しいスキー板を買い

ジョギングに精を出しています

11期芝田

写真つきのメール、ありがとうございます。ベルクハイム、お楽しみのようで。わたしは、連休の後も新緑の信州をサイクリングしたりしております。

ちなみにわたしの妹もサイクリングに凝っており、2年つづけてカシュガルからビキョクまで国境を越えて走ったりしております。彼女、連休は糸魚川から諏訪まで走ったようです。

以下は、私が妹にあてたメールです。

私も後半は2泊3日のサイクリングに出かけました。この季節の安曇野はいろんな色が鮮やかですね。

1日目

池田町美術館まで車で運んで、ここからスタート。ゆっくりと、大町から先はひたすらこいで、木崎湖、青木湖は西岸を走り、佐野坂峠を一気に白馬まで下りました。夜は、みそら野のペンションで泊。野々市小学校の後輩になる青年と出あいました。

2日目

国道の峠を越えて鬼無里村、さらに登って戸隠へ。ここの民宿に泊。

3日目

同じ道を鬼無里まで下り、小川村、美麻村と山あい縦断。新行から木崎湖に下り、国道へ。そのまま必死に漕いで、穂高まで下り、そこで富士見行きの電車に乗りました。自転車は翌日車で回収。白馬村と長野市の間の山あいの集落、何度も行きましたが今の季節、特にいいですね。

11期長岡

前回書き込みにある、NHK-総合TV、11月22日(木)での、「人間ドキュメント」にて、タイトル「仙人池のかあちゃん」、再放送が12月5日夜24:15～にあります。仙人池小屋は、昔(25～30年ほど前)よく出かけていた所であり、それ以来のお付き合いです。

もし、ご興味のある方がありましたら、どうぞ覧下さい。ーただし番組では、もう少し、秋の見事な眺めが紹介されるかと思ったものの、人物中心でした。

ところで：

先の連休、お出かけの方も多かったと思いますが、当初の天気予報とは違って、3日間とも実に穏やかな秋の快晴と大展望。以下、遅ればせながら、各地の事情紹介をかねて。今年は、松本近郊を除いてもう無理ですが、雪解けの頃にお出かけになると、何れも、昔、WVで歩いた山並みを、懐かし偲ぶことができるでしょう。そんな大展望の地のご紹介です。

23日、上信越自動車道から、佐久・三才山トンネル・松本・安房峠経由富山県(実家)へ。

予定通りの快晴に気をよくししつつも、夜明けに望む浅間山はまだ雪もなく、完全に裸のイメージ。佐久の盆地では、朝方の低い霧。やはり晩秋の朝。三才山トンネル東側上部では、カラマツ林に名残の黄葉の色が見えるものの、日陰のこと故、朝の路面は圧されて凍った霜が一杯で多少怖い状況。これを抜けると、松本側は一気に日だまりといった風で、下るにつれて雪の北アルプスの眺めも。

時間にゆとりがあることから、毎回、市内を通過するごとに気になっていた「アルプス公園」へ。地形的には、松本盆地を隔てての北アルプス南部の展望が広がる筈、かつ、道路地図に「展望」のマークがあるので行ったものの、あちこち見ても樹木にさえぎられて展望には今一つ。終点にある博物館屋上に見える展望台へと、入館料100円で。ほどほどの眺めながらも、展望を金で買うようで今一つ。館内の展示も、一時代前のような。

公園内で、ゲートボールのようなのをやっていらっしゃった方のお話では、北にわずかに見えている「青年の家」辺りが良いと。行ってみたそこは、いまだきもう流行らないのか、閉鎖中。途中に一箇所、古い展望台があったが、樹木で今一つ。近くの畑での方に聞けば、西の方に大きな展望台とのこと。5万図に「芥子望主山」とある所で、誰も利用しそうな山中に

立派に整備された園地。「農産物直売所」の案内板があったので行ってみたところ、そこに巨大な展望台ー名称とはどう見ても一致しないが、予算(補助金?)のための方便か。施設は、木貼りのなかなかのもので、上からは、松本市街が一望、ただし、山のほうは今一つ。足下の最高地点には、江戸期の山岳信仰の石碑を集めた塚と、その中央に二等三角点がひっそり。

さらに北へ車道沿いに。好展望が約束されている地形ながら、樹木に隔てられて今一つ。一旦谷へ降りて、見えていたレーダードーム(?)高塔(5万図の846m地点)へと細い道を辿って、ここに到ってようやく北アルプスの大展望。さらに北へ、余りお勧めできない細い非舗装道を辿って、広い道に合流した所で、一旦南へ行って、光城山。かなりの規模の古い山城で、樹幹越しながら、展望もなかなか。後は、北へ進んで、長峰山(長野自動車道の明科トンネル直上)。

ここにも前述同様の展望台。しかしそれに登らずとも、広い山頂ではどこでも北アルプスの大展望。のんびりお弁当の人々や、ハングライダーの人。ここに到ってようやくにたどり着いた、白馬岳以下の延々と連なる北アルプスの眺め。地元の人には周知の場所でしょうが、近くを通過時に晴れていれば、今後は是非立ち寄ってみたい所となりました。

下って次は、木崎湖西の小熊山から鹿島槍スキー場への、尾根沿いの林道へ。途中にハングライダーの場所があったりで、往復の車もちらほら。しかし、標高1200～1300mの尾根を連ねる道のために、狭い範囲ながら路面結氷も各所で。展望は完璧に申し分なく、カーブを廻るごとに、爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、五龍岳。それぞれに谷を隔てて、山麓から、雪をまとった頂稜までの、余すところのない眺め。スキー場に到着して、ついでに西の大谷原へ。ここは、鹿島槍などへの登山口につき、車10数台。この河原からも、目前に仰ぐ雪の鋭鋒が見事。

24日午前：秋の抜けるような空のもと、実家から近いことを良いことに、富山県八尾町奥の白木峰へ。昨年の同時期にも訪れてご紹介を書き込みましたが、昨秋とは打って変わっての好天。風もなく、1600m近くの山頂でも寒くはなし。普通の年は来られないこども、今年の遅い雪と好天のゆえに、ほどほどの賑わい。と言っても、登山口(標高1320m)での車は数台ほど。

。昨年の今頃もここで紹介しましたが、隔てるものとてもないこの頂きからは、定高性を持って広がる飛騨の山々の彼方に、かなり下まで降りてきた雪の線を画した北アルプスの山々。北端の特徴のない山から始まって、丸っこい朝日岳、毛勝三山、奥の白馬岳など、剣岳、立山、薬師岳、その間に針ノ木岳など、さらに、水晶岳から北中央部の山々、特徴のある槍・穂高と、意外なところに笠ヶ岳。さらに、乗鞍岳、御嶽山。その間には中央アルプス。どっしりとした御嶽山から右(南)は、低くなって、ポチッと小さく小秀山なども。高山市と庄川上流域の山々が連なって、南西から北西方へは白山の高まりとその北の山々。能登半島の基部と富山湾などの眺めも。

この山での晩春にはスズタケ（ネマガリダケ竹の子）採り、初夏には山上の池塘でモリアオガエルの産卵、ややあって一面のニッコウキスゲ。今はまだらに雪の残る笹原と、それ以下の山腹は全山落葉を終えたブナの純林。数年前に完全撤去された巨大なNTT中継所跡は、そのヘリポートさえも次第に風化の中に。この道は、今週にはもう雪で上部は不可でしょうが、普通の年は6月下旬には可。辺鄙な所ながら、眺望にはお薦めの地です。

25日帰路、

予報とは打って変わって、くずれそうにもない青空。松本で、ついでにと、美ヶ原（王ヶ頭）へ。何よりも、松本・浅間温泉からの林道が無料になっていたのが嬉しく、上りつつ曲がるごとに、落葉を終えた樹間に見え隠れする北アルプスの諸峰を確認しつつ、終点の大駐車場に。標高2000mでのカラマツ林は、もう名残の色もなく、寒々としたこずえのみ。絹層雲のもとでかげりの見え始めた空。やや霞んではきたものの、さすがに展望の名所。北東方には、浅間山、四阿山など。北西方には、北方は霞んでしまったものの、松本盆地を隔てての北アルプス全山。この辺り一帯の道は、12月1日から4月19日まで冬期閉鎖の表示。アンテナ林立でバカにして、随分行っていなかったものが、行ってみればやはり展望の名山。改めて見直して、夏の高山植物の頃が楽しみです。

ともあれ、ちょっと得られないような、連日の展望でした。北陸ではいよいよ雪、ほかにも寒気到来の季節。では皆様、どうぞご自愛ください。

11期森川

小春日和？の23日三重の美杉ビレッジの温泉へ行ってきました。小春日和が昨日も続いたので鈴鹿の藤原岳麓の聖宝寺へもみじを見に行き民家の家先でやっていた店？で麦とろを食べってきました。鈴鹿でとれた自然薯も売っていたのですが、2000～3500円と高く擦るのが面倒とのクレームがあり、泣き泣き帰ってきました。

2001年、、、鉄腕アトムが活躍した20世紀に別れを告げ希望に満ちた21世紀になるはずでした。それなのに、銀行の不始末による不況の上に、アフガン、自衛隊法の改悪、財政改革が急務なのに外国には気前良く援助の約束をして、改革・改革とお経を唱えなにもしないK総理・・・・・・。そして、加賀の元おひい様のお言葉。

イイカゲンクラブの会長としては、耳は痛いですが、おひい様が言われることは同期の仲間としては寂しい限りです。加賀の元おひい様は野山の華のように永遠であって欲しい。

少し早いですが、2002年こそは夢のある年になって欲しいですね。それに備えて、12月は少し大人しくしてごますりに徹しようと思います。

今年は天候に恵まれ、予定した所はほぼ、全部

行けました。雨に降られたのは、スーパー林道・新岩間温泉の10/28（日）の午後のみ。雨で中止したのは11/3（土）の桑名の六華園庭園のみ。今年行った中でお勧めの宿を会長だけに知らせます。「仙水小屋」北沢峠下車徒歩40分、要予約、6500円（一泊2食）今までに泊まった中で最高の食事でした。是非来年奥様と二人でどうぞ。甲斐駒も近い？ですよ。行く時はくれぐれも予約を忘れずに。

TEL ; 055-276-6293

野沢、アオヤギさんが張り切っているが、祭りの日と合わない方がいいのでは？要確認方

13期柴田

13期、秋の同期会（11月3・4日）の報告をさせていただきます。

ワングルのOBでありながら、山河とは無縁の生活を送っている大半の13期、今年（第9回目）の旅行のテーマを『山』と『川』に設定してみました。まず『山』として選んだ京都『嵐山』はブッシュの代わりに人をかき分けるのがたいへんでした。『川』としての『保津川』は遡行したかったのですが、濡れるのがイヤと言う人もいた為、船に乗っての優雅な川下りと相成りました。油断したため、波をかぶってジープを濡らし、結果的に冷たい思いをした人もおりました。この2日間、歩きどおしで足腰に痛みを訴える者続出となりました。

渡月橋のたもとで頂いた秋田のそば、天龍寺の湯豆腐、共に美味でしたし、宿での京風創作料理、ワングルの食事と比べれば、上品な事この上なでした。年に一度の同期会は私たちににとって、かけがえのない『財産』となっています。今年は11名（伴侶1名オープン参加）が結集。来年の幹事・日程も無事に決まり、またの再会を期してして解散となりました。まずは報告まで。

15期上馬

9月の声を聞く頃から急に涼しくなってきました。山では朝晩寒いくらいでした。

先週は、楽々新道を上り、小桜平避難小屋泊、大汝峰から中宮道を下りゴマ平避難小屋泊、念仏尾根から三方岩岳へと2泊3日で歩いてきました。まだまだ紅葉は早いですが、ナナカマドの実が赤く熟し、イワイチョウやハクサンフクロなどの草紅葉が始まっていました。それにいろいろな木の実がたくさん実っていました。ベニバナイチゴ、クロマメノキ、クロウスゴ、ガンコウラン、サンカヨウなどなど。

学生時代、PWで一緒に行ったメンバーの人たちには、思い出された方もいるかもしれませんね。どれも食べられる木の実です。4年生の時、別山山頂でガンコウランの実を集め、持って帰り果実酒にしたことがありました。今ではそんなことはできませんが（自然公園法に触れます）、ひとつぶ、懐かしい味を味わうくらいは、山の生きものに許しを請うてもよいのではと、楽しんできました。

ゴマ平の小屋は2年前に新しくなってから初めてでした。旧ゴマ平避難小屋の少し上、三方岩岳方面へと分かれる分岐に、2階建ての木の香も新しい小屋です。詰めれば20～30人は泊ま

れます。水場も近くに十分な流れがあります。ちょっと残念だったのはトイレの臭いのきついこと（この秋には改善される予定）でした。登山道の状況は概ね良好で、草刈りもされていました。

今回も動物の糞拾いでした。3日間で合計180個ほどありました。テンやキツネの糞にも木の実が多くなり、秋を感じました。

15期宇野

秋の小屋酒場、参加出来ずに残念です。

10月6日の締め切りまで参加しようか迷いながら気力のなさや浮き世のしがらみで、当日は休日出勤で過ごしてしまいました。

何か、大事なものを置き去りにしながら日々をついやしている後ろめたさをいまだに感じている自分に青臭さを感じながら、50歳を目の前にする我に愕然とする今日この頃です。

倉谷の流れに身を浸す我を夢想しつつ、現（うつつ）に流す日々、「おろろ」の幻の雄叫びが迫ってきます。気力が萎える前に、倉谷の息吹をもう一度この身に吹き込んでほしい。小屋酒場には行けなくても、いつかは行きたいと思っているファンが大勢いることを忘れないでください。

15期舟田

さて、先月、呉服屋（!）の催しで、運勢をみてもらえるのがありました。保護者懇談会では、どうシビリアな現実をぼやかした上にアドバースすればよいかわからず。どんな話術をするものかに興味があって、みてもらいました。彼女の占いの基本は、西洋占星術と姓名学なんだそうです。牡羊座の星と「節子」の名前はジャストマッチで、強いリーダーシップをもつことになるのだそうです。（ンダ、ンダ!）今年が変わり目の年にあたり、家族や何やで控えざるをえなかった所（何かの星が、かぶさっていたそう）、来年からはそれがなくなり、一挙に能力を开花していけるそう。（これ以上翔んでどうするんじゃ…旦那の陰の声）初期の目的を忘れ、上機嫌になってしまった私。催事でなかったら、思わず包んでしまったかも。ともあれ超元気です。今晚は、村田お姉様の橋渡しで、木下元々室堂主任と力丸様計4名で会食することになっています。次回会報特集「山の語り部」の取材のためです。

3日前には、まず練習も兼ねて、林ナカオ代表に取材させてもらいました。あとで、送信しますが、それで特集の意図する所は十分に理解してもらえそうです。全員（6名を予定）の取材が終わったところで、微調整をしますが、この草稿で、HPに掲載していただいても構いません。（あれこれと、総会にむけての準備はしていかにやあ）

なお、高三郎の新道の上部（クラコシ尾根）、作業が危険であり、やってもまたコシアゲ谷に崩落してしまいます。二又側（登りであれば、右）斜面にトラバース道をつけ直ししよう。そうすれば、女子が多数になってしまうかもしれない現役でも維持できるレベルになるであろう。と、来年、ナカオ他の方の手も借りて、付け直しをやってみるつもりです。標柱も立てた、ダムサイトの道もきれいになった、小屋だって楽しく使える…今やらないと、高三郎は復活で

きません。現役に200万円は持ち過ぎ。それを原資（やったぜ飲み会程度）に、人を雇い、安全な登山道にしていまい、今後の現役も長く部のバイトとして関わっていけるように、投資したいと思います。犀川源流域は、ナカオが世間に認められた大切な山城であり、どうしたらいいのだろうか？に答えてくれるボスを得たのは、それも「節子の星」なんでしょうね。付け替え作業については何度でもではなく、一度の山行で。その替わり、現役はもちろん、草刈り十字軍のように多数に参加してもらい、一緒に道を開いた感動を味わってもらおう。そのことで現役の「高三郎観」を一挙に変えてしまおうと思っています。

まさに、「開花の年」（もうちょっと、宝籤が当たるとかさあ…でも歓迎なんだけど）こんなことにワクワクしてしまう私って…。林さんのキャリアと人脈を頼ることになるので、彼の決定にあわせて。現役は主催側であっても、それに協力の決定順となります。来月のナカオ納山会には、来年度にやる仕事として林さんが発表するでしょうから、OB会役員の新年会、また会報にも間に合うと思います。任期末にいい仕事ができるんじゃないでしょうか？

15期松林

さて、1年半前からウオーキングにはまっている流れで、17日の土曜日、封切初日に映画「伊能忠敬一子午線の夢」を見に行ってきました。その熱気がさめぬまま、次は本屋へ立ち寄り、新潮文庫の「伊能忠敬を歩いた」（佐藤嘉尚著）を買ってきて読み始めたのです。すると、その65ページに「国土地理院の長岡正芳さん」という方が登場するのを見つけました。はて？「長岡正利さん」ならよく存じ上げているのですが、国土地理院には同じような名前の方が別にいらっしやったのでしょうか？

あの「伊能ウオーク」は、残念ながら朝日新聞社の主催だったこともあって、イベントが行われた当時はまったく関心がなかったのですが、今になって、映画を見たこともあり、がぜん興味がわいてきました。長岡さんが当時、このイベントに深く関わっていらっしやったことも、佐藤さんの本で改めて知りました。それにしても、伊能忠敬という人は、ウオーキングの神様だったんですね。

<長岡さんより返事>

それは、小生の名の書き間違いです。（^^;）

なお、現在は、国土環境株式会社におります。（昨6月より）

ところで、今朝は、朝の2時半から、しし座流星群を見に。例年になく見事で、時には、2～3個が同時に出現。

よって今日は、日中もふと眠くなるような一日でした。

いま思い起こすと、流星跡を残したようなものの場合、聞いているラジオに雑音が出ているような、ふとそんな気になる。静けさの夜空の中での大競演でした。

18期大西

残暑お見舞い申し上げます。

ご無沙汰しております。（昨夏の花・星・人の感想文以来、当節は大変お世話になりました。

）当方、山は登りたし、しかし、気力、体力、時間が行く手を阻んでいる状態が続いています（言い分けか）昨日、お盆休みを利用して帰省（石川）から戻ってきたところです。石川県も暑かったけれど、ここ大阪は37℃と狂わんばかりの暑さです。東京も暑かったし、この夏、自分の動くところに灼熱の太陽がついて回っているのではないかと思うほどです。

今、エアコンをびんびんかけて甲子園を見ますが、球児たちが熱中症にならないかと心配しています。でも、若さってすごいですね。アウトとわかってても懸命にヘッドスラディングするし、ベンチに戻ってくるのも走ってくるし、これが高校野球のさわやかさか。ティーショットを大きく横に曲げて走ろうとしない大人と違いますね。

私もさわやかなビールでも飲もう！！ ちょっと違うかな。

皆様はいかがお過ごしですか。

さて、この度、突如、東京転勤が決まり、7月より江戸川区に住んでおります。家族は父との同居に何の関心を示さないため、当然単身赴任です。当面の課題は休日をどう過ごすか。何年いるかわかりませんが大都会を楽しみたいと思います。在京のOBの皆さん、暇があれば声をかけてください。

18期横井

新年明けましておめでとうございます。

18期の横井です。

毎々OB通信ありがとうございます。奥名会長のお便りに季節を感じ、添付いただいている写真に心がなごみます。

やまざとも内容がますます充実して舟田さんはじめ事務局の皆さんにはお礼の言いようがありません。

なかなか仕事に追われてと言い訳して、登山することに気が向かないですが、歳を取るにつれて、年1回位自然に親しみたいと思うようになってきました。去年は5月の連休に谷川岳に行きましたが、思いの外、雪が深く、家族は登山の経験もないので途中下山してきました。「行きたいなら、お父さんだけで」と言われ、今年はひとりで行く事になりそうです。

22期森

舟田さん、絵葉書ありがとうございます。いい秋の日でしたね。いつか行きたいという気持ちがまた募りました。山小屋酒場の案内もありありがとうございます。参加はできませんが、皆さんで懐かしく楽しい夜をお過ごしください。

22期の青木 康治さん（旧姓嶋田さん）が2001. 9. 15に急逝されました。闘病生活の末ということでした。同期のメンバーで福井松岡町で行われたお通夜に参加しました。なかなか会えなくても、いつか会える、元気でいてくれていると思ってきたのに・・・。とってもさみしくなりました。また、22期で集まろうとその夜話し合いました。

26期畠山

休日の早朝、インラインスケートをやっています。冬はスピードスケートをやりますが、滑りの感覚はよく似ています。通常のスキーとは全く違いますが、ショートスキーの感覚とは

通じるものがあり、緩い下り坂ではショートウェーデルンを楽しむことができます。アパート前の水族館の駐車場で、子供の自転車と競争しながら遊んでいます。早朝トレーニングは海岸線を30-50km走ります。直江津から糸魚川までの海岸沿いのサイクリングロードが整備されていて、ここを朝日を浴びながら風を切って走るのはとても爽快です。親不知あたりまでの海岸線は変化に富んでいて、遠出の楽しみでもあります。

スピードや技術を追求する走り方はしないので、靴は柔らかめで、荒れた路面や、多少の段差でつまづかないように車輪サイズを大きめにし、柔らかめのローラーにしています。ブレードが外せるタイプなので、疲れたら復路は電車に乗って帰ることもありますし、子供の自転車に付き合いながら遠出することもあります。もう1ヶ月もすれば北アルプスや妙高は真っ白です。10年ぐらい前は、11月の2週に唐松岳の上から八方尾根上部の初滑りを楽しむのが恒例になっていましたが、今年はどうでしょうか。

36期蒲原

いつもお世話になっております。

又今年も、息子の追悼山行に行ってきます日程は8月24、25、26日です。剣岳

今年で9回目です

私達夫婦は息子を通じて、山が好きになりました。ッテ行ってもまだまだ駄目ですけど、剣にいきなり行き色んな山に登ってから行くなら解るけど、まだまだ、未熟ですが少しずつ他の山にも行ってみようと思っています。

又、行ってききましたら報告します宜しく願います。



年賀状より

(年頭挨拶部分はカット)

(この他に近況報告相当がない方分)

4期 高田 昌嗣

最近は大住山など、近くの山々を歩いていきます。

5期 稲葉 正己

私儀昨年末をもって永年のサラリーマン生活を終えることになりました。在職中は、格別のご厚情を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。これからは自然に楽しみつつ、これまで時間に追われやり残したことに取り組んでゆこうかと考えています。今後とも相変わりがせず、よろしくお願い申し上げます。

11期 小山 清

昨年は春にはバの街を歩き、秋にはハーフマラソンを走りました。

12期赤地 賢一 14期赤地 喜久子



2001.10.20 第一子 祐加子 結婚

15期 松下 重人

H14年4月山代で開業します。

16期 北川 隆次

春には昨年の雨飾山のリベンジを考えています。

16期 山内 政司

先日、運動不足がたたリ、腰を痛めました。そろそろ健康を真剣に考えねばならない年令に來ているようです。

17期 長田 正文

今年は年間10非の山登りを目標にしたいと思っています。

17期 渡辺 和文

17期で金沢B級グルメツアーを計画中です。懐かしの店の情報ありましたらお教え下さい。

18期 大西 正明

昨年7月より東京勤務となり、単身赴任生活を送っております。単調な一人暮らしになりがちな自分を叱咤し、できるだけ外に出掛ける事にしています。たまに山に登ったりもしています。今年は南アルプスに挑戦したいと思っています。年末に17期(川村、藤野、長田さん)と忘年会をやりました。

20期 松下 和隆 20期 松下 早苗

謹賀新年

東海自然歩道を完歩する。この家族計画も2年目を向かえ、昨年の夏は裏富士を歩きました。田貫(たぬき)湖から本栖湖を経て精進湖までの15キロ。3泊4日のコースでした。右の写真は田貫湖畔にての一枚。



左の写真は、「本栖湖の人魚姫」。魔法使いにお願いして尾ひれを足に変えてもらったところ。と思いたくなるほど神秘的な湖。

右の写真は、パノラマ台(1305)から見た夏富士。今コースの最高点です。ちょっと雲がかかっている残念ですが、富士の大樹海と左右に富士五湖(本栖湖、精進湖)が見下ろせる贅沢な穴場です。



ごふ、2代して、青の宮に参りまわす。

20期 久富 象二

新年早々、カンボジアへ行ってきます。

25期 辻村 善徳

昨年は秋にベルクハイムへ“単独行”しようと計画しておりましたが、残念ながら果たせませんでした。今年こそ…。



ペニツ

『花の山旅⑫白山』の 光と陰

梶 典雅(19期)

舟田編集長から頼まれた「裏話」になるのかどうかは別として、とにかくあんなしんどい思いはもう二度としたくないというのが、本音の話。

依頼の電話があったのは7月上旬。受け手がいないと、相手(「山と溪谷社」の下請編集者)は焦っていた。よくあるパターンだ。そもそもこの本は、花の群落写真とエッセイ風の文章で綴る「花のギャラリー」、百数十種の花を色別に並べて解説する「花図鑑」、花を見るための「コース案内」、代表的なお花畑で見られる花を網羅的に記す「花マップ」などからなる単行本、使用写真は300点にもなる。おいそれと引き受けられる話ではない。が、「花図鑑」に相当する『白山 花ガイド』という前歴?がぼくにあったことが、結果的には、お互いの決め手になったように思う。

頼んでおきながら「手持の写真を即、送れ」などとは、さすが全国区出版社の威厳。これは、「審査」にほかならない。そして、送られてきた数冊のシリーズ既刊本を見て驚いた。名だたるプロの写真家が名を連ねているではないか!

幸か不幸か、審査をパスしたぼくは、7月中旬から取材を開始した。ところが、あの2000年は変な年で、下旬は予想外の悪天候に見舞われ、お花松原のクロユリも平年なら適期の8月上旬でまだ蕾。ならばと12日に再訪したがまだ四分咲き。ええい、ままよと翌週、万難を排して登れば、花は満開なのに現地に着いたらガス。といった具合で、夏はのんびり東北の山へ、などは夢のまた夢、7回も白山に登るはめになった。後半は休みも取れず、マイカー規制もあって、朝5時市ノ瀬始発のバスに乗り、夕方5時30分別当出合発の終バス目がけて駆け下りる、という鬼のような日帰り山行。思い出してもゾッとする。

だがしかし、それより辛かったのは、そのあとである。記録を見れば、その年の8月までに30回を数えた山行は、その後パッタリ途絶え、休みはひたすら原稿書きと写真選びに追われる日々。猛烈なストレスとの戦いで、正月も登り初めもスキーもなかった。

というわけで、なんとかヤマケイの出版企画

花の山旅 ⑫

白山

梶 典雅



山と溪谷社

● 著者紹介

梶 典雅(とがのりまさ)

1955年、石川県金沢市生まれ。金沢大学在学中、ワンダーフォーゲル部に所属し、白山や北アルプスなどに登ったのが、高山の花との出会い。以来、山の自然に魅せられ、白山山系を中心に山遊びを続けている。著書に『白山 花ガイド』(橋本確文堂)のほか、共著・分担執筆として、『山と高原地図 白山』『マップルマガジン 白山』『マップルマガジン 自然の遊び場(西日本)』『日本百名山を登る』『関西の山歩き100選』(以上昭文社)、『花の百名山登山ガイド』(山と溪谷社)、『写真集 白山』『山菜・木の実ガイドブック』(以上橋本確文堂)などがある。金沢市在住。

● 花図鑑の植物同定
野上能力

● 編集スタッフ
Wakis Corporation
ブックデザイン
馬崎正司 (Dopai Inc.)
● 本文デザイン
Wakis DTP Systems
● 図版
GDO
● 取材・執筆協力
MUTSUMI
● 情報提供等
石川県自然解説員研究会
石川県白山自然保護センター
白峰村・尾白村・吉野台村
(株)ツワブキ白山
(株)白山観光協会
(株)橋本確文堂
(株)リトルアドベンチャー

に穴をあけずに済んだのであるが、ここで思い出した裏話をひとつ。シリーズ⑤『白馬岳』の「花図鑑」の解説に、ぼくが『白山 花ガイド』で試みた名前の由来や漢字表記が多くあることに気づいた。実は、数年前、白馬のみやげもの屋で目にした『北アルプス 花ガイド』なる本、体裁はもちろん、花を色・形で分ける苦心のオリジナルリティまで見事にパクられ啞然。実用新

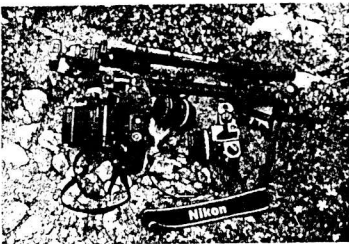
作例6：ウラジロナナカマドと大汝峰／前面に花を配し、のびやかな斜面と青空、
広がる雲を強調した。24mm広角レンズにPLフィルター使用



作例3：ツガザクラ
朝露の宿った花をねらった。ならば右の雲はカットし、縦位置で撮るべきであった。
55mmマクロ使用。



写真では、花自体にモデルとしてはや
り不真似があり、光の強さも異なったが
群生する様子とハイマツの下という生
環境の描写も意図した。24¹、使用。



カメラ：ニコンFM2チタンボディ、ペンタックス67
 レンズ：ニッコール24mmF2.8、ニッコール55mmマクロF2.8、SMCペンタックス677.5mmF4
 三脚：ヘルボン「カルマーニュ」643、雲台PH-263、ミノルタ製ミニ三脚
 その他：リリース、PLフィルターなど
 フィルム：フジRVP「ヘルビア」をISO-100(増感)で使うことが多い
 他に「プロビタ」など

主力カカラは、過酷な環境下での使用にも耐える堅牢さと機能でマニュアル機のDM2-Tを使っている。三脚はローアングルができるもの。三脚は、このタイプでは丈夫な方で、大型三脚を使いたいばいに広げられないような狭い道や岩場などでは、意外に重宝している。

▼おわりに

フイグルムは惜しまず設けラツト
私寫眞を始めたころは、一枚ずつ撮つて、
あとで後悔することが多かった。いいと思つた
被寫で出さなかつたら、絞りを賣出を要して何枚
か擧げておきたい。また、横位置を横置たら、
視点を変えて縦位置でどうかといふ工夫を
することゝいふ。

◆被寫寫件をよく観察する
天候や變遷といつた場合はともかく、花や山は
逃げてゐない。あつてすに、まず観察し、
何をよく撮りたいかを吟味する。また、作例として
3のよき失敗は免れる。また、見ずしてや
り、小さな花にも美を発見するといふ観察眼が
養われ、花の名前も覚えられらるだらう。



近年、白山の花を見ると、よくぞ生きてくたけにも咲いてくれた」と思う。このまなかなば咲くのは「西の崖」ぶち。このまな酸化が進めば、真先に絶滅する運命にあるとも言われている。白山の花のすばらしさに感ずることが、白山はもとより、自然をいとおひき持ちにつながるかと信じ、本書もその一助

慮して行動するといふ。

★4 掌堂や中宮道お花松原がおすすめ。ハクサンコサクラならな南電力馬場もよい。

★5 お港めぐりコースのコイワカガ、オチングルマ、ミヤマキンバイなどの群落のほか、観光新道「馬の立置」、付近や平瀬道上部、釈迦新道、屈託新道などに見られるミヤマトウキ、ニッコウキスゲ、オタカラコウ、シモツケソウ、ハクリソウ、タカネナデシコ、タカネツムシムシなどの共生群落（詳細は「花マツプ」参照）が代表的。

コースからの特徴的な主峰群が代表的景観。そのほか、石礫白道からの別山と主峰部、四塚山あたりからの大汝峰、加賀押定道からの四塚山、中宮道へ花松原からの刺ガ峰と大汝峰など。宿泊施設のある室堂や南嶺カ馬場を拠点に、いくつかのポイントをめぐるのも効

はじめに

の専門書は多々あり、このリミテッドで著名な方々が的確な手ほどきをされている。ところで、これは、私入りの撮影に参考する考え方と自由な花を撮る際に参考になると思われる事柄を記すことで、お話しを願いたい。

❶私が考える花の撮影法

花の撮影にもさまざまな目的や意図と、それに応じた技術、手法がある。こはいいうまでもない。それを以下に整理してみたが、あくまで概観的な区分であり、実際にはまた多くのことが多い。●観光的な写真❷ありのままを写し撮る。

❸国家的写真❹一個体としての特徴がわかるよう

自由に合ひはじめた20数年、意識して写真撮るようになってからも10数年を数えるがいたずらに年を重ねるばかりで、これまでもそして多分これからも素人の域を脱し得ないであろう私である。加えて、撮影技術に關す



撮影中の筆者。撮影機材の写真もそうだが、機材や私がいるのは「登山道」である。意のため

に、花にも葉にもピンとを合わせて撮る
例①

(2) 生徳の写真は、種としての特徴に加え、生育環境もわかるように周辺を入れて撮る。例②

● 主観的な写真 ● 自分の思いを表現する
(3) 造物的写真 ● 感性に訴えかける花の色や形など、最も表現したい部分を強調して撮る。例③

(4) 情景の写真 ● 花を景観の主要素ときには順役として、情感のある風景を作画する。例④



作例①・ノクサンニサクレ
全体を写すことを意図したが、結れたま
まで描ってしまった失敗例。55
使用。

★1 説明的、写実的な写真といつてもよい。星屑のようなものもこの範疇に入る。(○)自然的では50。構図から100。くわいのマクドレルズ。(○)生薬的では標準から広角系のレンズを使うことが多い。花の全体から葉、あるいは周辺部の環境にまでピントを合わせるには、絞りを絞って被写体深度を深めることになり、どうしてもシャッタースピードが遅くなるので、手ぶれ防止に三脚を使用する必要がある。



写真7：空平に咲くミヤマクロユリと御前峰



写真8：シモツケソウやイブキトラノオなどが混生する
日光新道のお花畑

作例四。

いにせよ、メインとなる花、特に群落をいかに曲面に入れるかが重要なポイントになる。当然のことながら、背丈が低く、小さな花ほど曲面構成や、花から背景までのビント合わせが難しい。

次に、自由でぜひ、撮影したいのがミヤマクロユリやハクサンコサクラの群落写真です。また、多彩でカラフルなお花畑、なお、白山の特徴のひとつといえよう。なお、ハクサン山の

動物18種は67ページに書いたが、目立たないスケッチで済ませた。山田熊等のもはともかく、ハクサンチンゲ、カキナガメ、フクロ、シヤジソ、トリカブト、ヒメツバメなど、やはり白宙でカメラに収めておきたいものであろう。

この日は、群芳写真堂を目的としていたのだからシヤジソの軽見込を心かっている（もとから機械体力にもないだけのことだが）

例作4、ハ・オン・クア
千鳥が池の底の雲に映える赤の灯やかさ
たけを引く 旗本と花の有名な花を表現し
たれ、御本座の若衆と入れることにより通
所を異にした。35分 使用

★3 熱地、方御や室々から。なだ
らかに横たわる御前時やコンバク
トにまよった別山。 お池めぐり



明確にして、あれもこれもと欲張らないことが大切。そのため、ハツクをホリイとつけた青黒処理や、全針を常葉の黒い切ったカフトなどに合わせるが、③造形的では、(4)情願的では(2)と同様のレンスを使う場合が多く、効果を高めるワイルターを使用することもある。

案特許でも取っておけば良かったと思ったほどだ。『白馬岳』の著者が、その本を参考にしたかどうかは知る由もなく、元の文献が同じであれば解説も似てくることは当然であるが、『白山』はこのシリーズでは後発になるため、同じような書きぶりは逆にこちらの品性・良識を疑われかねず、いらぬことに時間と労力を費やした。ついでに言うと、この『白馬岳』や『北岳』『中央アルプス』などに、セリ科などの植物名誤りがあった。専門家がチェックすることになったようで、『白山』の奥付にも「花図鑑の植物同定」者の名が記されている。



なお、「取材・執筆協力」者については多言しないが、撮影アシスタント兼モデル？から食料兼記録係、ポッカ、運転手、写真の整理・選定、カウンセラー、その他雑用まで、あきれながらもこなしてくれ、まさに内助の功。陰の力であったことは間違いない。

著者軽薄

付：苦労の後には喜びがある。これがきっかけで、2001年夏は市毛良枝さんと白山に登る機会に恵まれた。『山と溪谷』2002年6月号の特集だとか・・・。

2001年6月3日(日) 北日本新聞より

北ア 毛勝谷 2人滑落、重軽傷
二日午後零時半ごろ、北ア・毛勝山の西側にあ
る毛勝谷(約一、九〇〇
m)で、下山途中の広島
市東区牛田東、井護士、
新谷昭治さん(三〇)と広島
県廿日市市串戸、団体職
員、乃美康明さん(三〇)が
約二百三十m滑落、新谷
さんは深さ約十五mの雪
溪の割れ目に転落した。
県消防防災ヘリで県立中
央病院に運ばれ、新谷さ
んは全身打撲で重傷、乃
美さんは頭や肩などの打
撲で軽傷。
新谷さんらは広島県か
らの三人パーティーで、
一日に魚津市側から毛勝
山に登った。魚津署によ
ると、下山途中に新谷さ
んが雪溪で足を滑らせ、
前にいた乃美さんも巻き
込まれた。登山中に事故
を知った金沢市の男性公
務員(三〇)が携帯電話で一
九番。県消防防災ヘリ
が魚津署山岳警備隊員を
乗せて二人を救出した。
毛勝山(二、四一四m)の
頂上には魚津市と宇奈月
町の境がある。

* 内助の功の主は、21期梅 睦美さんです。

* 前ページは無断複製に該当しそうですが、あくまで「宣伝」です。OBの皆さん、現役のみなさん、本物は美麗フルカラーです。山溪のためにも、梅さんのためにも、実物を買きましょう！

毛勝山遭難救助体験記

梅 典雅(19期)

2001年6月2日の正午過ぎ、ぼくと深田君(20期)は、毛勝山の山頂をあとに、毛勝谷源頭の雪溪を下っていた。実は、毛勝は数年来、「グループ薮」改め「山楽同人やぶ」の栃尾君や久富君(20期)らと「行こう、行こう」と言っていた山で、KUWV富山支部(そんな組織はないと思うが)が誇るアルピニストの早川君(19期)をリーダーに、というのがぼくの思いであった。ところが、他のメンバーは、仕事、アキレス腱切断、痔など諸般の事情により、参加できなくなったというわけだ。

稜線直下の傾斜は、40度近くはあると感じた。「帰りはグリセード。ウッヒッヒ」という楽しみに、恐怖心が交錯してきたが、それでもアイゼンをつけずにソロリ、ソロリと滑っていた。下りはじめてすぐに、犬を連れた3人組を抜いた。稜線のコルで幕営していたパーティで、大きなザックを担ぎ、怖くて立って歩けずに、尻をついている者もいた。



【毛勝谷(阿部木谷)の登り口付近から】

さらに下ったとき、大きな叫び声が聞こえ、振り返るとあの登山者が滑落してゆく。そして、もう一人。一瞬、止めようと思い、駆け寄ったが、あまりのスピードと急斜面に、見送らざるを得なかった。はるか下方で、一人が止まったのが見えた。これは、現実のことなのだ。とにかく急がなくてはならない。グリセードで下る

が、落ち着かなくてはという意識と緊張からか足が疲れて、小刻みになる。やっとたどり着くと、顔面血だらけではあるが、意識はしっかりしている。先に滑落したもう一人を探すと、深さ6メートルほどのクレバスの底に、こちらも血だらけで倒れていた。生きていることはわかったが、呼びかけても返事がない。

これはヘリしかないと思った。深田君もかけつけたが、ザイルもなく、クレバスには降りられない。そこへ、ボーダーが滑ってきたので、呼び止めて連絡を依頼。その直後、下ってきた登山者の携帯を使い、魚津消防署にヘリを要請。クレバスの遭難者は、反応するようになり、投げ入れたスポーツ飲料も飲んだので少し安心したが、ショックのせいか意識は朦朧としているようだ。何度か消防や警察から問い合わせがあり、遭難者の様子や現在地、天候、風速などを知らせるが、ヘリの遅いこと、通報から1時間はたっただろう。

救助隊員が降下して、クレバスから遭難者を吊り上げようと試みるが失敗。山岳警備隊を呼ぶことになったが、ドジなことに無線は電池切れ。携帯で連絡はとれたものの、あつという間にあたりはガスに包まれ、どうなることかと不安が胸中を去来する。それに、寒くて歯の根も合わなくなり、ボロシャツに薄いカップだけという軽装を後悔した。

しかし、幸運にもガスの晴れ間があり、山岳警備隊員が降りて遭難者を救出、ヘリに収容することができた。この頃には、登山者も増え、みんなでザイルの確保やヘリへの収容に協力したが、ホバリングの風圧はすさまじく、自身の確保も怠れない。そして、遭難者のザックを深田君と交代で担ぎ、降り出した大雨の中を下山



【降下する救助隊員】

したのが4時15分、3時間近くも現地にいたことになる。

結局、クレバスに落ちた人は、記憶に障害が残ったものの、1か月後に退院したと聞いた。事故の原因は、端的に言えば、自分たちのレベルを超える山に来てしまったということであろう。しかし、軽装でアイゼンもはかずにヒョコヒョコとグリセードまでしていたぼくも、ひとつ間違えば誰かを巻き添えにしていたかもしれないと思うと怖くなった。

なお、新聞記事の「230メートル滑落」は標高差で、距離はゆうに500メートルを超えていた。岩の斜面にぶつかった際や雪上の大石に頭を強打しなかったことは幸運だった。



【収容される遭難者】



白山での遭難者救助について

37期 若山 悟

北 國

2001年(平成13年)6月3日(日曜日)

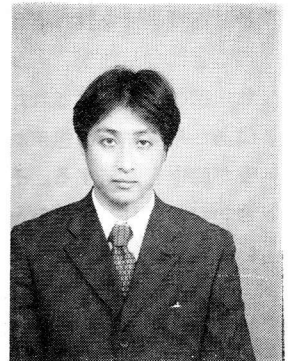
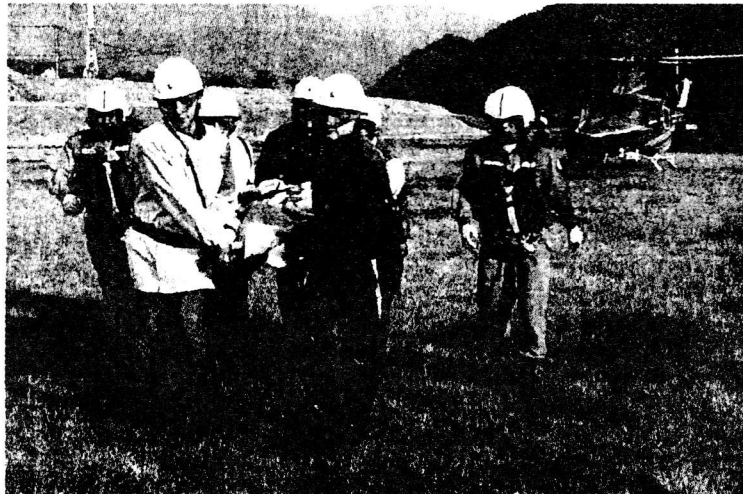
二日午後零時四十二分助した。女性(鶴来町水戸町の公立つるぎ病院に運ばれたが、右足首の骨折と全身打撲で重傷。鶴来署によると、女性
山中の金沢市三馬一丁目、会社員女性(玉が滑落したと、別の登山者から鶴来署に通報があった。松任石川広域消防白峰分署員や登山中の県高校山岳協会員らが女性を登山道まで引き上げ、午後四時四十五分、県消防防災ヘリが釣り上げて救助した。)

白山で女性滑落、重傷

登山中、県防災ヘリが救助

付近にいた登山者が女性を見つけ、別当出合まで降りて知らせ、高校総体の山岳競技で居合わせ

救助した女性をヘリから担架で救急車に運ぶ消防隊員 11日午後5時20分、鶴来町の手取川十八河原



去る6月2日、白山で遭難者を救助したが、その原稿依頼が6ヶ月後に突然やってきた。

私としては、すっかり忘れていたことだったので思い出せる範囲で書いていきたい。

まず、新聞には高校山岳協会の人々が救助したと書いてあったが、それは誤りで石川県高体連登山部が正しい。この組織は、高校の山岳部の顧問教諭で構成されているものであり、私も小松高校山岳部の顧問として、この組織の一員になっている。大学時代、私は雪山には行かず、3シーズンだけ参加していたというナメた部員であったが、そんな私が最近では同期の中で一番山に関わっているというのも、なんだか不思議な感じがしている。この高体連登山部の活動は、主に各高校の山岳部の練習登山・高校総体・国体などの引率である。その他に、数年に1回の割合で、ヒマラヤ登山、パキスタンでの学校の建設や植林などのボランティア活動も行っているが、私はこれらには関わっていない。

事件は、この組織が主管している高校総体3日目に起きた。高校生約80名、顧問教諭約20名は、朝9時頃白山室堂を出発し、市ノ瀬までを砂防新道を通るルートで下山していた。

この時期はまだ、かなり雪が残っており、室堂も屋根しか見えていないくらいである。黒ボコ岩直下の十二曲付近も当然雪がべったりとついていて、そのとき私は、生徒が安全に下りるのをサポートするために、急いで下のほうまでいかなければならなかった。そのため、覚えてたのグリセードをやってみたら、案の定転んでしまった。ピッケルで止まろうと思ったけれどピッケルを離してしまい、100mほど滑落してしまった。幸いにも他の顧問が下にいて止めてもらったので事なきを得たのだが、その後急な斜面を下りるのが怖くなった。

そんな中、南竜分岐を過ぎて甚ノ助小屋に行く途中で、1組の中年夫婦(?)があとから追いついてきた。登山隊長であるK教諭が話しかけたら、エコーラインから女性が滑落して万才谷で動けなくなっているの、救助を要請するために下山しているところだということであった。携帯電話を持っていたがその辺は電波が届かないので、公衆電話があるところまで下山するということだった。天気は曇りではあるが、ガスってなかったのでヘリが飛んできて救助するだろうと私たちは思い、大会中でもあったのでそのまま下山した。

しかし、甚ノ助小屋で休憩していたときからだんだん天気が悪くなり、小屋を出発してまもなく小雨が降りだした。1850m付近まで下山したときに、天候がかなり悪化してきた。ヘリが飛ぶかどうかかわからない状態にまでなったので、誰か遭難者の側にいたほうが良いのではないかということになった。大会中は隊を3つに分けて行動しているが、そのうち2隊はすでになかなり下山しており、大方のベテランの顧問も一緒に下山していた。私は最後尾の隊と一緒に歩いていたのだが、その隊は顧問は約6名、生徒約20名だった。まずは生徒を安全に下山させることが一番優先されることなので、残った顧問の数を考えて、遭難者の捜索は比較的装備もしっかりしていたK教諭と私が捜索に行くことになった。私は雪山の経験が浅いので少し不安になったが、同じ学校で顧問をしているK教諭には絶大なる信頼をおいているので、一緒ならば何とかなるだろうと思って行くことにした。ツェルトとガスボンベを他の顧問から借りて、私とK教諭は下りてきた道を再び山のほうへ登っていった。

南竜分岐を過ぎた頃から、雨風が強くなりガスも深くなり、視界は5m程になった。エコーラインを越えて、遭難者がいるという情報があつた万才谷付近に着いた。この後は、斜面はかなりきつく、ステップがない道をトラバースしていかなければならなかった。視界が悪かったので下はほとんど見えず、どのくらい深い谷なのかわからなかった。

私は数時間前の滑落が思い出されて、今ここで滑落したら、いったいどこまで落ちるのだろうかと不安になった。しかし、人1人の命がかかっている。ここで逃げたら担任をしているクラスの生徒たちに堂々と顔向けできない。私の頭の中では、プロジェクトXのテーマ曲である中嶋みゆきの「地上の星」が流れていた。以前、ホテルニュージャパンの火災における救出劇が放送されたが、ホテルに取り残された人を救出した消防士に自分を置き換えていた。

雪は凍っていて、なかなかステップをつけられなかったが、少しずつトラバースしていった。すると、突然前を歩いていたK教諭が滑落した。あっという間にガスの中に消えて

いった。少ししてから「大丈夫」という K 教諭の声が聞こえたのでホッとした。しかし、信頼をおいていた人でさえも滑落したので、私としてはかなりびびってしまった。K 教諭が下から上ってきて私と合流するとき、私も 2 m 程滑って「うぁ」と大声をあげた。起き上がったとき、ふと女性の声がかすかに聞こえた気がしたのだが、K 教諭は聞こえなかったといていたので、私も空耳と思ってあまり気にとめなかった。

視界がほとんどきかない状況で、遭難者が上にいるのか下にいるのか全くわからなかった。下手に動くと、私たちも自分の位置がわからなくなり迷ってしまうと思ったので、雪融けして露出している岩を目印にして、上の方に登ってみようということになった。さあ登ろうかと思ったそのとき、一瞬ガスがサッとはれて 200 m～300 m 位前方に、ワインレッド色のカップを着た人が横たわっていて手を振っていた。「いた！」と私は思わず叫んだ。体内に大量のアドレナリンが放出され興奮した。私たちは遭難者に近づき、「おーい」と叫んだら今度はぐったりとしていた。さらに近づき、まじかに遭難者をみたらハッとした。膝のあたりからズボンを通して出血しており、足も変形していた。顔もやつれてかなり衰弱しているようだった。「もう大丈夫ですよ。」とりあえず安心させようと私は声をかけた。

遭難者は何時間も強い雨風にさらされていたので、顔や手がかなり冷たくなっており震えていた。私は持ってきたツェルトを遭難者とともにかぶり、背中や手などをさすったり飴をなめさせたりしてとにかく安心させようとした。遭難者はホッとしたのか、「心細かった」と何度も何度も繰り返しつつぶやき泣いていた。話を聞くと、遭難者は金沢市内に住む 50 代の女性で、百名山を登ることを趣味としていた。今回は仲間 3 人で白山に登る予定だったが、2 人が都合悪くなったので 1 人で登ってきたそうである。別当出合から黒ボコ岩経由で室堂まで行く予定だったが、間違って南竜方面に来たそうである。エコーラインを登っていく人を見かけて、軽アイゼンとストックを装備していたので自分も登っていった。結構上の方まで登っていった一息ついたときに、あやまって 500 m～600 m ほど滑落したのである。斜面はかなり急で、岩や木などがところどころでいるところを回転しながら転げ落ち、途中岩などにもぶつかったりしたようだが、怪我の症状は足の骨折ぐらいにみえるのが奇跡的だと思った。ツェルトをかぶっていても寒いということだったので、セーターを着るように言ったが遭難者は持ってきていなかった。そのことに私は唾然としたのだが、仕方ないので私のシュラフカバーを靴の上からはかせて、ツェルトの中でガスコンロを使って暖をとった。発見してからこの間、K 教諭は無線で下の方にいる私たちの仲間に連絡をとっていた。本部は市ノ瀬にあり、そこまでは何人かの顧問が無線の中継していたそうである。連絡によると、天候が悪くヘリが飛ぶことができないということで、仲間の教諭がレスキュー隊と共に現場に登っているということだった。

遭難者はずっと寒がっており、唇もおおく辛そうで、ちょっとでも足を動かすととても痛がった。そのため急な斜面で不安定な場所ではあったが、なんとか落ち着かせてこれ以上衰弱させないようにすることで精一杯だっただけに、私自身この連絡は非常に勇気づけられた。雨風はずっと止むことなく、ツェルトも飛ばされそうになることもあったが、ツ

ェルトの中3人で仲間の到着を待つことにした。

1時間くらいたって雨が止みガスも少しはれた頃、仲間の教諭2人とレスキュー隊2人が到着した。彼らはザイルを持ってきていたので、まず添え木で足を固定してザイルで急斜面から谷底まで10mほど下ろした。私はそのとき、何でもまず発見したとき添え木をしなかったのだろうと思った。骨折の時は添え木をするのは常識として知っていたはずだったけれども、まず体を温めて落ち着かせようということばかり気をとられて私はすっかり添え木のことを忘れていたのだ。こういう緊急時には自分がまず冷静になって対処しなければいけないことをあらためて感じた。

谷底に下ろした後、天気が安定しガスもはれてきたのでヘリが飛ぶことになった。しばらく待っているとヘリが上空に到着した。レスキュー隊の人が、遭難者をホバーリングしているヘリに乗せるとヘリはそのまま飛んでいった。

この頃にはガスもすっかり消えていたので、周囲の状況がよくわかった。現場はエコーラインから南竜へむかう夏道からは、谷よりに大きく外れた地点だった。あらためて、遭難者が滑落しただろうと思われる斜面を谷底から見上げると、とても急な斜面だった。夏には高山植物でいっぱいになるこの辺も、雪がついたらこんなにも危険な場所になるのだ。

今回の救助を行って、つくづく自然の厳しさを感じると共に、命の重み、勇気、そして緊急時での冷静な判断というものがいかに大切であるかを学んだ。

私たち顧問4人は下山することにした。私の頭の中では、プロジェクトXのエンディング「ヘッドライト・テールライト」が流れていて、晴れ晴れとした気分現場を後にした。



6月2日の御前峰
遭難者を救助する数時間前。筆者は後列左端



H13年10月下旬 秋山練習登山 奈良岳ピーク
(ブナオ峠～奈良岳往復)



H12年の夏山合宿 双六小屋付近
計画は双六小屋から徳沢までだったが、部員
達の体調不良などにより新穂高温泉へ下山。



多彩な表情 石垣回廊 みせます

金沢城址公園 内外に見学ルート

県、部局横断で研究チーム

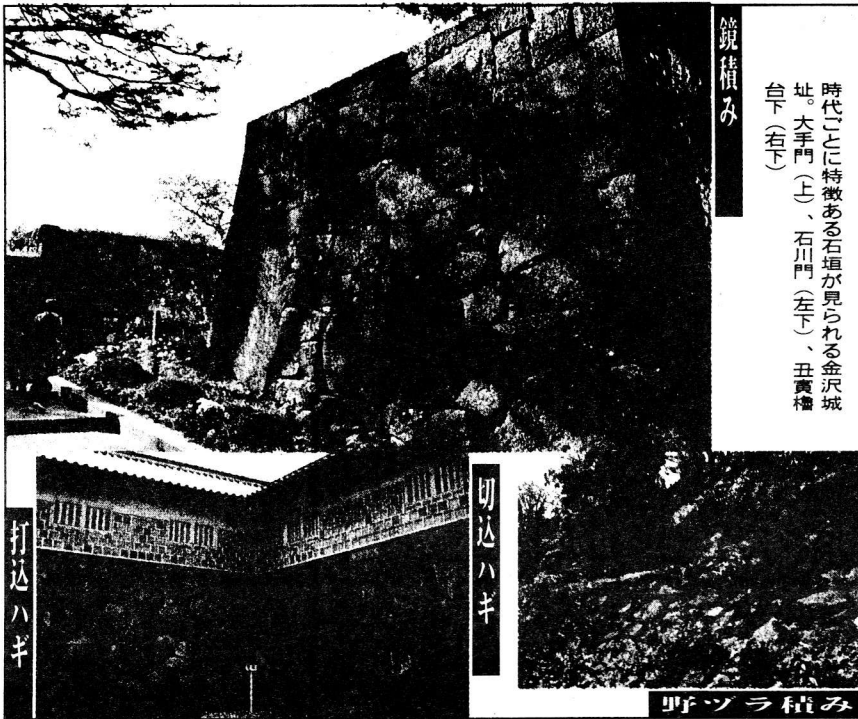
石川県は、加賀藩祖・前田利家以来の歴史を伝える金沢城址公園の石垣の技とデザインを内外から見ることが出来る「回廊」作りに着手する。緑化フェア後の公園整備の柱に位置付け、庁内に部局横断の研究チームをつくり、県丸の内駐車場など石垣景観の妨げとなる施設の移転も含めて検討を始める。郷土に学ぶふるさと教育につなげるとともに、県都の真ん中に残る文化財を全国に発信する。

丸の内駐車場
移転視野に ガイドツアーも

計画では、NHK大河
ドラマ「利家とまつ」放

景観積み

時代ごとに特徴ある石垣が見られる金沢城
址。大手門(上)、石川門(左下)、丑寅櫓
台下(右下)



野ツラ積み

切込ハギ

打込ハギ



映に伴い三月下旬から開幕する加賀百万石博に合わせ、来場者が城内外の石垣に間近に触れられる散策路を設け、要所に石積みの違いや時代背景を紹介したパネルなどを置く。学芸員や郷土史家が石垣に沿って案内しながら、特徴を説明するガイドツアーも実施する。

石工の技が細部まで見えるように、石積みの上の根や枝を生態系に影響が出ない範囲で取り除くなどの工夫も施す。城の外周では、宮守坂横の県体育館や県丸の内駐車場、その隣りにある住宅金融公庫や中小企業金融公庫の支店が入居する金沢中央ビルの背後にも保存状態の良い高石

垣が多く残っており、見学にふさわしいコースになり得るといふ。県では、県体育館などの施設が「城外周の景観を考えた場合に障害になる」(県幹部)としており、土木、文化財、都市計画、観光などの視点から施設の移転や跡地の埋蔵文化財調査、整備などの計画作りを進めることにしている。

「石垣回廊」の整備については、先月十九日に開かれた金沢経済同友会との意見交換会で、同会側の求めに応じ、谷本正憲知事が取り組む姿勢を明らかにしていた。

金沢 まち 通信

——村井 淳志 ③

金大移転10年をへて

スであちこち道がふさがれ、資材を積んだトラックが行き交うだけの殺伐とした町だった。

お店も住宅もほとんどなく、当然、バスの便も極端に悪い。教育学部の移転はまだ三年先だった。正直言って「こんな所に来るの」と、暗瀬(たん)たる思いだった。

た。年配の先生方も「除雪費がかさんで研究費が削られるよ」「城址内だから人気があったのに、学生が来なくなるんじゃないの?」などと、ぼや

次、東部の丘陵地・角間地区に移転してきた。そのころの角間や若松近辺は、まだ工事用のフェン

の体育館の建設費が翌年に繰り越されてしまっ

た。研究室の備品費用も切りつめられ、洗面台に

かける鏡も買えない。しかたなく、もう立ち入り禁止になっていた城址内の自分の研究室に忍び込み、古い鏡をはずして角

間にもつてきた(今でも使っている)。

ところがわずかの七、八年ほどで、若松・角間地区は見違えるように利便性がよくなった。途中、ジャスコの建設を請け負

っていたセネコンが倒産して、どうなることかと

思ったけれど無事開店したし、大型書店やコンビニもできた。鈴見橋から

ず成功だったのではない

か。もちろん城址内のミズバショウの池や満開の桜、タヌキが出没する森も懐かしいけれど、それは県民に広く開放され

た。その一方、角間の四季の移ろいにも、だんだん愛着がわいてきた。

ただ、かつて田上小学校に勤務しておられた先生は「若松地区は一面のブドウ畑があつて、静かな田園地帯だったんだよ」と、変貌(ぼう)する地域に複雑な表情だ。

(金沢大助教授)



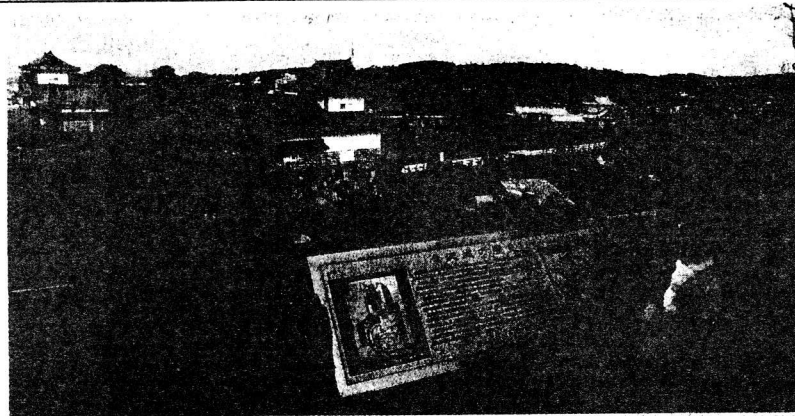
筆者の研究室から見える金沢大キャンパスの風景。正面の建物は付属図書館

当初は属流しにあったように感じていた大学人が多かったが、今になって総括してみても、大学移転とそれを移した東部地域の再開発は、ひとま

「金沢城公園」開放

観光客、散策楽しむ

全国都市緑化フェアのしていた金沢城公園は、会場撤収作業のため休園十二日、再び開放され、



園内を見学する来園者

金沢城公園

市民や観光客が城の石垣片手に園内を巡り歩く姿が見られた。五十間長屋の新しい新所を堪能した。同公園は十八日、金沢城址公園から改称されたばかりで、園内では、来年三月に開幕する加賀百万石博に向けた工事も進んでいる。

開園時間は二月二十八日までは午前八時から午後四時半、三月一日からは午前七時から午後六時となる。入園は無料。菱屋・橋爪門統橋をはじめ、三の丸広場、本丸園地、三十間長屋などが見学できる。

再開放初日の二十二日、観光客らがカメラを



ツキノワグマ

北 陸 中 日

2002年(平成14年)1月15日(火曜日)

中日春秋
空を飛べない鳥がいる。ダチヨウやペンギンたちだ。ニワトリもその仲間かもしれない。でも昨日まで自由にはばたいていた鳥が、不意に、飛べなくなったらどうしたらいいのだらう▼そんな難局に直面した鳥を主人公にした絵本「リトルターン」(B・ニューマン著、集英社)が静かに読者を広げている。リトルターン

とは、海鳥コアジサシのこと。毎日すこぶる快適に、またいくぶん退屈に暮らしていた彼がある日突然、飛べなくなってしまう▼翼やしっぽをチエックしても、どこも悪くない。そうして彼は気づく。壊れたのは外部ではなく、飛ぶための信念や本性、つまり内面が失われたのだ。と。失意と困惑。彼は、やむなく砂浜という未知の世界で暮らし続ける。星や花、カニ

に出会い、自分の内面をのぞきながら▼やがてリトルターンは、友達になったカニに言われる。「きみは飛ぶ能力を失ったんじゃない。ただどこかに置き忘れただけだ。」そしてある朝、自分のそばに自分の影があることに気づく。置き忘れた大事なものを発見したかのよう。彼は、ふたたび空に戻る▼訳者の五木寛之氏が「これは挫折者、引きこもりの物語」と言

っている。三十年前に世界的ベストセラーになった、やはり彼の訳本「かもめのジョナサン」は、上昇志向のいかにも二十世紀的な寓話だった。いまは逆に飛べなくなっている鳥たちの時代だとも▼編集者によると、実際に読者の大半は、三、四十代の男性だといふ。企業のリストラに直面する中堅の男性の共感を呼ぶのだらう。

60500ヘクタルの聖域

緑の回廊は奥羽山脈など全国十カ所で指定されているが、点在する保護林を面的に囲んで設定するのは白山山系が初めてという。

白山山系「緑の回廊」

多様な動植物を守るため石川、富山、福井、岐阜四県にまたがる白山山系国有林に「緑の回廊」を設ける計画で、関係自治体や団体などをつくる設定委員会(座長・林進岐阜大教授)が十三日、金沢市内で開かれ、回廊面積を約六万五千ヘクタールとすることを決めた。近畿中国、中部両森林管理局は所定の手続きをへて四月から指定する。



初の包括指定 7保護林結ぶ

これによって野生動物の移動ルートを確保し、種の保存など生物多様性の保全に努める。指定後は生態系に配慮し、公共性の高い場合を除き林地開発を規制し、伐採にも一定のルールを敷く。現地に看板を立てるほか、インターネットのホームページで啓発することから、包括的に動物の行動と植生とを設定することにした。

この日の審議で委員の多くは、森林環境教育への活用を期待を寄せ、地域の人材育成などを強調した。



「初夏の尾根にて」

イラスト：竹中敏

事務局長・「やまざと」編集長辞任予告

15期 舟田 節子

- ・OB会は、事務局員・役員とも、OB・現役懇親会の際の会費無料のみが特典の、ボランティアで運営されています。
- ・会報送付会員（＝会費納入会員）は、会費納入お願い（イエローカード）添付の後、返答なしで、登録削除としてきました。現在は、添付名簿の方を連絡対象としています。
- ・削除後も、納入があれば、記載復帰としています。
- ・41期生より、入会意志を問い、会報に次年度分年会費振込票（半年度納入）を添付しています。
- ・様々なワングル観、OB観を拝聴しましたが、「…すべき」の理想論に、なんら資金の裏付けがない…「誰かが払う」「誰がやるのか」と問えば「自分は都合が悪い。誰かがやれば…」
それらはOB会に限らない話でありましょう。

誰かが払ってくれて、誰かが運営してくれて…ムツカシイ話はええじゃないか。自分は都合がいい時に利用し、いつも待っていてくれる故郷であり続けて欲しい。
そんな虫のいい願望の世話役を誰が引き継ぐのでしょうか？

- ・平成4年11月30日、私は城内部室に「35周年記念誌編集委員募集」ピラを貼りに行きました。それはナカオ山岳会の創立30周年記念祝賀会の翌日のことでした。
- ・一度は諦めた山に誘い出してくれたのは、現役からの「25周年山行の案内」でした。そして、当時は女性は未婚と制限していた（時代ですね！）ナカオに、例外で入会できたのも、ワングルの実績の御蔭でした。
- ・もう、恩返しは済みました。OB会は私物ではありません。そして今後存続し続けるために、もう譲るべき時が来ています。

- ・もしそれでは運営できないというのなら、「金大ワングルOB会」は「その程度の器」なのです。
- ・これまでのOB会のご破算。各自が「一会員」としてOB会を支えるべく 機構、会費、会報、他諸々を熟考し直してほしいと思います。
- ・IT革命進行中の現在、バーチャル山岳会も出ています。事務も編集も、その気があれば、どこにいてもやれます。
- ・すべては「やる気」の問題なのです。今回の会報には、しつこくメッセージをいれたつもりです。
- ・中にはOB会を、私の生き甲斐と受けとめていらした方もおいでるようですが、総会にて「辞任」のけじめをつけます。
- ・早めに予告、謝辞とします。
「みなさん、ありがとうございました。」



OB会会計報告

(平成12年12月1日～平成14年1月20日)

《収入の部》

OB会費納入	42,000
石楠花の宴残金	2,851
野沢スキー合宿残金	2,768
預金利息	898

計	48,517
---	--------

《支出の部》

OB会報(やまざと) No.14 印刷費	250,720
" 郵送料	101,830
" 製作費	6,322
" 号外 郵送料	25,360
石楠花の宴補助	43,550
現役小屋作業補助	50,000
小屋酒場食費	17,303
小屋資材・備品等	49,648
OB・現役3年生懇親会	94,710
通 信 費	21,201
事 務 備 品	42,149
OB会報(やまざと) No.15 取材費	65,700
そ の 他	14,120

計	782,613
---	---------

《差引剰余金》

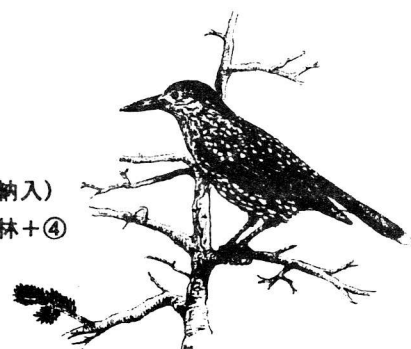
前回(12.11.30現在)繰越金	1,957,785
収 入 の 部	48,517
支 出 の 部	782,613

差 引 合 計	1,223,689
---------	-----------

*OB会費納入内訳 (○内は年数分 +は追加入 41期生より単年度納入)
 6期小川⑤ 9期山中+① 12期津田+① 13期柴田+② 22期小林+④
 24期岡原+③ 29期中道+① 41期竹内 長谷川 市山 田村

*残金中70万円は35周年記念事業の際の剰余金に相当します。
 今回の会報15号の印刷、郵送で40万円を支出の見込みです。
 平成15年度総会にむけ、残金の中での活動、ならびに連絡を行っていきます。

*平成15年総会は、添付名簿の会報送付会員を対象に案内を出します。



ホシガラス

「山ぼうし」と私

44期 福村 岳代

「山ぼうしの会」は、視覚障害者と晴眼者（障害のない人）が、共に山登りを楽しむ登山クラブです。

「視覚障害者が山登り？そんなことが可能なの？」

これが、私の山ぼうしの会を初めて知った時の感想です。山のあの景色があるから、どんなに辛くても、人は山に登れるのだ、と思っていた私にとって、眼の見えない人（以下視障者）が山に登るのは疑問でしたし、あの山の景色が見られないのは正直かわいそうだとも思っていました。

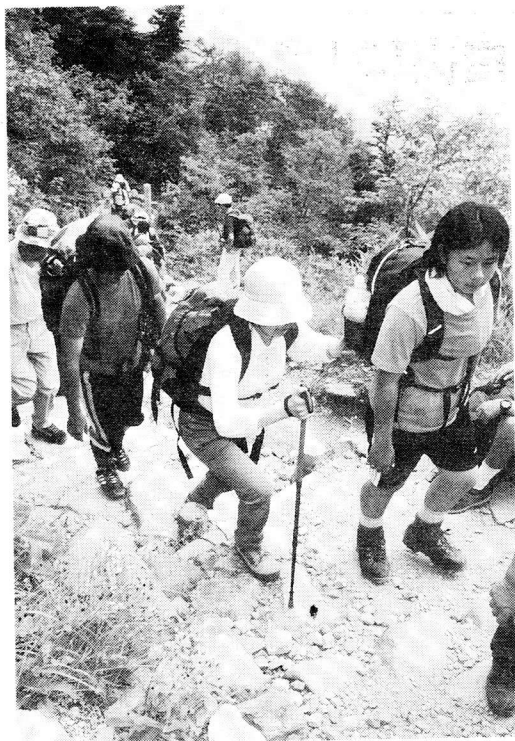
しかし、山には美しい景色以外にも、鳥のさえずりに耳をかたむけたり、新鮮な空気を胸いっぱい吸ったり、やわらかい土の感触を楽しんだり、山でしか味わえないものがたくさんあります。これらの山の素晴らしさを私は、忘れていたのかもしれませんが、目で見えるものでしか山を楽しんでないのでは？ということ、山ぼうしの活動を通して気付かされました。

また、山ぼうしの仲間達と一緒に山歩きをすることで、自分の足元に注意するようになりました。というのは、サポーターと視障者が安全に登るためには、常にサポーターは、視障者に周りの状況を正確に伝える必要があります。

例えば、普段は何気なく跨いでいる石や木の根なども、

「左前、石の段差あり20cmアップ、次すぐ右前、木の根あり10cmアップして跨いで下さい」など。

先にも述べましたが、私は山の景色ばかりに気をとられ自分の足元に広がっている世界のこ



となど、考えたこともありませんでした。自分の足元で地面に這うように成長した木の幹や、周りの草に埋もれながらも必死で生きている小さな花などに目を向けることで、また一つ山の楽しみ方が増えた気がします。

山ぼうしは会が発足してから、まだ1年半しか経っていません。その中で、晴眼者と視障者が共に知恵を出し合い、試行錯誤しながらやってきました。

しかし、まだまだサポート面にしても、安全面にしても、考えねばならない問題があるのは事実です。

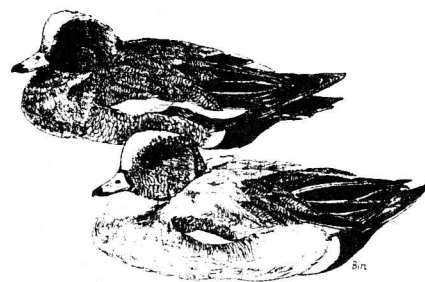
けれども、山に登りたいと思っている視障者と、そんな視障者と一緒に山を楽しみたいと思っている晴眼者がいる限り、山ぼうしの会は続いていくのだと思います。私はそんな彼らと山に登る事で、さらに山の魅力にとりつかれてしまいそうです。

（2001年度は、富山・吉峰グリーンパーク、倶利伽羅スノーハイク、キゴ山、大嵐山、医王山、口三方岳、砂御前山、白山南竜ケ馬場、大倉岳、鷲走ケ岳などの山に登りました。この中にはスノーシューを履いての活動や、富山の登山クラブとの交流登山もありました。）

【山に登る前の打ち合せ】

（視覚障害者の方については写真使用をご了解頂いています。）





ヒドリガモ(上)と
アヒ(下)

(福村さん、変な原稿があとについて、ゴメンナサイ。仙人池で見かけた時から書こうと思っていました。

どうか、さらに掘り下げて「山ぼうし」にかかわって下さい。)

IN TROUBLE

15期 舟田 節子

学研受験英語教材に、次のような話が載っている。

霧のロンドンでは、バスもタクシーも走れなくなる。ロンドン生まれで、急ぎの用のあったM氏もタクシーをgot off. His officeへ歩いて急ぐが、he lost his way. そこへ

"May I help you if you are in trouble?"
その男はついてくるようにM氏に言い、彼らは目的のビルにat last辿り着く。

"You know London better than I do."
と感心したM氏が

"How did you find your way in the fog?"
と聞くと

"It's quite easy for me to find my way in the fog," said the man, "because I can't see anything with my eyes."

文法本位の「見え見え」事例であった。即ち視覚障害者の方が、正確に地理を把握していたという、いかにも今風福祉好みの内容である。

なんでこの事例から書いたかと言うと、私はこの夏、仙人池コースで、視覚障害者の一行に出会ったからである。最近ことに山溪などには載っているが、現場を見たのは初めてだった。

「なんでこんなやばいコースに？」
の疑念に続いて、そのスピードに驚いた。少し離れてついていたギャル感覚のサポーターに、
「すごいですねえ」と言ったら、

「ええ、彼はベテランですから」
の答えが返ってきた。

なるほど、前者のザックに手を掛け進む彼は、瞬時にその動きを、寸分たがわず模倣していた。後ろから彼のザックを押す男の押し具合が、さらに上下左右と、その幅をフォローしているようであった。梯子の所ではさすがに細かい指示が出されていたが、二人三脚を連想するような、ちょっとしたぎこちなさを保ちながらもスピード感ある歩きだった。

彼らを追越したのは、仙人温泉～阿曾原間であった。私達はその朝は、剣御前から下りてきており、抜きつ抜かれつの同行者達も、仙人温泉でほとんどが行動を終了していた。ほぼ最終組ともいえる私達より後ということで、やや心配したが、かろうじて「明るい」うちに彼らも到着した。当日は冬期物置小屋も利用するほどの満員だったが、トイレから何からサポーターの世話になる彼の姿は目立っていた。

翌朝、もちろん彼らは早出をしており、私達は再度彼らを日電歩道上で、抜いた。それこそ「眼もくらむ」絶壁の歩道の途中で…。

仙人池に映る裏剣が絶景、その三段紅葉が絶賛…と、「見えなければ話にならぬ」あのコースを、躓けば奈落の底のあんなコースを、彼が「希望」したというのだろうか？

あんなスピードを出すこと、出せることを、「ベテラン」というのだろうか？

それこそ、日常生活の中において、視覚に頼らない正確な地理を獲得しているという話の方ならわかる。初めてで、危険で、何より視覚情報が必要な場所で…どんなに情報をもらったとしても真正正銘の「メクラ歩き」にしかならないのに…。

「白山なら眼をつぶってでも」ほどの「ベテラン」が室堂のそばで穴を掘っていたとか、あ



るいは凍死していたとか、ホワイトアウトの怖さはよく言われることだ。同じコースを歩き尽くして、なぞれる程を「ベテラン」ならまだわかるが、サポーターの動きを正確に模倣することが、山において、「ベテラン」と称されているのだろうか？スピードをあげる程、称賛されているのだろうか？

もちろんその視覚障害者は、サポーターの動きに全身全霊を傾けており、垣間見た私には張り詰めた緊張感のみが感じられた。それでも、踏破したら、「着いたぞ！」と言われたら…満足できるのだろうか？「晴眼者すら危険なコースを、よく踏破した」とサポーター達は褒め、視覚障害者の記録として、どこぞへ送るのだろうか？そう、彼らは「いいこと」を、苦勞してやり遂げたのだ。でも…私は「自己実現」がすり替えられているような気がする。

私の思う視覚障害者の「自己実現」は、日常生活が自立できること…他人に頼らなくても、思った時に思ったことがやれること。そして、視覚障害者ならこそその光れること…鍛えられた聴覚、触角、記憶力などの能力で、晴眼者には到底真似られない域にまで達すること…ではないかと思う。そんな「自己実現」を晴眼者はサポートし、環境を整えていくべきと思う。

何度回数を重ねても、100%他人に依存しなければならぬこと、自力で積み重ねていけないことは、本当の「自己実現」にならないと考える。

視覚障害者の山記録、さらには視覚障害者が「心眼」で撮ったという写真集も発刊されている。彼は、どんな写真が撮れたか「確かめたこと」、どの写真が選定されて、どんな写真集になったか「確かめたこと」があるのだろうか？

すなわち、話題を狙って、あれよ、あれよで乗せている側がいる。

とうとうエベレストに登った視覚障害者も出てきた。百名山をやってみたいと、あの「写真家」も「夢」を語り、それが「多くの視覚障害者への勇気になる」とも語っている。（あるいは、「語らせている」？）

たしかに、障害にめげていない明るい話題ではある。でも、「山の語り部」では、多くの方が「山は自己責任の世界だ」と答えていた。初めから自己責任の持てない人が、自力でそこから脱出もできない人が、「素晴らしいから」「登りたいから」で、山に入り込む…？

晴眼者の中高年登山が無責任の批判を浴びる一方で、こちらは「福祉」の御旗があるからだろうか？無謀極まりないのに、称賛を受け、ニュースバリューを持ってしまう。

世の中は「何でもあり」になり、何事も「けじめ」がなくなり、ぼやかすほど「善人」で「ものわかりよし」とされる。

晴眼者にしたところで、遭難したくて遭難した人はいないのだ。当然のような事故がおきた時、どの法律が、「自己責任をもてるはずのない人達が山に登る」行為について、誰に責任ありと裁くのだろう。

今この国は
「王様は裸だ！」を誰も言わない。

○ 1 小屋作業計画書

<日程> 2001/9/18, 19, 20 非常9/21

<目的> 高三郎登山道の整備

ベルクハイムの掃除

<行き先> 高三郎、ベルクハイム

<日程> 車 3P (2h)

1日目 角間＝犀川ダムーベルクハイム

* 犀川ダム最大待機 14:00

打切り 16:00

合計 3P (2h)

W5P

W4P

2日目 ベルクハイムー高三郎PーBH

起床 5:00

ピークチェックタイム 14:00

打切り 16:00

合計 W9P

3P

車

3日目 BHー犀川ダム＝角間

最大作業時間 14:00

打切り 16:00

<作業内容>

- ・ 1日目は小屋及びその周辺
- ・ 2日目はピークまで行ってから、下りながら作業をする
- ・ 3日目は小屋周辺

<行動条件>

強雨、強風でないこと

<欠員>

各パーティ (L + SL + 医療 + 2)

<メンバー>

Aパーティ L 久原 SL 角田 CL 谷村 竹内
古田 伊藤 加藤

Bパーティ L 山本 SL・CSL 西 深作 渡
日向 池田 岩田

Cパーティ L 日野 SL 石原 松山 森本
敵田 松本 荻田

(角田、渡は当日欠席)

小屋作業を終えて

CL 44期 谷村 一成

今年度の小屋作業は、昨年度までと違い、旧道だけでなく、新道の整備も行う事にした。

旧道の整備は過去5年でほぼ終了しているため、そろそろ新道にも手をつけようと思ったからである。そこで私は旧道から整備を始め、高三郎ピークをとり、新道を下りながら整備してこう考えた。

しかし、今となっては、その考えは少し無理なものであったと思う。

一日目はまず、ダム沿いの道を行き、ベルクハイムに着いた。そしてベルクハイムの周辺の作業をしてから、全体を二つに分けて、それぞれ新道・旧道の整備を、時間の許す限りした。この日の夜は小屋の中で盛り上がり、士気も上がった。

二日目、当初の私の計画どおり、旧道→ピーク→新道のコースを行く事で出発した。

旧道の整備はほとんどされたおり、要所要所で整備はしたが、そうでなくても、思っていた



日野

荻田 石原 竹内 池田 敵田 伊藤
日向 岩田

森本 谷村

松山 松本 加藤 古田

山本 久原

西

(撮影 深作)

より歩き易かった。来年は整備の必要がないくらいにはしたと思う。

その後ピークをとり、新道を下る。新道は思っていた以上に荒れていた。木の枝があらちちから伸びていて、先が見えない。しかし、みんな頑張り整備していった。それでも、そこそこ下ったあたりから、下りのきつさで思うように進まなくなった。枝を切りすぎて捕まるものがなくなり、下りにくくなってしまったのである。

そうしているうちに時間がなくなり、作業を中断させた。あたりは刻々と暗くなり、私は焦っていた。

ベルクハイムに帰ってきた頃には真っ暗で、みんな疲れ切っているのが分かる。そんな中、私は無茶な計画を立ててしまったもんだと気付いた。冷静に考えると、新道と旧道を両方とも整備するのは、日程的に無理なのである。また、荒れ具合を考えると、新道のみでも良かったのではないと思う。

無茶な計画に付き合ってくれたみんなには感謝したい。そして来年からは新道の整備に力を入れて欲しい。

今回CLをやってみて、今までCLをやってきた方の苦労が判った。私にとって、今年度の小屋作業はいろんな意味で思い出に残った。



日野 池田 石原 森本 荻田 松山 松本 竹内
深作 日向 古田 敵田 伊藤
山本 谷村 西 岩田 加藤

(撮影 久原)

2001年度現役名簿

4 回生 (43期)

小倉 亮	法・法	090-2831-1686	aas18910@par.odn.ne.jp
920-1152	金沢市田上2-59-202	076-263-5476	
418-0022	静岡県富士宮市小泉215-1-A3	0544-27-6794	
阿納 真弓	文・人間	090-1396-3967	
920-0941	金沢市旭町1-2-31-2E	076-232-6301	
819-0005	福岡県福岡市西区内浜2-33-1-101	092-881-5194	
加藤 菜就	工・物化	090-9442-9232	
920-0944	金沢市三口新町1-15-5	076-261-3458	
674-0057	兵庫県明石市大久保高丘5-21-43	078-935-8658	
西脇 幹雄	工・機械	090-8498-9887	
921-8036	金沢市弥生1-26-5北暎寮	076-241-6573	
451-0012	愛知県名古屋市西区稻生町3-52	052-522-8211	



2001/01/08

■冬合宿と打ち上げ会で考えたこと

ワングル顧問の前田です。冬合宿・荒島岳は病人が出たため、1日目途中で打ち切りテント設営、2日目出発地点に下山となりました。ラッセルの交代の仕方なども昨年よりうまくりましたが、降りたての深い雪のためトレースを確保するのに難渋したこと、メンバーが計画書より1名減って2パーティ13名と余裕がなかったことも原因です。病人は、風邪からきた自家中毒症ではないかと思われます。食餌療法(蛋白質・脂肪類は禁止、嘔吐分を補充する水分を梅干入りの白湯で摂取など)と睡眠で元気を回復しましたので。

27日は予定を作っていなかったもので、打ち上げ会にも顔出ししました。消化不良というか燃焼不足ということもあって、いろいろ話も聞きました。ワングルも二極化の傾向にあり、一方では、南ア11泊12日の合宿に代表されるようなチャレンジ精神がある反面、同好サークル的なもの以上に無理をしないという雰囲気も強いということです。PW計画もなかったわけではなく、参加者が規定人数(5名)に達せず、流れたものもかなりあったということです。そのため、はなから「面倒くさい」PWとはせず、自分たちで装備を揃えて出かけるケースもかなりあるようです。

私の意見は、(1)新トレ、合宿トレ・本番という行事は、ワングルの基本的な生活技術やマナーを体得する場であり共通の基盤であるが、それをベースにしたPWこそワングルの華である、(2)PWに参加することは特に義務づけられはしないが、部員としてPWへの支援と連帯は求められる、(3)5名という欠員条件は、春休み犀奥など人が減多に訪れず救援を求めることの困難な地域などは別として、携帯電話などの普及した今日では見なおしてもいいのではないか、(4)4回生になれば事実上引退している現状は改めるべきであって、就職活動等での中断が終われば4回生こそが積極的にPW計画を出すべきだ(大半がワングル行事に加わっていない4回生の「追い出しコンパ」に出る気はしない)、ということです。文系では、後期試験後に3回生ゼミの合宿を企画するのも困難になっています。民間企業の求人(青田刈り)日程が早まっているせいですが、公務員試験組みや(少数の)大学院進学組はまだ先のことで意見が衝突します。理系では、大学・教室がかわる率が高いのと大学院進学が多いので、ワングルの春「合宿」前に隠居ということはないでしょう。問題なのは、就職活動が「中断」として捉え、位置づけられていないことです。

2001/8/23

■夏合宿&PW

ワングル顧問の前田です。現役諸君の活動ぶりをお知らせするのがずいぶん中断してしまいました。今年は北アルプス2、南アルプスと北海道各1、計4パーティが合宿に出かけ、無事下山の連絡ももらいました。北海道は例年とは異なったルートを取り、台地歩きのはずが高低差も大きく、藪漕ぎまであったようです。

北アルプス野郎パーティ(rising sun party)は、顧問の語る「船窪物語」にめげず後立と裏銀を繋いできました。鎖、はしご、アップダウンの連続に「二度と行きたくない」と言っていますが、その内にまた出かけることでしょう。さすがにくたびれた模様で、双六から下りて

きました。

12日の長い日程を組んでいた南ア組は、3日短縮で予定コースをほぼ完歩してきました。福ヶ岳パーティからは詳しく聞く機会がなかったので、聞いておきます。

PW計画書も2通出てきました。屋久島と白馬一朝日です。私はと言えば、7月中旬に教職員組合法文分会の立山縦走で足慣らしをしたものの、それから1カ月以上ももたった8月18日「きたぐに」で糸魚川乗換え、猿倉から入山、鐘温泉の誘惑を蹴って天狗山荘。豪華な夕食。翌日、白馬山荘のコーヒーは準備中、雪倉岳で腹いっぱい冷水の予定もはずれ、がっくり。17:35到着の朝日小屋では夕食代わりに入善の花火大会を見ながらビール、シーヴース・リーガルとチーズ、サラミ。3日目、頑張って蓮華温泉に昼過ぎ着いたものの、盆過ぎでバスは夕方までなし。この日温泉泊まりとなる団体さんを羨ましく思いながら、湯上りビールで我慢して糸魚川へ。

翌日、大学に出てきて、屋久島PWの計画書に出会い、さらに本日(8/22)白馬尻一蓮華の行事届けに押印したような次第です。昨年は残雪の多い大日岳で高山植物も咲き残っていましたが、今年は、せっかくの種類も多いお花畑なのに、時期がずれていたのが残念でした。無理してでも7月に、と考えた次第です。

2001/10/11

14日千葉大学での学会に出かけますので、Berghelm酒場は失礼します。

晴天が予報された10月上旬の3連休、路線バスを利用して別当出合から観光新道を登り(10/6)、室堂に泊って、チブリ尾根を市ノ瀬に下り、最終シャトルバスで「ほうらい祭り」の鶴来町に戻ってきました(10/7)。数年前、岩間側に下りスーパー林道からの車で大渋滞に遭遇。待ち合わせの時間に遅れる旨の電話をかけるため一里野まで自動車をかき分け、追い抜き歩いたことを思い出し、昔、開学記念日に下った別山・市ノ瀬道を選んだ次第です。連休中日のチブリ避難小屋はさぞや窮屈に夜を過ごすことになるだろうと思う登山道の繁盛ぶりでした。室堂のプレハブ小屋も10月初めに撤去され、自炊にはビジターセンターの休憩室が用意されていました。外観上はほぼ完成だが、本格的に稼働するのは2002年開山式からになるだろう、とは室堂で出会った県関係者の説明でした。仮に知事も臨席となるとTVも取材で登ってくるし、ワングルにも(アルバイトの)声がかかってくる、とは私の期待です。

さて、妙高のPW計画書が届けられ、無事下山の電話も留守番電話に入っていました。

2001/12/24

冬山合宿計画書をお届けします。ローテーションからいくと今年は法恩寺・経ヶ岳の番ですが、利賀村の金剛堂山(1637m)という計画です。上回生が少ないのと、どっちみちラッセルで団子状態になるということから、1パーティ15人(十顧問)という編成になったそうです。

富山の山には人形山(もう少しで頂上というところから引き返し)、僧ヶ岳(寒波と重なり日程短縮、途中打ち切り)と(私の参加した)冬山合宿ではピークを踏んだ記憶がありませんが、今回はどうなるでしょうか。

2001 春合宿

[目的] 春山の経験、雪山技術の修得

[山城] 北アルプス後立山連峰 唐松岳

[日程] 3月21日(水)～ 3泊4日 予1 非1

[行程]

1日目 金沢 ===== 八方尾根スキー場 ++(ゴンドラリフト)++ 八方池山荘 ---- 八方池(幕営)

2日目 雪上訓練

3日目 八方池 ---- 唐松山荘 ---- 唐松岳 ---- 八方池(幕営)

4日目 八方池 ---- 八方池山荘 ++(ゴンドラリフト)++ 白馬山麓

[メンバー]

L 西脇幹雄(工3) s L 加藤菜就(工-物化3) 矢田部 桂(理-物3)

小倉 亮(法3) 阿納真弓(文3) 久原宗仁(文-史2)

吉森幸世(文-人間2) 山本資治(工-人機2) 松山文枝(医-保健1)

[連絡]

清水健作 090-9760-1387 谷上 望

1・2年山

行

1・2年山行 比良班

[日程] 3月27日～29日 予備1

[目的地] 滋賀県比良山系

[目的] 比良山系で琵琶湖の大観を楽しむ。

新入生が入部するまでに3回生がいない1・2回生だけの山行を行う。新時代への準備。

[行程]

1日目 金沢駅 ===== 北小松駅 ---- 比良元気村 (幕営)

2日目 比良元気村 ---- ヤケ山 ---- 釈迦岳 ---- 八雲キャンプ場 (幕営)

3日目 八雲キャンプ場 ---- 比良ロッジ ---- カモシカ台 ---- イン谷口 ---- 比良駅===== 金沢駅

[メンバー]

L 山本資治(工-人機2) s L 久原宗仁(文-史2) 西 大輔(工-人機2)

松山文枝(医-保健1) 森本達也(工-機機1)

[連絡]

加藤菜就(工-物化3) 076-261-3458 090-9442-9232

谷村一成(工-人機2) 090-7033-7253

1・2年山行 奥高尾

[日程] 4月2日～3日 1泊2日 予備1

[目的] 1・2年生の親睦を深め、それぞれの学年の役割を自覚し、自主的に行動すること

[行程]

1日目 金沢大学 ===== 湯涌温泉 ---- 分岐 ---- 前高尾 ---- 分岐 ---- 奥高尾(幕営)

2日目 奥高尾 ---- 日ノ峰 ---- 奥高尾 ---- 湯涌温泉

[メンバー]

L 日野鋼貴(文-人間2) s L 福村岳代(教-障害2) 谷村一成(工-人機2) 角田幸久(経2)

竹内雅幸(法1)

[連絡]

小倉 亮 076-263-5476 谷上 望 076-232-5648

1・2年山行 ロード

[日程] 3月27日～30日 3泊4日 非常1

[目的] 鍾乳洞観光

[行程]

1日目 金沢駅 ===== 郡上八幡 ---- 大滝鍾乳洞 ---- 郡上八幡(幕営)

2日目 郡上八幡 ---- 郡上八幡大鍾乳洞 ---- 和良村(幕営)

3日目 和良村 ---- 金山町 ---- 下呂(幕営)

4日目 下呂駅 ---- 金沢駅

[メンバー]

L 吉森幸世(文-人間2) 河原一美(教-2) 石原 諭(経-2) 中川拓哉(理-化) 竹内雅幸(法1)

[連絡]

矢田部 桂 232-7867 加藤菜就 090-9442-9232

GW後立山P

W

[日程] 5月4日～6日 2泊3日 予備日 5月7日 非常日5月8日

[目的地] 後立山連峰 扇沢 ←→ 鹿島槍

[目的] GWを後立山で満喫する。顧問と交流する。雪山技術を習得する。

[行程]

5月4日 金沢駅 ==== 信濃大町 ==== 扇沢 ---- 種池山荘(幕営)
5日 種池山荘 ---- 爺ヶ岳 ---- 冷池山荘 ---- 鹿島槍ヶ岳
---- 冷池山荘 ---- 爺ヶ岳 ---- 種池山荘(幕営)
6日 種池山荘 ---- 扇沢 ==== 信濃大町 ==== 金沢駅

[メンバー]

谷村一成(工-人機 3) 竹内雅幸(法2) 松山文枝(医-保2) 森本達也(工-機械2) 深作亮太(工-人機2) 前田達男(法-顧問)

[連絡]

(主) 山本資治(工-人機3) 090-9760-3424 076-263-7706 (補) 西 大輔(工-人機) 090-9442-2393

——屋 久 島 P. W

<日程> 2001年9月5日～10日 予備 9月11, 12, 13日 非常日9月14日

<目的地> 屋久島宮之浦岳

<目的> 本土では味わうことのできない島の大自然を満喫する。日本百名山の最南端かつ九州最高峰の宮之浦岳を登る。

<行程>

1日目(9/5)

金沢 ### 大阪 ### 天王寺・阿部野橋 == (夜行バス「トロピカルライナー」) ==

2日目(9/6)

=== 西鹿児島 ++++ 水族館・鹿児島北埠頭 ～～(フェリー)～～宮之浦 === 海楽園キャンピ場 △1(幕営)

3日目(9/7)

△1 --- 楠川 --- 白谷山荘 --- 辻峠 --- 楠川分かれ --- 大株歩道入口 --- ウィルソン株
--- 縄文杉 --- 旧高塚小屋 △2 (幕営)

4日目(9/8)

△2 --- 新高塚小屋 --- 第2展望台 --- 焼野三叉路 --- 永田岳(往復) --- 宮之浦岳 ---

栗生岳 --- 投石岩屋 --- 黒味岳分山 --- 花之江河 --- 淀川小屋 △3 (幕営)

5日目(9/9)

△3 --- 鯛之川出合 --- ハイキングコース分岐 --- 尾之間温泉 === 宮之浦

<連絡>

矢田部 桂 090-1394-7688 西 大輔 090-9442-2393

<メンバー>

L 松山文枝(医-保健2) s L 医療 竹内雅幸(法-公シス2) 伊藤亜希子(理-地球1) 加藤友佳(文-文1) W

——後立山連峰 P. W

[目的地] 朝日岳、雪倉岳、白馬岳

[目的] 夏休みを後立山連峰で満喫する。楽しい山行二するとともに部員の交流を深める。
自然の美しさに触れてみまっし。

[日程] 9月2日～5日

[コース]

1日目 金沢 ### 糸魚川 ##### 白馬 --- 猿倉 ---- 白馬尻▲(幕営)

2日目 白馬尻---(大雪溪)---葱平---村営頂上宿舎▲

3日目 村営頂上宿舎---白馬岳---雪倉岳---水平道---朝日小屋▲

4日目 朝日小屋---朝日岳---五輪尾根---白高地沢---兵馬ノ平---蓮華温泉 === 平岩 ### 糸魚川 ### 金沢

[サブコース]

大雨等のため白高地沢の仮設橋流失の場合、三国境---白馬大池---蓮華温泉のルートで下山。

[メンバー]

L 深作亮太(工-人機2) s L 谷村一成(工-人機3) 谷上 望(文-人間4)
吉森幸世(文-人間3) 古田弥生(教-学校2) 池田幸平(工-人機1)
松本瑞恵(経-経1) 岩田奈穂子(工-物化1)

[連絡員]

矢田部 桂 090-1394-7688

——夏合宿&合宿トレ

A 01' 福ヶ岳パーティ in 北アルプス

[目的] 山の素晴らしさと厳しさを満足いくまでお腹いっぱい味わってくる。

[日程] 7月31日(火)～8月8日(水) 8泊9日 予備3日 非常1日

[行程]

<1日目> 金沢 ==== 富山 ==== 折立 ---- 太郎平小屋 ---- 薬師峠 (幕営)
 <2日目> 薬師峠 ---- 薬師岳 ---- 太郎平小屋 ---- 薬師沢小屋 (幕営)
 <3日目> 薬師沢小屋 ---- アラスカ庭園 ---- 雲ノ平山荘 ---- 雲の平キャンプ場 (幕営)
 <4日目> 雲の平キャンプ場 ---- 祖父庭園 ---- 黒部源流渡渉点 ---- 三俣山荘
 ---- 三俣蓮華岳 ---- 双六岳 ---- 双六小屋 (幕営)
 <5日目> 双六小屋 ---- 樺沢岳 ---- 千丈乗越 ---- 槍ヶ岳山荘 (幕営)
 <6日目> 槍ヶ岳山荘 ---- 槍ヶ岳 (往復) ---- ヒュッテ大槍 ---- 水俣乗越 ---- ヒュッテ西岳 (幕営)
 <7日目> ヒュッテ西岳 ---- 大天井岳 ---- 横通岳南肩 ---- 常念小屋 (幕営)
 <8日目> 常念小屋 ---- 常念岳 ---- 蝶ヶ岳三角点 ---- 蝶ヶ岳ヒュッテ (幕営)
 <9日目> 蝶ヶ岳ヒュッテ ---- 長堀山 ---- 徳沢 ---- 上高地バスターミナル
 [メンバー]
 L 福村岳代 (教-障教3) sL 日野鋼資 (文-人間3) 森本達也 (工-機械2)
 古田弥生 (教-学校教育2) 伊藤亜希子 (理-地球1) 岩田奈穂子 (工-物化1)
 [連絡員]
 矢田部 桂 (理-物3) 090-1394-7688
 奥野岳志 090-1314-6306

2001 第1回トレーニング山行

[日程] 6月23日(土)、24日(日) 1泊2日 (非常1)
 [山城] 口三方岳
 [目的] 夏合宿に向けて体力と技術の向上をはかり、安全な登山を目指す。
 [行程] <1日目>
 金沢大学 == (車) == 千丈温泉 ---- テン場 (幕営)
 <2日目>
 テン場 ---- 登山口 ---- 口三方岳 ---- 内尾 == (車) == 金沢大学
 歩荷 ピークまで 男25kg~30kg 以降、自由。各自の体力を考えて設定。
 [メンバー]
 L 日野鋼資 (文-人間3) sL 福村岳代 (教-障教3) 医療 森本達也 (工-機械2)
 古田弥生 (教-学校教育2) 伊藤亜希子 (理-地球1) 岩田奈穂子 (工-物化1)
 山下隼人 (理-計算)

2001年福ヶ岳Party 第2回トレーニング山行

[日程] 7月7日(土)、8日(日) 1泊2日 (非常1)
 [山城] 白山
 [目的] 夏山に向け、山の技術・知識・体力をつける。歩荷は男30kg、女2kg。
 [行程] <1日目>
 金沢大学 == (車) == 別当出合 ---- 甚之助ヒュッテ --- 南竜ヶ馬場 (幕営)
 <2日目>
 幕営地 ---- 室堂 ---- 御前峰 ---- 大汝峰 ---- 室堂 ---- 黒ボコ岩 ---- 殿ヶ池ヒュッテ ----
 別当出合 == (車) == 金沢
 [メンバー]
 L 森本達也 (工-機械2) sL 福村岳代 (教-障教3) 医療 古田弥生 (教-学校教育2)
 伊藤亜希子 (理-地球1) 岩田奈穂子 (工-物化1) 山下隼人 (理-計算)
 B O1' ライジングサンParty 夏合宿
 [日程] 8月10日~20日 (10泊11日)
 [山城] 北アルプス (白馬→槍ヶ岳)
 [目的] 槍(鑓)を3つとる。One for All, All for Oneの精神を身につける。
 [行程]
 <1日目> 金沢 ==== 糸魚川 ==== 白馬大池 ---- 大池山荘 (幕営)
 <2日目> 大池山荘 ---- 白馬岳 ---- 白馬鑓ヶ岳 ---- 天狗山荘 (幕営)
 <3日目> 天狗山荘 ---- 唐松岳 ---- 五竜山荘 (幕営)
 <4日目> 五竜山荘 ---- 五竜岳 ---- キレット小屋 ---- 鹿島槍岳 ---- 冷池山荘 (幕営)
 <5日目> 冷池山荘 ---- 爺岳 ---- 種池山荘 (幕営)
 <6日目> 種池山荘 ---- 針の木岳 ---- 針の木小屋 (幕営)
 <7日目> 針の木小屋 ---- 船窪乗越 ---- 烏帽子岳 ---- 烏帽子小屋 (幕営)
 <8日目> 烏帽子小屋 ---- 野口五郎小屋 (幕営) ---- 野口五郎岳 (往復)
 <9日目> 野口五郎小屋 ---- 水晶小屋 ---- 水晶岳 (往復) ---- 三俣山荘 (幕営) ---- 三俣蓮華岳 (往復)
 <10日目> 三俣山荘 ---- 双六岳 ---- 双六小屋 ---- 千丈乗越 ---- 槍ヶ岳山荘 (幕営)
 <11日目> 槍ヶ岳山荘 ---- 槍ヶ岳 (往復) ---- 新穂高温泉
 [メンバー]
 L 久原宗仁 (文-史3) sL 石原 諭 (経-経3) 角田幸久 (経-経3)
 竹内雅幸 (法-公シス2) 池田幸平 (工-人機1)
 [連絡員]

矢田部 桂 (理-物3) 090-1394-7688
奥野岳志 090-1314-6306

2001年第1回トレーニング山行

<目的> 体力向上

<山城> 雨飾山

<日程> 6月30日(土)、7月1日(日) 非常1

<行程> 1日目 金沢大学 == (車) == 雨飾キャンプ場 (幕営)

2日目 雨飾キャンプ場 ---- 荒菅沢 ---- 笹平 ---- 雨飾山頂 ---- 雨飾キャンプ場
== (車) ==

金沢大学

[メンバー]

L 石原 諭 (経-経3) sL 久原宗仁 (文-史3) 角田幸久 (経-経3)

竹内雅幸 (法-公シス2) 池田幸平 (工-人機1)

※ 雨天のため登頂ならず。

2001年夏合宿 北アルプス野郎Party 第2回トレーニング山行「白山」

[日程] 7月14日(土)、15日(日) 1泊2日 (非常1)

[山城] 白山

[目的] 夏合宿に向けてのオープン戦第2回戦。体力・技術・精神力を身につけるとともに、夏合宿へのモチベーションを高める。※トレーニングを目的とするため、歩荷は35kg以上ならOKとする(室堂まで)。

[行程] <1日目>
金沢大学 == (車) == 別当出合駐車場 ---- 甚之助ヒュッテ --- 南竜ヶ馬場 (幕営)

<2日目>
幕営地 -- (展望歩道) -- 室堂 ---- 御前峰 ---- 大汝峰 ---- 室堂 ---- 黒ボコ岩 ----
殿ヶ池ヒュッテ ---- 別当出合登山口 == (車) == 金沢

[メンバー]

L 竹内雅幸 (法-公シス2) sL 久原宗仁 (文-史3) 角田幸久 (経-経3)

石原 諭 (経-経3) 池田幸平 (工-人機1)

C 2001年夏合宿 南アルプス<山本山>Party

[目的] ワンゲルのメイン山行である夏合宿を楽しむ。

南アルプスの厳しい自然に鍛えられる。上回生は下に技術を伝え、下は吸収する。

[日程] 8月7日(火)~8月18日(土) 11泊12日

[目的地] 鳳凰三山→甲斐駒・仙丈→白峰三山

[行程]

1日目 金沢駅 ==== 糸魚川 ==== 松本 ==== 甲府 (幕営)

2日目 甲府 ==== 夜叉神峠登山口 --- 夜叉神峠 --- 大崖頭山 ---- 苺平 ---- 南御室小屋 (幕営)

3日目 南御室小屋 --- 薬師峠 ---- 観音岳 --- 鳳凰小屋 (幕営)

4日目 鳳凰小屋 --- 地藏岳 --- 白鳳峠 ---- 広河原峠 ---- 早川尾根小屋 (幕営)

5日目 早川尾根小屋 --- アサヨ峰 --- 栗沢山 --- 仙水小屋 (幕営)

6日目 仙水小屋 --- 仙水峠 --- 駒津峰 ---- 甲斐駒ヶ岳 (往復) ---- 北沢長衛小屋 (幕営)

7日目 北沢長衛小屋 (幕営) --- 大滝五合目 --- 小仙丈岳 ---- 仙丈岳 (往復)

8日目 北沢長衛小屋 --- 野呂川出合 --- 広河原 --- 白根御池小屋 (幕営)

9日目 白根御池小屋 --- 二俣 --- 八本歯のコル --- 吊尾根分岐 --- 北岳 (往復) --- 北岳山荘 (幕営)

10日目 北岳山荘 --- 間ノ岳 --- 農鳥小屋 (幕営)

11日目 農鳥小屋 --- 西農鳥岳 --- 農鳥岳 ---- 大門沢小屋 (幕営)

12日目 大門沢小屋 --- 奈良田温泉 == (バス) == 身延駅

[メンバー]

L 山本資治 (工-人機3) sL 谷村一成 (工-人機3) 医療 河原一美 (教-美術3)

松山文枝 (医-保健2) 松本瑞恵 (経-経1) 荻田真憲 (工-土建1)

[連絡員]

奥野岳志 090-1314-6306 加藤菜就 (工-物化3) 090-9442-9232

01' 第1回トレーニング山行

[日程] 6月23日(土)、24日(日) 1泊2日 (非常1)

[山城] 口三方岳

[目的] 夏合宿に向けて体力と技術の向上をはかる。

[行程] <1日目>

金沢大学 == (車) == 千丈温泉 (内尾) (幕営)

<2日目>

内尾 ---- 口三方登山口 ---- 分岐 ---- 口三方岳 ---- 登山口 ---- 内尾 == (車) == 金沢大学

歩荷 ピークまで 男25kg 女20kg

[メンバー]

L 谷村一成(工-人機3) sL 山本資治(工-人機3) 河原一美(教-学校3)
日向弘幸(医-保健2) 松本瑞恵(経-経1) 森 篤士(理-化1)

2001年 第2回トレーニング山行「白山」

[日程] 7月14日(土)、15日(日) 1泊2日 (非常1)

[山城] 白山

[目的] 夏合宿に向け、技術・体力のレベルアップを図る。白山の景観を楽しみながら登る。

[行程] <1日目>

金沢大学 == (車) == 別当出合駐車場 ---- 甚之助ヒュッテ --- 南竜ケ馬場 (幕営)

<2日目>

幕営地 -- (エコーライン) -- 室堂 ---- 御前峰 ---- 大汝峰 ---- 室堂 ---- 黒ボコ岩 ----

殿ヶ池ヒュッテ ---- 別当出合登山口 == (車) == 金沢

[メンバー]

L 松山文枝(医-保健2) sL 谷村一成(工-人機3) 医療 日野鋼資(文-人間3)
吉森幸世(文-人間3) 松本瑞恵(経-経1) 荻田真憲(工-土建1)
古田弥生(教-学校2) 渡 洋子(医-保健2) Lucie Zakova

※ 歩荷 男28kg, 女22kg。歩荷水は基本的に室堂まで持っていくこととする。

D 2001年夏合宿 北海道Party (デイリー西) —— 北海道はええのお～

[行先] 北海道・大雪山

[日程] 2001年8月5日～15日 6泊7日 予備3 非常1 (8/5, 8/6, 8/14, 8/15は移動日)

[目的] ・北海道の大自然を体全体で味わう。

・リス、シカ、キタキツネ、ヒグマなどの動物と戯れる。時には格闘する。

・とりあえずケガのない楽しい山行をする。

[コース]

-1日目 金沢====福井====敦賀====東舞鶴----舞鶴港~~~~(新日本海フェリー)

0日目 ~~~~~海上~~~~~

1日目 ~~~~~小樽港----小樽築港====札幌====旭川====美瑛====白金温泉----国設白金野営場 (幕営)

2日目 白金野営場 ---- 望岳台(十勝岳登山口) ---- 雲の平分岐 ---- 十勝岳 ----

上ホロ避難小屋(幕営) ---- 上ホロカメトック山 ---- 上富良野岳(往復)

3日目 上ホロ避難小屋 ---- 十勝岳 ---- 美瑛岳 ---- 美瑛岳分岐 ---- 美瑛富士分岐 ----

美瑛富士(往復) ---- 美瑛富士キャンプ地(幕営)

4日目 美瑛富士キャンプ地 ---- ベベツ岳 ---- オプタテシケ山 ---- 双子池キャンプ地(幕営)

5日目 双子池C地 ---- コスマヌプリ ---- ツリガネ山 ---- 三山台 ---- 南沼キャンプ指定地(幕営)

6日目 南沼C地 ---- トムラウシ山 ---- ひさご沼キャンプ指定地(幕営)

7日目 ひさご沼 ---- 化雲岳 ---- 第一公園 ---- 滝見台 ---- 天人峽温泉 ==== 旭川駅

[メンバー]

L 西 大輔(工-人機3) sL 吉森幸世(文-人間3) 医療 深作亮太(工-人機2)
日向弘幸(医-保健2) 加藤夕佳(文-文1) 敵田 聡子(薬-製薬1)

[連絡員]

奥野岳志 090-1314-6306 加藤菜就(工-物化3) 090-9442-9232

2001年夏合宿 北海道Party (デイリー西) 第1回トレーニング山行

[日程] 6月23日(土)、24日(日) 1泊2日 (非常1)

[山城] 口三方岳

[目的] 夏合宿に向けて体力と技術の向上をはかる。

[行程] <1日目>

金沢大学 == (車) == 千丈温泉 ---- 口三方登山口 (幕営)

<2日目>

幕営地 ---- 口三方岳 ---- 幕営地 ---- 千丈温泉 == (車) == 金沢大学

歩荷 ピークまで 男27kg 女20kg

[メンバー] L 吉森幸世(文-人間3) sL 西 大輔(工-人機3) 医療 松山文枝(医-保健2)

深作亮太(工-人機2) 渡 洋子(医-保健2) 加藤夕佳(文-文1)

敵田 聡子(薬-製薬1) 荻田真憲(工-土建1)

[連絡員]

山本資治 090-9760-3424

谷村一成 090-7033-7253

2001年夏合宿 北海道Party (デイリー西) 第2回トレーニング山行

[日程] 7月7日(土)、8日(日) 1泊2日 (非常1)

[山城] 白山

[目的] 夏合宿に向けて体力と技術の向上をはかる。Lをおいていかないよう、常時後に気を配る。

とりあえず、皆で楽しい山行にする。(歩荷は男子28kg、女子20kgとする)

[行程] <1日目>

金沢 == (車) == 別当出合 ---- 甚之助ヒュッテ --- 南竜ケ馬場 (幕営)

<2日目>

幕営地 -- (エコーライン) -- 室堂 ---- 御前峰 ---- 大汝峰 ---- 室堂 ---- 黒ボコ岩 ----

殿ケ池ヒュッテ ---- 別当出合 == (車) == 金沢

[メンバー] L 日向弘幸 (医-保健2) sL 西 大輔 (工-人機3) 医療 深作亮太 (工-人機2)

加藤夕佳 (文-文1) 飯田 聡子 (薬-製薬1)

[連絡員]

山本資治 090-9760-3424

谷村一成 090-7033-7253

-----火打・妙高PW

日程: 10月6日~7日 1泊2日 (予備1、非常1)

山城: 火打山、妙高山

目的: 秋の妙高高原の紅葉を楽しむ。日本シリーズに向けて応援の体力をつける。

行程: 1日目 (10月6日)

金沢大学 == (車) == 笹ヶ峰登山口 ---- 富士見平 ---- 高谷池ヒュッテ (泊) ---- 火打山 (往復)

2日目 (10月7日)

高谷池ヒュッテ ---- 黒沢池ヒュッテ ---- 妙高山 ---- 黒沢池ヒュッテ ---- 富士見平 ---- 笹ヶ峰登山

口 == (車) == 金沢大学

メンバー

L 日向弘幸 (医-保健2) sL 竹内雅幸 (法-法2) 医療 森本達也 (工-機械2)

深作亮太 (工-人機2) 渡 洋子 (医-保健2) 古田弥生 (教-学校2)

池田幸平 (工-人機1)

連絡員 西 大輔 090-9442-2393 松山文枝 090-9446-1810

-----雲取山PW

[山城] 奥秩父

[目的] 紅葉の季節こそ山へ行こう。上回生との交流山行。

[日程] 11月2日(金)、3日(祝) 予備日4日(日) 前夜発1泊2日予備1非常1

[行程]

0日目 金沢 = (夜行バス) = 新宿

1日目 新宿++++立川++++奥多摩=バス=鴨沢——堂所——セツ石小屋——ブナ板——奥多摩小屋 (幕営)

2日目 奥多摩小屋——小雲取山——雲取山——奥多摩小屋——セツ石小屋——鴨沢

[メンバー]

L 竹内雅幸 (法-公シス2) sL 小倉 亮 (法-法) 医療 森本達也 (工-機械2)

古田弥生 (教-学校教育2) 池田幸平 (工-人機1)

[連絡員] 谷上 望 (090-944-4969) 日向弘幸 (医-保健2)

-----冬山合宿

[目的] 冬山の技術を確認・修得する。冬山を楽しむ。

[目的地] 富山県利賀村・金剛堂山

[日程] 12月26日~28日 予備12月29日 非常12月30日

[行程] 26日 金沢 = (バス) = スノーバレー利賀——栃谷登山口——1346mピーク——小屋 (幕営)

27日 小屋——1451mピーク——前金剛——中金剛——1451mピーク——小屋 (幕営)

28日 小屋——栃谷登山口——スノーバレー利賀 = (タクシー) = 八尾++++富山++++金沢

[メンバー]

cL 山本資治 (工-人機3) SC 谷村一成 (工-人機3) 医療 西 大輔 (工-人機3)

吉森幸世 (文-人間3) 竹内雅幸 (法-公シス2) 森本達也 (工-機械2)

深作亮太 (工-人機2) 古田弥生 (教-学校教育2) 池田幸平 (工-人機1)

岩田奈穂子 (工-物化1) 荻田真憲 (工-土建1) 松本瑞恵 (経-経1)

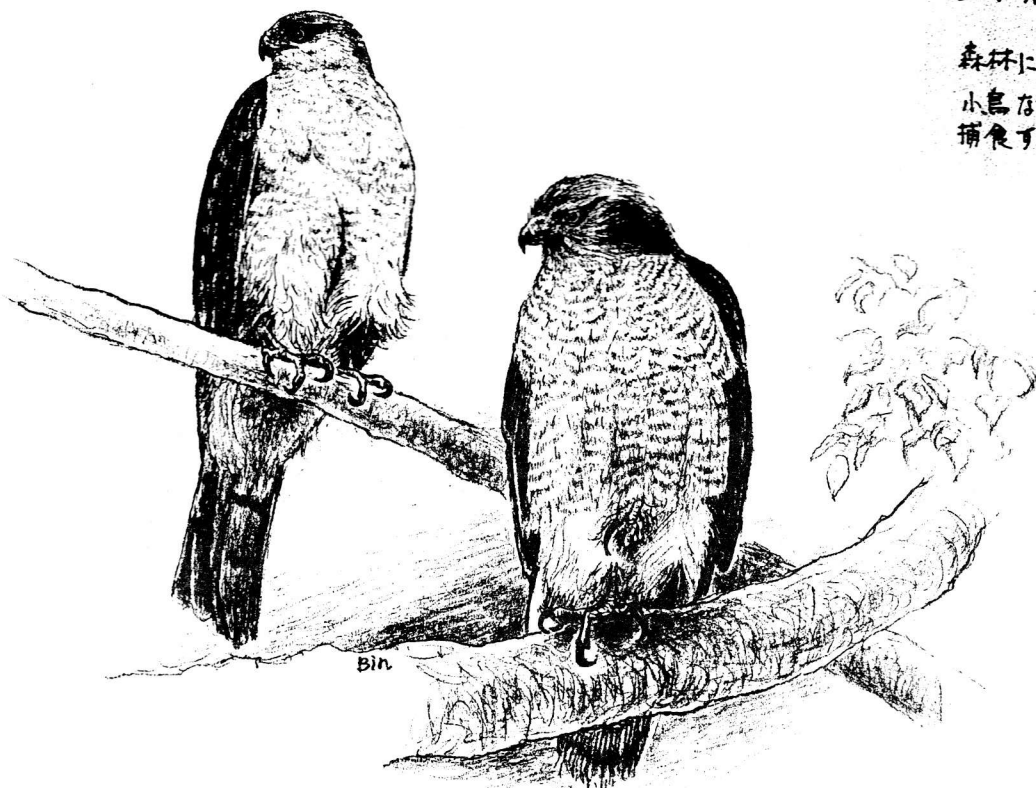
飯田 聡子 (薬-製薬1) 伊藤亜希子 (理-地球1) 加藤夕佳 (文-文1)

[連絡員] 久原宗仁 (文-史3) 090-3130-7681

河原一美 (教-美術3) 090-2830-4082

ハヤカ
右ガメス
左ザオス

森林にすむ。
小鳥なむを
捕食する。



OB会報「やまざと」15号
(' 0 1 冬号)

発行日 平成14年2月
発行者 奥名 正啓
編集責任者 舟田 節子
印刷 プリントショップ多田

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会
事務局 ☎920-0911 石川県金沢市橋場町10-49
☎076-222-9288 (舟田 節子)
E-mail settyan-f@muc.biglobe.ne.jp
URL: www02.u-page.so-net.ne.jp/pa2/ma-okuna/kuwv/

奥名会長 E-mail ma-okuna@pa2.so-net.ne.jp
名倉名簿担当 E-mail nag@kso.njk.co.jp

振込口座 郵便局 00780-3-14120 金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会
" 北国銀行本店 普223703 金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会